
月に還るまで

村上 悟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月に還るまで

【Nコード】

N5795S

【作者名】

村上 悟

【あらすじ】

子供を失った恭二は、新しい絵を描くことができないでいた。そこに訪れる弟子志願の娘。彼女は恭二の心を少しずつ解きほぐしていく。

そして、恭二の息子敬一郎は蘇るために旅に出ていた。過去と現世、そして来世を繋ぐ心の物語。

この物語は毎日18時に更新します。

最終投稿日は6月23日で全67部となります。

作中の絵画作品にモデルはありません。

全て村上悟のオリジナル考案の絵画です。

なお、作中絵画の制作に取り組まれた方が「もし」いらっしやいましたら、ぜひ村上まで連絡してください。

作品の挿絵などに使わせていただきます。

それでは、福岡県は久留米市を舞台にした物語、楽しんでください。

第一部

—

静かに。

静かにたなびく煙を眺めながら、恭二は煙草を口にくわえる。

涙は出なかった。だが胸の中は果てしない空洞に包まれていた。

煙草の煙と、煙突からの煙が重なって、恭二は自身が空に昇って行くような錯覚に襲われる。

すっかりしなければ。自分が喪主なのだから。そういった責任感だけが彼を動かしていた。肺に吸い込んだニコチンが、脳の神経を麻痺させる。今日は特別に頭がぼんやりとする。どこか別の世界にしているような気になってしまふ。ただっ広い土地の中にポツリと建つ葬儀場は、それだけで寂しさを増長させる。今、この瞬間、恭二は世界に取り残されていた。

遠くには筑後川が見える。福岡県久留米市を横切るこの大きな川も、この丘から見れば一つの小さな風景にすぎない。見慣れた景色がこんなにも矮小化されている。そのことも恭二を孤独にした理由の一つだった。

川の流れに、恭二は思い出を乗せた。

たった三日だけだった。彼はわずか三日……正確には六十八時間と二十七分だけ恭二の息子だった。

まだ名前すら無い息子に対して、彼は何をしてやれただろう。生まれた瞬間には立ち会えた。しかし、彼の泣き声を聞くことはできなかった。笑う顔も、泣き顔も、見ることはできなかった。腕に抱くことができたのは、すでに冷たくなってからだった。二千五百グラムの、低体重児だった。

後悔にふける恭二の煙草を、誰かがつまんだ。

「止めたんじゃないかと？」

振り返ると、妻の洋子が疲れた顔で微笑んでいた。恭二は煙草を取り返し、再び口に含んだ。

「止められんと」

「無理にとは言わんよ、今は」

結婚して十年目に、やっとできた子供だった。その息子は今、真っ白な灰になって、空へ昇って行く。二人とも、その煙を無言で眺めていた。恭二は考える。洋子は息子のことをどう思っただろうか。今、どう思っているのだろうか。彼女は息子に、母乳を含ませることすらできなかったのだ。本来ならばまだ病室のベッドの上のはずだった。無理を言ってこの時間だけ、外出させてもらっている。骨を拾ったら、すぐに病院へ戻る手筈になっていた。

一番辛いのは、洋子なのだ。そうは思っているけど、恭二は体の、心の重みに耐えきれなかった。今すぐにでも叫び、全身を滅茶苦茶に引き裂いてしまいたい。ともすれば洋子に八つ当たりしそうになる自分を制するのに、全ての力が注がれる。

「洋子、頑張ろうな」

何気なく、言っただけだった。

「恭二さん、これ以上、何を頑張ると？」

だが、洋子の返答は痛々しいものだった。自分は何を言ってしまったのだろう。空回りした言葉に、自ら答えが見つけれない。

「い、いや、あんまり気に病まんとよ」

「うん、分かっとなとやけど」

言葉の一つ一つが恭二の口から飛び出して行く。それらは無責任にたゆたうと、ヴィールスのように洋子を冒していく。

「でもね、恭二さん」

洋子は次第に唇を歪ませ、瞳に涙を溜めていく。

「私にはどうしようもなかったとよ」

子供のように声を上げて泣き出した洋子の肩を、恭二は引きつけ

るように強くつかんだ。

「分かつとる、分かつとるけん。俺が悪かった」

口について出てくる謝罪をそのまま放り出す。恭二は既に自分に対する責任を放棄していた。自らの体が理解できなかった。あふれる涙をそのままにして、洋子と二人、抱き合っていた。人目も気にせず泣きじゃくる。煙草は涙に濡れて、土にまみれた。鼻水も涎も垂れ流したまま、二人は意味の理解できない言葉ばかりを話していた。お互いにお互いを慰め合い、自分を慰めていた。

地面に膝をつき、涙が涸れるまで泣いた。

ふと見ると、煙はもう、微かに余韻を残すのみとなっていた。

息子は美しかった。

幼くてして死んだ子供を「天使になった」と表現する人間がいる。今まさに彼は息子のことを天使であると表明したかった。細々と揺れる息子の魂は、羽を広げて昇っていくようで、自由闊達に空を舞う。掻き消えるように雲の隙間に吸い込まれていく。

その煙に引つ張られるようにして、疲れも悲しさも抜けていく。人が変わったかのように自分自身が明確になる。課せられた使命を思い出して、大きな子供たちは日常に帰っていく。

俺は父親なのだ。息子の最後くらい、きちんとしておきたい。そう考えて、あらゆる体液を拭いっつ、立ち上がった。

洋子も似たような状況だった。彼女の方はまだ茫然としていて、目元をハンカチで拭っていた。先程までの行為を恥ずかしく思ったのか、恭二と目を合わせようとしなない。

そんな洋子に、恭二は言った。

「子供に名前を付けないとな」

彼女は目を合わさないままに応える。

「そうやね」

彼女の視線は、もう見えなくなってしまった息子に向いていた。洋子は心の中で息子の声を聞いていた。ありがとうと言っているように思えた。それが自己防衛のための幻であろうとも、その一言で

洋子は救われた気がした。

収骨が始まって、二人は会話を交わすことは無かった。しかしすでに思う言葉は同じだった。ただ息子を思つて、ひたすらに箸を動かしていく。同じ骨を、二人で一緒に。

息子はまだ小さかったので、拾うことができるような骨は少なかった。それでも拾うことのできた骨を、職員が説明してくれる。恭二はその説明には耳を傾けることはできなかった。息子を解剖されたかのような気持ちになつてしまった。一方で洋子の方は息子の全てを目に焼き付け、記憶に留めようと必死に復唱していた。両極端な対応に、職員も複雑な表情を隠せないでいた。

骨壺と一緒に、埋葬許可証も入っていた。出生届、死亡届、事務的な手続きは無数にある。出産育児一時金の申請は気が滅入った。窓口でにこやかに「おめでとうございます」と職員が口にする。それを無視して死産証明書を提出する。そんなやり取りが目に見えたからだ。

だが、一つだけ心を込めて恭二が取り組んだ書類があつた。

出生届だ。手続きの進捗を考えるとあまり時間はなかったが、二人で一生懸命に考えた。画数を調べ、自分たちの願いを込めた。将来は人に尊敬されるような人物になつて欲しかった。そこで「敬」の一字に、自分たちの最初の子であることを示す「一郎」を足す。画数も悪くない。自己顕示欲が強く、大成功か悲運かという両極端な総運ではあつたが、恭二はこう言つて肯定した。

「俺と似てると思わん？ 良かるうもん、筑後の人間ならこれくらいでかい人間にならんといかん」

洋子は恭二らしいと思い、それ以前に敬一郎の響きが気に入つたので口を挟まなかった。

結局、出生届には『田中 敬一郎』と書いて提出した。

二

彼の目の前には、青く明るい、丸い物体が浮かんでいた。

その表面は水で覆われており、舐めると塩辛かった。三パーセントの塩と、わずかな金属が含まれ、それらが辛さを際立たせていた。指でつつくと、その部分に穴があいてしまった。この穴をクレーターということなど、彼は知らない。

この球体に住む六十億の人間の生命は、彼の手に委ねられていた。「ここはどこ？」

質問に答えるものは、誰もいなかった。彼は一人きりでいることに不安を覚えた。

だが、地球を抱きしめると不思議に落ち着いた。濡れるのも構わずに抱いたまま寝転ぶ。その姿はタイヤで遊ぶパンダに似ていた。そのままでいると、彼はふと思索的になってしまふ。自分の今までの思い出してしまうのだ。

十ヶ月の間の記憶だった。残念ながら、彼は生まれてからの記憶を持たなかった。苦しみと意識の混濁の中で、それらの思い出は失われてしまった。だが、彼は知っていた。自分が愛されていたことを。大事にされていたことを。

改めて地球を覗いてみる。じっと見つめると、自分の見たい物が見えるのだ。彼は両親を見ようと思っていた。

両親は骨を拾っていた。その後、無機質な部屋の人物にいくつかの紙を渡していた。彼はその中の一枚をアップにして見る。そこに書かれた文字が何なのか、彼には分かるはずがなかったのだが、なぜだか読み取れてしまふ。

「たなかけいいちろう？」

声を出して読むと、文字が体に染み渡っていった。すっきりと広

がる清涼感と甘さが、彼の心を溶けさせてしまう。敬一郎、そう認識した瞬間に彼はいくつかの事実を思い出した。

一つは自分が立つことも座することもできない赤ん坊だったということ。今は背丈からして十歳くらいの子供に見える。話すこともできる。それがなぜかという、敬一郎自身にも分からない。

もう一つは、彼の両親の名前だった。恭二と洋子、恭二は頑固な画家で、洋子は優しい専業主婦だった。

そして最後に、自分が死んでしまったということを思い出した。

「僕は、消えてしまったんだね」

敬一郎はそう表現した。あの世界から、自分はいなくなってしまった。まだ両親の顔さえまともに見ていない。それが残念に思えて、手に持った地球から二人の姿を探す。

その恭二は、自宅の庭から月を眺めていた。洋子はいない。彼女は台所で夜食を作っている。白く輝く月、その姿は女性に似てしつとりと美しく、様々な姿を見せて飽きることがない。その本質を捕えようと、恭二は敬一郎を亡くしてから毎晩、庭に出ていた。折り畳みの椅子に座っていると、どうしても腰が痛くなる。時々立ったり座ったりを繰り返しながら、視線は常に月のぼんやりとした光に向いている。雲の動きにより、彼女は瞬きをしたり目を伏せたりする。ある時には巨大で眩しく、その光景に飲み込まれそうになる。またある時には先鋭な筋だけを残し、闇に開いた空間のようにその先が見通せそうな気になる。一ヶ月を通じて思ったことは、今まで不思議なくらいに月の姿を眺めることは無かった、ということだ。初めて見たように、恭二は月の移り変わりを見つめている。

「なんか分かったと？」

気がつくと隣に洋子がいた。恭二は首を振ってまた月に視線を戻した。

「月っち不思議かね。一個も同じ日がなかとよ」

「ばってん毎日見とつたらなんか分かるうもん？」

また恭二は首を振った。久留米の男は頑固者が多い。だが今、恭

二は本当に分からなくなってしまうていた。

三

敬一郎を亡くして数日、洋子が産婦人科から退院して来た時に恭二が言った。

「敬一郎を絵の中に残してやろう」

それは素直な気持ちだった。成長を見ることができなかった敬一郎の姿を、せめて絵の中で実現させてやりたいと思っていた。「生命」シリーズとはまた違った形で、敬一郎を永遠に残してあげられればと思ったのだ。

しかし、それは困難な作業だった。肖像画を残すのは、気が引けた。そういった形にすれば、どうしても悲しみも永遠にしてしまう。写真とは異なり、絵は思いがこもる。今現在の思いを乗せた肖像画を作れば、敬一郎の顔は寂しげなものになるだろう。恭二は、もし息子の肖像を創るのならば、二人が新しい生活に向けて前向きになれたときだと考えていた。

恭二は敬一郎を象徴するものを絵にするべきだと考えていた。何日も何日もカンバスの前に座り、白く粗い布を一心に見つめる。いつもはそうしていると自分の思考が投影され、次第に形になっていくのだ。だが、この時ばかりはまともなものが浮かばなかった。浮かぶのは彼の火葬と骨ばかりだった。一人で抱えられるような小さな棺桶、その中に入れた、先走って買ってしまったおしゃぶり、それらのものが次々と浮かび上がっては消え、暗い画面に重なり合っていく。まさに自らの気分を象徴したものだ。だが、それではいけないのだ。今必要なのは敬一郎を残し、自分たちが前へ進めるような、そんな絵が欲しいのだ。自分たちと敬一郎の関係に一区切りをつけるための。

「なんか分かったと？」

そう、その時も洋子はそう言った。

普段はアトリエに誰も入れない恭二が、彼女を呼ぶことがある。コーヒーが飲みたくなったときと、掃除をして欲しいときだ。その時、恭二は休憩のために洋子を呼んだ。

それでも、洋子が制作中の恭二に声をかけることは滅多にない。コーヒーを置いたらすぐに出て行くのが常だった。だが、その時には懇願するようにそう言うてきたのだ。

そして、その時もまた、恭二はただ首を振るだけだった。

洋子が恭二の隣に座った。一人分の椅子しか用意されていないため、二人とも床に直接膝を抱える。じっとカンバスを眺めた。これもまた、常でないことだった。

「洋子は、敬一郎の顔、覚えとる？」

しばらくして、恭二が聞いた。

「もちろん、覚えとるよ」

「どんな顔しとった？」

「恭二さん、忘れたと？」

洋子が目を見開いて恭二の顔を凝視する。それを見て慌てて恭二が訂正する。

「そうじゃなか。洋子が敬一郎のこと、どげん思っとなか知りたい」

それを聞いて、洋子が視線をカンバスに戻し、ホッと息をつく。

胸に手を当て、まるで本当に心臓が飛び出しそうだったと言わんばかりだ。

洋子はさらに数分、カンバスを見つめていた。その仕草は、恭二がするのに似ていた。やがて目を伏せ、大きく息を吸う。

「そうねえ、可愛か、可愛かつち思っとなか知ったけんね。ばってん、覚えとるよ。切れ長の目、恭二さんそっくりやったあ。鼻はちっちゃかつたけん、私に似とるうけど」

それを受けて、恭二が続ける。

「思ったより髪が少なかつたばい」

「恭二さんごたる」

「俺は禿げとらんよ。ちよつと薄かだけやん」

そう言つて、恭二は自分の頭を触つた。確かに、前髪の生え際が後退気味だつた。

「恭二さんも気性が激しかけん、敬一郎もそげんなつたらうね」

「似とつたらね。くるくるくるくる顔が変わつたらうね」

お互いに笑い合う。敬一郎が逝つてしまつてから、こんなに自然に笑えたのは初めてだ。しばらく会話が途切れ、笑い声だけが響く。なんだか気恥ずかしくて、お互いの顔が見れない。その内に、どちらからともなく笑い声が消えていき、静寂が戻つた時に洋子が言つた。

「お月様のごたるね」

それが、一つの契機だつたのだ。

四

恭二は洋子の一言で月をモチーフにすることを決めた。だが、月は眺めれば眺めるほど不思議で、飽きない存在だった。裏を返せば、つかみ所が無く、いつまで経っても全貌が把握できないということだ。

「難しかね」

恭二が言った。

「しょうがなかよ。今は心が落ち着いてなかつちやない？」
「そうかもしれん。ばってん、それでも描かんと、俺は前に進めんとよ」

「そうね、私も恭二さんの絵は楽しみにしてるけん。けど、無理はせんで。この上に恭二さんまで体壊したら、私どげんしていいか分からんことになるよ」

洋子がそつと恭二の手を握った。普段よりも熱く感じるそれを、恭二は強く握り返した。そのままの姿勢で再び月を見つめる。銀色の球体はゆっくりと下降線をたどり始めていた。

「月にはウサギがいるっち言うばってん、本当？」

洋子がふとそんなことを聞いた。見れば月の丘陵地と海の差異により、模様がそのように見えないことは無い。

「ああ、ジャータカのウサギやね」

だが、恭二はそんな話をしだした。洋子がおうむ返しに問い返す。
「ジャータカのウサギ？」

「そうたい。仏教の経典でジャータカ、ってのがある。月に昇ったウサギは、その中の話に出て来るったい」

「仏教なの？」

「元はね。今じゃ小さい子が読む絵本とかにも載っとるよ」

そう言つて、こんな話をし始めた。

「昔、ある所に、食べ物も無く、力尽きようとしているお爺さんがいました。そこに、ウサギとキツネとサルが通りかかりました。

三匹はお爺さんを助けようと話し合いました。それぞれが得意なものを持つてきて、お爺さんに分けてあげよう。

キツネは、川に入つて魚を獲つてきました。お爺さんは少し元気になりました。

次にサルが山に入つて木の実を採つてきました。またお爺さんは元気になりました。

さあ次はウサギの番です。しかし、ウサギが一生懸命に餌を取ろうと頑張つても、どうしても見つかりません。

サルとキツネはウサギを責めました。

「後は君だけだぞ。さあ早く食べ物を探してこいよ」

「僕たちにはかり働かせて、君は楽するつもりなのかい」

だけど、どうやっても餌は見つかりませんでした。

そこでウサギは、お爺さんに火を熾してくださいと頼みました。

少し元気になっていたお爺さんは、ウサギの頑張りに酬いてあげようと、火を熾してあげました。

すると、燃えさかる炎の中に、ウサギが飛び込んでしまいました。火はあつという間にウサギの毛と皮と肉を焼いてしまいました。お爺さんやサルやキツネが驚いて火を消しましたが、もう手遅れでした。

「どうぞ僕の肉を食べてください。そうすれば元気になりますよ」

そう言つてウサギは息絶えたのでした。

キツネとサルは自分の言葉を悔やみました。そして、どうかウサギを生き返らせてくださいと一心に願いました。

すると、その姿を見ていたお爺さんが、正体を現しました。お爺さんは仏様だったのです。

仏様はウサギを抱きかかえると、ウサギの尊い布施をねぎらつて

言いました。

「このウサギは私が天に還してあげよう。そうして月に住み、いつまでも楽しく暮らすが良い」

そう言うなりウサギの姿は月に昇っていきました。だから、今でも月にはウサギの姿が見えるのです」

恭二が話し終わると、洋子は月を見て涙を流していた。嗚咽を上げる訳でもなく、ただ静かに雫が頬を垂れる。それを自ら掬い取って恭二の方を見る。

「じゃあ敬一郎も月に居るかもしれんね」

そのあどけない言葉に、恭二が微笑んだ。

「そうやね、月に還つとるかもしれんね」

月は何も答えない。ただ刻一刻と朝に向かって沈んでいくだけだ。その光景を、敬一郎は見ていた。

目の前にある地球を一心に覗き込み、恭二たちの言葉の意味を考えていた。

「死んだものは月に還る？　じゃあ僕がいるのは月、なのかな？」

独り言のつもりで言ったのだが、応えが返ってきた。

「そうだね、そうかもしれないね」

振り返ると、知らない人間が立っていた。彼は敬一郎の警戒を解くように微笑むと、もう一度口を開いた。

「そうだったら、素敵だと思わないかい？」

答えずに敬一郎は、その人間を観察する。歳の頃は四十前後、ちょうど恭二たちと同じ年代のように思えた。カジュアルでカラフルな服装をしていて、敬一郎はまるでピエロだと感じた。実際にはダークグリーンのジーンズに、赤いシャツを着ていただけで、派手ではあったが奇抜と言う程でもない。敬一郎の記憶にある「おじさんは茶系の服しか着なかった」ので、そう思ったのだ。彼は髭を剃ったこざっぱりとした表情をしていて、どこにも陰鬱の気が無い。この死の世界にあつて陽気だけでいるのは反対に不自然な気がしたが、

その雰囲気が敬一郎の警戒を解く役目を担っていた。

「まあね」

それを聞いて、彼は満足気に微笑む。だが敬一郎はこう続けた。

「でも、死んだら何にもならないさ」

そうやって口を尖らせる。そんな彼を見て、「おじさん」は笑う。
「なるほど、君は自分が死んだことで両親が苦しんでいるのが辛いんだね」

敬一郎は答えなかった。代わりに質問を返す。

「おじさんは一体誰なのさ」

再び目付きが警戒を帯びていた。

「そうか。知らない人間から色々指摘されるのは不快なものだ」
一人得心して苦笑を漏らす。とかく笑顔の絶えない人間だ。

「私は矢島海里、と言う。そうだな、言うなればこの管理人かな」
飄々とした物言いに、敬一郎はふと気分が和らぐのを感じた。親しみが胸の表層に浮いて来て、懐かしさがそれを包んでいる。

彼の表明を受けて、敬一郎が自己紹介を返そうとした。

「僕は……僕は……」

だが、自分を敬一郎と紹介していいのかどうかで悩んでしまった。
それを見て海里が先回りしてしまう。

「誰が何と言おうと、君は今、田中敬一郎だよ」

「なんで僕の名前を知ってるの？」

「言つたら、私は管理人なのさ。何でも知っているよ」

敬一郎は海里の顔を振り仰いだ。彼は一点の曇りなく、晴れやかな笑顔を見せていた。それだけで、彼のことを信用して良いように思える。

「ここは、どこなの？」

彼は聞いた。海里はすぐには答えずに、ずっと遠くを眺めていた。
その先には乳白色の海、もしくは雲が漂っていた。底は深く、見通すことができない。気がつく、彼らが座っている場所もまた、乳白色の砂で覆われていた。

雲の海から魚が一匹、飛び上がった。銀色に輝く鱗を持ち、長い尾を引いて再び潜っていく。額の先端から赤く長い髭が伸びていた。巨大で優美なその姿は、人魚のようにも思えた。

「世界には二種類ある」

と、海里が口を開いた。

「一つは、現世、生者の世界、生まれた者の世界だ。そこは光と変化にあふれ、個人は固定される。私は私であり、あなたはあなたである。また、人は人と交わることで人であると認定され、自分を失わずに済む。しかし、その一方で私が私であると疑った瞬間に私でなくなってしまう世界でもある。彼らは保証されている自分を自ら失うことのできる存在でもあるのだ」

その言い回しは、敬一郎には難しすぎた。だが、後に彼はこの言葉を理解することになる。

さらに海里は続ける。

「もう一つは黄泉、死者の世界、死んだ者とまだ生まれる前の者の世界だ。そこでは光も変化も無く、個人は世界に溶けてしまっている。私はいつから私であるか判然とせず、あなたも私も同一である。また、人は人と交わる必要すら無く、自分というものを持たない。常に流れ、何事をも取り込み、新しい存在になる。しかしその一方で私を保って自らの深淵を覗き、壊れた世界を取り戻そうとする者もいる。今の君がそうだ」

こちらの言い回しも、敬一郎には分からなかった。ただ、今の自分のことが表現された言葉だということは理解できた。それが良いことなのか悪いことなのかを判断する能力は、今の敬一郎には無かった。

「この二つは一見、異なったもののように見える。そう、例えば地球と月のように」

二人の目の前に二つの球体が浮かぶ。一つはさつき敬一郎が遊んでいた球体、地球だ。もう一つはでこぼことした灰色の地面を持ち、鈍く輝く小さな球体、月だった。片方は青を中心とした複雑な色合

いを見せ、片方は表面がイビツで灰色の単色で表現されていた。

第一印象は月の方が圧倒的に悪かった。敬一郎がそう判断したと見て取ると、海里はさらに言った。

「だが、この二つはある存在を前にすると同等になる」

その途端、急に気温が上がった。熱源を探ると、遠くに赤く燃える球体が浮かんでいた。

「太陽だ。ほら、見てごらん」

今や、月と地球は同じように輝いていた。太陽の光を一身に浴びて、丸く輪を描いていた。先程までみすばらしいと思っていた月が、太陽と協調するなり明るさを増していく。地球の青さとは対照的ではあるが、神秘的で優しい美しさだった。

「月がきれいだね」

敬一郎が思わず漏らす。

「そう、きれいだ。なるほど、確かに月は地球に比べて生命力には欠けているだろう。しかし美しさでは地球に負けない。ところが、その美しさも彼だけではなし得ないものなのだ」

そう言った瞬間に地球が離れて行く。月も太陽も遙か遠くにポツンと見えるだけだ。

「遙か宇宙から見れば地球も月も太陽も小さな存在だ。実にこの美しい景色を見ることができるのはお互いだけなのだよ」

再び地球と月が接近してきた。しかし地球の方は敬一郎にぶつかろうかという程に近づいてくると、突然その色彩を無くしてしまう。地球を透かして、敬一郎の目に銀色の月が見える。それは今までよりもより繊細で、頼りない印象を受ける。しっかりと見つめていないと、そのまま空に溶けてしまいそうだ。

すると今度は月が敬一郎の前にスライドし、光の輪を残して色を消してしまった。その先には地球が青々と力強く輝き、きれぎれにたゆたう雲海がそれを生き物のように躍動させる。地球は鼓動をしているかのように微かに膨張する。海水が沸き上がり、大きなうねりを形成する。巨大な水柱が地球の中心を襲う。踊る天使の輪が幾

重にも広がり、地球が脱皮したかのような印象を与える。

「見たかい、地球の躍動、月の静かな輝き。お互いが欠けては全てが無に消え去るのと同じだ。地球から見る月は人の心を和ませる。同時に、月に降り立ったアームストロングも思っただろうね、なんて素晴らしい世界だと」

最後の表現は敬一郎にはまた理解できない節回しだった。生まれてすぐ死んだ彼にはアポロ計画など知りようも無かったし、ジャズにも興味はなかったのだ。

「さて、同様に、現世も黄泉も……生きている者の世界も、死んだ者とまだ生まれる前の者の世界も同じ世界にあり、お互いがお互いを必要としているのだよ。ただ、そのことにそれぞれが気づいていないだけで」

海里はこちらとあちらの表現をわざわざ言い直す。彼にとってその表現法は何らかの意味を持つものらしい。敬一郎は言い直した後者の方が格好良いと感じた。そしてその方が優しくて馴染みやすいと思った。

海里は長い例え話でここがどこなのかを説明しようとしていた。それはあまりにも長過ぎて、敬一郎自身、自分がどんな質問をしたかを忘れてしまうくらいだった。そのため、彼は改めて聞いたのだ。

「ねえ、それでどうなるの？」

「なるほど、そうだったね。君の質問は、ここがどこなのか、だった。私は二つの世界を提示した。地球であり月であり、現世であり黄泉である。さて、君はここがどこなんだと思う？」

質問に質問で返す。敬一郎をからかっているようでもあった。しかし当の敬一郎はそのことには気付かず、一所懸命に考えている。彼は海里の説明を順序よく追っていた。順番に巡っていたって、だが最後には一番最初に帰ってしまうのだ。つまり、死んだ者は月に還る、という件だった。

しかし待てよ、と彼は思う。死んだ人間はやがてまた現世に戻っ

ていくのではないだろうか。そのことに気付いたのは海里の言葉からだ。お互いがお互いが必要としている。月がいなければ地球は認識されない。地球が無ければ月は輝きを主張できない。死んだ者や生まれる前の者が存在する世界が無ければ、現世は存続できない。なぜなら行き場がなくなるからだ。同時に、現世が無ければ黄泉は存在し得ない。ヒントは海里の言い回しだった。

『死んだ者と、まだ生まれる前の者』

それはつまり、二つが同一であることを示している。ということは、彼らは生まれ、生きるのだ。

敬一郎は結論を出した。

「どこでもない」

「おやおや」

海里が苦笑する。その様子を見て、敬一郎が笑った。

「でも、全てでもある」

海里の笑みが止まる。一瞬表情を無くし、それから再び微笑んだ。全てを包み込む、柔らかい表情だった。

「現世も黄泉も、一つの世界なんだね。お互いがお互いの存在に気付いていないだけで」

「そうだ。なぜ気付かないのか。それを説明するシステムがあるんだよ」

彼らの周囲から地球と月と太陽が消える。代わって天上から降りてきたのはリボンが八の字に結び合わさったような物体だった。

「メビウスの輪、というんだが。まあ名前はどうでも良い。肝心なのは、この物体がいつまでも終着の無い、永遠の繰り返しを表現しているという所だ」

敬一郎はメビウスの輪の一点からリボンの表面をたどってみる。八の字を巡る旅はある一カ所で捻りが加えられ、その瞬間に裏側へと移る。そうして元の場所まで戻ってみると、敬一郎の指は出発点の真裏に到着するのだ。そしてまたそれを辿っていくと、今度は前回の出発点に行き着いてしまい、いつまで経っても結ばれることが

無い。

「現世と黄泉を、このリボンの裏と表に例えることができる。どちらが表でどちらが裏かなんてどうでも良いんだ。向こうで死んだ者はこちらに来る。だが、こちらから向こうへ行こうとするとき、元の所には戻れない」

「それってつまり、違う所に出ちゃうってこと？」

「その通り。再び現世へ生まれたとき、それは元の自分ではなく、新しい自分として生まれるんだ。それは世界を再生させるための循環システムだ」

敬一郎には地球が巨大なりサイクル工場として稼働している様子が思い浮かんだ。作り、壊れ、集め、溶かし、精製し、再生する。それらは何度も何度も巡っていく。

「地球が常に新しくなっていくための、このシステムの名前を『輪廻』という。これは自然の法則であり、超えることはできない理なんだよ」

海里の言葉に、敬一郎が眉をひそめた。

「じゃあ、僕はもうお父さんたちの所には戻れないの？」

不機嫌そうな声に海里は答えず、代わりにまた質問で返した。

「なるほど、そういうえば先程の質問に答えてもらっていないな。君は自分が死んだことで両親が苦しんでいるのが辛いんだね？」

敬一郎も段々と海里の話し方の特徴に慣れてきていた。先を急ぐとせずに質問に一つずつ答えていく。

「そうだよ。だから、できれば戻りたかったんだけど……」

「できれば？　だが、考えてもごらん。世の中には子供を亡くした親なんて五万といるんだよ。恭二と洋子は悲しみに暮れている。それこそ自分の身を滅ぼしかねない悲しみだろう。しかしそれは広い世界から見ればありふれたことなんだよ」

それは確かにそうなんだろう。しかし、敬一郎はその考えに反発していた。例え全てから見ればありふれていても、その現実を味わわれるのは個人なのだ。視点を変えるだけで悲しみは無限大に広

がる。海里の話にはその視点が抜けていた。

そのことを伝えようとした時、海里が続きを話す。

「今、恭二と洋子は全てが過去に帰ることを望んでいる。しかし、そうなつてごらん、大変なことだよ。世界中の子供を亡くした親が、同じことを考えているんだ」

これは敬一郎にも簡単に想像できた。人が死んで悲しまない者はいない。子供を亡くした親でなくても、できれば死んだ人間に生き返って欲しいと思っているだろう。しかしそうなったとき、現世は停止する。なぜなら死んだ人間が生き返ることで、新しく生まれ変わる者がいなくなるからだ。黙り込んだ敬一郎を見て、海里は彼がその答えに達したのだと理解した。

「だからこそ、輪廻というシステムがあるんだ」

海里は大げさな身振りで敬一郎に示してみせる。再びメビウスの輪が宙に浮き、キラキラと輝いてみせている。どこかの安っぽい新興宗教の宣伝のようだった。

「二人も今は絶望を味わっているが、いつまでもそれが続く訳じゃない。いずれそれを取り越え、新しい幸福を享受することができるようになるさ」

一見、筋の通った話だった。

だが、敬一郎はなおも海里に反発した。「でも……」そう言いかけて、止まる。海里が腕を前に出し、制止したのだ。

「よく考えて物を言うんだね。言葉は重要な意味を持っている。おそらく君は今、大事な決断をしようとしている。だがそれが本当に大切なことなのかを考えてから口にするんだ。世界の構成は、それで変わってしまうかもしれない」

世界、と海里は言う。敬一郎は口元を手で押さえたまま思う。果たして自分の一言がそんなに大変な意味を持つのだろうか、と。

彼は知らなかった。人が甦ったという話は現存する。心肺停止後に息を吹き返したという話、埋葬後に土を掘り返して起き上がったという話など探してみればいくらでも出てくる。だが、大抵は誤診

や医療の未発達によって引き起こされた奇跡だ。それも全てはまだ体が存在していることが前提の話だ。

敬一郎の肉体は既に焼かれ、灰となって空に昇っていった。その状態での甦りなど、あり得ない話なのだ。

それに気付かぬまま、敬一郎は考えた。新しい命として輪廻することを選ぶか、無理だと分かっても復活する方法を探すのか。結局、両親の悲しみと敬一郎の復活とは別の次元にあるような気がしていた。

彼は自分の中に入っていった。

魂としての彼と肉体としての彼はこの場所では同一であるはずだった。敬一郎はそのような場所にいるのだ。

僕は、僕以外の何者でもない。彼が考えた前提は間違っていない。僕は、二人の子供だ。そう、彼が考えた仮定は間違っていない。

僕は、二人に歓迎されるだろうか。彼が考えた結末は、正しいとは限らない。

目を閉じて考えに耽る敬一郎を眺めながら、海里は恭二と洋子を眺めていた。停滞した時間は動きそうになかった。この空白の間のみが、敬一郎に残された時間だった。彼はそのことを知っている。海里は敬一郎を思い、心臓を動かした。または脳髄を動かした。しかし、どこをどう動かそうが、彼には心の動きは存在せず、ただ決められた使命に従って行動するのみなのだ。彼に求められる行動とは即ち、この世界とあの世界を管理し、滞りなく運営していくという役目であった。

考える敬一郎の目の前に、恭二が姿を現す。

「敬一郎、何を悩んでいるんだい？」

その隣に、洋子が微笑みながら浮かび上がる。

「私たちはいつでも会えるじゃない」

それらの偶像は、優しく肩に手をかけながら、敬一郎の心を揺さぶる。

「お父さん、お母さん……」

あり得ないことだと分かっている、敬一郎は惑わされる。何度も目を擦り、仮面に裏が無いかを確かめる。

「ねえ、海里っ」

と、声をかけようとして気付く。海里の姿が見えないのだ。さらに気がつく、風景は乳白色で無限大の地平から、ここ最近で見慣れた現世の田中家の一室に変わっている。

壁にはいくつもの絵画が飾ってあった。壁面は白く、スポットライトが絵を外して間接的に明るくなるように調節されている。適度に涼しい室内は、まるで美術館の中にいるかのように静謐としていた。

いつの間にか三人は、ソファに座り、冷たいお茶の入ったグラスを手に使っていた。恭二が口を開く。

「敬一郎が還ってきてくれて嬉しいよ」

洋子もまた喜びを露にする。

「本当に、よく還ってきてくれたね」

涙ぐんでいる。それを見て、敬一郎の胸に喜びとも悲しみともつかない興奮が押し寄せてくる。

「お父さん、お母さん、僕を待っていてくれたんだね」

彼の瞳にも涙があふれていた。それを拭おうともせずに、両親それぞれの胸に抱きつく。恭二も洋子も優しく、または強く包容を返す。夢の中にいるようだった。この瞬間が永遠に停止していれば良いのにと考える。しかしその一方でこのような出来事がたくさん訪れると良いのに、とも思う。

彼は両親の方にはかり気を取られて、壁に飾ってある絵画には目を向けなかった。

そこには先程のメビウスの輪が、端正な青で彩られていた。マリンプルーの上に描かれたコバルトのメビウスは、停まること無い回遊魚のように絵の中で輪廻を繰り返している。

「敬一郎、これからずっとここにいてくれよ」

「そうよ、どこにも行く必要なんて無いんだから」

「うん、そうだね」

「お前が死んだとき、私たちはとても悲しんだんだよ」

「私たちも死んでしまおうかと思ってしまったのよ」

「そんなの嫌だよ。だって、僕はここにいる」

「そう、敬一郎は戻ってきた」

「そうね、私たちの敬一郎」

「……………」

喜びが若干薄れた瞬間、その隙間に冷たい風が吹いて来た。敬一郎のパズルを崩壊させる、綻びのピースが見え隠れする。

「お父さん、お母さん、ねえ聞いて」

口元に微かな笑みを浮かべながら、敬一郎は話し始める。

「僕は死んでからずっと見ていたんだ。お父さんのこと、お母さんのこと。二人がどんな暮らしをしているか、二人がどんな性格でどんな友達がいて、どんな風に僕のことを思ってくれていたのか」

「そうかそうか、それは嬉しいな」

恭二がそう言った瞬間、敬一郎は彼を指差す。

「たぶん、お父さんなら『それは嬉しかね』と言うと思うんだけど」
言われて、恭二が口を押さえる。

「敬一郎、そんなことなかよ。恭二さんは敬一郎に会って嬉しかね、ちよっとおかしくなったと」

その言葉に耳を塞いで、彼は立ち上がる。そして、二人の正面に立ち、両手を広げた。

「見てよ。これが僕だよ」

「確かに敬一郎だ」

「そうやね」

二人がうなずくと、敬一郎は悲しげに首を振った。

「でも、これは僕じゃない。敬一郎と呼ばれる前の、僕だ」

彼の瞳から涙が零れ落ちる。思わず叫んでいた。

「どうしてこんなことするんだよ！ 海里っ」

恭二と洋子……もしくはそう思わせていた者に向けて語気を強め

る。

「こんなことで僕が喜ぶと思っているの？ 諦めると思っているの？」

今、敬一郎は感性のみでつかんだ答えを語ろうとしていた。

「僕は何があっても現世へ還るよ。本当の敬一郎として二人に会った。それがたとえ難しいことでも、不可能なことでも、僕はやり遂げてみせる。いくら邪魔されようとだよ」

振り絞るようにして声を上げていた。敬一郎はしっかりと目を瞑り、声を限りに叫んでいた。そうしないと負けてしまいそうだった。気付かなければ良かった、との後悔に。

景色は徐々に砂塵と化し、元の乳白色の世界に戻っていった。溶け合った恭二と洋子はぎこちない笑顔だけを残して雲の海に流れていく。後には再び、敬一郎と海里だけが残った。

「騙すつもりじゃなかったんだ。少し試しただけなんだよ。君が先程の偶像で満足するようなら、無理に甦る必要など無いんだよ。」

荒い息を吐きながら、敬一郎が座り込む。後ろ手に体を支えながら海里の方を見ていた。ずいぶんと疲れていた。海里に精神的な揺さぶりをかけられ、それらを肉体の若さで撥ね付けた。そうでもないと取り込まれてしまう。敬一郎は今、全身で、魂の全てを懸けて海里に向かい合っていた。恭二と洋子の亡霊は、見えなくなった今も敬一郎の隣にいて囁きかける。この幸せな空間で永遠に暮らそう。死のない世界、それが黄泉だ。自分の変化に怯えず、永久に縷々として生きていこう。それらの誘いは魅力的ではあった。ここであれば敬一郎はいつでも好きなだけ幸せに暮らすことができた。黄泉のように定形のない世界では、自分の望む通りの形が作れるのだからだが、敬一郎は思い直す。月の恭二は敬一郎の本質を見抜けなかった。彼らは形で繋がっていても心では繋がっていない。

敬一郎は定形でないのにこの世界に見当たらない『心』という存在を探していた。それは不確定で曖昧で、常に揺らいではいるが、その本質が変わることはなかった。敬一郎が欲しかったのは永遠に

変わらない形ではなく、永遠に消えない心だったのだ。そして、それは黄泉ではなく、現世にこそあるのだと信じていた。

「何度でも言うよ。僕は月から出る。地球に還るよ」

その一言に、海里が大きく頷いた。

「そうか、それなら行こう」

座り込んでいた敬一郎の手を引く。

「どこに？」

疲労で目の前がふらつきさえする敬一郎は、虚ろに海里を見た。

彼は微笑みを絶やさずに言った。

「月が完全な円を描き、地球に最も近くなる夜、君は現世に還るんだ」

その笑顔は力強く優しくかった。

「どこへ行くの？」

敬一郎が戸惑いながら聞く。

海里は、その方向を指差して言った。

「月の入口へ」

五

月が傾いた頃、洋子は寝付かれずに起きてきた。水を一杯飲んで、トイレに行けば眠れるのではないかと思ったのだ。起きた時に恭二が横にいないことは度々あったので、怪訝には思わなかった。寝室を出て廊下をまっすぐに歩く。突き当たりを右に行けばキッチン、左に行けば風呂とトイレがあった。慣れた屋内のため、明かりをつけずにキッチンまでの道のりを進む。ドアを開けて左側にスイッチがあり、点けると蛍光灯が数回瞬いた。誰もいないキッチンは、しかし無数の動作音のためにざわめいていた。

「また出しつ放し」

洋子が見つけたのは流しの横に置かれたグラスだった。その中にはアイスコーヒーが半分残っている。いつも恭二は「後で飲むから」と言って置きつ放しにするのだ。だが、その実、飲み干したことは数える程も無い。

「もうすぐ夏やけん。放つて置かんで欲しかね」

そう言っただけ残ったコーヒーを流しに捨てる。その際に触れたグラスは生温く、置かれてからずいぶんと時間が経っているのが分かった。

洋子はそのグラスを軽く水洗いすると、麦茶を入れて飲み干す。喉を液体が通り抜けていく。胃に収まった麦茶は、柔らかく胃を潤していった。一息つくと、洋子はそのグラスを、今度は洗剤で洗い直してから水屋に片付ける。体に水分を入れたことで、尿意をもよおして来た。再び廊下へ出てトイレへと向かう。

数分後、すっきりとした顔をして出て来た洋子は、自室までの道のりをまた明かりをつけずに歩いていく。すると、帰りは余裕が出て来たからだろう、行きには気がつかなかったことに気付く。恭二

のアトリエから光が漏れ、そこから幽かに声が聞こえるのだ。洋子は気付かれないように近付いていく。

「ばれたら怒られるけんね」

無断でアトリエに入られる、覗かれる、は恭二が最も嫌う行為だ。そして、アトリエの恭二は妙に神経質で、勘が鋭い。どんなに静かに見ている、必ず分かってしまう。それでも、洋子は何度も覗いてしまうのだ。

部屋の中は明るく、余計なものは何も無い。反射を良くするため、必要以上に白い壁紙を使っていた。一つだけ置いてある棚には、絵筆と絵の具の缶、ナイフなどの道具がきれいに並べてあった。ただし、これは恭二が並べたものではない。彼は制作中に部屋に入れることは嫌がるが、そのくせ部屋の片付けはしようとしなない。部屋を出ると洋子呼んで、掃除をするように言いつけるのだ。洋子はそれを喜んで引き受ける。彼女が制作中の作品を見ることができるのは、その時だけなのだ。

その部屋の中で、恭二は一人、頭を抱えていた。短く繰り返す荒い息だけが、室内に広がる。恭二は再び頭を上げると、カンバスをじっと見つめる。しかしそこには何も描かれていなかった。おそらく、彼の頭の中には作品の完成形が朧げに浮かんではいるのだろう。ところがそれを具体的に形にするための筆が動かないのだ。洋子は恭二のそのような状態を良く知っていた。そのことを、彼は「取り出せない」と表現していた。頭の中にあるものが上手く形にできない。それがどれほどの苦痛なのか、洋子には分からない。分かったくもなかった。なぜなら恭二の苦悩の姿を、彼女は最も近くで見ているのだから。

「月までは分かつとるのにね」

声を出さずに、洋子は独白した。暗に、とりあえず月を描いてみれば良いのに、との意味合いが込められている。

もし恭二がそれを聞いたら反発するだろう。創作とはそのようなものじゃないと説教するだろう。彼にとって創作は神聖で、手続き

を経たものでなくてはならなかった。計算され、技巧を凝らし、決定された美しさを持つていなければならなかった。その一方で、彼はピカソを崇拜していた。あの力強い立体に憧れていた。また、パウル・クレーを師と仰いでいた。詩的で自由な線に恋い焦がれていた。彼は愚直であるが故に決まりきった線しか描けなかった。定規で引いたような揺るぎない線だった。それは透明な立方体に風景を押し込めるようなやり方だった。その箱庭のような絵画には、しかし厳格さと静けさが漂っていた。彼の作品を一言で表すならば、「無」だった。

その厳格さが、今、彼を苦しめている。恭二は捉え所の無いものを描くことが苦手だった。声すら聞かなかった我が子を表現するための手立てが思いつかなかったのだ。

洋子が見ているとも気付かずに、恭二は様々な方法を試している。最後に息子を抱いたあの感触を思い出そうと、整頓された部屋の中から重みのある物体を探す。だが絵を描くための道具しか見当たらずに仕方なく絵の具の缶を抱きかかえるのだ。一見、滑稽にしか見えないその光景を、洋子は悲しく思った。他のことはともかく絵に關してだけは絶対の自信を誇示する恭二が、今この瞬間、愚かに缶を抱えて彷徨っている。

それも違うと感じたのか、今度は木製の人体模型を赤ん坊のように膝を抱えさせ、じっと眺めてみる。だがそこに敬一郎の表情が生まれるわけではなく、木型は木型のままだ。地面に寝そべって、模型が動きはしないだろうかと恭二は期待をかける。その現実が彼にインスピレーションを与えてくれると信じている。それが察せられて洋子は胸中に空洞を感じた。

耐えきれなくて、洋子はそつとその場を離れる。

その時、ドアの隙間から嗚咽が聞こえた。

微かに鼻を吸る音が聞こえる。

再び覗いてみると、恭二は模型を抱えて泣き崩れていた。それは失った悲しみではなく、失っていく悲しみだった。

生まれた時には、最後に抱いた時には、火葬した時にははつきりと覚えていた感触が、時間の砂とともに流れ落ちていくことを憂えた涙だった。

恭二は戦っているのだ。

自分の記憶と。その胸に潜む玉のような濁りの無い記憶と戦っているのだ。

六

筆の先の油絵の具は、すでに乾こうとしていた。それに気付いた恭二は慌ててオイルで洗う。白と黒が一对一の割合で混ざった灰色が、オイルに広がっていく。そして、恭二はそのまま筆を投げ出した。

「ダメだ。これじゃ」

座椅子から立ち上がり、腰を押さえる。もう二時間もカンバスを前にしていた。その割には筆は進まず、白い画布にはわずかに灰色の線が一本描かれただけだった。その一本は指二本くらいの太さがある。右から左に流されたもので、やや円弧になっていた。恭二はその色で下地を作るべきか、それともそのまま背景を荒い白のまま描くべきかを悩んでいた。

「イメージが湧かん。どげん描いて良かか分からん」

投げやりで棒読みな絶望だった。それを聞きつけて、洋子がアトリエに入ってくる。手にした盆の上には冷えたコーヒーが乗っていた。普段なら文句の一つも言う恭二が、この時は何も言わずにカップを受け取った。

「はい、コーヒー。で、私はどげんすれば良かと？」

「ありがと。何かしてくれるんやったら膝枕が良かね」

洋子が呆れて溜息を吐く。それでも言い返さないのは、恭二が表面的な明るさだけでこう言っているのが分かっていいるからだ。日を追う毎に制作は絶望的になり、今や肖像画すら描くことのできない様子だった。洋子は改めて恐怖を覚える。人間の思い出とはこれほど脆いものだったのかと。そうやって恭二を心配する彼女自身も、敬一郎に関する記憶は曖昧になっていた。特に産んだときの痛みについてほとんど思い出すことができない。表情も、臍の緒がつい

た様子も、流れ出た血液もぼんやりとした色彩として赤や白と認識はすれど、輪郭が太い線で描かれることはもう無かった。

フローリングの床に直接正座し、恭二を呼び寄せる。彼は男特有の厭らしさを秘めた笑顔を見せながら頭を乗せた。さりげなく太股に触れてくる手を払いのけながら、洋子は恭二に提案する。

「もう良かとよ。無理だけはせんね」

一瞬で恭二の表情が一変する。

「お前はそげんこつば心配せんで良か。俺が描くつち言つたら描くつちゃけん」

頑固な夫は、そのまま視線を合わせようとせずに膝に顔を埋める。それから一言も口を開こうとしない。洋子は洋子でどう言っているか分からず、黙り込んでしまった。

気まずい空気が流れる中、鐘の音が聞こえる。

同時に玄関の方向を見た二人は、顔を見合わせた。恭二が膝から頭を上げ、洋子が静かに立ち上がる。その瞬間も、二人が声を発することは無かった。

部屋を出て行く洋子を見送った恭二は、もう一度筆を取ろうと腰を上げた。

その時、洋子の声が聞こえてくる。

「恭二さん、お客さんよ」

そこに含まれた感情は戸惑いだった。首を傾げ、部屋を出る。右の正面に見える玄関に、一人の少女が立っていた。彼女は恭しく頭を垂れ、恭二が声をかけるまでしばらくの間そのままだった。

「えっと、お嬢さん？」

上擦った声で呼びかけると、彼女は急に顔を上げて喋り始める。

「あのっ、私は益田詩緒と言います。先生に弟子にしてもらいたくて来ました」

洋子と恭二は、また顔を見合わせた。返事をすることもできずに少女を観察する。中学三年生か高校一年生、そのくらいの歳に見える。制服をきちんと着こなし、脇には画材一式の入った大きなカバ

ンを持っていた。赤く可愛らしい眼鏡の奥にある瞳はまっすぐに恭二を見つめていて、あまりにも純粹に輝いているために恭二は目を逸らしてしまう。声はハキハキと大きく、短くそろえた髪と相まって活動的な印象を与えていた。詩緒はまた言った。

「あの、弟子にしてみられますか？」

急かすように前に乗り出す。しかし恭二には答えようが無かった。まず状況が飲み込めなかった。詩緒は一所懸命だが、それに応えるだけの用意が彼には無かった。

今日何度目かの沈黙を救ったのは、洋子だった。

「恭二さん、とにかく上がってもらったら？」

「そ、そうだな」

吃りながら応えると、恭二は詩緒に手招きをする。詩緒は良い結果の兆しだと感じ、表情を明るくした。

「すいません、お邪魔しますっ」

とにかく声の大きな少女だった。

七

海里は敬一郎の肩を叩いて振り向かせた。

「気になるかい？」

敬一郎は声を出さずに、ただ首を振った。まっすぐに月の入口のある方角を見て、ひた走った。

地球は望めば、いつでも視界に現れて来た。そして、敬一郎が望みさえすればどんな状況であろうと両親の姿が脳裏に浮かんでくるのだ。今、二人は走りながら恭二と洋子の戸惑いを眺めていた。敬一郎は否定したが、気にならないはずが無かった。その証拠に、彼はさらに速度を上げて海里と距離を取ろうとした。しかし、全てが全てと同一の世界ではそれは適わなかった。

海里は大気に混じり乳白色の液体として地面を滑っていった。世界の色彩と混じり、海里は時間と距離を自らの手元に引き寄せて敬一郎を追った。敬一郎はというと、際限のない世界で自分に制限を付けてしまい、息を切らしている。

彼は現世での常識にとらわれていた。生きるためには必要な酸素も、死者には必要ない。活動のためのエネルギーは大気から取り込めば良いだけのことだった。それには、変換などしなくても良い。ここでは何もかもが異なっていて、何もかもが同じなのだ。つまりエネルギーも原料も、そしてそれを使用する敬一郎自身も形が異なっただけで同じものからできていた。敬一郎が酸素を欲し、それをエネルギーに代えることを欲しているからこそ世界はそのように動いている。だが、海里のように自らをエネルギーと同一だと考えさえすれば、無駄な作業は必要ないのだ。

「というわけだよ。さあ、捕まえた」

それらを一息に説明して、海里は敬一郎を抱きしめた。敬一郎は

抵抗する気力さえ失っている。幼い彼には海里の言うことの半分も理解できなかった。仮に全部を理解したとしても、敬一郎には海里のような自由な姿を取ることはできなかっただろう。自分の姿を壊したくなかったのだ。そうすればこの世界に溶けてしまう。甘くて軽い乳白色の世界に同化し、何もかもを失ってしまうと思っていた。そうならないためには、敬一郎はあくまで迷い込んだ現世の人間とといった体裁を崩すわけにはいかなかったのだ。自分を失わないこと、それが現世へ復活するための近道であると信じていた。

「それよりも海里、道は合っているの？」

敬一郎はこれから進むであろう道を指差して言った。

「合っているかもしれないし、間違っているかもしれない。全ては君が決めることだよ」

相変わらず、海里は謎掛けのような物言いしかなかった。

「私はそれに付き従うだけさ」

つまり、どこに向かってても入口に辿り着くのだと言いたいようだ。敬一郎は訝しげな表情を浮かべて、海里の前に行く。彼は決して敬一郎を誘導しようとはしなかった。この先の予定を話そうとしなかった。ただ分かっていることは、満月の夜までに月の入口に辿り着けば良い、ということだけだ。

「じゃあこっちに行くよ」

先程指差した道を歩み始める。その後ろを、海里が付いて行く。彼らの前には何も見えない。相変わらず乳白色の世界が広がるだけだ。ただ、それらにも海や山はあった。現世のそれとは違い、山は果てしなく高く、海は果てしなく深かった。海里と敬一郎が出会った雲の海も、落ちれば元の所に這い上がるのは不可能なくらいにどこまでも白い闇が覗いていたのだ。それらが問題視されないのは、海里たち黄泉の住人にとっては高さや深さは障害にならないからだ。この世界に溶けてしまえば、どんな場所にだって行くことができる。一方で敬一郎と言えば、一つの丘を越えるのに何時間もかかったり、崖から飛び降りることができずに震える膝で足場を探してい

なくてはならなかった。

「私は何度も言ったよ。君がその気になりさえすれば、いつでも月の入口に行くことができるんだ。簡単さ、体の全てが液体のように溶けていく光景を想像すれば良い。君の体は少しずつ大気の子と混じり合っていく。一対二の割合で、大気に取り込まれないように、自分の割合を保ちながら。難しくないんだ。この掌を見てごらん。これが半分に分れると思えば良い」

敬一郎が見ていると、海里の掌が、薄皮を剥がすように半分になっ
ていく。

「下半分は移動のために使おう」

さらに、下半分が砂となり消えていく。しかし海里に痛みなど無い
よう、そのままの要領で右半身が溶けていった。何かの陰から覗
いているようで滑稽ではあったが、敬一郎は真剣に眺めている。

『では、後ろを見てごらん、敬一郎』

声に振り向く。同時に、前と後ろから同じ音が聞こえる。正面で
は左半身が、後ろからは右半身が語りかけてくる。その間につなが
りなど無い。

「どうなってるの？」

思わず敬一郎は問いかけた。海里は再び一つに戻り、敬一郎の肩
に手をかける。

「言ったろう？ 簡単なことさ。君は意識というものを保ちすぎる。
さあ、私と握手してごらん」

言われるままに手を握ると、それが徐々に自分の中に染み込んで
いく様子が分かる。掌に薬を注射されたような、むず痒い感触だ。
気がつくと、もう海里の手と敬一郎の手の境界は無くなっていた。
自分の手の感覚を思い出そうとするが、それはあやふやで、今のこ
の触覚の方がしっくり来るような気がする。その気になれば、海里
の体の中にさえ入り込めそうだ。敬一郎は今、分解されて一つの分
子となっている。手に意識を集中すれば、隣り合っている海里の分
子と挨拶を交わすことができた。彼はいつもよりもにこやかに頭を

垂れる。周囲を見れば、海里は無数にいた。しかしその全てが海里であるわけではなかった。海里のようなものも混じっていたし、その他の知らない誰かも混じっているような気がする。あくまで海里はその外見を持っているだけであり、海里個人としての意識はどこにも無い。総体としての海里を探すと、それはここにもあり、あそこにもあるのだ。

意識を自分の胸の中心に戻す。敬一郎の考えでは、そこに人間の魂があるはずだった。そこに戻った瞬間、掌は二つに分離し、海里と敬一郎はあるべき場所に還った。

「今のは……？」

「触れてみて分かったが、君は自分のことをなんだと思っているんだい？」

「田中敬一郎」

至極自然に答える。だが、海里は首を振った。

「それは違うね。正確には田中敬一郎だったものの、だ。今の君は肉体を持たない。現世ではこういった状態を魂と呼ぶね。今の君は全体で一個の君なんだよ。魂とはどこかにあるものではなく、その状態を指す。小さな胸にしまっておくべきものは魂ではなく思い出でるべきだ」

確かに、肉体の無い敬一郎は魂なのだろう。だが、海里はさらに言った。

「魂が状態であるならば、君はその状態を変えることができるはずだよ。名称はどうだっていいのさ。じゃあ仮に無の状態と名付けようか。全てと同一化し、自身たる証拠の無い状態のことをそう言う。私が君を追いかけた時になったのがそうだ」

無、と名前を与えられた状態は、敬一郎の心に刻まれた。

「何も無い。自分が無くなるってこと？」

「そうじゃない、自分が全体になるんだ。アニミズムって知っているかい？ 山川草木の全てに神が宿っているという考え方なんだけど、それに置き換えれば、君がその神様の一つになるってことさ」

「僕が、神様に？」

「できるよ。草葉の陰に自分を散らしていけば済む話だからね。見てごらん」

そう言つと、海里は自分の頭を耄り取り、その辺りに投げ散らした。

「僕の顔をお食べ、つてところかな。私たちは分割可能な存在なんだ」

口の無い彼が話しかける。

「君は今、私がどこから話しかけていると思う？」

「分からないよ。色んな方向から話しかけて来てるように感じるけど」

「それは、君が見たからだよ。私が自分を様々な方向に投げるのを君が特定したがつているのは私の口なのさ。それが見つからないから、あらゆる方向から話しかけているように聞こえるんだ」

敬一郎は考えた。海里の話はいつも堂々巡りだ。彼の話を考えていくと、必ず最初の疑問に行き当たる。

「じゃあ、海里のことなのに、僕が決めているってこと？」

そして、海里は全体からの声でしばらく前と同じ言葉を繰り返す。「全ては君が決めることだよ。それを良く覚えておくんだね」

それを最後に、海里の声が聞こえなくなった。たつた今まであった、海里の気配も消えている。消えて初めて、敬一郎は海里に気配があったのだと分かった。

「海里？ どこに行つたのさ」

呼びかけても、返事が無い。

敬一郎は海里を探して歩き始めた。

初めの内は方角を見失わないようにと気をつけていたが、それもすぐに分からなくなってしまった。

何しろどこを見ても景色など変わらないのだ。海里が一緒でなければ、自分が本当に歩いているのかさえ判別できなかった。比較対象が無くなった今、敬一郎は自分の位置すら見失っていた。

それでも歩く。

敬一郎は自分の中心に意識を込めながら歩いていく。今の彼には確固たる自分が無かった。敬一郎はそれを欲していたのだ。どこかにあるはずの自分、どこかにいるはずの自分を認めてくれるはずの誰か。それは、やはり彼の両親であるべきだった。結局、敬一郎は現世の理に囚われながらこの黄泉へと歩んで来たのだった。狭間で生きる、生きてもない死んでもいない人間、それが田中敬一郎なのだ。

海里はどこを探しても見つからない。やがて敬一郎は疲れてその場に座りこんでしまった。疲れた自分に、敬一郎は自分の姿を見る。それが彼の安心を誘った。

「海里はどこに行っただろう？」

敬一郎は彼との行動を思い起こした。そもそも、敬一郎は海里について何も知らない。ただ、この黄泉の管理人であるという、彼の言葉だけが頼りなのだ。しかし、それでさえも確定された情報ではない。彼は敬一郎を導いてくれるようで、結局は何もしてくれてはいない。全ての道は敬一郎が決めて来たのだ。そこに気がついた時、敬一郎は自らの行動を一つ一つ確かめてみる。だが、そこに何の因果も見つけられず、敬一郎はただ首を振った。全てを決めたと言いつつも、敬一郎はただ流されるように歩いて来ただけで何も自分では決断していなかった。ただ一つ、現世に戻ると決めた以外は。

彼は指針を探していた。そして、敬一郎が頼ることのできる人間は、両親しかいなかった。

「お父さんなら、こんな時どうしただろう」

彼はふとそう考えた。きつと、大雑把な性格をしている恭二のことだ。深くは考えないで自分の信じる方向に進んでいくのだろう。それを思うと、少し可笑しかった。いない人間の行動を考えると、元気が出た。

「お母さんならどうしただろう」

その勢いで、今度は洋子がこの場にいた場合のことを考える。お

つとりして誰かに依存しがちな彼女だ。きつと何もできずに座りこんでしまふのだろう。

「あはは、じゃあ、僕はもうしたら良いだろう」

また、力があふれてくる。二人が隣に寄り添ってくれているかのようにだ。敬一郎はそう感じた。いない人間の行動を考えると……そうやって出て来た元気とは、その二人から直接受け取ったものなのだ。

「僕は、やっぱり前に進むしか無いんだろうな」

一人呟いて、よっこらしよ、と立ち上がる。敬一郎は目の前をじつと眺めていた。

そこにある乳白色の砂丘が揺らいでいく。視線の先に、切り込みのような道ができていく。長く細いが、まっすぐに確実に視認できる道だった。

「僕は、月の入口まで絶対に辿り着く」

声に出して言うてみた。道はわずかに太くなり、色彩を濃くしていった。綺麗なパースペクティブを描いて、それは求める所まで導いてくれていた。

「海里と一緒に」

ひとときわ大声でそう叫ぶと、向こうからやって来る人影が見えた。確認せずとも、それが海里であることが分かる。彼は視界が揺らぐ度に歩みを大きくして、敬一郎の方に近付いて来た。消えたかと思うとまた現れ、溶けたかと思うと流れていった。道に沿って川へと成り果てた海里は、せせらぎを辿って敬一郎の足を濡らす。そのまま海里を形成した海里は、一言「やあ」とだけ言った。

八

恭二から出たのは怒だった。

「いかにいかに。弟子やら採らんぞ」

壁にかけられた額が微かに震えた。それほどの大声だった。

「なんでいかにですか」

詩緒はそれでも食らいついた。決して相手から目を逸らさないように、まっすぐに恭二を見つめて、一言一言をゆっくりはつきりと口にする。

「私は、ただ、側におって、一緒に、制作させて、くれるだけで、良かとです」

こちら恭二に負けない大声だった。立ち上がりばかりに興奮する詩緒の隣で、洋子が手を差し伸べたまま固まっている。

「俺の気が散るったい。俺にプラスにならん事ば、なんでせないかんとか」

「良か刺激になるかもしれんやないですか」

なおも食ってかかる詩緒に、恭二は背を向けた。それは完全拒否の合図だ。この状態になった恭二が、どれだけ面倒かを洋子は知っている。

「詩緒ちゃん、やったっけ？」

耐えきれずに声をかける。

「はい、益田詩緒です。奥さんは賛成してくれますか？」

十六歳、まだまだ純粋な瞳が眩しい。自らの損益のために彼女を追いついて出そうとしている自分が恥ずかしくて、洋子は目を逸らしつつ話を続ける。

「ん、私じゃあどげんもできんとよ。あげんなった恭二さんは誰も説得できんけん、ご免けど今日は帰ってくれんね」

柔らかいが、有無を言わさぬ口調だった。さすがの詩緒も空気を読み始める。これ以上居ても、状況は悪くなるばかりだった。仕方なく、ペコリと頭を下げて部屋を辞す。

二人は見送りもしなかった。洋子はそうしようとしたのだが、恭二の怒りが怖くて立つことができなかった。

詩緒が帰った後に、洋子はたった今、起きた出来事を反芻する。

当初は戸惑っていただけの恭二をここまで怒らせたのは、詩緒の話を詳しく聞いてからだだった。彼女はこう言ったのだ。

「先生の絵が好きなんです」

「ふーん、どこが？」

恭二は先を促した。詩緒は期待に満ちた目で持論を展開する。

「先生の絵は寂しくて悲しいんです。どの絵も独りぼっちで誰も助けてくれない。そんな姿が素直に表れているから、だからすごいと思うんです」

どこまでも素直な娘だった。

恭二はそれを聞くと席を立とうとした。それを洋子が止めようとする。しかし、恭二は睨みつけるだけで何も言おうとはせず、洋子はそんな恭二に抗えずにいた。視線を落とす妻を見て、恭二は詩緒に、こう言ったのだった。

「いかにいかに。弟子やら採らんぞ」

詩緒の言ったことは的を射ていたのだ。あまりに正鵠を射ていたので、恭二は機嫌を損ねた。彼は自分の絵を静謐で収まりの良い絵だと考えていた。だが、周囲はそこに孤独を見いだしていた。寂しさのあまり、見るものを自省させた。仏教の座禅のように、自分を見つめさせる絵だと考えられていたのだ。それらの評価を払拭しようと恭二はまたミニマルな絵画を著す。すると今度はそれをアイコンのようだと評価される。マレーヴィチへのオマージュかと書かれる。俺はロシアのフォルマリストでも宗教画家でもないと反発する。そして今度は具象を求めようとする。しかし彼の描く人物画はどうしても瞳が沈んでいた。体躯が省略化されていた。田中恭二はどうし

ようもなく象徴画家だったのだ。その時は東郷青児に似ていると言われた。常に自分に対する評価を求め続ける彼は、表現を誰かのものに例えられることに不満を持った。それ以降、恭二の前で寂しいや孤独と言った言葉はタブーだった。

「恭二さん、お茶にでもしましょう」

洋子は率先して動くように見せかけ、その場を離れる。キッチンに入り、慌ただしくコーヒーを用意する。恭二は苦みの強いものが好きだった。お茶菓子には彼の一番好きなチョコチップクッキーを添える。十年間の生活で、彼の笑顔を取り戻す方法は心得ていた。ただ、詩緒が目の前には実践できなかったのだ。

戻って来た時、彼は自分の絵を眺めていた。壁には彼の時代毎の代表作が飾られている。初めて美術展に応募した作品、初めて良い評価が得られた作品、初めて個展を開いたときのメイン作品、大きな賞をもらったときの作品、そして自分が一番気に入っている作品と順序よく並んでいる。その中で、恭二の視線がぶつかっているのは「月の隙間」と題された作品だ。モスグリーンの背景に、輝かしい黄色で塗られ、イラスト化された月の杯、その下にはリアルな水滴が流れている。月と瞳を重ねた作品だ。ここでも寂しさは際立っていた。

洋子が盆を置いて、恭二は気付かなかった。彼女もそれをあえて遮ろうとはしなかった。きつと、恭二は何か考えているのだろう、それだけしか分からない。洋子自身は、絵に関する知識はほとんどなかった。恭二の絵については「上手だな」と感心したり「変な絵」と理解を放棄したりする一般的な感想しか持っていない。彼女が愛しているのは恭二であり、恭二の絵ではないのだ。

五分程経っただろうか。洋子はコーヒーのカップだけをキッチンに持って行く。そして、古いものを捨て新しいものを入れ、再び何事も無かったように恭二の隣に座る。

そうして初めて、恭二は洋子の存在に気付く。夢から覚めたように周囲を見回し、洋子とコーヒーの存在を確認する。彼はありがと

うの一言もなしにそれを飲み干した。

洋子は彼が何を考えていたのかを問おうとはしなかった。行動の契機が詩緒の言葉にあることだけが分かれば、それで良かった。彼女にはいつでも彼を抱擁する準備ができていたし、彼もそれを承知していた。それ以上のことは何も望まなかった。

大変なのは翌日からだった。

詩緒は夕方になると必ずチャイムを鳴らした。

「先生、こんにちば。ご機嫌いかがですか？」

怒鳴られてもめげない詩緒は、いつも明るい声で挨拶をした。

「機嫌良いわけ無かろうが」

玄関を開けようとせず、窓から顔を出した恭二が叫ぶ。恭二が返事しないにもかかわらず、詩緒は話し続けた。

「センセイ、あのね、私反省してるんよ。ネットで調べたとやけど、先生は寂しいと言われるのが嫌いっちゃる？ もうそげんこと言わんけん機嫌直してくれん？」

返事は無い。

「まあね、頑固者っち聞いとるけん、すぐには直らんやろ。また来るけんね、センセイ」

この日も、洋子はご機嫌取りに大忙しだった。頑固者は恭二が嫌う第二キーワードだったのだ。

ある日は物で釣ろうとした。

「センセイ、またネットで悪かとはってん、チョコチップクッキーが好きとやる？ やっぱりミスターイトーのチョコチップじゃなかいかなやる？ 置いとくけん食べてよ」

そう言って帰って行く。後で洋子が確認しに行くと、どこのスーパーにでも売っているチョコチップクッキーの箱が二つと、ケーキの箱が置いてあった。ケーキの箱には手紙がついていて、「家の近くにある美味しいケーキ屋さんのです。奥さん食べてください」と書いてある。

その対応の違いに、洋子は思わず笑ってしまった。しかし、恭二

はまた機嫌を損ねている。

「なんば笑いよるとか。あいつは俺ばなめとるとか？」

不思議なことに、一日の中で詩緒について話す機会が増えて行った。二日間、詩緒が顔を出さないことがあった時など、恭二はいつもに増して苛つきながら、一日中家の中を歩き回った。結局、三日後に顔を出した詩緒は、「友達と旅行に行つて来ただよ」と土産を差し出す始末だ。

一ヶ月、ほとんど毎日、詩緒は顔を出した。あつけらかんとした語り口で、自分がいかに弟子にして欲しいかを語る。最初の日以外は決して無理強いせず、長居もしなかった。ただ偶然立ち寄ったかのような、挨拶だけの毎日が繰り返される。

九

田中家の朝は規則正しい。

一番の早起きは洋子だった。彼女は必ず毎朝七時には起床し、朝食の準備を始める。ご飯を炊き、魚を焼き、味噌汁を作る。具はワカメと油揚げ、豆腐の三種と決まっていた。出汁は合わせ出汁、一番美味しい物を食べてもらうため、白味噌は恭二が起きて来てから入れることにしていた。

支度が終わり、恭二が起きてくるまではまだ一時間以上あった。これだけ早く準備しても、彼が起きてくるのはいつも九時だった。敬一郎が逝ってから、彼は夜中に月の光を見ながらでしか制作をしようとしなかった。今までよりも一時間は遅く起きるようになっていた。

その間、洋子は壁にかけられた絵を眺めるようにしていた。彼女が見ることのできる恭二の絵画は、それが全てだった。後は売れてしまったか、アトリエにあって彼が見せてくれない作品ばかりだった。

一枚の絵をじっと眺める。一個の球体が草原の中心で立ち尽くしている。

立ち尽くしている、その表現が似合う程、その球体は悠然と画面に納まっていた。その玉は灰色で、長い影が伸びていた。空は雲一つない青空だった。そのため、球体は青と緑の中にポツンと取り残されている。

「記憶なんだよ、これは」

そう恭二が言ったのを覚えている。彼が気に入っていて、どうしても手放さなかった作品だ。洋子はその絵を子供でも描けるような単純な絵だと思っていた。それが深い議論を呼ぶような物だとはど

うしても考えられなかったのだ。

やがて、恭二が大きく伸びをしながらリビングに入って来る。パジャマの襟は寝汗で汚れていた。

「おはよう」

「おはよう、行つて来たら？」

「ん、そうする」

汗かきの恭二は、起きてすぐにシャワーを浴びる。その間に、洋子は食卓を準備する。五分後、恭二がタオルで頭を拭きながら戻つて来た時には、湯気の立つ朝餉が並べられているのだ。

「いただきます」

どんなに調子の悪い時でも、朝食だけは欠かさずに食べる。一言も話さずに食事を口に運ぶ恭二を、洋子は真正面から眺める。自身も魚をつつきながら、彼の表情をつぶさに観察する。それが、洋子にとって一番幸せな時間だった。

食事が終わると、恭二は読書を始める。洋子は食事を片付けて部屋の掃除を始める。自分の居場所が無くなる頃、恭二はウェアに着替えてジョギングに出かける。

近くの、名前も知らないような公園を一時間程グルグルと周回して行く。決して健康のためというわけではなく、恭二の場合は昼寝のために疲れるようにするのだった。

ベンチに座り、今日最初の煙草を取り出す。この煙草が一番旨いと感じていた。ゆったりとした時間、雲を眺めながら恭二は空の上のことについて思いを馳せる。一つ一つの雲を様々な造形に例えていく。

あれは馬に似ているな。あちらの大きなのは象に似ている。車？扇風機に似ているな。あれはもしかしたらパルテノン神殿か。様々なものに例えながら心の中で呟く。

なあ、敬一郎。そっちは楽しいか。色んな遊び道具があるし、たくさん友達がいるだろう？俺たちが行くまで、楽しく暮らしていてくれよ。

その頃、敬一郎はたくさんのブランコに追われていた。

左右に振れるそれを、タイミングよく避けて行く。隣を見ると、海里はブランコを避けるまでもなく、それと同化してしまっていた。

「何度も言うようだが」

「何度も聞いているからもう良いよ。僕は好きで避けてるんだ。慣れれば楽しいものだよ」

汗だくになりながら澄ました顔をしてみせる。しかしその次の瞬間にはブランコが襲って来ていた。

こんな風に障害が出したのは、つい最近のことだった。乳白色の景色がいったん途切れたかと思うと、地球上の風景のような、穏やかな草原が広がっていった。遠くからは鳥のさえずりが聞こえ、優しい風も吹いて来る。遙か向こうには微かな家並みまで見え始めた。敬一郎は、いつの間にか月の入口を越えてしまったのかと思っ

てしまった。だがそれは偽りの風景だったのだ。

始めは橋桁の行進だった。巨大な橋桁が何十にも渡って隊列を組み、敬一郎たちに向かって行進してくるのだ。身の毛がよだつのを我慢して彼らが真上を通り過ぎるまで待っていた。その行進は一昼夜に渡って続けられた。

その次がこのブランコだった。両脇はいつの間にか高い壁で囲まれ、ブランコがその壁面にぶつかってから戻ってくるので騒音が絶えなかった。工事中のビルの中を通っているみたいだった。そうやってぶつかっているのに、一向に勢いが衰えないことが不思議で仕方なかった。

一服を終えた恭二は、家に帰って来てからまたシャワーを浴びる。その度に着替えを出さなくてはならず、洗わなければならない。その面倒を、洋子は文句一つ言わずにこなしていた。

昼食は麺類と決まっていた。夏は素麺になることが多かった。お中元での貰い物の大半がそれだったからだ。皆、恭二が麺類好きだ

と知っていたのだ。それ以外にも夏は冷麺、ザル蕎麦、冷やし担々麺と冷たいものが多かった。クーラーの効いたやや冷え過ぎの部屋で、そうしたものを食べるのが恭二の一番の楽しみだった。

「晩ご飯は何にしようか？」

洋子が聞くと、恭二は決まってこう返す。

「今は満腹だから考えられん」

この答えが来るのを分かっている、洋子は毎日同じ質問を繰り返す。

五ヶ月前までは、この昼食後から恭二の仕事の時間だった。夕食を挟んで十時頃まで続けてアトリエにこもる。または戸外に写生に出かける。恭二は一枚の絵に一ヶ月から二ヶ月の時間をかけた。素描や水彩でのテストを重ね、ようやく油彩に移るのだ。練習や実験から良い作品が生まれることもあったが、彼の重要な作品はそれらの試行錯誤の末に生まれていた。

だが、この頃の彼はそのペースを大幅に変えていた。制作開始は夜の九時からだった。それも練習は無しにいきなり本描きに入っていた。それでも、一筆、二筆進むのが精一杯で、まとまりの無い線が多かった。そのため、途中で何度かカンバスを捨て、新たなものを掲げてから制作に入った。

その作品に関してはサイズが決まっていた。F百号、一メートル六十センチ程度のサイズだ。それを横に長く使う。ちょっとしたテーブルくらいの大きさがある。恭二はそれをイーゼルにかけず、壁に立てかけてから描く。その姿勢が一番描きやすいと感じる。そのため、座椅子も買ってあった。洋子はその話を聞いてから買って来てくれたものだ。クッションが良く、背もたれも弾力があり、座っていて疲れない。腰も痛くならないので気に入っていた。

普段、恭二は油彩だけでなくアクリルも多用した。生命シリーズの時はほとんどがアクリルで描かれていた。だが、この作品だけは油絵で仕上げようと恭二は考えていた。月をモチーフとし、敬一郎を象徴する、この作品だけは。

制作は九時から明けて二時まで行われる。そのわずか五時間、恭二は後悔と不安に押し潰されそうになりながらなんとか筆跡を増やそうと試みる。当初の目的は絵の完成だったのが、段々と線の数を増やすことだけが目的になって行く。そして、それに気がついた瞬間、恭二はカンバスを破り捨てるのだ。そんな時に思うのだ。

「敬一郎が生きとつてくれたら」

「敬一郎にもう一目だけでも会えたら」

「敬一郎が、生まれさえせんどけば」

相反する妄想が彼の頭を支配する。それに疲れ果て、眠りに入るのだ。

恭二は昼から夕刻に入る時間、最も機嫌が悪い。夜になり、制作時間に入ることとを恐れているからだ。ならば止めれば良さそうなものだが、それができないのも頑固者気質が災いしているからだ。

ところが、そんな恭二が最近は夕刻のチャイムを楽しみにしている。いや、表向きは疎んじているのだが、洋子には気分が晴れ渡って行くのが手に取るように分かる。

午後五時を過ぎた。恭二は玄関横の窓から外を気にするようになる。洋子はいつ恭二が詩緒を家に上げてても良いように、お茶の準備をする。

十分が過ぎ、恭二が一瞬声を上げた。

「おっ」

それで詩緒がやって来たことが分かる。チャイムが鳴る。恭二は動かない。洋子は率先して応対に出ようとする。

「はい、どなたですか」

訊くまでもないのだが、それが一つのルールとなっている。

「先生、奥さん、こんばんわ。益田詩緒です」

彼女はいつも礼儀正しく、そして声が大きかった。誰にでも聞こえるハキハキとした発声で、家の中の二人に話しかける。だが、恭二は許可を与えず、洋子が扉を開けることは無かった。

「今日は私の絵ば持って来たとです。スケッチブックば郵便受けに

入れとくけん、見てくれますか。明日、また返事は聞きに来ますけん。よろしく願います」

そうとだけ言って、帰って行く。あまりにあっさり帰るので、声をかけるタイミングすら失ってしまった。そのためか恭二はきょんとして立ち尽くしている。洋子は慌てて扉を開けて詩緒を追いかけたが、走って行ったのかすでに姿は見えなかった。

戻って来た洋子は、一冊のスケッチブックを手にしていた。目が荒いタイプの紙を使っている。恭二は冊子を閉じたまま、じっと表面を眺めていた。その中に、どんな絵が展開されているか、見たくもあり、怖くもあるのだ。

洋子は絵のことが全く分からないので、とりあえず恭二が眺めるに任せている。しかし、いつまで経っても恭二が中を開こうとしないので、しびれを切らして声を上げた。

「恭二さん、見てあげんと？」

「見るばってん。まあその……紙が気になったとたい」

「紙がどげんしたと？ 普通の画用紙のこたるばってん」

恭二の言葉はただの誤摩化しだったが、それでも洋子の言葉に呆れた。

「あのな、紙にも色々あるったい。厚い紙もあれば薄い紙もある、目の粗い紙もあれば細かい紙もある。それぞれ描き心地も違うつとし、仕上げ方も違うつたい」

そう言って、アトリエから何冊かのスケッチブックを持って来る。水彩に適したものの、パステルに適したものの、恭二は洋子が眉をひそめる程に事細かな説明を続けた。

あまりに長く続くものだから、最後には言葉を遮るようにして洋子が口を開いた。

「そげん言われたらそうやね。分かるばってん、詩緒ちゃんの実力は、中は見てみらんと分かんっちゃなかと？」

言われて初めて恭二は自分がまだスケッチブックを開いていないことを思い出した。慌てて開こうとすると、洋子が口を挟む。

「私も見て良かと？」

「じゃあソファに行こうか」

二人並んでソファに座る。用意していたコーヒーを飲んでから、テーブルに置いたスケッチブックを開いた。

最初のページには、肖像画が描かれてあった。一目で自分を鏡に映して描いたものだと分かる。真正面を見て、真剣な表情だった。今までに見た詩緒の、どの感情とも違う、寂しげな印象を受ける。

「なんだか気取ってるみたいやね」

洋子が感想を言うが、恭二は何も言わない。画面に見入っていて、話も聞こえていないようだ。

「恭二さん、なんだかんだ言って詩緒ちゃんのことを気にかけるとやね」

次のページをめくる。

色鉛筆で描かれたイラストが丁寧に収められている。平面構成をテーマにしているようだ。清涼飲料水の缶を無数に描き、それがスポーツ選手とその汗を構成している。

さらに次のページには、精細に描かれたガラスの花瓶と一輪の花が縦長に描かれていた。

「上手かやん。詩緒ちゃんもやるね」

洋子は先程から詩緒を褒める言葉しか使わない。だが、恭二は一言も返さなかった。

彼は次々とページをめくっていった。主にデッサンを中心として、基礎技術を表現したようなスケッチブックだった。確かに、技術はあった。プロの目から見ればまだまだ荒削りだが、丁寧にしっかりとした自信にあふれていた。

「明日、益田が来たら、家に上げてくれ」

恭二はそれだけを言うと、部屋を出て行った。一人残された洋子は、それが吉報だと信じて、心を躍らせていた。一刻も早くこの知らせを、詩緒の元に届けたいと願った。だが、彼らは詩緒について何も知らない。突然訪ねて来た、弟子志願の高校一年生。それが彼

らと詩緒を繋ぐ全てだった。

十

一方で、敬一郎は苦勞を重ねていた。歩を進める度に障害が発生し、行く手を阻む。昨日は砂漠の巨大な蟻地獄、今日は果てしない空を雲に乗って渡らねばならなかった。

「海里、一体、これは、なんなんだい？」

体が弾むのに合わせて発音する。自然に声も弾んでいた。しかし、心までそうだとは限らない。

「分からないね。君がそれを望んでいるんじゃないのかな」

海里はいつも、現象が全て敬一郎の想像によって生み出されると語っていた。もしそれが本当ならば、敬一郎自らが生まれ変わるのを望まないために困難を生み出し、諦めるための理由を作り出しているように思える。

「でも、僕は心から現世に戻りたいと思っているんだよ。なのにこんな……」

と言いながら飛び上がると、一瞬足を踏み外してしまう。

「うわあ」

慌てて雲の端をつかみ、額に汗をかきながらよじ登る。途中からは海里が手を貸してくれる。敬一郎はやっと登った雲の上で一息ついた。

「はあ、はあ。相変わらず、息も切れないんだね」

「私はエネルギーであり、この世界そのものなんだよ。疲れるというのは、おかしい話じゃないか」

呆れたように笑う。その後で、ふと真面目な表情に戻って呟いた。

「もしかしたら……」

「なんだい？」

「うん、もしかしたら、君は世界から拒絶されているのかもしれないな

い」

いきなり大きくなった話に、敬一郎は目を見開く。

「世界　が？」

海里は雲でできた足下を確かめてから両手を肩の高さまで上げる。するとそこには月と地球が浮かび上がって来た。

「いいかい、この月がこの黄泉で、地球が現世だしよう。見慣れた表現だから頭に入りやすいだろう？」

敬一郎が頷くのを見ると、海里は続きを話し始めた。

「月は地球の周囲を回っている。それは　」

と言つて月を地球の方に投げた。月は最初は楕円軌道を描いていたが、段々と円軌道に近付いていく。

「　地球の重力と月の遠心力が均衡しているからだ。つまり、月は地球と自らによって支えられている」

段々と話が難しくなっていくため、敬一郎は理解するために全力を傾ける。

「ようするに、どちらかが無くなれば月は今の位置にはいられないってこと？」

敬一郎なりの推測を海里にぶつける。海里は静かに頷いた。

「そういうことだ。月は常に地球から離れようとしている。地球は月を引っ張ろうとしている。その二つがきちんと約束を守るからこそ、月はそこにいられる」

海里が指で押さえて、月の自転を遅くさせる。するとたちまち月は地球に向かって迫っていく、やがて接触して削れていった。地球もまたダメージを受け、その大部分が宇宙の塵となっていく。

「または地球の重力が少し弱まれば、月は離れていく」

今度は地球の回転を抑える。そうすると月はわずかず地球から離れようとし、やがて遠く宇宙へと消えていった。

「実際の話として、月の重力により地球が影響を受け、地球の自転が遅くなり、そのために月は段々と地球から離れていつている」

この段まで来ると、もう敬一郎には何がなんだか分からなかった。

とにかく、月と地球がお互いにルールを守っている限り、その拮抗は崩れない、そのことだけは理解できた。それを海里に伝えたと、彼は蘊蓄を語るのを止めて敬一郎に本題を伝える。

「敬一郎は、ルールを破る者だ。輪廻という法則を破る、異端者だ」
「僕がいると、現世と黄泉が無くなってしまうの？」

「それはどうか分らない。何しろ今までそんなことをした人間などいないのだから。ただ、世界はそれを危惧しているのだろう。だから敬一郎を排除しようとする」

海里は一つだけ手元に残った地球を両手で擦り潰すと、足下に粉を払い落とした。

それ以上、敬一郎は口を開くことができなかった。

十一

朝から暗い一日だった。曇天は重く大気を圧迫し、恭二の心をも沈ませた。朝から三杯のコーヒ―を立て続けに飲み、昼前のジョギングも行かなかった。昼間はただひたすら眠って過ごし、読書すらしようとしなかった。

「恭二さん、落ち着かんね」

洋子はその様子を、明るいものと受け取っていた。待ち遠しくて仕方が無いのだと考えていたのだ。恭二は返事をせず、横になって寝た振りをした。

洋子は朝から詩緒を迎え入れる準備に余念がなかった。夕食は一緒に食べていつてもらうつもりだった。恭二には相談していない。眠った振りをしながら、恭二は考えていた。どうして近頃、洋子は嬉しそうにしているのだろう。こんなに不愉快なことが起こっているというのに。

洋子と恭二の心はすれ違っていた。

夕刻、いよいよチャイムが鳴る。

空はまたその重みを増したようだ。

「センセイ、奥さん、こんにちは」

いつものように、大きな声が門扉に響く。その途端、玄関に明かりが灯り、音を立てて扉が開いた。

「いらつしゃい、詩緒ちゃん。恭二さんが待つとるよ」

洋子の声に詩緒の表情が明るくなる。

「ホントですか？」

「当たり前やん、早よせんね」

家の中に通された詩緒は、まっすぐ洋子の後について行く。奇麗に磨かれた床の上で、詩緒の足がキュツと鳴る。その音に彼女自身

が驚いている。

洋子は静かに歩みを進めると、アトリエの正面にあるドアに手をかけた。ノブはゆっくりと回された。開かれた先には恭二の姿が見える。詩緒は眦をきつくしてその方を向いた。恭二はうつむき、両手を額の前で組んでいた。ドアが開かれても二人の方を見ようとはしなかった。その前には詩緒のスケッチブックが開かれていた。

「先生、見てくれたんですね」

いつもの筑後弁が鳴りを潜め、標準語での会話が心がけられている。それだけ、詩緒にとっては待ち遠しかった瞬間だった。

洋子は彼女をソファの前に案内した。足音が微かに部屋に響く。その間、恭二は一言も話そうとはしなかった。また、物音も、息さえ潜めていたように、田中家からは音という概念が消え去ろうとしていた。このまま、全ての存在が無音のまま通り過ぎるのを恐れたのか、洋子がことさら明るく声を上げる。

「恭二さん、なんばしよっと。詩緒ちゃんが来ただよ」

洋子の呼びかけで、部屋に呼吸が戻った。気がつく、詩緒の耳にはポットの湯が沸く音、鼻にはクッキーの甘い匂い、目には壁にかけられた数々の絵画が認識される。

恭二は時間をかけて、両手を離していった。その手は、スケッチブックを撫でるように滑っていく。開かれたページは筑後川の土手の風景を描いていた。

「益田、座ってくれ」

言われて初めて、自分が立ったままだと気付いた。洋子も改めて詩緒にソファを勧めた。体の沈む、柔らかすぎるソファだった。詩緒はそれに身を委ねていると、囚われているような感覚に襲われた。緊張から固くした体が、余計にそうさせる。

洋子が隣に座る。彼女は目の前にあるコーヒーマグも、チョコチップクッキーも勧めようとはしなかった。

恭二はスケッチブックを一度閉じ、それから第一ページ目を開いた。詩緒の自画像だ。

「精細で繊細、線が優しすぎるくらいはあるが、全体の構造はしっかりとしていてモチーフが浮き彫りにされている。存在感のある自画像だ」

次のページを開く。平面構成をテーマにしたイラストだ。

「汗と飲料缶をかけた面白さはある。ただ色使いはやや単純で、パターン化されすぎている。その点に不安が残るな。狙いがはっきりしない部分も見受けられるし、そもそも益田は運動に興味を持ちそうな人間には見えない。このテーマを選んでも深みは与えられないな」

その視線の先には細い腕と白い肌、赤い眼鏡をかけた詩緒がいる。詩緒はその評価を聞いて、しまった、というような顔をした。

恭二は、こちらもまた標準語で詩緒の絵の評価を下していた。試験の結果を言い渡すように、淡々と、感情を込めずに続けられる。洋子はその一切に口を挟むことができずにいる。詩緒は先が読めないことで苛立ちを募らせていた。ただそれは微かで、表面どころか詩緒の表層意識にさえ昇っては来なかった。

そして恭二が、ゆっくりと立ち上がる。手にはスケッチブックを持っていた。

テーブルを挟んで向かい側の詩緒の側まで来ると、突然それをテーブルのガラス面に叩き付けた。

「お前は俺ば嘗めとるとかつ」

興奮のあまり、息が荒くなっていた。

「お前は俺に試験官ばさせよつとか。お前は俺にこげなもんば見せてどげんしようとしたとか。俺はこげなもんじゃ動かん。さっさと帰れ」

詩緒はあまりの勢いに、何も言葉を発することができずにいた。ただ、呆然と、恭二の方を向いて、恐れ表情を、浮かべていた。ゆっくりと時間が過ぎる。洋子は恭二が何を言っているのか理解していなかった。彼女の期待は裏切られ、打ち捨てられていた。その期待は碎かれた後に宙を舞い、閉め忘れたドアから逃れていく。玄

関脇の窓から流れ出た溜息は空氣に霧散し、雲の一つに重なっていく。その雲の一つは偶然にも敬一郎がしがみついていたものだった。彼は未だに雲のステージから抜け出られずにいたのだ。小さな彼にとつて、何者かから拒絶されているという恐怖は堪え難いものであった。震え、戦慄き、涙を流す。その涙は溜息の一部を溶かして地上へ戻つて来る。地面に溶けた期待は遍くマントルに浸透し、私たちの生活を根底から支えている。期待は歸りたがっていた。洋子の懷へと。その居心地の良い場所へと。しかし、彼女が絶望している間には彼に入り込む余地はなかった。消された懷は、同様に田中家を浮遊していた。ただそれは行く場所を見つけられずに彷徨っていた。散々迷ったあげく、新たな懷の形成元と成り得る詩緒の胸へと潜り込んでいった。そうして彼はそのまま眠りについた。彼が寝ている間に、詩緒は玄関を出て歸宅の途に着いていた。その姿は小さく、段々と足下から消え行くような乏しいものだった。誰もその姿に気付くものはいなかった。彼女は今、自ら益田詩緒を否定していた。それは永遠に循環する点で輪廻と似ていたが、希望に満ちていない部分で似ても似つかない現象だった。

「歸れ、か」

消え行く足が小さな石ころを蹴る。四回跳ねて側溝に転がっていった欠片は、そのまま流れることもできずに留まっていた。そして、そのまま永遠に留まったままだった。

詩緒は田中家から益田家への道を削るようにして歩いていた。筑後川から二回分かれた支流の小川を横目にして。道は先の方で左に折れ曲がっていた。その先には橋が二つあり、男橋、女橋と呼ばれていた。こうした辺鄙な場所にある橋にありがちな、都市伝説がまことしやかに囁かれている。曰く、この橋の下は処刑場であった。細い川の対岸同士で、男と女の受刑者が同時に首を刎ねられた。死の瞬間、男は女を呼び、女は男を呼んだ。首はその勢いによって小川に転がり落ち、その流れの中で、ようやく二人は結ばれた。詩緒はその偽りの伝説を美しいと思った。いつかそれを抽象的な絵に仕

立てたいと思っていた。その思いも、今日は働かない。俯いた彼女には橋の全景は見えなかった。

橋を渡ると、両側を田畑に挟まれた道に出る。農道の割に車通りが多く、危険だといつも注意される場所だ。歩道も無く、小さい頃はいつも怯えながら端の下草を踏みつつ歩いた覚えがあった。その川では泥鰌が捕れた。夜中に誰かが仕掛けを作っているのを、死体を埋めているのだと勘違いしたことがある。川の脇には草が生い茂り、川面が見えにくいからだ。

今、彼女はその時と同じ思いで歩いていた。ただし、怯えているのは見えない恐怖ではなく、見えてしまった未来への恐怖だった。一体、私は何をしているんだろう。先生に何を見てもらおうとしていたのだろう。

今度は道を右に折れる。ポツポツと住宅の陰が見え始め、それはやがて建て売りの一群へと移り変わっていった。注意しなければ自分の家が何軒目か忘れてしまうような、容量の少ないゲームの背景のような光景だった。

しかし慣れとは恐ろしいもので、上の空の詩緒にも自分の家の区別はついた。無意識の流れるような仕草で鍵を取り出し、扉を開く。玄関は暗く、足下が見え辛い。手探りでスイッチを押した。暖色の蛍光灯が点灯する。ただいま、その言葉に対する返答は無かった。気にも止めず、二階の自分の部屋へと上っていく。回すと少し軋むノブを押すと、少々引つかかりを感じながらドアが開いた。部屋には額にも入れられていないカンバスが無造作に置かれている。ドアから一番遠くに見えるベッドは所々絵の具で汚れていた。その中で綺麗な寝具がやけに眩く感じる。ドアから右に視線を移すと、大きく黒い机が部屋の五分の一を占めていた。板を三枚接続しただけの簡単な作りの机だった。デスクトップにはほとんど物が置かれておらず、目立つのはモバイルサイズのノートパソコンだけだった。その他には、ベッドと同じような絵の具の汚れが目についた。その犯人である画材は部屋の左側を占めるウォークインクローゼットに収

められている。そして、その中にはまだまだ相当数のカンバスが立てかけてあるのだった。

詩緒はそれらの絵を避け、ベッドに横になった。荷物はクローゼットに投げ入れられたままだった。頭の後ろで手を組んで、詩緒は天井を見つめたまま考えた。

恭二の絵を知ったのは、つい一年前だった。彼の制作した膨大な数の生命シリーズ、それが彼女の根底と繋がっていた。優しく、寂しい、そして儚かった。球体は地面に根を下ろしたように絵の中で存在の光を放っていた。粗雑なようで臨場感のある背景はその球体の意味をいや増しに増していった。そこにいる「三人」は、幸せそうに見えた。その解釈は誰もが認めることだった。ある日彼女は生命シリーズ最大の作品を体験しにいった。珍しく恭二がインスタレーション作品を制作したというのだ。企画展示室を一杯に使って、ブランコや土手が形作られていた。空に浮かぶ綿菓子のような雲には滑り台の上から乗ることができるようになっていた。その雲の上から下界を眺めると、こちらを見上げる他の入場者の姿が認められた。相手は楽しそうに笑いかけてくれた。おそらく、彼女も同じような笑顔を見せていただろう。そこでは、生命シリーズの本質が体現できるようになっていたのだ。

詩緒は恭二の全てを知りたくなかった。インターネットや本で恭二の嗜好や生活ぶりを収集していった。その際、自宅写真を見て、彼が意外に近い場所に住んでいることも知った。やがて詩緒は渴望する。恭二の絵を間近で見たい。恭二の制作を見たい。恭二の隣で制作したい。恭二に自分の絵を見てもらいたい。そして、恭二の力になりたい。

詩緒はベッドから起き上がり、自分の絵を一枚取り上げた。そこには幸せそうにこちらを向いて微笑む三人の家族が描かれていた。食卓を囲んで、焼肉を食べている所だった。技巧的にも表現としても十分な作品だった。ただ一つだけ奇妙な所があるとすれば、それは部分的に抽象的だった。家具や背景、テレビの様子などはとても

リアルであるのに、それぞれの登場人物がひどくデフォルメされている。特に両親は表情に乏しく、姿形が違っただけで同じ顔のように思えてしまう。ある意味で、幼児が描いたような絵だった。彼女はその絵を持って、階下に降りていった。

リビングには黄色いベンチソファと背の低いテーブルのみが置かれていた。それらはフロアリングに直接置かれているため、暖かみが無く、閑散とした印象を受けた。さらに奥のダイニングに向かうと、背の高いテーブルに椅子が四脚ついている。テーブルを挟んで詩緒の向かい側には、絵に描かれていたのと同じテレビが置かれていた。

詩緒はテレビを点けた。画面の中では新人のお笑い芸人が下らない芸を見せている。詩緒はそれを笑うことなく、絵を椅子の一つに立てかけた。

冷蔵庫を覗くと、昨日作った物が残っていた。ボウルに入ったままのサラダと、レバーとモヤシの炒め物が今日の食事となった。

それらを食卓に並べ、冷凍のご飯を温める。即席味噌汁の具と味噌を椀に入れ、お湯を注いだ。再び冷蔵庫を開け、麦茶を取り出す。絵の向かい側に座った詩緒は、それに向かって話しかけた。

「お父さん、お母さん、今日は何時に帰ってくるの？ で、今度はいつ休みになるの？ 話したいことがたくさんあるんだけど？」

疑問を投げかけても、誰も答えてはくれなかった。そういった意味では、絵はまるで遺影のようだった。

「明日は何時に出るの？ また五時とか六時とか？ なんでそんなに仕事するの？ そうしないとうちはやっていけないの？」

飽くなき疑問を、絵に向かって問いかける。答えはまた返っては来ない。だが、詩緒には分かっていたのだ。

両親はそれぞれ別の職場から深夜に帰って来る。二人とも別々の時間に帰って来て、顔も合わさずに簡単な食事だけをして寝てしまう。その食事を用意するのは詩緒の役目で、彼女が食事を供されることは無かった。

次の日には朝早くから出勤してしまう。コーヒーだけは常に作り置きがあった。二人はその後、職場に向かう途中にあるコンビニでおにぎりを買って朝食とする。父親の利雄はシーチキンマヨネーズ、母親の景子は焼き明太子が大好きだった。出勤前に詩緒と会うことは無く、仮に詩緒が早起きをして会っても、忙しい二人はろくに話も聞かないで出て行ってしまう。それが分かってから、詩緒も二人に合わせて早起きするのは止めてしまった。

利雄は古い人間で、仕事をしていることが家族に対する最も大きな貢献だと考えていた。景子は新しい人間で、働く喜びを知っている女性だった。それぞれ家族を大事にしたいと考えてはいても、それを実行するに至らない一般的な人間たちだった。

詩緒のお喋りは続く。一人で会話することの寂しさをごまかすためだけにテレビは点いていた。そうして常に音声飛び交うことで彼女の切ない儀式が少しでも華やかなものになる。

食事を終えた詩緒は一人でそれを片付け、両親のための食事を作る。

今日、自分のために食事を作る気分でも、両親のためには作ってあげようという気になるのだった。そうした時こそが、彼女と両親の接するほぼ唯一の時間だった。

疲れて帰る二人のために、味噌汁を作り、塩の利いた卵焼きを焼く。おにぎりは少し多めに握り、大好きな具を入れた。アジの味噌干しを焼いて皿に置き、ラップをかけて保存した。こうしておけば冷えても美味しいし、レンジで温めても良い。

そして、詩緒は二人に手紙を書いた。

他愛のない、日常の出来事を綴った手紙だった。学校でのちょっとした失敗、友達との会話、面白かったテレビ番組、今流行っているもの、感動したこと、美味しかったもの、思い出したこと、二人が好きだということ。

そこには喜びのみが綴られていた。濾過し、抽出された幸せのみが押し固められ、表面を輝かせていた。あるべきはずの対照的な感

情は一切内側に閉じ込め、さも忘れてしまったかのように振る舞われていた。そこには適度な感傷さえ窺われなかった。詩緒はだが、それで満足してペンを置く。少しでも自分の存在を伝えるために。返事が来ることはほとんど無かったが、それでも詩緒は書き続けていった。それが彼女と両親との間に張られた、たった一本の糸だったからだ。

二階に上がって、詩緒は自分の描いた絵を見つめる。

詩緒の描く絵はほとんどが家族の肖像だった。家族での写真さえ撮れない彼女の、それはただ一つの手段だった。思い出は、彼女の中でのみ作られ、記録されていった。

今見ている一枚は、それとは少し異なっていた。

真っ白な部屋に、様々な機器が置かれている。中央にはベッドがあり、そこに景子が寝ていた。胸の上にはまだ体液の付着した嬰兒が抱かれていた。隣には震える手で二人を抱きかかえるようにしている利雄の姿があった。二人の表情は疲れきっていたが、心からの喜びに溢れていた。全てを出し切った後の爽快さが滲み出ている。

この絵は、夢でもなく、架空の記録でもなく、現実の模写だった。詩緒がその写真の意味を噛み締めたくて描いた、彼女の知らない光景の模写だった。

その絵を眺めながら、詩緒は瞼を下ろしていく。

夢の中で、彼女は決意していた。

十二

敬一郎は動けずにいた。

彼は動く術を失っていた。

隣で海里はただ動かずにいた。

彼は敬一郎が動くのを待っていた。時間を所有しない彼は、時の砂が流れ落ちる光景に焦る必要を感じなかった。ただ世界がうねり、消え、そして生まれていく姿を眺めているだけで退屈は途切れていた。

敬一郎がこの世界に戻って来てから、半年が過ぎていた。季節は春から夏を過ぎ、秋に移り変わろうとしていた。その間に一回の大雨に鹿児島が泣き、四つの台風が九州を掠めていった。それらのユースもまた、忘れられようとしていた。

だが、それは現世での話である。彼ら死んだ者とまだ生まれる前の者には関係のない話だ。海里は実に長い間待っていた。敬一郎もまた動かずにいた。彼は海里が雲の上に落とした砂塵をずっと眺めていた。停止した時間と時間の間は、いつでも取り戻せるのだ。問題は彼自身が納得するかどうかにあった。

「行こう、海里」

ようやく、敬一郎は声を上げた。長い時間固まっていたせいで、足の筋肉が弱っていた。だが歳若い彼はすぐにそのハンデをカバーしていくだろう。ゆっくりと踏み出した一歩に合わせて、海里が隣を歩いていく。彼は思っている。法則に合わせさえすれば痛みやハンデなど関係ないのに、と。ただ自身が最前までの自分であるのだと感じれば良いのだ。だが、それは敬一郎が望んでいない。そのことを何度も言われているだけに、今この場というのは気が引けた。彼も十分に分かっているのだ。自分の役割というものを。

敬一郎は重い足を、その重さを噛み締めながら動かしていた。彼にとつてはそれが生きているという感覚なのだ。

「ねえ海里」

敬一郎の問いかけに、海里は足を止めて振り返った。

「世界に拒絶されるつてのはどんな気持ちなんだろうね」

「現世の時間で何ヶ月も固まっていた人間がそれを問うのかね」

「僕はショックを受けていただけだよ。別にその気持ち自体を味わったわけじゃない。そうだと思ったただけであれだけなんだから、本当にそうだったとしたらさぞ恐ろしいんだろうね」

「敬一郎、怖いのかい？」

「正直に言つと怖いよ。でも、それでも僕の気持ちは揺らがないよ」
その証拠に、月の入口までの道は輝きを増していた。敬一郎の決心が固いことを示している。

「益田詩緒のことは覚えてるかな」

海里が思い出したように言った。

「お父さんの弟子になりたがっていたあの子でしょう」

「そうだ、君がとても気にしていたあの子だよ」

そう言われて、敬一郎は慚然とした表情を浮かべる。

「別に気にしてなんかいないよ」

「そんなことはないだろう。君はあの子に父親を取られるんじゃないかと不安なんだよ」

今度は何も言い返さなかった。海里の言ったことは確かだった。

そして、敬一郎には分かっていたのだ。自分のその不安が、ここ最近の障害を生み出していたのだということが。

「でも、詩緒のことと世界に拒絶されることと何の関係があるのさ」
不満のある顔を崩さないままで敬一郎は問いかけた。海里はまたも掌から地球を生み出して、敬一郎に説明しようとする。

「ちよつと待つてよ。もういい加減、難しい話は勘弁だよ」

制止する敬一郎に構わず、海里は地球を回転させる。そして、それはある一点で止まった。対象が小さくてよく分からないが、そこ

は福岡県久留米市のある小さな町だった。恭二と洋子、詩緒の住む町だ。

「話はちゃんと最後まで聞くものだ。私は別に難しいことを言おうとしているわけじゃない。ただ、君に見てもらおうとしていただけなんだよ」

地球の、日本の、その町のビジョンが敬一郎の脳裏に語りかける。詩緒は再び、田中家の前に立っていた。曇天からは一霎の雨が落ちて来ていた。詩緒はそれに気付いて、空を見上げた。傘は持っていない。そして、持つ気もなかった。

彼女は一式の道具を持っていた。携帯用のイーゼル、油絵の具と筆、パレット、小さなカンバス。

詩緒がチャイムを鳴らすと、玄関横の窓が開く。

「弟子は取らんつち言うたろうが」

声だけが無慈悲に響く。その重みは、詩緒の心を暗く押し潰し、涙腺を緩ませた。遠くまで弾き飛ばされそうな思いがする。やっとのことで踏みとどまると、詩緒は恭二に向かって言った。

「先生、見て欲しかとです。私の絵ば」

恭二から返事はなかった。拒絶だった。その門は詩緒を拒絶する世界への扉だった。同時に、それは恭二が自身へ閉ざした苦悩の門でもあった。彼女はそれを開けるために、どんなことでもするつもりだった。ただ、痛みのある胸はどうしても行動を一步遅らせる。

気後れして一步下がると、それ以上前に進めないような気がして来た。

「彼女は何をしようとしているの？」

敬一郎は海里に向かって首を傾げた。秘密主義の彼はしつ、と口に指を当てたまま何も語らなかった。もう少し見ているという意味なのだろう。

敬一郎には、彼女の気持ちがわかる。踏み出せない思い。これ以上踏み込んでしまえば、もうどうしようもなく取り返しのつかない事態に陥るのではないかと考えてしまうのだ。吐き出した言葉を取

り戻せないかと考えているのだ。だがそれができなことは口にした自分が一番良く分かっている。だからこそ詩緒は胸を痛めている。

「先生、見て欲しかとです。私の絵ば。お願いします」

もう一度彼女は言った。今度も返事はなかった。だが、今の言葉は恭二に向かつて言ったものではなかった。彼女自身が踏み出すために放った言葉なのだ。

イーゼルを安定した場所に立て、その上にカンバスを置く。F五号、長い辺が三十センチ程度のサイズだ。それを縦長に使う。

カンバスは門に背を向けて立てられていた。

「もしかして、描いている所を見てもらおうとしているの？」

海里が頷いた。

「でも、お父さんは見ないと思うよ」

敬一郎はやや希望を込めてそう言った。海里の言う通り、恭二と洋子を取られなくなかったのだ。

だが、海里は首を振った。

「敬一郎、見てもらうんじゃないよ。見せるんだ。世界から拒絶された彼女の、それが決意なんだよ」

敬一郎にはまだ意味が分からなかった。彼女がそうやって絵を描き続けても、その扉は決して開きそうにない。

パレットを手にした詩緒は、ゆっくりと色を塗り込んでいく。

玄関では、恭二が腕を組んで立っていた。その様子を洋子が見ている。

「気になるっちゃんい？」

「気にならん」

恭二は断固として言い切る。だが、その頭の中ではなぜ油彩を選んだのかを考えていた。乾きの遅い油彩では、短時間で描くのにには適していない。

詩緒は下地を作らなかった。真っ白なカンバスの上に、直接色を置いていく。小さい円、大きな円、様々な球体が配置されていく。

「詩緒は何を描こうとしているの？」

先程から敬一郎は質問ばかりだ。そして、海里も多くを語ろうとしない。全ては見えていれば分かることだと考えているのだ。

「へえ、風船でも描いてるっちゃんか？」

洋子が窓から絵を覗き見ている。恭二はそんな洋子の方を気にして、何度も視線を泳がせている。

「あ、ほらほら、円から線が出て来た。やっぱり風船っちゃんい」と

恭二はその言葉が気にかかった。円から線が出ている。白いカンバスに。

「あれ？ 線が他の円と繋がったばい？」

詩緒は様々な大きさ、様々な色で塗られた円を線で繋げていった。それは不規則で、重なることもあった。見た目はカラフルで楽しいが、何となく神経質な印象を受ける。

恭二はそれを聞いて、一つの絵を思い浮かべていた。

田中敦子という画家が、描いた作品だ。今、洋子が実況したような物を多数描いていた。

まさか、人の作品を真似るような人間だったのか。

恭二はそれが気がかりになり、また憤慨し、洋子を退かせて窓から覗き見る。

「なんだこれは？」

カンバスを見た恭二は思わず叫んでしまった。確かに、円と曲線が描かれていた。ただし、それは画面のごく一部であり、小さなカンバスの中央よりやや上に集められていた。

恭二の声を聞いた詩緒はゆっくりと振り向いた。視線はあくまで鋭く、口元には満面の笑みを携えて。

「みーたーなー」

勝ち誇った笑みだった。

「やっと見てくれたんやね、センセイ。私の作戦勝ち？」

恭二は目を何度も瞬かせながら、詩緒に問いかけた。

「わざと田中敦子を真似たとか？」

詩緒はパレットを置いて立ち上がり、恭二の方に体を向ける。その手には一枚のコピー用紙が握られていた。

「またまたインターネットで悪かつちゃけど、具象と抽象を扱った展覧会の寄稿文に、田中敦子について書いてあったとよ」

『具体という活動は現代美術を市民のレベルまで引き下げてくれた。高尚で扱い辛いと感じられていた芸術を、楽しく、感覚的な物に変えてくれた。その中でも田中敦子の電飾服や円と曲線を使った抽象

絵画は見た目の楽しさと同時に儚さや狂気をも感じさせ、それは私の作品作りに大きな影響を与えている。』

具体とは既存の手法や素材を使わないで、常に新しい美術を求める「具体美術協会」の会員らによる一連の作品を指す。ダダイズムに傾倒する彼らの作品群は確かに難解な部分はあるが、その一方で光や仕掛けを使ったパフォーマンスアートにより、美術をより楽しく、より身近に感じさせてくれる団体でもあった。そしてその常に挑戦し続ける姿は、恭二の精神性に似通った部分が多々あった。故に、彼は具体のヒロインとも言える田中敦子に憧れるのだ。

詩緒は印刷した寄稿文を読み上げる。

恭二は呆れて首を振った。

「しかしお前、それは本当にその展覧会の時期にだけ、しかもインターネットのみに載せられたもので……確か会期が終わったら消されたはずやぞ」

それらのやり取りを、敬一郎も見ていた。

「本当なの？」

「私を知る分けないだろう？　だが、恭二がそう言っているのだからその通りなんだろう」

「すごいね、あのお姉ちゃん。そんなにお父さんのことが好きなんだ」

「そうだな、ここまで来るとマニアというよりもストーカーにも似ている気がするが。どちらにしろ、画業に関しては敬一郎、お前よりも遥かに詳しいだろうな」

敬一郎は感心のあまり口を開け放している。

「先生、分かってもらえた？」

詩緒が玄関横の窓の下まで詰め寄る。恭二は壁一枚で隔たれているというのに思わず後じさりしてしまう。

「うつ……しかしだな」

「愛ゆえの厳しい評価ってのは許されんと？　自分の実力ば知ってもらおうとするとは悪いこつね？　愛しとるなら自分のことも知っ

てもらいたいと思うのは当然のことじゃなかと。そりゃ、あんな部活で描いたごたるスケッチば持つて行っただとは失礼やったと思うばってん、でもあれだつて私が全力で描いたとよ。最高の作品じゃなかばってん、もうちょつと見てくれたつて良かつちやなかと？ それに、まだ最後のページば評価してもらつとらんとよ」

一息に詩緒が言った。

「洋子、悪かけど、スケッチブックば持つて来てくれんね」

それに押されて、恭二が洋子に頼む。すぐに持つて来られたスケッチブックの、最後のページを開く。そこには筑後川が描かれていた。

橋の上から描いたのだろうか、画面中央を上っていく川は、やがてその身を細めながらゆつたりと二つに分かれ、再び流れていく。

恭二はその絵をずっと眺めていた。評価を語ろうとはしなかった。技術的なものを考慮しないで画面下にまっすぐ横に引かれた線は、おそらく橋の欄干を示しているのだろう。そこから始まる川の流れは画面上部で左右に分かれる。左は工業地帯の煙が、右側には住宅の屋根が見える。中央の中州は巨大な球体に押し潰されていた。

「このことか？」

窓に向けてその面を見せる。詩緒はただ頷いた。それを見て、恭二は溜め息をついた。洋子はそれらのやりとりについていけず、ただ恭二の背中を見つめているだけだった。

「僕もよく分からないんだけど」

「私に聞かれても困るよ。これは恭二と詩緒の問題だ。だが、恭二は何か分かかっていて、それで詩緒を拒絶したみたいだね。拒絶するには二通りある。一つは自分と相容れないためにするもの」

「ようするに、怖いから？」

「まあそうだ。未知への恐怖は誰にでもある。もう一つは、自分と同一であるが故の拒絶だ」

「似ているから、拒むの？」

「そうだとも。ごく単純にしよう。君は、君が二人いたら怖くない

かい」

敬一郎は想像する。姿形、声、考え方まで同じ人間が自分の他にも存在する。そう思った瞬間、背中がむず痒くなるような違和感を覚えた。

「なんだか気持ち悪い」

「そうだろう？ 前に言った言葉を覚えているかい。現世とは自分が確立している世界なんだ。人は他人に認識されて初めて人となる。そう言った意味では、同一者がいることは現世のルールを否定することになる。だからこそ、違和感を感じるんだ。同時に、自分を理解してくれない人間、認識してくれない人間も恐れる。なぜなら、認識されないということは、自分が自分でなくなるからだ。だからそれもまた現世のルールから外れることになる。不便だね。過ぎたことは全てにおいて否定せざるを得ない世の中なんて」

海里が憂鬱な顔を見せる。黄泉の住人としての彼には分からないのだ。そんな不都合な世界が。だが、彼でさえもいつか現世に行くのだろう。敬一郎はそれを思っただけでかな痛みを感じていた。長い旅の間に、海里に対する信頼感が生まれていた。それは依存心と言いつても良い。子供が親に対して求める物と同質のものだった。

二人が会話を交わしている間、恭二は考え込んでいた。洋子も、詩緒もまたそれを眺めていた。詩緒は感じ取っていたのだ、恭二の思いを。

「とりあえず上げれ」

そう言っただけで恭二は扉を開いた。そして洋子に向かってお茶を出すように言いつける。

「良かと？」

驚いて、洋子が問い返す。恭二は無言で頷く。その仕草には諦観に似たものがあつた。

以前通されたのと同じ、まっすぐな廊下を通り抜けていく。もう詩緒は期待も不安も抱いていなかった。自分は、やることを全てやったのだという達成感が支配していた。

詩緒は、スケッチブックの中に技術のみを詰め込んだのではない。恭二への思いも封入していたのだ。

恭二が先に立ってドアを開ける。その向こう側には三回目となるリビングが顔を覗かせる。柔らかすぎるソファとガラストップのテーブル、そして壁にかけられた無数の絵画たち……すでに見慣れたそれらが、詩緒には懐かしく感じられる。恭二がソファに座り、洋子は隣り合ったキッチンへと向かった。すぐにドアを隔ててお湯を沸かす音が聞こえて来る。アイスコーヒーで良いのに、と詩緒は思う。数分後、温かいコーヒーの香りが漂って来た。詩緒はそれを酸っぱい香りだと感じた。陶器が触れ合う音がして、ドアが開いた。洋子がコーヒーとチョコチップクッキーを盆に乗せてやって来る。「あれ？ まだ座つとらんと？ 恭二さん座つてもらったら良かったに」

言われて、恭二は曖昧な返事をする。まだ迷っているのだ。そんな彼を無視して、洋子が言った。

「良かよ、詩緒ちゃん、座りいよ」

「え？ でも」

「良かとよ。詩緒ちゃん、これこの前食べさせてあげられんやつたけんね、食べえよ」

そう言つてクッキーとコーヒーを勧める。詩緒が恭二の方を見ると、彼も戸惑つたように洋子の顔を見つめていた。

「あの、奥さん、その」

詩緒が良いあぐねていると洋子が笑いかけて来る。

「もう決めたと。私は詩緒ちゃんの味方になるっちゃけん。恭二さ

ん、覚悟しといてね」

睨むようにして恭二に話しかける。彼は一度唾を飲み込み、微かに頷いた。その瞬間、詩緒の懷に住み着いていた希望は再び空間全体に広がり、期待と手をつなぐ。彼らは天井から笑いかけ、微笑ましくも涙ぐましい洋子の勇気を褒め称えるのだった。

「ありがとうございます。でも、どうして？」

詩緒が問うと、洋子は寂しい目をして答えた。

「詩緒ちゃんやったら知つとるやろ？　こちらは半年前に子供を亡くしとるとよ」

「はい……」

「ずっと暗かった家庭がね、詩緒ちゃんが来てから明るくなったとよ。この人も詩緒ちゃんの話をする時は楽しそうにするっちゃん」

詩緒は恭二の顔を見た。彼は恥ずかしそうに顔を背けた。

「良かった」

思わず、詩緒は一言を漏らした。

「え？」

洋子が詩緒を見る。

「あ、いや、何でも無かです」

「何でも無いってことはなかるうもん。言つてごらん」

それでも詩緒は戸惑っている。その言動がまた恭二を怒らせるのではないかと思っているのだ。それを感じ取った洋子が言った。

「良かとよ。恭二さんのことば気にせんで。私が守っちゃるけん」

仕方なく、詩緒は話す。恭二の方は見ずに、洋子だけを視界に入れて。

「私がここに來たきつかけはそのことやったとです。先生も奥さんも落ち込んだるやろうと思つて、なんか役に立てんかな、と思つてから……後の方は自分の野望優先させた感じがあるけど」

聞いた洋子の目から一筋涙が落ちる。詩緒を手招きすると抱きしめた。詩緒は驚きと戸惑いで慌てふためいている。

「ちよ、ちよっと奥さん」

「良かやないね、良かやないね」

洋子は詩緒の頭を掻き抱き、息のできない程に締め付ける。圧迫によって眼鏡がずれた詩緒は、それを戻そうと目元に手をやるが、洋子の力強さの前になかなか修正することができないでいる。

「お願いやけん、ちよつとの間だけ抱っこさせとって」

そう言って詩緒の頭を撫でる。段々と詩緒もされるにまかせていった。気持ち良さそうに目を瞑る。

そうした劇を、恭二は見ていた。二人が共謀してそうしているのではないかと思ったくらいだ。だが、そうではないようだ。つまり詩緒はそこまで恭二と洋子のことを思っているということなのだろう。どうにも腑に落ちなかった。なぜそこまでしてくれるのか。答えは、このスケッチブックの中にあるのだろう。

恭二は抱き合う二人をそのままに、ページを捲っていった。最後のページに行き当たり、手を止める。作品に対して様々な方面からアプローチしていく。まずはつきりしているのは、この作品が恭二の影響を受けているということだ。風景の中に球体を配置するのは、まさに生命シリーズの一貫した特徴だ。

だが、それは生命を感じさせるものではなかった。風景に対して球体が大きすぎる。そして、それは中州を押し潰している。線も実に単純化されていて、まるで子供が描いたようなぎこちなさだ。

ふと感じたのは、球体は中州を潰しているのではなく、画面の左右に配置された工場と家とを分断しているのではないかということだ。それが意味することは、家庭と仕事だろう。それが分たれている。それを橋の上から見ている。流れは二つに分かれている。

生命シリーズは地球に生きている我々を地球と同じ球体で描くことで一体感を表現している。だが、この絵では球体は障害でしかない。

それらのことを考えたとき、恭二はこの絵がひどく悲しいものに見えた。悲しく、孤独だった。そう思った時に気付く。それは詩緒が恭二の作品に見たものと同じではないか。

「益田、お前は何に潰されとるとか？」

恭二は詩緒に声をかけた。抱き合っていた二人は同時に彼の方を見る。詩緒は初め、何を意味しているのか分からないようだった。

しかし、恭二がスケッチブックを指し示すと、理解して口を開いた。

「家庭の存在」

「なんてこった」

恭二は頭を抱える。ようやく恭二は全てを理解する。一方で洋子とは言えば二人の交わした少ない言葉が何を意味しているか分からないでいる。

恭二は頭を上げ、大きく溜め息をついた。

「益田……詩緒」

「なんですか？」

恭二はただ名前をなぞっただけだった。だが詩緒はそれと呼ばれたと勘違いしたようだ。

「いや、その……まあ食え。一息ついてから話をしよう」

そう言っただけでクッキーを差し出す。そのついでに、自らも一口に入れた。

「ああ、やっとセンセイが笑った」

詩緒が指差して笑う。洋子もそんな詩緒を見て笑う。そんな二人を見て、恭二は感じた。これで良いのだ、と。

「なんだか楽しそうだね」

敬一郎はそんな団欒のような光景を見て不満を口にした。

「仕方ないだろう。時とは過ぎ行くものだし、人の心とは変わっていくものだ。敬一郎、君も変わっていくのだよ」

「僕は変わらないよ。決して、決心を揺るがせたりしない」

その答えを聞いて、海里は首をすくめる。

「私が言ったのはそういった意味ではないのだがな　とにかく、分かっただろう。絶望とはこうして乗り越えていくものだ。拒絶とつきあう方法はそう多くはない」

敬一郎は言われて、ようやく本題を思い出した。海里は敬一郎の質問に答えてくれようとしていたのだ。世界から拒絶されるとはどんな気持ちなのか。詩緒の行動を見ていて、それは十分すぎる程に分かった。

「だが、彼女は乗り越えたぞ。拒絶とつきあう方法の一つは、受け入れることだ。拒絶を許容し、自らも殻を形成する。そうすることで断絶はするがそれ以上傷つくことは無い」

「でもそれじゃなんにも解決しないよ？」

「その通りだ。もう一つの方法は戦うことだ。語り、触れ、説いて理解を深めることだ。その行為が、存在が正しいものであれば必ず勝つことができる。勝利とは即ち認められる、認識されるということだ」

海里の言葉を、敬一郎が受け継ぐ。

「そして、認識されるということは現世では自分を形成することだ、でしょ」

語り口調を真似されて、海里が苦笑する。

「その通りだ。さあ、時間がない。君も絶望に打ちひしがれている場合じゃない」

そう言つて、海里は空を指差した。乳白色の世界から現世のような障害に入つた頃には、決して見えなかったものが見えていた。

敬一郎の乗っている雲からはよく見えた。地上で見るよりも、おそらく遙かに大きく。

彼自身、気がつかない内に辺りは暗くなつていた。そもそも夜があるということ自体分からなかつたのだ。

それは雲をいくつか従えて、膨張するようにその場に浮かんでいた。

白く、黄色く、暗く、様々な色に光を放ちながら、反射しながら、水面に浮かんだ蓮のように優雅に漂つていた。

月が、敬一郎と対等な位置に存在している。月に月、その異様さに彼は圧倒されていた。

満月には足りない、しかし限りなく満月に近い格好で、月は無言のまま敬一郎を見つめていた。

「いつの間に……」

「それが必要な時には出てくるものだ。君が必要としたんだよ、敬一郎」

それにしても月は巨大だった。どこから見ても、裏側など覗けそうも無いくらいに。

「僕が、呼んだ？」

「そうだ、リミットを知るために。私が旅立ちの時に話したことを覚えているかな」

しっかりと覚えていた。その言葉が、敬一郎の支えだったのだから。

「月が完全な円を描き、地球に最も近くなる夜、月の入口へ」

「そうだ。月明かりで見えるその場所を見てごらん」

もう一度、海里は月の方角を指す。しかし高度は遙か低く、地面の一端を見ていた。敬一郎の意志による光の道は、その方向にまっすぐと伸びていた。そこに行くには、この雲から降りて、崖を下らなければならない。

崖からそこまでは緩やかな丘のように見える。山の裾野のようにも見える。今までは見えなかった所で、突然出現したのかもしれない。敬一郎はその、光の道の先を見つめた。

そこには階段が浮かんでいた。

月の光に照らされて、ぼんやりと輝く、真っ白い階段だった。

そして、それを上った先には、地球が浮かんでいる。

海里が説明のために出したのではない、青く白い、巨大な球体だった。

ふと、敬一郎は恐怖を覚えた。自分が今からあの場所に向かうのだと思うと、なんだか怖いような気がしたのだ。

「怖いのかい、敬一郎」

海里が後ろから声をかけた。囁きだったというのに、ひどく大きく聞こえ、驚いてしまった。

「な、なんだよ。怖くなんかないよ。さあ、行こう」

敬一郎は崖を降りるために一步を踏み出す。その姿を悲しく見つめながら、海里は自分の身を岩清水として地に染み込んでいった。

十三

恭二は何も教えてはくれなかった。ただ隣で絵を描いて良い、そう言っただけだ。だが、詩緒はそれを不満とは思わない。むしろ幸せだと感じていた。何しろ、あれだけ憧れた人間の隣で絵を描くことができるのだ。それは同時に、恭二の描く絵を見ることができるとのことだった。

「それにしても、センセイって秘密主義やったっけ」

詩緒は首を傾げながら恭二のキャンバスを覗き見る。隠す理由もないのに、恭二はその目を塞ごうとした。

それを撥ね除けて、詩緒は恭二の絵を見ようとする。

そこには何も描かれていなかった。筆だけはしっかりと持っているが、先程からそれが動いた気配はない。先日何事かを描き込んでいたようだが、次の日には新しいキャンバスに変わっていた。

「キャンバスも高いっちゃん、勿体なかよ」

と詩緒に言われてしまう始末だ。

「うるさかね、詩緒は自分の分ばせんか」

そいつって無理矢理に首を逸らさせる。彼女は、あの日の続きを描いていた。画面中央上にカラフルな円と、それらが無作為につながる曲線が描かれていた。先日はそこまでだったが、今はそれに輪郭が描かれていた。一目で人間と分かる輪郭だ。

「シナプスば描いたつもりか。安易やな」

シナプスとは神経細胞をつなぎ、伝令を行う組織のことだ。そう言われれば、その円と線はそうに見えないこともない。

「センセイこそ分かつとらんね。これはシナプスとかじゃなかとよ」
詩緒の口ぶりだと、彼女はシナプスそのものを知らないようだった。当てが外れて、恭二も苦笑いをする。

「じゃあどげんするとか」

恭二は手を止めて詩緒の筆の先を見ていた。詩緒は人の輪郭を描いた後に、その下にマグマ溜まりを描いた。その部分だけがやけにリアルで、抽象的な上部分とちぐはぐな印象を受ける。そして、マグマ溜まりから円と線に向けて溶岩が吹き出ていく。

「これは溶岩のつもりか」

「うーん、もう一捻り。実はこれは悩み、っちゃけど」

そう言われて、恭二は初めて自分が描かれた部品の位置関係を間違っていたことに気付く。マグマ溜まりは人の下に配置されたのではなく、正面に配置されたのだ。つまり、これは一個の人間と外部からの攻撃を表したものだというのがこのだ。

「悩み、か」

恭二は感心していた。まだ十六歳の子供が、これだけの表現力を持つていることに。技術も申し分なく、デフォルメすることも知っている。ただ一つだけ心配なのは、テーマが暗く、深すぎるということだ。この年頃の子供は、もっと明るいテーマを選んで良いのではないだろうか。

「詩緒、お前はもうちょっと子供らしい絵ば描かんか？」

「馬鹿にしとると？」

「そげんこつちやなか。戸外に出て風景画を描くとか、楽しいことをせんといかんとやなかか？　こんままじゃ人間が小さくなるぞ」

そう言いながら、恭二にも分かっていた。詩緒が絵を描くのは、自分の寂しさを紛らすため、癒すためなのだ。だからこそ、詩緒の絵は痛々しく感じる。あまりに内面を直接的に表現しすぎるので、見ている者が不快感を抱きかねない。それはある種、致命的な欠点だった。

「二人とも、そろそろおやつにでもしようか」

二人して黙り込んでいると、洋子が戸を叩く。詩緒にはアトリエに入ることを許したのに、洋子には未だに許していない。

恭二は「分かった」と返事をする立ち上がった。詩緒もそれに

続く。リビングではすでに温かいコーヒーと、ケーキが並んでいた。詩緒にはチーズケーキ、恭二にはチョコレートケーキだった。

「センセイ、本当にチョコが好きっちゃね」

「悪かか？」

「許してね、詩緒ちゃん。恭二さん、酒も飲まんし、煙草も止めたけんね。これだけが楽しみみたい」

恭二は詩緒が弟子入りした時から煙草を止めていた。一度は止めようとして止められなかったそれを、また始めようというのだ。洋子は驚きながらも歓迎した。だが、今度は別の健康面に気をつけなければならぬようだ。

「それにしてもセンセイはチョコ食べ過ぎばい」

「やっぱり詩緒ちゃんもそげん思う？」

「このままやったら太るよ」

恭二は言葉を返せずにいる。申し訳なさそうにフォークをケーキに入れる恭二を、二人が笑う。

その時、恭二が詩緒に話しかけた。

「詩緒、お前の絵はもう少しなんとかせんといかん」

「どこが悪かとですか？」

「感情が出過ぎとる」

そう言つて、先程考えたことを説明する。詩緒は真剣に聞き入つて、その上で反論する。

「でも、絵には必ず感情が入るもんち思うとですよ。先生だっちゃそげんでしよう」

詩緒は、だからこそ恭二には生命シリーズが描けたのだと信じている。それでこそ、憧れた画家なのだ。だが、恭二は興奮する詩緒を手で制しておいて、話し始めた。

「お前の言うことは確かにその通りばってん、過ぎるとはいかんたい。見る人間はお前の愚痴ば聞きたいっちゃんか。お前がその境遇ばどげんしてテーマに昇華するかば期待しとるとたい。ただ描き殴るだけやったら子供だっちゃできる。俺の絵にだっちゃ感情は籠

つとる。ばってん、それを自分の中で整理せんといかん。今、俺が
絵ば描ききらんとはそれでたい。見よったろうが。お前ば弟子にし
てからいっちょも描いとらん」

静かな声だった。それだけに引き込まれた。恭二は一度も詩緒の
顔を見なかった。それは自分の境遇を思つてのことだった。資格の
ない人間がそれを言うのは、天に向かつて唾をするように心苦しか
った。

洋子はいつの間にか席を外していた。

玄関から外に出て、真昼の月を眺めている。見えるはずのないそれは、死んだ敬一郎を示しているようで儚く感じた。

絵のことは分らないが、洋子は二人が同じことで悩んでいるのだと分かった。それは、お互いがお互いのことを話す時に真剣で、辛そうであることから分かる。口に出すことさえ憚られる、そんなことについて話している。自分たちの核になる出来事について話しているのだと分かる。

「恭二さんも越えんといかんとやね」

詩緒を弟子にしたのは間違いいではないと、洋子は信じていた。恭二はあれだけ嫌がったが、洋子は詩緒がいることによる刺激が彼を前に進ませてくれるのではないかと期待している。そしてそれは深く彼女と触れていくにつれて確信に変わっていった。詩緒と恭二は似ていた。似すぎていて、二人とも自滅せねば良いが、と自嘲気味に思う。

「先生は、なんで悩んどると？」

ストレートに、詩緒が訊く。恭二は上手く答えられずにいた。

「それはな、なんというか、描くのが辛かけんよ」

抽象的で、恭二らしくない答えだった。詩緒はさらに訊く。

「何が辛かと？」

「ん……」

恭二は押し黙った。視線も逸らした。しかし、詩緒は逃がすまいと視線を合わせようと近付いていく。その度に、恭二は詩緒から逃げるように顔を背けていく。

「先生！」

詩緒は大声を上げて恭二の顔を両手で挟んだ。無理矢理に向けられた恭二の顔が、詩緒の鼻先にまで近づけられる。

恭二は息を飲んだ。詩緒に対して性的な感情は抱いていなかった

が、これだけ肉薄するとドギマギしてしまう。

「先生は私の事情ば聞いたでしょうが。なんで私には教えられん？」

詩緒と視線が合う。彼女の目は真剣だった。まっすぐに悲しそうに歪んでいた。

「敬一郎ば思い出すけんな。それで辛かよ」

「え？」

「俺が今描きよるとは敬一郎をテーマにしたもんたい。ばってん、どげん描いて良いか分からん。描こうとすると、敬一郎を思い出して辛かよ。どうしてもその痛みが必要以上に画面に出そうになると。だけん、進めきらん。出来上がったが、本当に敬一郎のことは伝えとるやろうかと思つてから、描ききらんたい」

一気に吐き出して、詩緒から逃げる。惘然とした表情のまま、恭二は詩緒を睨みつける。詩緒もそれ以上責めようとはしなかった。だがその代わりに寂しそうに問いかけた。

「先生は辛かですか。敬一郎君ば思い出したら」

恭二は視線を落として答えなかった。

「それじゃああの生命シリーズはなんやっただですか？ おかしかったですよ。それじゃまるで敬一郎君の全部が辛かみたいじゃないですか」

その言葉に、恭二がゆるゆると話す。

「敬一郎はな、たった三日間しか生きとらんかった。その間、俺はあいつの顔ば見とらん。俺は生きた敬一郎に会つとらんとよ。泣き声も、笑った顔も、授乳している姿も見とらん。それがどうして楽しかったち言えるとか」

力なく、項垂れる。今この瞬間も、恭二は敬一郎が生まれてからの場面を繰り返し投影していた。頭の中はそれでいっぱいになり、破裂しそうだった。

だが、それでも詩緒は言葉を緩めなかった。恭二の言葉を否定し、わななく口元を必死に抑えながら、言葉を発しようとした。

「それじゃ、敬一郎君が可哀想かとです。思い出して辛かとは、嫌な思い出だけでしょう。敬一郎君が、奥さんのお腹に宿ったときの喜びとか、期待とかはどげんなるとですか。初めてお腹を蹴ったときは？ 生まれたち聞いた瞬間はどげんやったとですか？ 敬一郎君はそれまでもずつと生きとったとですよ。敬一郎君が生きとったとは、たった三日じゃなか。十月十日の間、一所懸命生きとったとです。そして、先生たちと一緒に暮らしたとですよ」

恭二は目を見開いて詩緒を見た。目に一杯涙を溜めた詩緒は、泣き声を抑えようとして、必死に唇を噛み締めている。

今更のように、恭二は気がついた。

生まれてからのショックがあまりに大きすぎて、忘れてしまっていたのだ。

そう、確かに喜びはいつでも側にいた。

もう一年以上前になる。洋子がジョギングから帰って来た恭二に体温計のようなものを差し出したのだ。

「なんかこれは」

分からないでいる恭二がそう言うのと、洋子は嬉しさを抑えきれず、笑い声を漏らしながら恭二に抱きつく。

「馬鹿やね、分からんとね。子供ができたったい」

結婚して十年目の出来事だった。すでに半分諦めていたので、突然のことに対応できないでいる。恭二はおかげで洋子と一緒に喜ぶタイミングを逃してしまった。しがみつく洋子は嬉しくて涙を流しているようで、微かに嗚咽が聞こえて来る。

「泣かんで良かるうもん」

恭二が言っと、洋子は薄情もん、と詰る。

「恭二さんこそ、もうちょっと喜んでくれても良かるうもん？」

彼は笑顔一つ浮かべてはいなかった。ただはしゃいでいる洋子を見て、呆然としているだけだ。

「いや、お前がそげん喜ぶもんやから、俺が喜べんとたい」

そんな恭二を見て、洋子はまた笑う。今の彼女にとっては、世界

の全てが幸福の種に見える。どんなことも許容し、どんなことも輝いて見えた。壁にかけられた恭二の寂しげな絵画さえも、笑っているように思えるのだ。まだ感じるこのできない、自分のお腹に宿っている命を思い、あれこれと想像する。まずは男の子だろうか、女の子だろうかということ。次には名前はどうかということ。その次には心配が沸き起こる。五体満足で生まれてくれるだろうか。元気に大きくなってくれるだろうか。さらには、でもどんな状態でも私は愛し抜いてみせる、といった決意まで。

幸せが家一杯に広がると、耐えきれずに洋子は恭二を散歩に誘う。どこにでも飛び出していきたい。そんな風に表現する洋子を、恭二は心配そうに見つめるのだ。相手が喜びすぎると、どうにも自分の嬉しさが半減するような気がする。実際に、今現在洋子は大事な体なのだ。無理をしてはいけないし、興奮しすぎてもいけない。ましてや四十近くなってからの出産は危険も伴うだろう。素直に喜べなかったのは、その辺りのことを直感的に感じ取ったのかもしれない。

「ちょっと待て、お前はそげん言うばってん、俺はまだジョギングから帰って来て着替えてもおらんとぞ」

あくまで冷静な恭二に向かって、洋子は不満を表す。しかし、恭二の言うことももつともで、「じゃあその間に準備するけん」と言っ

って洋子も着替えを始める。

シャワーを浴びながら恭二は、一人になってゆつくりと考えてみる。こういう時に思い浮かぶのは、経済的なことばかりだ。自営業とはいえ、自分が六十になる頃に子供が二十歳になるのは何となく不安が残った。結婚も三十直前だったが、それから十年も種が宿らないとは思わなかった。我が家の貯蓄はどうなのだろうか。財布のことは全て洋子に任せてあった。恭二は酒も飲まないし、遊びにいくことも少ない。唯一の道楽といえば煙草くらいだ。

画材などが必要な時にカードで買っていた。無制限に使うほど金銭感覚がないわけではないし、制作のペースがやや遅めの恭二はそういう心配をせずとも済んだ。

次に思い浮かぶのは作品作りについてだった。この出来事が、自分にどういった影響を及ぼすのだろう。その時点で、恭二はディフォルメされた人物画の連作を描いていた。東郷青児との関連性も言われているが、恭二は不満だった。別に作風が似ているわけではない。ただ何となく雰囲気似ている程度の話なのだ。それなのにわざわざ先人を持ち出して来る批評家の神経が疑われた。

実はこの評価、たった一人の批評家がたった一度だけ書いたものだった。だが恭二は気になって仕方がないのだ。それだけ彼は絵画に対して神経質だった。

だからこそ恭二は紛うことなき自分の代表作を描きたかったのだ。そして、ようやく思いは子供のことに向いた。ここまで延々と遠回りして来たのも、実感が湧かないからだだった。自分が父親になるそれはどんな意味合いを持つのだろう。恭二はどうしても物事を直裁的に考えることができないでいる。単純に嬉しい、と表現できないのだ。喜ぶにも理由が必要だった。しかし、その理由がどうしても思い浮かばなかったのだ。洋子のように未来のことに思いを馳せることもできなかつたし、生まれる際の不安など端から持たなかつ

た。その心配事に気付かなかったのだから。

つつい、いつもより長くシャワーを浴びてしまった。それでも、恭二にはまだ子供を持つ喜びが分らないでいる。

浴室を出ても下がらない体温に辟易しながら、彼は小さな扇風機を体に当ててしばらく過ごす。その音を聞きつけて、洋子が声をかけて来た。

「恭二さんまだ上がらんと？ こっちはもう用意ができたとはってん」

声は玄関から聞こえて来た。どうやらすでに靴を履いて待っているようだ。

「もうちょっと待てんとか」

文句を言いながらも、急いで服を着る。体温が下がりきっていないせいで、服を着たばかりなのにまた汗をかいてしまう。裾をばたつかせてなんとか汗を乾かそうとするが、なかなか上手くいかない。そうしている内に、再び催促が来る。

「公園に行こうか、それとも一番街に行く？」

問われて、恭二はすぐに一番街、と答えた。理由はただ一つ。そこにはアーケードがあるからだ。

恭二の住む町から一番街までは車で十分程度の距離だ。西日本鉄道、通称西鉄の久留米駅からJR久留米駅方面にまっすぐと伸びるアーケード街がそれだ。

恭二は焼けるようなハンドルをタオルで覆い、まっすぐに車を走らせた。細く、しかし交通量の意外と多い道を、ゆっくりと進んでいく。やがて道は聖マリア病院へと続く大きな交差点に出る。それを横目に、恭二はさらに先に進んだ。すぐに駅から伸びる高架が見える。その高架下を左に曲がると間もなく久留米駅だ。恭二はその近辺にあるコインパークに車を停めた。

久留米市一番の繁華街、とは言え人通りは少なかった。近年できた郊外的大型商業施設に客を取られているためだと聞く。「相変わらず少なかね。本当に客が居るとやろつか」

恭二は毒づきながら洋子と腕を組む。恭二の言つことももつともで、アーケードの中はシャッターの閉まった店も多い。平日だからとは言つても、あまりに寂しい光景だった。

「まあまあ、涼しいけん良かやん」

洋子は恭二の考えを見通していた。確かに公園よりは涼しいが、それでも夏の熱気は脇から漂って来る。恭二は汗を流したままにして、周囲を眺める。人はまばらで、どちらかというと店員の数の方が多いような気がする。中には居酒屋チェーン店がいくつか見当たるので、夜にはまだ人が集まるのだろう。

昔松竹映画のあつた場所を過ぎ、洋子は何かを探していた。どうやら目的があつて一番街へと来たらしい。いつの間にか手を離して先に先にと進んでいく。時々振り返つては、恭二が来るのを待っている。恭二はそのような洋子の様子を、少女のようだと思う。付き合い始めた頃の洋子は良くはしゃぐ女だった。家庭に入ってから家事に全力を傾ける静かな女になったが。

本当に嬉しいのだな、と恭二は思う。

「恭二さん、こっちばい、はよ来んと」

そう言つて手招きする。そんな洋子の姿を見ると、こちらまで浮き足立った気持ちになる。

洋子は一番街の一角にある書店に入った。明治書店という名前の小さな店だ。店内は細長く、所狭しと雑誌や実用書が並んでいる。専門書の類いはほとんどない。漫画雑誌が中心の店だった。恭二も洋子も漫画や雑誌を読む習慣がない。新聞も恭二が全国紙と、美術新聞を取っているくらいだ。洋子は文学や芸術といったものに全く興味を示さなかった。ニュースソースはワイドショーといった有様で、昔にそれを見つけた覚えがある。返つて来た答えは「恭二さんが教えてくれれば良いやん」だった。

そんな中、洋子はいくつかの本を手にする。「おなかの中から始める子育て」「赤ちゃんの未来がひらける新しい胎教」などなどだった。表紙には可愛らしい赤ん坊のイラストが描いてある。「すぐ

実践できる」「赤ちゃんはお母さんお父さんを選んで生まれてきます」、など分かりやすく扇情的なキャッチコピーが踊る。

「それ、買うとか？」

「買うばってん、悪か？」

「悪かなかばってん……」

恭二はそういったマニユアル本の類いを好まなかった。

さらに洋子は雑誌の棚に向かうと、「たまごクラブ」を手に取った。妊婦のための情報誌だ。テレビコマーシャルを良く見るため、

恭二も知っていた。

妊婦二人が並んでいる表紙に、特集の文字が踊っている。「高齢出産もこれで大丈夫！ Q & A 30」と一番大きな文字で書いてあった。

「ねえ、これこれ、良かつち思わん？」

恭二の裾をつまんで感想を聞こうとする。恭二は恥ずかしくなつて返事を濁したまま書籍の棚へと逃げていった。洋子の詰る声が耳に残った。

結局三冊とも買った洋子は、次に斜め前にあるCDショップへと恭二を連れて行く。

看板にはシティワルツ、とある。二階建てで、どうやら一階がCD、二階がDVDとなっているようだ。店の前には中高生がはしゃぎながら何事かを話している。どうやらアイドルグループに関することらしい。S M A P、という名前は聞いたことがある。彼女らは結局品物は買わずに帰っていった。

明るい店内には、無数の商品が並べられていた。手前からポップス、ロック、端の方に演歌やワールドミュージックが並んでいる。さらにその一角にミュージックビデオがわずかな数だけ揃えられていた。恭二はそれらを一瞥する。一見して目的のものを見つけるのは難しそうだ。

洋子は店に入るなり何事かを店員に聞いている。恭二は何と無しに店内を見回すが、音楽の趣味を持たない彼には興味を惹くものは

見えない。洋子は店員の案内で店の端の方に行き、そこで談笑している。

その顔に恭二は惹かれた。

抑えきれない笑みが、体全体から溢れている。まるで十歳は若返ったような、張りのある笑みだ。

そうか、洋子は嬉しいのか。

ふと、そう思った。そう思うと、自分の胸の内からむずむずとした感覚が浮き上がって来た。そのまま足下が地面から離れて行くような気がした。

理由が見つかった。恭二は確信した。

喜ぶための理由が見つかったのだ。それは二乗にも三乗にもなり、恭二の体を内側から食い破っていく。咆哮する龍が足下から駆け昇り、締め付けて行くようだ。鼓舞され、破裂し、飛び上がり、涙が流れる。この感情を表現する言葉を、恭二は今、持たなかった。

いや、あるのだ。単純な一言で。

喜び、幸せ、嬉しさ、そんな風に言われるのだ。だが、それでは足りない。それらのポジティブな言葉を全て合わせても足りないくらいに感情が、恭二を覆い尽くし、照らしている。

「ねえ、見て見て恭二さん。ララバイおめでどう〜天使へのメッセーじ〜だって」

洋子が話しかける。恭二が振り返ると、洋子が驚く。

「どげんしたと？ 泣いとると？」

恭二は泣いていた。溢れてしまうものは仕方がない。止める方法は知らなかった。

「歳取ると涙腺が緩くなるったい」

洋子はわけが分からないながらも、彼の背中を叩く。

「しっかりせんと、お父さん」

「そげんこつば言わんだっちゃ分かつとう」

恭二は洋子の手を振りほどいて背を見せる。洋子は「それじゃこれば買って来るけん」と言ってカウンターへと向かう。

それから程なくだった。恭二は新しい絵画のシリーズを発表する。何の変哲もないリアルな風景の中に、これもリアルな球体を配置した作品だった。

例えば、「ブランコ」と題した作品では、どこにでもある公園のブランコが描かれている。そのブランコの上に、小さな赤い球体が描かれ、後ろには大きな灰色の球体が配置されている。それらを脇から眺めるようにして灰白い球体が佇んでいた。

洋子の懐妊はすでに業界には伝わっていたため、誰もがこれを「未来の風景」と解釈した。恭二も、それを肯定した。

「肩車」という作品では、青い大きな球体の上に小さな青い球体が乗っている。それを脇から見ている球体も青だった。

「雲」と題した作品には、球体は一つしか出て来なかった。滑り台の上に真っ白く小さな球体が描かれている。そして滑り台の斜め上方に雲が一つだけ配置されている。言うまでもなく、子供が雲に乗れるかどうかを夢想している場面を想像した作品だった。

これらのシリーズによって、恭二は一般の客層を取り込んだ。今までの哲学的な雰囲気を残したまま、明るい印象の作品を著すことができるようになったからだ。作品の大きさは段々と大きくなり、ついにはインスタレーション 体験作品にまでなってしまう。

今までに描いた生命シリーズを、実物大にしてしまったのだ。展示空間にはブランコや滑り台が配置され、肩車する巨大な球体も置かれた。滑り台の上の雲には、実際に乗れるようになっていた。一見、何の変哲もない遊具などを配置したようなこの作品群は、一般来場者に大いに喜ばれた。というのも、親子来場者には風船が配られ、子供には飴が渡された。作品群が配置されたその床は全体がカーペットとなっており、クレヨンや色鉛筆が無造作に置かれていた。子供たちはその中で自由に絵を描くことができた。床だけではない、

壁も、天井にも描くことができたのだ。子供たちは展示物に乗り、いかに空間を埋めるかに拘泥した。たちまち部屋は絵で埋まり、翌日にはまた新しいカンバスが張られる。描かれた絵は別室に展示され、それを見るために親子がリピーターとしてやってきた。

この作品群は、洋子もとても喜んだ。彼女にとっても、分かりやすい作品だったのだ。何より、恭二の喜びの大きさが伝わって来た。彼は決して制作風景を見せることはなかったが、完成した作品は一番に洋子に見せた。そして、事細かに状況を説明してみせるのだ。

「良かか、南の島ぞ。そうやね、グアムとか、行ったことなかばってん。砂浜がザーっと広がるとるったい。もう向こうまで見えんくらいばい。砂の粒が細かかけん、さらさらして足にくつつかんと。そんなところば、俺とお前が歩いとるったい。で、後ろから、お父さん、お母さん、言うて子供がバーって走って来る。俺とお前はあつという間に抜かれるったい。で、それば自慢そうにして子供が振り返る。そげなところは絵にしたっちゃけど」

恭二はこれに「かけっこ」と題を付けた。洋子はそれに対して感想を返す。

「良かねえ、元気良かつちやろうね。恭二さんは男の子っち思うとると？」

「俺は男の子が良かね」

「私は女の子が良かつちやけど？」

そう言つと、恭二は意見を翻す。

「まあそやね。俺も女の子で良かつち思う。一緒に絵とか描けたら良かね。そうたい、そげんすれば良かつちやんね」

この時期、恭二は一ヶ月に十以上の作品を描くことも珍しくなかった。このように洋子との会話の中で、次々にアイデアを生み出し、制作して行つた。

その間に、洋子の検診の送り迎えをする。恭二は診察に立ち会いたがったが、これは洋子が許さなかった。
「だって恥ずかしやん」

「なんば今更言いよるとか。俺のは興味本位じゃなかったい。ちゃんと仕事のために経験ばしとかないかとぞ」

厳しい表情で言う恭二に、洋子が苦笑を返す。

「ようするに興味があるっちゃる。写真ば見せちゃるけん、それで良かるうもん」

結局、恭二の方が折れることになる。超音波検査のビデオ収録ができることが分かったからだ。

「ほら、ここが頭で、こつちが手たい」

まだまだ小さな胎児の、分かりにくい超音波画像を洋子が説明する。恭二はそれをスケッチブックに速記しながら、真剣に聞き入っている。

「意外にちよろちよろ動くとな」

「元気が良いですね、っち言われたよ」

「男の子かもしれんね」

「女の子でも元気良か子がおるよ」

そんな風に言っては笑っていた。

その頃は、二人とも笑顔を絶やさなかったのだ。

恭二は今まで忘れていた思い出を詩緒に話した。普段ならこういつたことを恥ずかしがる恭二が、臆面もなく語っていく。それは単純な驚きと、感動によって包み込まれているためだ。恭二は今、自分の思いを濾過することなく口から紡ぎだしている。

「お前の言うごつたい。敬一郎は俺と洋子と一緒に居ったつたい」

「だけん、生命シリーズができたでしようが」

詩緒が畳み掛ける。恭二が頷く。

確かに敬一郎は恭二とともに生きていたのだ。そして、恭二は思いつく。そこには常に洋子がいたことを。洋子と敬一郎は同体だった。あの時期、恭二にとって敬一郎は洋子と同じ生命体だった。敬一郎を愛し、洋子を愛していた。

「詩緒、すまんけど、洋子ば呼んで来てくれんか」

師の言葉に、詩緒は素直に従う。ふと窓から外を見ると、夕焼け

の中に太陽が沈む所だった。太陽はゆっくりと形を扁平にして行きながら、街並に溶けて行つた。天は徐々に幕を下ろし、星は微かな光を瞬かせている。

恭二は思った。太陽が沈む。月が昇る。それらは同時に存在し得ない。だがそれは見た目だけの話だ。大きな視点で見れば、その二つは常に同時に存在している。ただ自分たちが気付かないだけだ。

洋子が部屋に入つて来る。恭二はその音で我に返つた。一人静かに泣いていたのだらう。洋子の目は赤く、顔面は紅潮していた。詩緒はドアの付近に立っていた。恭二はあえてそのままにして、洋子だけを側に呼んだ。

「また泣いとつたとか」

洋子の頭に手を置く。

「ごめんなさい」

言つてから一つ、しゃくり上げた。

「謝ることなかるうが。俺はお前ば泣かせてばかりばい。こつちこそ悪かった」

洋子を抱きしめる。詩緒が見ていようと構わなかった。だが、洋子の方はそうはいかない。慌てて恭二を引き剥がそうとする。それでも、恭二は強く洋子を抱きしめた。すると、それ以上彼女は何もしようとせず、彼にされるがままになる。

「俺がいつまでも敬一郎を生かそうとするけん、お前も辛かやな。俺がお前の中にいる敬一郎を愛しとつたこつ、お前も俺の中にいる敬一郎に苦しんどるとやろう」

洋子が身じろぎした。恭二の説を肯定したのだ。それから、また嗚咽しか聞こえなくなった。

恭二は洋子を抱きしめたまま、頭を撫でる。辛抱強く、彼女の涙が治まるまで待った。

その間に、窓の外の風景はオレンジから赤に、そして紫へと変色して行つた。一片だけ残っていた太陽の光が眼前から消え去ると、後には昼でもなく、夜でもない空間が出現した。

「洋子、見てくれんか」

鳴咽が治まったことを確認して、恭二は洋子の肩をつかんで外を見せる。

「詩緒も、この風景ば覚えとってくれんか」

「家並み、のことですか？」

詩緒の質問に首を振る。

「そうじゃなか、この闇のことたい。太陽が沈んで、月が昇る前、昼でもなく夜でもない。ばってん、確実に次の段階に進もうとする時間帯……こげん、なんかもが真っ青に染まる時間のことは、薄明っち言うつたい」

今、闇は天蓋を覆い、家の中にまで侵入して来た。それは闇というには明るく、光というには暗かった。薄暗い青、それ一色に染まる。窓も壁も床もソファもコーヒークップもテーブルも壁にかけられた絵画たちも恭二も洋子も詩緒も空気も生も死も全てが青に染まる。全ては同一で区別がなく、しかし確実に個々の特徴は残していた。

「詩緒、手伝ってくれんか。敬一郎ば描くけん」

恭二は洋子の手を引き、アトリエに向かった。

十四

「まるで、ここみたいだね。何もかもが同じ色に染まるなんて」

敬一郎は現世の景色を見てそう感想を漏らした。いつの間にか風景は乳白色のあの場面へと戻っていた。

確かに、二人は月の入口に辿り着いたはずだった。目の前には巨大な地球が浮かび、光の道は彼らを祝福するように輝いていたはずだった。

「ねえ海里、どうしてなの？ これも、僕が世界から拒絶されたから？」

海里は何も答えなかった。

制作はたった二日間で行われた。

まず初日、あの薄明の後、目一杯にライトアップしたアトリエで、恭二は下地を塗る。彼は詩緒に色を調整するように言った。始め、詩緒は固辞した。下地は作品の雰囲気を決める一番大事な部分だ。それを任される程、詩緒は技術がない。

「技術じゃなか、感性で作りたい。俺が認める。お前なら薄明の色が分かるやろうが」

それでも詩緒は戸惑った。色彩は個人で感じ方が違う。詩緒が感じた色と、恭二が思っている色は異なっている。それが恭二の作品に使われるなんて、考えられなかった。

すると、恭二が言う。

「お前は、弟子になる時に俺に話したろうが。両親と会えない苦しさば、俺に話したろうが。お前やったら分かるはずぞ」

詩緒はしばらく恭二の言葉を考えていた。彼は何が言いたいのだろう。私と薄明、それと敬一郎をつなぐものは何なのだろう。ほどなくそれは分かった。彼女は恭二と絵の誕生の瞬間を共有していたのだ。だからこそ、恭二はあの時、詩緒に席を外させなかったのだ。それを理解し、絵の具の缶をとる。油絵の具の上に張った水を捨て、ある程度の分量をナイフですくい取る。それらを何色かに行った後、同じナイフで絵の具をこねていく。コバルトブルーを中心として、暖色を混ぜていく。複数の色を混ぜすぎると色が死ぬ。それを避けるためにぎりぎりのラインを狙っていた。できれば一発で決まれば良かった。今までの経験と、感を頼りに、頭の中に思い描いた色彩と重ねていく。

「できました」

絵の具を混ぜた皿をそのまま渡す。恭二はそれを一瞥する。

「ふむ、良か」

それだけ言って、ペインティングナイフで無造作にカンバスを塗っていく。

洋子はそれらの作業を後ろから眺めていた。恭二の制作風景を見るのは初めてだった。絵を描く作業とはもつとのんびりしたものかと思ったが、今の二人は慌ただしく動いている。恭二からは次々と指示が飛び、詩緒もそれをやや戸惑いながらこなしていく。洋子は何かに似ていると思い、ずっと考えていた。

「大工さんに似とるね」

独白する。絵を描く作業は家を建てるのにも似ていた。下から順々に積み上げていくのだ。二人のやり方は、まさにそれを思わせた。その日は、下地だけで終わる。もうすっかり遅い時間になってしまった。一日置いて乾燥させ、翌日に行うことにした。

次の日、夕方にやって来た詩緒はアトリエから締め出しを食らう。「どげんしたのですか？」

洋子に聞くと、彼女は作業を見ていたらしい。

「ほんの一時間ほど前なんやけどね。なんか、明るか色ばちよこち

よこ塗りよったばってん、そこから考えだしたたい。私も、どげんしたとね、っち聞いたら、お前は出て行っとなんね、っちそれから、詩緒ちゃんが出来たらリビングで待たせとけ、っちも言うとなんね」

詩緒は洋子の誘いで、ソファに座る。いつものセッティングが整っていた。

「昨日は遅かったばってん、大丈夫やった？ 親御さんに挨拶ばせんといかんち思っただけ」

氣にする洋子に、

「良かったですよ。どうせ居らんですから。昨日も帰ったとは十時くらいやったけど、先生が送ってってくれたし、大丈夫やったです」と返す。洋子はなおも心配そうだったが、詩緒がそれ以上話したくないため、会話が止まってしまった。

そこに、床を踏み鳴らす大きな音が聞こえる。

「おい、できたぞ。はよ来んか」

恭二が大きな声を出して手招きしている。

「できたのですかっ」

詩緒も負けずに大きな声で返事をする。詩緒に続いて、洋子も足を踏み鳴らしながらアトリエに向かう。リビングを出るとすぐ向こう側に恭二の顔が見えた。彼は手招きをしている。その表情は唇の左端を吊り上げた、不敵なものだった。

「はよ入らんか。時間が過ぎるやろうが」

恭二の声に弾かれるようにして、詩緒の駆け足が速くなる。彼女は今こそ一層瞳を輝かせていた。

「はい、すぐに行きます」

従順な言葉遣いで、彼女はアトリエに飛び込んだ。それに続いて、洋子も扉をくぐる。

部屋は、暗かった。しかし、闇ではない。

太陽が落ちて月が昇るまでのその時間、今はちょうどそこにあった。薄明……先生、絵が見えんとですよ」

詩緒は必死に目を凝らす。だが、青に溶け込んだ画面はいくら目が慣れようが見えることはなかった。その最中、恭二が言葉を発する。

「詩緒、ありがとうな。この絵はお前の協力無しじゃできなかった。俺は今まで、生者の立場でしかものば見とらんやった。敬一郎と同じ、死者の立場でものば考えとらんやった。それに気付いたのが昨日やった。ばってん、気付いたとは良いが、俺にはそげなこつば表現はできん」とい

恭二は二人に背中を向けたままで話し続ける。それに口を挟むものは誰もいなかった。

「今やけん、本音は話せるばってん、俺は本当に心から敬一郎のこつば愛しとるわけじゃなかった」とい

洋子が息を飲む音が聞こえる。恭二の元に駆け寄ろうとする彼女の手を、詩緒がつかんだ。詩緒の手は汗ばみ、何かを必死に我慢しているように力強かった。その意志を感じ、洋子も踏み留まる。

「敬一郎が生まれて、ずっと一緒に過ごしたたらそうなたろうけどな。ばってん、男っちゃんに見えんもんばそげん信じきらんとたい。だけん、悪かばってん、洋子と俺とじゃ敬一郎の愛し方が違ったろうと思う。たぶん、敬一郎が死んだ直後やったら鬱陶しくさえ思っとったろうな。しょうがなかったい。俺は画家やけん。絵ば描いとらんと気が狂う」

詩緒にはその気持ちが痛い程わかる。三日筆を握らなければ、体の底がむず痒くなる。気持ちを整理するのも、表現するのも、発散するのも全ては絵を通してでしかできないのだ。絵描きとはそういう人種なのだ。

おそらく、これは絵描きだけではないだろう。小説家だって、音楽家だって、本当にそれを生業にする人間というもの、理屈ではなく病的にそれを欲するものなのだ。人生の全てがその媒体をフィルターとして生活している。フィルターがなければ、直射日光が当たるようなものだ。あまりにも眩しく、痛く、辛い。濾過されないそれは芸術家という人種にとってあまりに毒々しすぎる。

「俺はたぶん、絵が描けんようになってから敬一郎ば憎んどったんやろうな」

窓から透ける青に溶け、恭二の表情は見えない。だが、詩緒にも洋子にも彼の歪んだ顔がありありと浮かんだ。

洋子は詩緒の手を振りほどいた。ゆっくりと引き剥がすように、優しくすり抜けていく。そして、歩を進めると恭二の背中に手を置いて言った。

「敬一郎は幸せやね。恭二さんからたくさんの感情ば受けて。私はそげんたくさんのは敬一郎に与えてやれんやつたよ。やっぱりお父さんは違うつちゃんね」

詩緒は、その場にいることが辛くなつて来た。夫婦の本音がぶつ

かっている。洋子は優しすぎた。それ故に彼女は傷ついて来たのだろ。詩緒はかけてあげる言葉を知らなかったし、それをしてはいけないということも分かっていた。だからこそ自分の居場所が確立できずに辛い思いを味わっていた。

その空気を感じ取ってか、恭二は洋子の言葉に応えず、詩緒に向かって話しかける。

「詩緒、だから俺はお前にこの作品の下地ば頼んだ。この色はお前にしか出せん。形は違えばってん、お前と敬一郎は同じたい。求めるものから切り離された……言い方が悪かばってん、葬られた人間たい。だけん、お前やつたら敬一郎のいる場所ば表現できるっち思っただたい」

つまり、恭二は薄明の青は死者と生者をつなぐ青だと言いたいのだ。恭二では、敬一郎の立場に立てない彼ではその色を想像することはできない。暗く、しかし明るい青を。今、薄明は闇に沈み、もはや誰がどこにいたのかさえ分からなくなってしまった。詩緒は頷くことで返答としたが、それが相手にとって理解できない情報であることに気がつかなかった。そのため、恭二の言葉は宙に浮いたまままでどこにも繋がらず、いつしか霧散していった。

恭二のいた方角から、カーテンを閉める音が聞こえた。慣れた彼には暗闇でも何がどこにあるのか把握できているのだろう。微かな足音は澱みなく、ほどなく明かりが灯る。その明滅する光に視界を奪われ、詩緒はわずかの間、目を瞑ったままだった。そつと目を開けると、アトリエの中央に、イーゼルに立てかけられた絵が見える。まず最初に、詩緒は珍しいと思った。彼女は恭二がイーゼルを使っている所を見たことがない。彼自身もイーゼルは好まないと言っていた。洋子の買ってくれた座椅子に座って気楽に描くのが良いのだと。

だがすぐにそれは演出なのだと悟る。恭二は絵を最も見やすいように配置してくれたのだ。照明に反射せず、絵のイメージを損なわない展示方法を選んだだけなのだ。確かに、その絵は中空にある方

がふさわしいと詩緒も感じた。

恭二は洋子を伴って絵の正面に回った。詩緒もその隣に肩を並べる。絵はそうすることで一層輝いて見えた。

詩緒の描いた下地に、たった二つのアイテムが足されている。

画面右側に太陽、左側に月、ただそれだけの絵だった。

よく見ると、下地にはいくらかの加工がしてあった。全体が渦を巻くような描き方をしてあるのだ。その線上に太陽と月が、画面に対して均等に配置されている。そうすることで、まるで月と太陽がグルグルと回っているかのような錯覚を受ける。また、太陽自身も様々な暖色の渦によって描かれているため、その効果は顕著だ。月とは言えば、細くもなく太くもなく、満月からそれを四分の一した大きさの円を切り取ったような形をしている。そのため、普通では見ないような歪な三日月になってしまっている。ただ、それによって欠けてしまった月は太陽に存在を食われることなく、しっかりとした強さを保っていた。

月も太陽も、お互いが影響し合っていた。太陽は渦により画面の中心になろうとするが、それを月によって阻まれている。だがそれは悪い印象を持たず、太陽の強すぎる主張が和らいでいるのだ。また、月が単体で存在しているのは、歪すぎて対象がはつきりしない。二つはお互いを支え合っていた。

「先生、これはなんば表現しとつとですか？」

詩緒が作品を仔細に眺めてから質問する。恭二は洋子から離れ、詩緒と一緒に作品を見る。

「お前はこれがなんか分かんとか」

「分からんことはなかばってん、センセイから教えてもらいたかたです」

腕を組んで、恭二が難色を示す。彼にとって大事なこの作品の説明をすることが躊躇われたのだ。そこに洋子が割って入った。

「恭二さん、私も知りたかよ。教えてくれんとね」

笑いかけながらそう言う。洋子は少しだけ振り返り、詩緒に笑い

かけた。二人とも知りたがっているのだ。恭二の、今現在の敬一郎への思いを。

恭二は再び部屋の中を歩き回る。落ち着きがなく、しきりに周囲を見回している。まるでそこに答えが隠されていると信じているかのようだ。

やがて、彼はある一角に目を留めた。

彼が、敬一郎の死んだ三月からこの九月までに描き損じ、描きあぐねて捨てていった作品の数々だった。それは作品とすら呼べない。ただ一本の線が描かれているもの、真っ黒に下地を塗っているもの、何も描いていないのに切り裂かれたカンバスすらある。この一枚一枚に、恭二の苦悩が……そして敬一郎への憎悪が込められている。またある一角に目を向ける。

そこには今のところ、最後の生命シリーズとなった作品が、作りかけのまま放置してある。ほとんど完成に近いそれは、三つの球体が乳白色の空間で一体になろうとしている場面を描いていた。それは今までの生命シリーズの、どの作品とも異なっていた。お互いに感応し、溶け合い、混ざり合い、同一の生命体として生きて行くことの喜びを謳ったものだった。

いわば、この二つは相反するものだ。その反発の果てに薄明を表現するこの作品はできた。

恭二は深く呼吸をすると、詩緒と洋子に向かって笑いかける。

「この世とあの世があるとして、どちらが本当の世界なんだと思うとる？」

唐突に問われて、二人は答えることができなかった。身じろぎすらせず、恭二が話すのを待っている。

「俺は、どっちも本当じゃなかと思うとる。もしくはどっちも本当なんじゃなかと思うとる」

恭二は絵の中の月と太陽を指差す。

「月は、太陽の光を受けんと輝くこともできん。ばってん、月がな

かと、地球の夜は輝かん。俺が地球やったとして、もし太陽だけやったらこれだけの発展はなかったやろうつち思うつたい」

彼の説明は抽象的で、象徴的で、分かりにくい話し方だった。洋子はもちろん、絵を描くために様々な物事に触れている詩緒にも、理解が難しい話だった。

「月は太陽がなかと輝かん、太陽も月がなかと十分に力を発揮できん。その二つの力を受けて、俺は初めて成長できるとやろうつたい。

俺は今まで太陽ばっか見よつたつたい。月を眺めることばせんかった。敬一郎が死んでから初めてじっくりと月ば眺めた。綺麗かった。面白かった。たぶん、敬一郎が生きとつたら、こげん風に楽しかったつちやろつな。敬一郎と過ごした十月十日ば振り返つてから、ようやつと月の楽しさば認めることができた。洋子はさつき、俺のことば慰めてくれたばつてん、俺こそ、敬一郎からたくさんのことば教えてもらつたつたい。喜び、悲しみ、怒り、恨み……俺は、もう敬一郎のことば恨もうつちや思わん。悲しもうつちや思わんたい。無理して考え込んでも、敬一郎のことば思つたら色んな感情が湧いて来る。それに対して自然に付き合つちやろうつち思つとる。月と太陽と地球とが影響し合つとること、俺と洋子と敬一郎もずっとずっと影響しあうつちやろつ。それは、敬一郎が生きとることと変わらんつちやなかるうか。目の前にはおらんばつてん、敬一郎と俺たちはずっと影響し合つとるとよ」

一気に話し終えて、恭二は床に座り込む。肩で息をし、その唇は震えていた。

彼は、区切りを付けたのだ。敬一郎が生まれ、死んだという事実。ようやくそれらを飲み込んで生きて行く覚悟ができたのだ。

そんな彼に洋子が寄り添う。彼女は何も話しかけず、何も語ろうとしなかった。詩緒は思った。もしかしたら洋子はずっと前から区切りを付けていたのかもしれない。敬一郎が死んだという事実、諦めるでもなく引きずるでもなく。彼女は一年近い時間、敬一郎をその体内に宿していたのだ。もしかしたら今でもその心を感じ取つ

ているのかもしれない。

二人の隣で、月と太陽を描いた作品は、蛍光灯の光を浴びて艶やかに踊っていた。渦巻く宇宙を駆け回っていた。それは油絵の具の質感のせいだったかもしれないが、そんなことは詩緒には関係がなかったのだ。今は浸りたかった。二人とこの時間を共有できた感動に。

だが、それでも次に言葉を発したのは詩緒だった。

「ねえ先生、この作品の名前ば教えてもらっとらんよ」

脱力から抜け出しつつあった恭二は、詩緒のその言葉にすぐに応えた。

「そうやったな。お前やったらある程度感づいとるかもしれない、うち思うとったが」

「そげん勘が良かこつはなかです」

「嘘付け。それん名前はな、『薄明のとき』つち言うつたい」

詩緒は口の中だけで復唱した。

『薄明のとき』

なるほど、詩緒が密かに考えていたタイトルに近かった。恭二が話した言葉とこの絵とを合わせた時、初めて深みが分かる。そのヒントとなり、象徴するタイトルだった。

「良か名前やね。嬉しかよ、矢島海里の作品誕生に立ち会えるやなんて」

その言葉を、敬一郎も聞いていた。

「矢島、海里だつて？」

彼が地球を覗き込んでみると、画面の右下に署名がしてあった。

彼には読めなかったが、確かに「K・YASHIMA」とある。敬一郎は自分の背中に立つ海里を振り返る。彼は慌てる様子もなく、敬一郎を見下ろしていた。

「どうした、敬一郎。そんなに不思議そうな顔をして」

敬一郎は二の句が継げなかった。どう質問していいか分からなかったのだ。そうしていると、海里の方から話し始める。

「別段不思議なことではない。恭二は面白いことを言ったな。月も太陽も地球も影響し合っている。私たちが今いるここが月だとして、現世たる地球の影響を受けたって何の不思議もないさ。地球の潮汐は月の引力の影響を受けている。以前に言ったように、自転と公転、つまり地球と月がこうして適切な距離を保っていられるのも、お互いの影響によるんだよ。君は今、恭二の筆名である矢島海里と、この私が同一人物であるかどうかを疑っているんだろう？ 答えはイエスでありノーでもある。いくつかはつきり言えることがある。一つは、ここ半年……現世の時間で言えばの話だが……その間はこの月において君の影響が大きかった。地形が変わったり戻ったり、月の入口が頻繁に動いているのもそのせいなんだろう。だが、たかが死人の影響がそこまで大きいはずがない。そうとなればこの世界では誰もが思っていることを叶えてしまっからね。言ってはいなかったが、この月に影響を与えたものがもう一人いる。それが恭二だった。最初に言っただろう。この世界では全てが同一で、定形のものはない。私が真に一個の人間としての矢島海里だとは限らないさ」

そう言った瞬間、海里の体は崩れ、砂となり、乳白色の地面に溶け込んでいった。後に残ったのは広大な大地に座り込む敬一郎だけだった。

「海里？ どうしたんだよ、海里。また、僕のせいだって言うのかい。僕が望んだからだって。だったらそれは違っよ。今、僕は心から海里にいて欲しいと思っているんだ。さあ出て来てよ」

しばらく待つてみたが、返事がない。敬一郎の目の前には地球が浮かんでいた。そこには作品の完成を祝う田中家の姿が映し出されていた。

苛立ちを覚えた敬一郎は、地球を思い切り殴った。太平洋に巨大なクレーターを残して、地球は彼方へと飛んでいく。敬一郎は叫んだ。

「出て来てよっ、早く現世に還ろうよっ」

すると、どこからか声が聞こえて来た。

「無駄だよ、君の居場所は既にある」

海里の声だった。姿は見えず、サラウンドのように体の中心から音が沸き上がって来るように思えた。

「海里、戻って来てよ」

だが、敬一郎の声は突然発生した巨大な音に飲み込まれてしまった。

「なに？」

遙か彼方の四方から、柵が近付いて来る。

敬一郎は本能的に避けようと走り出した。しかし、柵は軌道を修正しながら彼を取り込もうと動き続ける。

やがて、走ることに疲れた敬一郎は柵に囲まれてしまった。

「なんだよ、これ」

敬一郎は周囲を見回す。

格子はかなり大きな隙間が開いていて、いつでも抜け出せそうに思える。天井には柵がない。なんとかすればどこからか逃げ出せそうだった。

「よし」

そう言つて彼が隙間から抜け出そうとしたとき、それに合わせて格子は隙間を狭くした。

「この檻、ひよつとして生きてる？」

不気味に思ったが、海里を探すためにもここから出なくてはならない。今度は天井に上って出ようとする。しかし、柵はいくら上ってもその端から伸びていき、これもまた出られそうになかった。

道具を使おうにも月の砂漠に取り残された彼には使えるものがない。

散々挑戦し、疲れた彼はついに眠ってしまう。子供らしい泣き顔を浮かべて。

その隣に、海里が現れた。

彼は敬一郎が起きないように細心の注意を払って、敬一郎の頭を撫でる。

「敬一郎よ、これは試練だ。自分の持てる手段を使って、解いてみせよ。そして、その時、君は新しい世界に旅立つだろう」

それだけ囁くと、海里は自らを水と化し、砂に染み込んで出て行ってしまった。

第二部

—

ドアを開けると、目の前にその絵は見える。

ソファの奥の、やや高い位置に掲げてあった。

深い青の下地に、歪な太陽と月が描かれてある。

視線はさらに、隅にあるローボードへと向かう。そこには、いくつかの写真が並べてあった。夫婦が結婚したときの写真、大きな賞を受賞したときの写真、妊娠中に大きなお腹を抱えている写真、そして、敬一郎が写った写真だった。

視線　詩緒はそれらをゆっくりと見回してからソファに座った。

「詩緒ちゃん、ありがとうね」

洋子がコーヒートをテーブルに置く。喪服の彼女はそのまま詩緒の正面に座った。

「良かとですよ。私がそげんしたかったとですから。そう言えば、先生は、どげんしたとですか？」

詩緒は辺りを見回して洋子に確認する。すると耳にシャワーの音が聞こえた。同時に洋子が「シャワーは浴びとるよ」と答える。

喪服を持たない詩緒は、制服で墓前に参った。いつもの元気で勝ち気な様子と違って、セーラー服に身を包んだ彼女は淑やかな女の子に見えた。

敬一郎が亡くなって、二年が過ぎた。三月のある日曜日、恭二と洋子は墓参りに向かった。一緒に行きたいと頼んだのは詩緒の方からだ。涼しく、落ち着いた天候の午前中、三人は歩いて霊園に向かった。あまり清掃されていない園内は、雑草が足首に触れ、不快に感じる。古い墓に供えられた花は枯れて風化していた。暑い中

で長年洗われていない墓は、罅入って墓碑銘が読めなくなっている。それらの中でも田中家の墓は光沢が見られ、やや劣化した部分は見受けられはしても、定期的な墓参りがなされているのが分かる。

墓の前で、三人は言葉少なに作業を進めた。墓を洗い、花を替え、線香を立てた。墓前には果物をいくつか供える。恭二は初め、クツキーを供えようとした。

「もうすぐ三歳だしな」

しかし、それは洋子によって止められた。

「子供が甘いものなんて」

苦笑を浮かべた恭二は、気を取り直して墓に向き直る。

恭二は敬一郎にまず謝罪した。

「すまん、敬一郎。俺が情けなかけん、お前ば成仏させきれんかったごつ思っばい」

恭二はいつも同じことを言っている。

それに対して洋子が語る。

「お父さんはね、敬一郎のこつばたつくさん考えてくれたとよ。お母さんもたくさん考えたばってん、お父さんには敵わんやった。敬一郎も、新しく生まれ変わったら、お父さんごつたくさん考える子になりいね」

詩緒はそれらの光景を後ろから黙ってみていた。そして、声を出すこと無く敬一郎に語りかける。

「敬一郎君もきつとお父さんとお母さんのことば好きやったるうっち思っばってん、私も先生と洋子さんのこつ、好きったい。ごめんばってん、一緒に居らせてね」

でも、とさらに思っのだ。敬一郎の場所は決して無くならないだろう。彼らは整理したことで敬一郎の居場所を確保したのだから。

もう一つ思っのは、敬一郎は本当にこの墓の下に眠っているのだろうか、ということだ。確かに骨はこの下にある。だがそれと魂は同一なのだろうか。短い人生の中で、詩緒が死に接することはあまり無かった。両親も祖父母も健在だし、友人とその周囲に死者が生

まれたことも無かった。信仰にすら馴染みの無い彼女には、墓が持つ役割が納得できなかったのだ。それは偶像であり、祈りの空間でもある。死者と精神で会話することのできない人間は、自らその対象と特別な場を設定しなければ浄土と繋がることさえできない。

だがそれを一番身近な大人である恭二と洋子に問うことはできなかった。それは彼らの信仰を否定することにも繋がったからだ。

目の前の洋子を見て、ソファの上の詩緒は再びその問題について考えていた。そうだった意味ではあの「薄明のとき」もまた墓と同じ意味合いを持つのではないだろうか。敬一郎を象徴する絵画は、敬一郎の魂を思いながら制作された。それは即ち、魂の所在をその絵に求めるのと同義なのではないだろうか。尽きない疑問を繰り返す内に恭二が部屋に入ってきて来る。さっぱりとした表情を見せた恭二は、絵の前で足を止め、それから写真に視線を這わせる。先程、詩緒が辿ったのと同じやり方だった。

「俺にもコーヒーをくれんか？」

「良かよ」

洋子が応え、キッチンに消える。恭二はそのまま洋子が座っていた場所に腰を下ろした。

「ありがとうな」

そして、洋子と同じ感謝の意を告げる。詩緒は首を振って「うんや、良かとよ」と笑った。

「センセイ、敬一郎君は、今頃どこに居るとやろうか」

詩緒はずっと考えていたことを聞いた。写实的ではない、画家らしい答えが聞きたかったのだ。それは同時に、「薄明のとき」を理解する手助けにもなるはずだった。

「あの絵は描こうと思ったときにっさい、洋子と話したと。敬一郎は月に居るかもしれん」

理解できなかった詩緒はさらに問いつめる。恭二はそんな彼女にあの絵を描こうとしたきっかけを教えてくれた。敬一郎を亡くし、その面影、思い出を忘れないために象徴画を描こうとしたこと。そ

の題材に悩んでいる時に洋子と二人で月を眺めたこと。そのくると変わる表情が敬一郎に似ていると思ったこと。そして、ジャータカのウサギの話をした後に洋子が呟いた言葉。

「奥さんもロマンチストやね」

「あれは昔からあげんとやん。芸術家に向いとるっち思うとばってん、いつちよん描こうとせん」

「私も奥さんは画家か小説家に向いとるち思うとるですよ。なんでせんとですか？」

「あれが言うこつは逃げばかりたい。絵が下手かけんとか、恥ずかしかけんとか、思いつかんけんとか。そげん言う割に、俺が教えちやるっち言うてもいっちょんやろうとせんとたい」

「奥さんの性格やけん、がば恥ずかしかとやろうね」

「そげんたい。下手だっちゃ描けば楽しかたに」

恭二は心底から洋子に絵を習わせたいようだ。詩緒は思い出した。そう言えば恭二は具体美術に憧憬を抱いているのだ。あの芸術集団は美術がアカデミックであることを否定していた。一般の、絵に関する教育を受けたことの無い人間でも素晴らしい作品が描けることを実証していた。それらの思いが、洋子に対する態度に繋がっているのだ。

恭二にそこまでの影響を与える具体的に、詩緒は興味を持った。いずれ、現代美術館に行つて作品をつぶさに見てみよう。一番近い美術館である石橋美術館には具体美術の収蔵が無い。

そこまで考えて、詩緒は地元の美術館に恭二の、矢島海里の作品が展示されていないことに思いが及んだ。

「そつえば、先生の作品は福岡市美術館にしかなくとですか？」

詩緒が生命シリーズのインスタレーションを見たのは福岡市の大濠公園内にある福岡市美術館の企画展示室だった。それ以外の恭二の作品もそちらでは見たが、石橋美術館に所蔵されているという話を聞いたことは無かった。

「大分の美術館にも所蔵されとるよ。東京にも何枚があつたはずや

けど。後は個人蔵とか、画廊にあるとが多かね」

恭二の答えた内容は分かっていた。彼女が聞きたいのは、なぜ、の部分だった。

「石橋美術館にはなかとですか？」

その問いを聞いた瞬間、恭二は苦い顔をした。そのために、詩緒はそれ以上何も聞けなくなってしまった。もしかしたら、また恭二の地雷を踏んでしまったかもしれないと思ったのだ。

だが、彼の代わりに洋子が脇から答えた。

「恭二さんが渡しとらんとよ。向こうからは何回か言うて来とつたとやけど」

コーヒーを恭二の前に置く。その隣に座りながら続きを話した。

「地元の美術館には納得いく大傑作ば所蔵してもらわんといかんけん、まだ渡せん、やったつけ？」

「言つなバカ」

恭二が一言だけ洋子を詰った。彼はまた、先程と同じ表情をしていた。それで、詩緒は自分が地雷を踏んだのではないと理解した。

「センセイの気持ち、分かる気がするですよ。やっぱり、地元の美術館が一番好きとやけんね」

詩緒の言葉に、恭二が薄い笑みを浮かべて頷いた。

その後、二人は制作に入るが、恭二は電話で三度、接客で一度、席を外した。敬一郎を亡くしてからしばらくの間断っていた仕事を再開したため、画家仲間や画廊、雑誌などからも連絡が入るようになったからだ。

それらの様子を見て、詩緒は思う。画家は孤独な商売ではないのだと。むしろ人物関係が非常に重要で、せっかく絵を描いても展示や販売をしてくれないければ収入が無くなるし、交友関係が広くないと、仕事の幅も広がらない。

矢島海里を知った頃は、彼のことを孤高の画家だと思っていたが、それは表向きに作られたキャラクターなのだと分かる。電話での応対や接客態度などを見ていると非常に丁寧で、親切だ。それらのこ

とを教えるためだろうか、彼は必ず接客には詩緒を同席させ、自分の弟子であることを説明した。

「今はまだ未熟ですが、成人するまでにはモノになると思います。何かあれば、私を通していただければ」

初めは若い女の子を弟子にしたということで勘ぐる向きもあったが、この業界での恭二は余程信頼があるのだらう。今後一年もすれば矢島海里の優秀な弟子、との噂が広がることになる。実際に、海里の手伝いで、二つ三つの仕事をこなすことにもなるのだ。

初めは義侠心から弟子入りした詩緒だが、今、恭二に師事して本当に良かったと思っていた。彼は絵に関する技術はほとんど教えてくれないが、それ以外のことについては積極的に教えてくれた。それに応えるために詩緒も海里の仕事を積極的に見聞きし、覚え、手伝った。そして、いつの間にか学校と寝るとき以外は田中家に出入りし、まるで家族のように接するようになっていたのだ。

二

墓参りから数日経って、田中家はまた日常を取り戻した。恭二は半年後に迫った個展に向けての準備で忙しい。そんな中、夕方五時頃から田中家に入った詩緒は、恭二の隣で絵を描いていた。ジェットコースターに父親と二人で乗っている姿を正面から捉えた作品だった。もちろん、詩緒は父親と二人で乗ったことなどなかった。

「お前は写真ばかり見て描くとやな」

「そげんこと言ったって、子供の財力で遊園地に行くのは結構大変やし」

返答を聞いて、恭二は唸った。絵は写真と違う。質感や動き、周囲の空気などはどうしても静止した画像を見ても分からない。それではただのレタリングだ。本物の絵を描くにはやはり本物と接する必要があると恭二は考えていた。

「まあ全くジェットコースターを知らんわけじゃなかし、写真はデイトイールだけを参考にしとるとばい。質感や空気は十分に分かるとるけん」

恭二の心配を先読みした詩緒が、苦笑しながら振り返る。だがその赤い眼鏡の奥では、寂しげな瞳がやや潤んでいた。

「バカ言え、記憶に頼って描かんで、ちゃんと写生せんか。今度連れてっちやるけん、後で洋子に言うとき」

恭二はそれだけを言うと、突然席を立ってアトリエを出て行ってしまう。後にはドアを見つめたまま目を瞬かせている詩緒だけが残されていた。彼女は恭二の言葉を何度か頭に巡らせて、ニヤリと口元をゆがめた。

「センセイも恥ずかしがり屋さんやね」

そう言っただけの後を追いかけていく。アトリエの正面にあるリビ

ングで、恭二はソファに寝ていた。

「先生？」

詩緒が声をかけても、身じろぎもしない。

「先生、海里先生」

揺すってみたが、起きはしなかった。そこに洋子が入って来る。

「良かよ。タヌキは放っておいて、晩ご飯にせんね」

気がつくと、ダイニングテーブルには食事が並んでいた。初めは食事を共にすることに抵抗を感じていた詩緒だったが、恭二の師匠命令により毎日の夕食と一緒に食べている。頑固な恭二は、詩緒が「せめて食費を」と言っても決して受け取らない。「他人と一緒に食事をするのも勉強の内たい」と譲らないのだ。

ソファに座る詩緒の鼻に、味噌汁の香りが漂って来る。それは恭二の鼻にも届いたようで、急に起き上がって「こすかなあ、お前ら」と怒鳴った。

「センセイがはよ起きんからですよ」

「そげんたい。恭二さんもなんば照れとるか分からんばってん、しやんとせん」と

詩緒と洋子から言われて、渋々立ち上がる。

ついでに、とでも言うような感じで、先程の話を持ち出した。

「洋子、今度時間が空いたら益田とスペースワールドに行くけん。スケジュールば調べとってくれ」

突然だったのもそうだが、何より恭二の言葉と思えなくて洋子は驚いていた。

「どげんしたと？」

「バカ、取材たい。益田が今、ジェットコースターの絵ば描きよるけん、実物ば見せてやらんといかん」とたい

恭二の言い分に、詩緒が補足をする。

「私はよかつち言ったとばってん、センセイがどげんしたつちや本物ば見て描かんといかんち言うけん」

「お前だつちや嬉しかつちやろうが」

恭二の挑発に詩緒が乗った。

「センセイだつちや若か女の子と一緒にやけん嬉しかろうもん」

不毛な言い争いは食卓でも続いた。その様子を見て、洋子は微笑みを絶やさない。子供二人の口喧嘩を見ているような気分になる。ふと、敬一郎が成長していたら、こんな感じで賑やかな食事風景が繰り広げられていたのだろうか考える。しかし、洋子はすぐにその考えを頭から追い出した。妄想としては楽しくても、仮定の話はきりがない。少なくとも、これから前を向く努力をすべきなのだと自分に言い聞かせる。

「奥さん」

と詩緒に呼びかけられて初めて正気に戻った。二人が心配そうに自分を見ていた。

「ごめん、どげんしたと？」

精一杯の笑みを浮かべたつもりだったが、どうやらぎこちなかったようだ。詩緒はますます不安気に洋子を見ている。恭二に至っては席を立ち、洋子の額に手を当てていた。

「熱やらなかよ……ちよつと敬一郎のことば思い出しとっただけやけん。ばってん心配せんだったちゃ良かとよ。ちよつと、ちよつとだけやったけん、別に苦しくもなかし、それにもう大丈夫やけん」

隙間を埋めようとすればするほど、会話が繋がらない。二年以上が経ち、それでもこんな時がふと訪れる。そういう時に一番申し訳なく思うのは、詩緒に対してだった。自分たちは彼女を敬一郎の身代わりにしようとしているのではないだろうかと思ってしまうのだ。「ごめんね、詩緒ちゃん」

口をついて出た謝罪は、尚更、詩緒の表情をゆがめる結果になる。こういうとき彼女は笑っていいのか慰めていいのか分からない、といった表情を見せる。それが洋子にとって、さらに辛さを増幅させた。

そんな悲しみのスパイラルを断ち切るのは、いつも決まって恭二だった。

「ごちゃごちゃ言わんで食べんか。飯が冷める」

そう言って黙ってご飯を掻き込む。そして、空になった茶碗を洋子に差し出し、「おかわり」と言うのだ。

洋子がキッチンへ行っている間に、恭二は詩緒に対して仕事の話をする。今度の個展に出す作品の選択についてだった。

「やっぱり中心になる作品がなかといかんち思うとばってんな。お前はどげん思う？」

生命シリーズのインスタレーション展から約三年ぶりの個展だった。その間の変遷は大きすぎて、作品選びは難航していた。

「薄明のとき、は出さんですか？」

詩緒の指摘に、恭二は首を傾げた。

「正直、出したくなかった。あれば大衆の面前に出すとは、敬一郎ば晒しもんにしとるごたっけん好かん」

「そげん言ったら、最近の作品が生命シリーズば中心にせんといかんとなかですか？」

「そげんち思うばってん、ここ最近で中心になるごたる作品はなから薄明のとき、を仕上げた後の一年間、恭二は今までの作品をなぞるようなものを描き続けていた。時にはシュルレアリスム、または風景画、人物画も手がけた。それはまるで手探りで闇の中を歩いているようなやり方だった。はつきり言って、詩緒はそのような進化の仕方には戸惑いがあった。実際に、恭二に実践ではなく、観察や熟考から新しいステージに上がることは出来ないのか尋ねてみた。だが、返って来た答えは「実践の無い進化やら進化じゃなか」だった。

恭二は小手先を嫌う。たとえ遠回りでも、他人の手法を拝借したり、流行を安易に追うことを否定し、地道に自分の中の思考経路を変化させる方法をとる。実際に、恭二の絵は薄明のときを境にして、より明確で、分かりやすいものになるうとしていた。だが、それらを経て行くと、再び薄明のときに戻ってしまうのだ。ある意味では、恭二の試みは自分の中心がその作品であることを確認する作業

なのかもしれない、と詩緒は考える。一番身近で恭二の作品を見ている詩緒にも、彼が何を求めているのかはつきりとは分からなかった。一見しただけでは、恭二のやり方は一貫性が無く、ただでたために描き散らしているようにも見えたからだ。

ある時には、ただの風景画を描いていた。何の変哲も無い、アトリエから見える風景だ。それは学生の写生のように特徴の無い作品だった。どうも贋目に見ても、一定レベルをクリアした作品とは思えなかった。

またある時には珍しく抽象画を描いていた。抽象画に関して、詩緒は評価を確定する術を持たないが、それがどういった経緯から生まれたのか、想像すら出来なかった。脈絡の無い線と色彩は、以前恭二が話してくれたパウルクレーの自由な線とも、マティスやカンディンスキーの鮮やかな色彩とも異なっていた。遠回しな言い方を止めて直接的な言及をすると、それは詩緒から見て美しくない作品だった。

「じゃあ新しく代表作ば描くしかなかですよ」

冷たく言い放つ詩緒から目を背け、恭二は頭を抱える。

「バカ言え、俺の工程じゃ間に合わん」

「半年あればなんとか」

「構想があるならともかく、今からじゃでけん」

「なに、どうしたの？」

洋子が戻ってきた。

「今度の個展のことばってん、中心になる作品はどげんしようかち思ってた」

茶碗を恭二の前に置き、席に座る。一口お茶を嚙ってから、口を開いた。

「私は絵のことはよう分からんばってん、恭二さんは今度の個展はどげんしようち思うとると？」

「どげんちはなんか？」

首を傾げる恭二に、洋子は言い方を変える。

「だけん、テーマとか、全体のまとまりとか、そげんがあるもん。来てくれた人にどげな矢島海里ば見てもらいたかとね」

洋子の言葉を、恭二は噛み締めた。俯き、唇を噛み締めたままで何も語らなくなった。その時間は十分にも及び、その間、二人はコーヒーを飲んで息を整える。気がつけば、恭二はおかわりの茶碗を左手に乗せたままだった。

詩緒もまた、その間、口を開くことを止め、恭二を観察していた。彼は、頭の中で何かを構成しているように思えた。前後の言からおそらく個展に出す作品のことなのだろう。詩緒は、恭二が洋子の言葉から何を探し当てたのかを推量した。彼の表情はとても真剣で、周囲が真空になったのかと思うほどに潔癖だった。

これまでの恭二の作品群を見て、それを中心にして個展を開くとして、今の彼にどんな構成が考えられるだろう。

彼の代表作は言わずと知れた生命シリーズだ。それを中心にして……。そこで詩緒の思考は止まった。彼の作品はその前と後とではあまりに違いすぎた。混ぜてしまうとどちらの良さも殺してしまう。詩緒が仮に置いた作品は、今もリビングにかかっている「月の隙間」だ。生命力を鼓舞する前者と、死を空間に閉じ込めた後者ではギャップがありすぎて鑑賞者が戸惑ってしまう。

それから色々と考えてみたが、良い考えは浮かばなかった。そして、恭二もまた、そのことについて語ることは無かった。

三

恭二は送ると言っていたが、詩緒はそれを断った。それでも、頑固な恭二は無理矢理に家までついて来てしまった。

「親御さんはまだ帰らんとか」

「私だっちゃんほとんど見たことなかとに、会えるわけなですよ」
「なんばされとるとか？」

詩緒は意味が分からずに聞き直した。

「え？」

「いや、お前の親御さんはどげな仕事ばされとるとか、ち思つてた
い。共働きせなんごつ……まあ良かたい」

途中で言い淀む。いくら親しいとは言え、他人が入ることのできる領域を越えていた。だが、まだ世間に疎い詩緒は彼の言葉を推測し、答える。

「そこまで貧乏っちゃんわけじゃなかつたと思つてすけどね。うちの
お父さんもセンセイと同じで昔の人間やけん。仕事するとが男の役
目っち思つとるごたるよ。お母さんはお母さんで今時の考えばしと
るけん、仕事が楽しくてしょうがなかつたよ」

「お前はほんなこつそれで良かつか？」

「良かこつはなかつたてん、しょうがなかつかよ」

「しょうがなかつたがあるか」

「そげん言つたっちゃん、私にはどげんもできんもん。それとも、セ
ンセイがしてくれるとね」

売り言葉に買い言葉で、詩緒は強気に出る。それに対して、恭二
は何も言えない。

「ありがとうございます。先生も気をつけて帰ってください」

その丁寧な言葉が、余計に恭二を引き剥がす。彼はもうひとこと声をかけようとしていたが、その前にドアは閉まってしまった。

閉めたドアを背にして、詩緒は溜め息をつく。恭二が自分の身の上を心配してくれているのは嬉しかった。だが、これ以上立ち入られると、平静でいられるかどうか分からなかったのだ。

詩緒は頭の中をできるだけ冷静にしようと努めた。息を吸い、何も考えないように肩の力を抜いた。真っ暗な中で、見えるのは何かの家電製品の、赤いパイロットランプだけだった。彼女はその一点を見つめる。それは熱を発さない蛍の冷光のように、ただ静かに、美しく光っているだけだった。

蛍、と詩緒は呟いた。それは彼女を導いてはくれない。

ゆったりとした時間の中で、詩緒は自分の呼吸音を聞いた。常に無く、荒く、速く息をしているのが分かった。もっと耳を澄ますと、心音が聞こえた。ごんごんごんと銅鑼を打つような振動が全身に伝わって来る。それは聴覚に聞こえた音ではなく、体に感じた音だった。詩緒の全体が今、チョコレート磨砕器となっていた。それによれば、彼女は作られた言語ではなく、偶然性が多きを占める観念だと言う。独身者と花嫁はその観念によって出会い、秩序から混沌に向かつて九発の弾を撃つ。昇ったものがまた降りて来るように、彼女の独身者は彼女によって裸にされ、彼女もまた彼女の独身者によって粉碎されるのだ。

観念たる彼女は、家という巨大な石臼によって轆き潰され、パウダー状の粉となってその隅々にまで充満する。礫死体の流した涙は階段を伝わり、お笑い番組の流れるテレビを赤く染める。適度な運動の後の入浴が、彼女を一層孤独にさせた。

それらのイメージは、彼女が今まで見て来た絵画から描かれた妄想ではあった。しかし、確実に詩緒を浸食し、溶き解す塩化ナトリウム液は、今の詩緒の心を如実に表現もしていたのだ。

詩緒は階段を上る。

たった一つの言葉から発せられた記憶の瓦解が、彼女の心を犯し

ていた。陵辱され、辱めを受けた詩緒は丸裸の花嫁としてその踊り場に立つ。

できれば安易に触れて欲しくなかった。自ら話し始めることすら、身を引き裂きたい程の羞恥を感じたのに。

あの日、詩緒が矢島海里に弟子入りした日、彼女は自分の生い立ちを話した。

「こまか頃は、ばさらか喋ったやろうし、遊んでもくれたとば覚えとですよ。ばってん、小学校に入ってから、今までの九年間、私は家族がどげんもんか分からんまま過ごしたとです」

恭二は黙って詩緒の話しに耳を傾けてくれた。

「私は、抱っこ……とかもされたかったし、お父さんやお母さんとお風呂に入りたかったとですよ。知らなかったことが、がばいありました。食事のマナーとかも全然やったし。ご飯食べながら本読んだり、絵を描いたりしちやいかんやら家じゃ誰も教えてくれんとですよ。夜中に騒いじやいかんちも知らんやったし、お菓子ばかり食べとつちやいかんちも分からんやったです。私の母親は本やっただです。目が覚めたら枕元に置いてある本が、私のお母さんやっただです。よう考えたら、一緒に居た頃もそげん躰けに熱心やなかつたごたるです。ばってん、そげな母親でも、父親でも、居つてくれたら度は過ぎんやっただと思つたですよ」

洋子が顔を背けた。自分の表情が、詩緒に与える影響を考えたのだ。

「オモチヤだけがどんどん増えて行つたとです。食事は出来とつたし、不自由は無かつたばってん、全部一人やっただです。その内、友達の家に行くことなつてから、おかしか、ち思ふようになつたとです。子供が一人で食事するやらおかしか。誰も叱ってくれんやらおかしか。家がこげん静かやらおかしか。おかしかこつばつかでした。私は何がほんなこつやら分からんです。ばってん、なんか知らんばつてんが、人並みにはなつたとですよ。学校やら幼稚園に行きよつたけんやろつとは思つたとです。そやけど、いつつも人の顔ばかり見てから過ごしよつた。自分が虫にでもなつた気分やっただです。中

学校に入った頃は、自分は姿の見えんロボットに育てられよるとやなかやか、ち思うとつたですもん」

その告白に、恭二は何も意見を言わなかった。詩緒の告白に一部おかしい部分があることも指摘しなかった。彼女が興奮していたからだ。その代わりに、絵画との出会いを聞いたのだ。

詩緒は今、自宅の階段を上り、自分の部屋の前に立っている。ノブを回し、暗く静かな中に響く金属音に一つ、鼓動が大きく鳴る。何も見えなくても、変わらないレイアウトの部屋は自由に行き来できた。正面左の壁側にクローゼット、右奥にベッド、そしてドアを開けてすぐ右側に大きく真っ黒な机がある。

幅二メートル、奥行き一メートルにもなる大きな机だ。その代わり、シンプルで何の飾り気も無い。人気のアニメキャラクターも描かれていないし、五段階調節のできる椅子もついていない。ただ平板な板を組み合わせただけの机だった。その上には今、モバイルノートパソコンが一台と、スケッチブックしか置かれていない。

「これが良いよ。お願いっ」

誰の声だろう。詩緒は記憶にある元気な声が自分のものだと信じられなかった。駄々をこねたのは、この一回きりだ。大手家具店の学習機の隣にある、大人用の机売り場。詩緒はそこで一時間も粘った。

「ダメやつち言いよろうが」

そして、父親が手を上げたのも、この一回が今のところ最後だ。売り場に響く破裂音に周囲が振り返る。利雄はその音の大きさに自ら驚いている。母親の景子は、周囲を気にしながらも、頬を押さえる詩緒に駆け寄った。

「利雄さん、何もそんなに強く叩かなくても」

「分からん奴は殴らんといかん」

そう言えば、父親と恭二は似ている所がある、と詩緒は心の中でくすりと笑った。だが、幼い詩緒はそれどころではない。突然の父親の豹変と、頬の痛みに一瞬、息が止まる。世界の全てが固定し、

凝固した。そして、次の瞬間、体の奥底にあった「何か」の塊が目元まで押し上がって来た。

巨大な泣き声が、知らずに喉から飛び出して来る。瞼をしっかりと閉じ、ただ勢いに任せて声を上げ続けた。もうその時点で、なんでも泣いていたのかはすっかりと忘れてしまった。

結局、泣き声に負けた利雄と景子だった。

一週間後、机が自宅に届く。店舗で見たものと違う、やけに平べったい段ボールが届いた。幼い詩緒が訝ると、利雄が「これからお父さんが作ってやるからな」と腕まくりをする。まだこの頃の彼には余裕があった。

ところが、一枚一枚の板は異常に重く、接合部も分かりにくかった。どうやら二つのネジが合わさってようやく板同士が結合するように設計されているらしい。わずかに四枚で作り上げるだけに、その頑強さに対する配慮は並々ならぬものがあつた。さすがに学習机とは一桁値段が違う。ほんの数分、のつもりが三十分も机と格闘してしまった。

「頑張れえ、お父さん、頑張れ」

詩緒は隣で応援している。まだ就職していなかった景子はその声をキッチンで聞いて微笑んでいた。その彼女が作っているのはクッキーだ。料理が苦手な彼女でも、お菓子作りは得意としている。

ようやく利雄が一息つく頃、レンジの中から甘い匂いが漂ってくる。それを嗅ぎ付けて詩緒はドタバタと派手に床を踏み鳴らしながらキッチンへと向かった。

利雄は一人残され、机に手を突いたまま苦笑を浮かべる。溜息こそ漏れたが笑みは絶やさないはまだ。

仕上げを終えて、利雄もダイニングへと入って来る。すでにクッキーの半分は詩緒に食べられてしまつてゐる。その正面で、景子はコーヒークップを手にしたまま笑っていた。

その隣に座つた利雄は、用意されていたカップを手に取り、一気に飲み干す。

「食べたら机は見らんね。出来とるよ」

詩緒はお菓子の滓を口一杯に頬張ったまま、「ありがとう」と叫ぶ。

「こらこら、口ん中は無くしてから喋らんか」

「そげんよ。喉に詰まってしまっけんね」

二人から叱られ、少し苦い顔をする。それでも、クッキーの甘さが詩緒の笑顔を継続させた。しばらくその表情を眺めていた利雄が問いかけた。

「詩緒、それにしても、何であげなでか机は欲しがったとか？」

何で欲しかったんだっけ？ と詩緒は自問する。記憶の階層が浅いのだ。もっと深くにそれはあるはずだ。最初、最初は何だっけ。小学校入学よりも前、もしかしたら幼稚園よりも前にあるのかもしれない。探って行くが、どこにも見当たらない。幼稚園の頃、詩緒はよくいじめられていた。おとなしく、友達の輪に入ることの出来ない子供だった。誰かが誘ってくればようやくと一緒に遊ぶことが出来たが、そうでなければ一人で絵本を読むか、お絵描きをして遊んでいた。

今、何かが引つかかった。詩緒は回想の巻きを緩める。日々をどう過ごしていたか。幼稚園を卒業した頃にはたくさんの友達が出来ていた。きっかけがあるのだ。自分から声をかけることが出来なかった。だったら皆から声をかけてくれるような出来事があったのだ。それは、絵本がきっかけだった。

目に止まった一つの光景。

絵本を読みながら、そのキャラクターを画用紙に写していた。

「ぴよちゃんのかくれんぼ」

ふわふわで、愛らしいヒヨコのぴよちゃんと、牛や犬や豚や猫が隠れんぼをする。仕掛け絵本で、ページの一部をめくることが隠れた絵が現れたりした。その時期の詩緒が一番好きだった絵本だ。

詩緒が描き写していたのは、ぴよちゃんと、ぶたさんだった。この二匹が、お気に入りだったのだ。この頃の詩緒が持つアイテムはほとんどがヒヨコとブタで埋め尽くされていた。

その二匹を何気なく描いていると、誰かが後ろから声を上げた。

「あー、かわいい」

びっくりした詩緒は、思わず泣き出してしまった。

それを見て、声をかけた子も驚き、泣き出してしまふ。二人の泣き声を聞き、担任が駆けつけて来る。

「あらあらどうしたの二人とも。ケンカしたの？ 違うの。由衣ちゃん、何で泣いてるの。詩緒ちゃん？ いつものびっくりかな。うん、落ち着いて。何でも無いから」

担任の妹尾は、まず詩緒から抱き寄せ、落ち着かせた。抱き上げて背中を軽く叩くと、嗚咽の感覚が緩やかになってくる。

次に、由衣には言葉で言い聞かせた。

「ほら、詩緒ちゃんも泣き止んだよ。由衣ちゃんも、もう大丈夫だから。ね、どうしたのか先生に教えてくれるかな」

由衣は先程の行動を教えた。辿々しく、途中で嗚咽も混じるため、あまり明瞭ではない説明だった。しかし、妹尾は根気よく聞き、詩緒と由衣の話を総合して事件を考えた。

「ようするに、由衣ちゃんは詩緒ちゃんの絵が可愛かったから見せて欲しかったのね。で、詩緒ちゃんは急に声をかけられたからびっくりしちゃったんだね」

まとめると、何でも無いことだった。そうして、妹尾先生の仲介で詩緒の絵が公開される。まだ輪郭に歪みはあるし、パーツの配置も若干ずれている。それでもそれは可愛らしく見えたし、幼稚園のレベルにしては上出来に上出来を重ねたくらいに良く出来たものだった。

この後から、絵本のキャラクター描きが幼稚園の遊びの一つに加わったんだっけ。先生は園児が外で遊んでくれないって悩んでいたみたいだけど。それから段々と一緒に外で遊ぶようになって。

そうだ。詩緒は心の中で叫ぶ。

いつだってきっかけは絵だった。そして、その絵を始めたのは、幼稚園に入る前のことだ。

二歳の誕生日だった。

その日、詩緒には初めてのことばかりだった。ケーキを食べさせてもらったのも初めてなら、遊園地に連れて行ってもらったのも初めてだった。遊園地とは言っても、太宰府天満宮に併設するだざいふ遊園地だ。全ての乗り物が小さな子供用になっていて、小学校低学年までなら十分に楽しむことができる。メリーゴーランドやミニバイキング、子供列車など、一歳から乗ることのできる物が満載されている。初め、それがどんな物か分からなかった詩緒は、利雄に手を引かれてメリーゴーランドに乗った。利雄は馬車を選んだ。幼い詩緒は初めて見る馬に怯えてしまつて、それを選ぼうとはしなかった。

周囲には子供の一人さえもいなかった。たった一組のために動かされるそれは、嬉しくもあり、寂しくもあった。だが、それを感じ

たのは利雄だけだったようで、詩緒はグルグルと回る景色を不思議そうに眺めていた。目的も無く走っているこの馬車が理解できなかったのだ。

笑顔を見せない詩緒の顔を、父親は覗き込んだ。いくら何でも子供騙しすぎただろうかと心配した。結局、メリーゴーランドは五周ほどするとゆっくりと止まった。

再び手を引かれて、母親の元に戻る。詩緒は乗っている間、景子に対して手を振ることもしなかった。そのためか、彼女の表情も心無しか曇っている。

詩緒は二人と手をつないで、辿々しく言葉を紡いだ。

「くるくる、おもしろいね」

口が裂けそうなほどにニンマリと笑う。目元は皺だらけで、利雄は我が子ながら不細工な顔だと吹き出してしまった。景子もほっとした顔で詩緒を抱きしめた。

一度火の点いてしまった詩緒は止まらなかった。次から次に遊具を指定し、その度に利雄なり景子なりの手を引っ張る。閉園の頃になっても、同じ物に何度も乗ろうとした。

「もうおしまいだよ。また今度連れて来てあげるから」

利雄が何度もそう言い聞かせて、ようやく「またこんど？」と納得した。

「そう、また今度。今からお家に帰って、ごちそうだからね」

ご馳走、の意味は詩緒にはよく分からなかったようだ。それでも楽しいことが待っていると思っただけ、何度も「ごちそう、ごちそう」とはしゃいでいた。

その夜、ケーキとともに出されたのはカラフルな包みだった。

「あけていい？」

詩緒が聞くので、二人が頷く。詩緒は小さな手を一所懸命動かして、包み紙を破っていく。

現れたのは、黄色い箱だった。一部に細長く窓が開いており、中が見えるようになっていた。

「なに、これ？」

詩緒は目を瞬かせて問いかける。景子が歯を見せて笑い、「開けてごらん」とじらした。

詩緒が箱を辿々しく開けると、そこには鮮やかな色をした八色のクレヨンが並んでいた。

赤、青、黄、緑、茶、ピンク、橙、黒、それらをしげしげと眺めて不思議そうにつまんでいる。

「もう一つ入ってるよ」

利雄がそう言うと、包みを手に取る。奇麗に紙を取り去ると、そこには画用紙帳が現れた。

画用紙を机に置き、その隣にクレヨンの箱を置くように詩緒に言う。

「クレヨンを持って、画用紙に何か書いてごらん」

景子が詩緒の手を取り、持ち方を教える。どうしても指三本で持ってしまうが、景子はそれを良しとした。

詩緒はまだ、自分が何をしようとしているのか、理解できないようだ。言われるままに画用紙にクレヨンを乗せ、線を引いていく。何も無い真っ白な画面に、一本の歪んだ線がゆるゆると描かれていく。軌跡が長くなるほどに、詩緒の表情が明るくなっていく。

「うわあ、うわあ」

歓声を上げて、好きなように手を動かしていく。まだ絵と呼べるほどの物ではない。具象でもなく、かといって抽象でもない。ただひたすら、遊ぶ線を描く。選んだ色は緑だった。どこまで行っても途切れることの無い色彩の道路に、詩緒は没頭した。それは時には画面をはみ出すこともあった。しかし、景子も利雄も止めるようなことはしなかった。ルールは必要だ。画面の中に描くことを教えなければならぬ。それでも、今はただ無邪気に喜ぶ詩緒の表情を眺めていたかった。

そうだ、詩緒は再び叫ぶ。

そこが原点だった。私の、画家としての原点。

真っ白な紙に新しい線が生まれる喜び。それをもっと味わいたくて、絵を描き続けた。

それが、友達を生んだ。それもまた新しい喜び。

私の喜びは、いつも絵画と共にあった。

周りにとって、どう思われているかは分からない。でも、私にとって、それは真実と確信できるものだった。

だからこそ、あの机が欲しかったのだ。

広く、丈夫そうなあの机が。

たくさんの絵が描けそうな、あの机が。

詩緒は今、黒い机の前に座り、両親を思っている。たった一つ、絵画が繋ぎ止めてくれなかったもの。

思い出は、いつも暗い表情を残して閉じていく。

小学校に上がってから、事態は変化していった。その頃の詩緒に世間の動きが分かるうはずも無いが、世の中は十年以上に及ぶ闇の時代に入ろうとしていた。今まで順調に來たものが順調ではなくなり、ついには消滅する、というようなことも対岸のことではなくなっていた。そんなある日、景子が仕事を始めると宣言する。

「詩緒ちゃんも、もうお姉さんだし、大丈夫だよ。ちゃんと晩ご飯までには帰って来るようにするから」

とってつけたような言い訳を盾にして、しかし利雄はそれを否定はしなかった。詩緒が二人の顔を見て薄暗く思うのは、もう少し先のことになる。

とにかく、家族の断層はずれ始めた。

家に帰っても、誰もいない。それは詩緒にとって心を開いた空間と同じだった。たくさんの思い出が詰まった胸の引き出しは、その

空虚な空間に放り出される度に中身を吐き出していく。

詩緒がその新しい環境に慣れるために始めたことが、思い出の描画だった。

小学校に上がって、詩緒の選択肢は増えた。クレヨンだけではなく、色鉛筆も使えるようになっていた。少しではあるが、水彩絵の具も理解し始めていた。

彼女が画材を理解するという意味は、ただ描けるということと少し違っていた。詩緒はいつも、画材によって絵を描く前に、線を描いた。他人から見たらおかしい光景だったかもしれない。真っ白なあるいは色のついた紙を前にして、画材の……例えばそれが色鉛筆であれば、一色の鉛筆を選ぶ。その時々で違うが、主に緑を選ぶ。好きな色なのだ。紙にまず、まっすぐな線を引き。それから円を描く、破線を引いてみる、鉛筆を寝かしてみる、連続して平行に線を引き。具象や抽象を描く前に、その画材の持つ力を理解するのだ。ただ、詩緒自身はそういった思惑を持っていたわけではない。ただ、初めて絵に触れた時の感動を、あの線で遊ぶ楽しさを再現しているだけなのだ。

黒い机の上で、詩緒は描き続ける。

家族で食事をした時を。一緒に遊びに行った時を。怒られたことを。抱きしめられたことを。

様々な表現で、様々な場面を。

始めは思い出を綴るだけだった。

「そんなこと言ったってしょうがないでしょう」

詩緒の脳裏に、母親の声が響く。

「私はあなたを助けているのよ」

父親の声は聞こえない。押し黙って、母の言葉に耐えているのだ。小さな詩緒は、それを階段の陰から見ている。声を潜め、震えながら、でも逃げる事が出来ないでいる。

父は黙ったままで母を殴った。平手だった。倒れ込んだ母は、それでも怯まずに父を睨み返した。私は、それを震えながら見ていた。

詩緒は今でも目の前の出来事のように回想できる。

二歳の頃、遊園地に行った。詩緒はその出来事を知ってはいても、覚えてはいなかった。頼りになるのは写真だけだ。何度もそれを眺め、記憶と希望を具材にして画面を塗り込めて行く。

母は、何か難しい言葉で父を罵った。それによりもう一度、平手が打たれ、母は手近なバツグを投げた。その瞬間、「バカ、詩緒が起きる」と父が声を上げる。母も巻戻しをかけられたように手を引っ込めた。

二人とも、悲しい顔をしている。何かを疎んじるような、悲しい顔をしている。私は、それが悲しくて、二階の部屋へ逃げる。真っ黒な机が私を迎え入れる。その上には一枚の画用紙が置いてある。私は何かに追われるようにして描いていく。私を父を母を。そこでは皆が微笑んでいて、楽しく食事をしている。そうだ、父の大好きな焼き肉にしよう。

詩緒は、思い出していた。ドアを背にして。背中が冷たく、鼻筋がツンとする。

父親も母親も大好きだった。

詩緒はいつだって二人のことが好きだった。

四

空はどこまでも高く、雲一つない。どこかに散歩でも行きたい気分だ。

敬一郎は、立ち上がり、数歩進んだ。そこで端に行き当たる。右を向き、また数歩、鉄格子に頭をぶつけ、その場に座り込んだ。

全く、世界は美しい。敬一郎を排除した世界はどこまでも澄んでいた。

「それにしても」

と敬一郎は独り言を吐く。

「それにしても月には鳥一羽、虫の一匹もないんだね」

誰も答えてくれるものはいない。そんなことは分かってきている。ここに閉じ込められてどれくらいになるだろう。少なくとも、一年が経っていることは分かる。時間の感覚がないこの世界で、敬一郎の指針となるのは現世の動きだった。その時間とこの時間が同じであるとは限らないが、少なくとも停止された敬一郎の人生において、恭二と洋子は全てに優先される灯台の明かりのようであった。

乳白色の世界は例え変化があったとしても見た目に乏しい。敬一郎の目を楽しませるものはこの世界にはなかった。そのため、現世への思いは日一日と増していくのだが、彼自身は死者としての自分を全うするしかないのだった。つまり、動かないでいるか寝るかどちらかしか選べなかったし、そのどちらも本質はそう変わるものではなかった。食べ物がなくとも死ぬことはないし、動かなくても筋肉が痩せ衰えることもなかった。その辺りは黄泉の法則を否定していた敬一郎だが、無意識の内にこの世界とリンクし、自らの存在を保つように心がけていたのだろう。

檻に閉じ込められて、敬一郎が出る努力をしなかったわけではな

い。最初の内はよじ登ってみたり、隙間から手を出してみたり、地面を掘ってみたりもした。しかし、檻はその度に柔軟に変化し、高く背を伸ばし、格子を太くし、地面に根を生やした。一時はこの檻は海里の変化した姿なのではないだろうか考えたほどだ。だが、呼びかけても返事はない。そうしていく間に、敬一郎にも答えが見えて来た。つまり、彼がこの黄泉の法則を認めてしまえば出ることは容易いのだ。檻と同化し、存在を一つにし、地面に溶ける。そうして自分を変化させてしまえば出ることはできるだろう。だが、その瞬間に敬一郎は捕えられてしまう。この世界の輪廻の法則に囚われ、自分を保つことが難しくなる。それが分かっていたからこそ、彼は試さなかった。

慣れてしまえば、そう退屈でもなかった。半ば、彼はこの専用のシアターに満足しつつあった。

恭二は相変わらずの生活を崩さなかった。

ただ、起きる時間は以前のように八時に戻っていた。

朝食を食べ、本を読み、掃除が始まるとウェアを来てジョギングに出かける。

近頃、恭二はジョギングの場所を名も知らない公園から大隈公園に変えた。グラウンドもある比較的大きな公園で、その周りをグルグルと回るのが楽しいのだ。

走り始めると、徐々に子供たちが集まってきた。さわさわとした騒々しさから、段々と大きな喧噪に移り変わっていく。五周もする頃には黒い帽子と白いシャツの一団が出来上がっていた。その内に一人が監督の姿を見つけて号令をかける。フィルムが切り替わったかのように子供たちの塊が動いていく。監督がグラウンドの領域に入ると、チームのリーダーらしき少年が「おはようございます」と大声を上げた。それに続いて、全員が声を揃えて「おはようございます。今日もよろしく願います」と叫んだ。監督は鷹揚に手を挙げると「よし、おはよう。大会も近いから、気合い入れて行こう。まずは走り込みから始め」。規則正しく並んだユニフォームの

列が走り出す。それは瞬く間に恭二を追い抜いて小気味良い足音を立てる。漣のように頭が揺れる。その中の一人を、恭二は敬一郎に見立てる。

あいつは、俺の背中ば見るやろうか。

画家になりたいっちなやろうか。

それとも、あげん野球とか、サッカーとかするとやろうか。

俺はあいつが画家になりたかつち言うたらどげん返すやろうか。

クレーのごつ、画家になったら自分と比べられるけん、やめとけ、
っちなやろうか。

それとも、今、益田にしようごつ、あいつの画風ば壊さんごつしながら導いていくやろうか。

そういったことを考えながら、恭二は野球少年たちの後を追うがため、スピードを上げる。人に着いて行くと、無理なく自分のペー
スを更新できる。気が楽なのだ。普段、独立独歩の彼にとって、受
動的な立場でいることは気が休まった。

ここ最近、寝ても覚めても個展のことばかりを考えている。美術館からの要望は、やはり生命シリーズを中心とした、矢島海里の懐古的な展覧会だった。できれば、今までに展示したことの無い大作を出してもらえれば、との意見も出た。

学芸員は、敬一郎が逝ってからの恭二を停滞したと見ているのだろ
う。生命シリーズを最盛期と見て、それに繋がる流れを展示したい
ようだった。

だが、それは恭二の性格が許さなかった。

彼自身は「薄明のとき」を境にして、自分を切り離そうとしてい
た。矢島海里の画業で度々あるように、作風をがらりと変えるつも
りだった。変わっていくのが自分でも理解できた。

しかし、それがどういった方向性であるのか、何を生み出すのか
はまだ闇の中にあった。

予感があった。

それは曲がり角からひょっこりと顔を出して来るのではないかと思われるほど近くにあると恭二は考えていた。

その角の向こうに居るのは、詩緒なのではないかと思っていた。

恭二と制作姿勢が似ていて、それでいて異なる画風を持つ詩緒。彼女が隣で描いている内に、恭二は彼女の絵に惹かれていた。確かにまだ荒削りではあるが、恭二に無いものを持っている。

後ろ向きな中にも、希望を残しているのが詩緒の絵画だ。家族を写生するシリーズがそれに当たる。そしてそれは、後ろか前のどちらかしか向いていない恭二の作品に、新しい息吹を与えてくれる可能性を秘めていた。

自宅に戻ってシャワーを浴びる。

頭をタオルで拭きながら、妻の姿を探した。見当はついている。

いつも台所にいるか、居間でテレビを見ているかだ。案の定、洋子はテレビを見ていた。

「ちよつと話があるとはってん」

話しかけると、彼女はちらりと恭二の表情を見てからテレビを消した。

「良かよ。どげんしたと？」

恭二はジョギング中に思ったことについて、仔細漏らさず話した。

恭二自身は大事な決意を話すかのような気持ちで語ったのだが、洋子は意外に平然と答えるのだった。

「そげんとは当たり前やんね」

「なんでか」

やや強い調子で恭二が咎める。

「恭二さんは詩緒ちゃんのお陰でスランプから立ち直ったやろ。それに、薄明のときの地塗りをしたのは詩緒ちゃんやもん。もう十分、

恭二さんは詩緒ちゃんの影響は受け取るよ」

「そうか……」

拍子抜けした恭二は気の抜けた返事をする。気がついてはいたが、今更ながら影響の大きさを認識する。立ったままだった恭二が洋子の隣に座ると、彼女は夫の肩に手を置いた。そのまま揉み解す。

「恭二さん、ちょっと考え過ぎやなかと。一回、気分転換でもせんと、良か答えは出んよ」

恭二は気持ち良さそうに目を瞑っている。洋子は彼の肩が凝っていることに気付いた。肩甲骨の辺りから鎖骨の辺りまで、ぐぐつと盛り上がっている。押すと弾力はあるが、軟骨に触れているようなコリコリ感があり、血管を押し潰しているのではないかと思われるような圧迫感を感じる。

丁寧は丁寧に、そして力強く指圧する。恭二の口から吐息が漏れる。その長さが彼の苦悩の度合いなのだと洋子は噛み締めた。しばらく、二人黙ったまま洋子は懸命に揉み、恭二は注文を付けるでも無くされるままになっていた。

それが突然、妻の手をつかむ。

「なあ洋子」

「なに？」

「旅行にでも行かんか？」

つかんだ手を前に引つ張る。自然と洋子の体は恭二に密着する。

洋子が彼の体を抱きしめた。じんわりと温かみが伝わって来る。間が開いた後、彼女が答えた。

「そうやね、どこか行きたいところがある？」

問いに、恭二は振り返った。

「湯布院に行こうかち思うてたい。今、思いついたとばってん」

洋子が微笑む。彼女は立ち上がり、雑誌棚の中から旅行誌を取り出した。湯布院は初めてではない。何度か行ったことのある場所であり、恭二が気に入っている場所でもあった。

「ほんと好きっちゃね。で、今回はどこに泊まるつか？」

敬一郎はいつしか二人の内面を鑑賞できるようになっていることに、疑問を抱かなかった。具象的に、二つの球が敬一郎の前に浮かぶ。片方はダイヤモンドのように多面的にカットされ、深い紫の輝きを放っている。もう片方は水晶のように透明で、真円を象っている。どちらがどちらか、敬一郎にはすぐに分かった。水晶の方に触れる。表面だけを見れば冷たそうに感じるが、実際にそうしてみると柔らかく、温かい。だがその奥深くに手を伸ばしてみると、芯の部分はゴムみたいに弾力を持っている。

「お母さん」

慈しみ、掌の上で球体を撫でる。間近で見ると、ある一角に曇りがある。それは自分を失ったが故のものだろうか、そう考えたとき、敬一郎は自然と頬が緩む。その一方で自分を責める声も聞こえるのだ。

視線をずらし、ダイヤモンドを手取る。何者をも侵入させないという意志がはっきりと分かる。表面は光を乱反射させており、決して中が覗けないようになっていた。

「お父さん　海里　」

敬一郎はその名を呼んだ。しかし、砂が盛り上がることもなければ、天井から滴って来た水が形を変えることもなかった。あの海里と父親とは違うのだと分かっている、彼が恭二の影響下で形成された物質であることは否めない。

視点を変えて、敬一郎は詩緒の生活を眺める。これ以上考えても、彼の年齢では理解まで到達しようがなかったし、本能的に拒否もしていたのだ。恭二を憎むことを。

朝起きて、まず詩緒がすることは手紙探しだった。昨夜両親に当たった手紙の返事が残されていないかを真つ先に気にする。だが、いくら探しても、紙片すら置いてはいなかった。詩緒はそこに恭二のことと、絵のことを綴った。先週末に連れて行ってもらった遊園地のことを書いた。あるいは詩緒が期待していたのは叱責だったかもしれない。その体験を元にして描いたジェットコースターの絵を、恭二は殊更に褒めてくれた。この二年間で初めての出来事だった。敬一郎はその姿を見ていて、ひどい嫉妬にかられたものだ。一時は自分の居場所が無くなってしまったのではないかと砂を檻に叩き付ける。

ところが、恭二は洋子に話すのだった。

「正直に言つて、あいつはあのままじゃ駄目になるぞ」

「どげんしたと、恭二さん」

「あいつが描く家族の絵は少し悲観的すぎるみたい。寂しか気持ちばつかが表れとる。確かに希望も表れとるが、それがテーマに結びついたらん。前にも言つたばつてんが、悲しさば全面に押しだすつちやなか。それば作品として表現せんといかん。それがあいつには分かつたらん」

「それやつたら、何で褒めたと?」

「それは……こげん言つたらあいつは怒ろつばつてん、可愛そかきたい。あいつの環境ば聞いたたら、無下に作品ば避難できんごつなる」

「情が移つたつちやろつかね。珍しかやん、恭二さんがそげなこつば言うげな。ばつてん、詩緒ちゃんはそのげんこつば喜ばんち思うよ。ちゃんと言つてあげんと」

「分かつとるばつてん、どげんしてやつたら良かか分からんたい。あいつは口で言つて分かる人間じゃなかけんな。自分で何かばつまんと、身にならんやろつ」

「ねえ恭二さん、私はこげん思うとばってん」

「なんか？」

「止めさせるとか、修正させるだけじゃなくてっさい、とことんやらせても良かつちやなかと」

「どげんことば言いよると？」

「だけん、突き詰めてやらせるったい。例えば、大作ば描いたらどげんね、っち勧めてたい。気が済めば違う方向に考えが向くっちなかね」

その言葉を聞いて、敬一郎はやや溜飲を下げた。なんだ、詩緒はお父さんたちを困らせてばかりじゃないか。

敬一郎はまだ、複雑な人間の心理というものを解せず、自分の単純な感想に置き換えて考えていた。

学校での詩緒は目立つことのない普通の生徒として過ごしていた。数人の友人とグループを作り、当たり障りのない話をする。昨日のテレビについて、新しく買った服について。芸能人の離婚や結婚、それに自分たちを重ね合わせて他愛のない妄想話に花を咲かす。退屈な風景だった。だが、敬一郎には意外に映った。恭二の所ではあれほど個性を発揮する詩緒が、むしろここでは埋もれてしまうような存在でいるのだから。

校門を出てから、詩緒は一度家に帰る。着替え、自分用の道具を持ち、田中家へ向かうために靴を履く。

「こんにちは、センセイ、詩緒です」

その門をくぐると、詩緒は人が変わったように元気になる。自身でも、力が溢れて来るような気分になる。詩緒はこの家が大好きだった。ともすれば、自宅のことを忘れてしまいそうになるくらいに。

挨拶もそこそこに、二人はそれぞれの作品の制作に入った。恭二は何も描かずに、カンバスを見つめていた。もうこれで三日目だ。

一方で、詩緒は土手で遊ぶ家族を描いていた。彼女が恭二の隣で家族の風景を描くのはもう十作目だった。それ以外には具象とも抽

象ともつかない絵を描くことが多かった。弟子入りの際に描いていた、円を使った絵などだ。

画面は横長く、鮮やかな色を残すために、詩緒はソフトパステルを使っていた。分かりやすく言えば、色のついたチョークだ。彼女がこれを選んだのは、色数の多さと表現の多彩さによる。パステルは水彩絵の具のように混色が出来ない。その代わりに多彩な色数を用意してそれを補完する。技法も様々だ。パステルは単純に顔料を微量の固着剤で固めたものだ。だから画面上に塗り付けただけでは荒く、細かい表現が出来ない。そのため、付着した顔料を布や筆、または指などを使って押さえたり、擦ったりすることで表現の幅が広がっていく。上達すればとても鮮やかで繊細な表現が可能になる。

画家には得意とする画材というものがある。恭二は油彩とアクリルを得意としているし、それ以外のものは扱おうとしない。元々、油彩は表現があまりに多彩すぎて、熟練までに時間を要する。表現方法自体が異なるため、あまり他のものには手が出せないのだ。

それに比べて、詩緒は幼い時から触れて来たものを次々に自分のものにしていった。クレヨンから始まり、色鉛筆、水彩、パステルそして油彩と様々な画材を手にする。恭二は初め、詩緒のそういった浮気性に不快感を抱いたものだ。しかし、隣で彼女の描く絵はどれも手を抜かず、一つ一つがまだ熟練の余地はあるものの十分な段階に達していた。

「お前はほんなこつ器用やな」

恭二が呆れて言っていると、詩緒は応えた。

「どれも大事で捨てきれんのやもん」

詩緒は一つの画面に一つの画材を使うのではなく、複数の要素を使ってカンバスを彩って来た。それが偏らずに熟練して来られた理由の一つだろう。

恭二が見るに、土手は筑後川を描いていた。長く遅しい筑後川は、その両岸に様々な施設を抱いている。芝生の広場、公園、サッカー場、ゴルフ場、バイクの練習場などなど。場所が変われば景色も変

わる。背景の景色などから、彼はそこが豆津橋の付近であると考えていた。そこには大きな広場があり、駐車場もあるのでランニングをしたり、ウォーキングを楽しんだりする人がたくさん集まって来る。また、小さな子供連れが子供を思い切り走らせる場所としても使用されていた。

しばらく遠景を描いていた詩緒だが、次第に動きが緩慢になって来る。そして、やがて画面を見つめたまま、恭二と同じように止まってしまった。

「どげんしたとか」

「センセイ、しばらく外で写生ばしようち思うとですよ」

「豆津橋か」

詩緒が目を瞬かせた。

「なんで分かるとですか」

「俺もちつこの人間たい。それくらいは分かる。それに、ここから近かけんな」

その場所は、詩緒の家からも近かった。自然、最も親しんだ場所になる。

「一度空気が吸って来んと、続きが描けそうになかいです」

「良かったかなか」

素っ気なく返事をする恭二に、詩緒は頬を膨らませる。

「もうちよつと引き止めてくれても良かったかなですか」

「何で俺がそんなことばせにやならんとや」

笑いながら言い返す。続けて、恭二は今まで言えなかったことを話した。

「大体な、お前は将来ばどげん考えとるとか」

突然話が変わったように感じた詩緒は、戸惑ってしまい何も言えなくなった。

「俺が言いたかとは、お前は画家になる気があるとか、ちつことたい」

「もちろんあります」

恭二が真剣な話をしていると感じた詩緒が、急に標準語で話し始めた。

「それやったらもうそろそろ受験のことば考えんといかんとやなかか？　もうすぐ夏になっぞ」

そう言われて、詩緒が首を傾げた。

「私は先生の弟子です。このまま置いてくれないんですか。先生の所で勉強させてください」

前に乗り出して声を大きくする。眉根が下がり、声はやや掠れていた。直感的に彼女の泣き顔を想像した恭二が、足早に続きを話す。「そうじゃなか。ここにはこれからもずっと来たら良かたい。ばつてん、大学は行かんとか」

「何度も言うんですけど、大学で勉強するより、先生の、矢島海里の所で勉強した方が上達が早いと思うんです」

そこで、ようやく恭二が詩緒の方を向いた。何も描かないまま、筆だけを持っていた手を下ろし、詩緒の肩にかける。

「良かか、益田。大学には行け。勉強しにいくだけじゃなか。あそこにはたくさん、同年代の仲間が居る。もう分かっところもん。画家に大事なものは技術だけじゃなか。人とのつながりも重要になつとぞ。ここに籠つとったらお前は駄目になる。もっと外に出ろ。たくさんの人と会え。目に見えない何かを感じ取れ。それが絵画つちうもんたい」

詩緒は俯いた。ずっと恭二の隣で絵を描いて行くものだと思っていた。それが自分にとっての安息であり、進むべき道だと考えていたのだ。

「少し、考えさせてください」

やつのことでそれだけを言った。恭二はそれに構わず、言葉を続ける。

「ショックを受け取るごたるが、もう一つ言わせてもらっぞ。詩緒、お前でかい作品ば描かんか？」

靄のかかった心に、矢のように言葉が飛び込んで来る。

「描きたいです！」

即答した詩緒を見て、恭二が苦笑した。

「泣いたカラスがもう笑った」

「からかわんどって。ほんなつば言つと、ずっと前から描きたかったですよ。ばってん、そんな大きな画布ば買うお金もなし、場所もなし」

いつの間にか筑後弁に戻っている。

「それなら早よ言わんか。画布代くらい俺が出しちゃーよ。高校の卒業制作と思えば良か。どんくらいのは描きたかつか」

臃げなイメージは浮かんでいた。それを実行に移すためのサイズも決まっていた。

「百号でお願いします」

恭二が不思議そうな顔をする。

「薄明のときと同じサイズやな」

「へへへ、そうですよ」

笑う詩緒は、一つの疑問を提示する。

「でも、何で急にそげんこつば言ってくれたのですか」

その疑問には答えず、恭二はリビングへと誘った。お茶にしよう、と言うのだ。

敬一郎は、俯瞰の構図でそれらを見ていた。詩緒を見るつもりが、いつの間にか田中家をも見ている。今やその二つは分ち難い存在であるように敬一郎には思えた。

それにしても、と彼は考える。詩緒はなんて面白い人間なんだろう。

彼女はとても弱々しく、それでいて強かった。表面的なものなのか、どちらが本質なのか、全く分らない。暗い面、明るい面、厳しい面、楽しい面、優しい面、憂鬱な面、たくさんのペルソナを持っていた。詩緒のことをもっと知りたい。それには今後も田中家と関わってもらわないと。いつか、彼女の内面を覗くことが出来れば、この場所に彼女の胸にある丸い玉を呼び出すことが出来たら、そんな風に夢想するのだ。

敬一郎は気付いていなかった。彼女の言葉が彼を葬る手助けをし

ていたことに。彼女のヒントが「薄明のとき」を産み、彼女の存在が田中家の平穩を維持させていることに。そのため、彼は未だに檻から出ることが出来ないでいる。檻は拒否の表れでもあった。

黄泉の海里は言った。恭二の影響が大きかったと。彼の觀念がこの月の現象も左右しているのだと。ならば、この檻は彼らの拒否の表現だと考えることができるだろう。

それでも、敬一郎は恭二を恨んではいなかった。恨むことが出来なかった。彼の目標であり拠り所でもあるそれを否定することは出来なかったのだ。

「湯布院ですか？」

「そうよ、良いでしょう」

「良かったですねえ、私も学校が無かったら行きたかですけど」

「何でお前まで連れて行かんといかんとか」

「ごめんね、詩緒ちゃん。たまには夫婦二人きりにさせてね」

「あ、す、すいません。私ったら」

「バカ言うな、なんば赤くなりよつとか」

二人の魂が明るく輝く。そのモニターは踊り、紫はより深く、水晶はより鮮やかに光を放っている。

敬一郎はその眩しさを喜んでいた。

「はあ、でも……お父さんたち、元気になったから良かったのかもな」

敬一郎が独白している隣を　正確には檻の横を　一人の老人が通りかかった。

「え？」

この世界に来て、海里以外に初めて見た人間だった。いや、と敬一郎は思い直す。もしかしたら人間じゃないかもしれない。何しろこの世界では自分の想像した通りの物になれるのだから。次の瞬間にはまた別の選択肢が浮かぶ。いやまて、わざわざ老人になりたいと思うものがあるだろうか。もしかしたらこれは海里の変装かもしれない。

「すみません、ちょっと待って」

敬一郎は迷いながらも声をかけた。老人はそれから二、三步進んで止まり、曲がった腰を苦しそうに伸ばしながら敬一郎の方を向いた。

「なんですか」

ゆるりとした受け答えだった。口を開くのも億劫だといった様子で、海里の快活ではきはきとした語り口とは全く違っていた。

「ああ、ええと、そうだ、ここから出してくれませんか？」

海里なの？ とは聞けずに、差し迫った問題を問い合わせる。老人はまたも苦しそうに首を動かし、檻の全景を見てから敬一郎に言った。

「自分で出られませんか？」

彼はこの世界で長いこと暮らしているように感じられた。地面と同化して移動することなど容易いだろうに、と言わんばかりだ。

「いや、それが……出来ないんです」

敬一郎の戸惑ったような台詞に、老人がそっぽを向く。

「無理です。順番なんですよ」

一步一步確実に、老人は前に進んで行った。

「ちょ、ちょっと待ってよ。方法だけでも教えてよ。それに、順番って何なの？」

もはや老人は振り向こうとはしなかった。敬一郎は老人の足下に微かに輝く道を見る。それはナメクジのぬめりのようにも見えたが、確実にある方向を指し示していた。

数時間をかけて、老人は見えなくなっで行った。その間、敬一郎は何度も声をかけた。しかし、彼は自分が存在しないものだとも言つように僅かにも反応を見せず、行ってしまった

五

豆津橋を右手に眺めながら、詩緒は土手に遊ぶ人々を描いていた。春から初夏にかけての陽気は、うつとりとした眠気を誘う一方で何かを始めたいという活気も含んでいた。

緩やかに広がって行く川幅を画面の大勢に占めながら、詩緒の絵は大まかな画面取りをしていた。

どの部分にどの要素を配置して行くか。またはどこにどの配色をすれば全体がバランス良くなるのか。それとは反対に、どうすればバランスを崩して自分の作品をアピールできるのかを考えていた。

土手では、休日のためか大勢の親子連れが賑わっていた。その表情を眺めながら、今朝の出来事を振り返る。

珍しく、父親が家にいたのだ。朝起きると、階下からテレビの音が聞こえる。詩緒は飛び起きた。盛大な音を立てて居間に行くと、ソファに寝転んだ父親が、さきイカを片手にビールを飲んでいた。寝転んだままで、器用なものだと感心した詩緒が、父親の正面に回る。

「お父さん、お早う」

「おう、お早う。お休み」

「お休みじゃなかよ。せっかくの休みなんやけん、ちょっとくらい話さんと」

利雄は詩緒の方をチラリと見ると、また一口、ビールを飲んだ。同じ年代なのに、恭二と利雄ではえらい違いだ、と詩緒が頬を膨らます。

「手紙なら読んだけん。画家のセンスイによろしくち言っといてくれんか。今度お礼ばしに行くけん」

進学のことについて、まだ詩緒は手紙に書いていなかった。

「そげん言うとかよ。お父さん、体は大丈夫と？」

詩緒の問いに、利雄はビールを飲み干して言った。

「心配してくれるとやったら、寝せてくれんか。父は疲れをとるとよ」

言うが早い、目を瞑ってしまふ。詩緒はそれ以上何も言えず、

詩緒は道具を脇に抱えて飛び出して来てしまった。

まだ若い父親が、三歳くらいの子とサッカーをしていた。ドリブルする父親を、男の子が追いかける。何度も足が届きそうになるのだが、その度に父親が見事な足さばきを見せて回避していた。

「お父さん、待ってよ、ずるいよ」

とうとう男の子が泣き出してしまふ。父親は慌てて駆け寄り、男の子を抱き上げた。その様子を母親が微笑みながら見ている。

その向こうではフリスビーをしている兄妹がいた。兄の方は上手に投げる事ができているのだが、どうしても妹が成功しない。あらぬ方向に行ったり距離が全く足りなかったり、その度に兄が取りに行つてあげている。しかし、兄は決して怒らず、根気よくコツを伝授するのだ。

「良かか、目標ばちゃんと見らんと。それから、体の正面で手は放すつたい。そげんしたらしゃんと行くけん。もう一回やってみ」

何度目か、ようやく一回だけ成功する。妹は涙ぐみ、兄は喝采を上げている。

詩緒はサッカーを選んだ。男の子を自分に変換し、ニコニコと笑っている様子を描こうと思っていた。結局、恭二のアトリエで描いていたものは破棄してしまった。どうしても納得いかなかったのだ。薄い鉛筆で、当たりを点ける。描いて行くための指針をそこに記す。筑後川が画面左下から右上に向かって横切る形にする。それとエックス型に交わる格好で豆津橋を描く。

画面の右下半分に土手を描く。そこには広い緑を配置する。家族三人の肖像を置くのだ。

大まかな部分から形を取って行った。その頃にはもうすでに詩緒

の頭の中に完成図が出来上がっていた。後はそれに向かって色と線を配置して行くだけだ。

ただ、一つだけ悩んだ部分があった。

色の偏りだ。画面の全体は緑と青に覆われていた。詩緒はそこに赤い色が欲しいと思っていた。

詩緒は赤の中からやや薄目のものを選んだ。いくら補色の効果が期待できるといっても、毒々しすぎると思ったからだ。控えめな赤は、目に優しいだけでなく、心にも優しい。何より、詩緒自身の気持ちを和らげることができた。彼女はそれを、幼い自分の肖像に配色した。

青と赤と緑が交わったその画面は、とても美しいものに思えた。実際に、詩緒の構成した画面は卒がなく、柔らかい印象を与えた。それを支えているのが、画面を斜めに横切る筑後川だった。そして豆津橋だった。その二つがエックスの形に交わることで、カンバスを際立たせ、更にそれがずれていることで唯一の赤で彩られた人物に焦点を当てることができていた。

大まかな配色を施している最中だった。

詩緒の後ろから、声をかけるものがあった。

「クリスマスنگたんな」

思わず詩緒は振り返った。そこに、一人の男が立っていた。彼について、詩緒は微かに覚えがあった。何のことはない、ただのクラスメイトだ。三年時に一緒になって、一度も話したことがない、彼女にとって庭石程度の存在だった。

詩緒は彼の存在を認めるとすぐにカンバスに目を向けた。そしてパステルを大きく塗り立てていく。それを見て、彼がまた言った。
「クレヨンで描いとか、幼稚園児んごたるな」

詩緒は今度も無視した。言葉は彼女の心に、ささやかな風さえ吹かすことが出来なかった。それでもなお、彼は詩緒に語りかけていた。

「色を塗るとも幼稚園児ばってん、描き方も幼稚園児ばい。何かそ

のボヤーツとした線は。全然似とらんやんか。それに、人が大きかもん。そげん描いたらおかしかぞ」

彼はパステルの特性について全く理解していなかった。クレヨン
の力を侮っていた。絵に対する冒瀆は著しく、詩緒は胸に靄の塊が
沸き起こって来るのを感じていた。だが、それはすぐに溶解する。
美術は説明するものではない。見て、それぞれが理解すれば良いの
だ。彼がそう読み取ったのならそれで良いと思った。詩緒自身は
矢島海里の傍で制作を続けて来たという自負があり、それは詩緒の
美術に対する芯を固く太く作り上げていた。その芯に肉付けされた
彼女の作品は、たとえどんな批判を受けようとも乱れることは無か
った。

詩緒は彼が口を閉ざしたのを見て、より画面に集中した。今日の
内に、輪郭だけは仕上げておきたかったのだ。

その絵は、赤がより目立つように作られていった。赤は詩緒で、
父親は優しい緑だった。母親は少し憂鬱なブルーだった。それでも、
全体には幸せそうな家族に見えた。

画面の中では。

六

詩緒が画面に集中したことで、靖志は話しかけられなくなっていた。

もつと話していたかった。それなのに、なぜ自分はある言葉を使っただろう。

益田詩緒のことを、金田靖志はあまり知らなかった。クラスでも目立たない女だとしてしか認識していなかった。彼にとって、庭石程度の存在だった。

その容姿について、靖志は目立っていると思ったことは無かった。それは自分自身にも言えることだが、彼は自分を卑下したりする性格ではなかった。B型的な性格であり、実際にB型だった。服やアクセサリーにも気をつけていた。ただ、メタル系ではなくアジア系のものを好んでいた。益田詩緒から化粧っ気や飾り物の気配は感じられない。

正直、靖志は詩緒に好意を感じていなかった。

朝、教室に入っていくと、靖志は元気よく皆に挨拶をする。クラスを中心ではないが、無視されているわけではなかった。むしろいつも無鉄砲で精一杯校庭で遊び回る靖志のことを、クラス中が心地よい気分で眺めていた。

「おっはよう」

「おはよう」「おはようさん」「元気？」

様々な声にまとめて返答をする。

「おうよっ」

彼らの仲は簡単だった。

その声の中に、詩緒は入っていなかった。そして、彼らの仲間の

誰とも、詩緒はチームを組んでいなかった。いつも小さなグループで片隅に集まり、こそそと何事かを話していた。クスクスとしたくすぐったい笑い声が、時折微かに届くだけで、それは靖志の耳には残らない。彼の心に届いていたのは、仲間たちの呆れるほど大きな声だけだった。

「靖志、昼休みは何するんだよ」

「キックベースやろうぜ、この前の体育のリベンジってことで」
すぐに何人かが手を挙げる。元々正式なルールでやる考えなど無いのだ。ある程度が集まれば良かった。

授業中も、詩緒は丁寧にノートを取っていた。そういった几帳面さは、十二分に持ち合わせていた。靖志と言えば、ノートどころか教科書すら開いていない。

その際も、彼の視線が詩緒の方に向くことは無かった。二人は隔絶された世界にいたのだ。

昼休みになり、詩緒はぼんやりと外を眺めていた。校庭を見てみると、たくさんの生徒がボールを使って遊んでいる。バレーやドッジボールが中心なのは、小学生の頃からあまり変化が無かった。その一角で靖志の団がキックベースをしている。今、彼が打席に立った。ピッチャーがボールを転がすと、彼はそれを目一杯に蹴り上げる。球は高く高く上がったが、それほど距離は伸びず、センターに易々とキャッチされてしまった。

詩緒は、その光景を眺めていた。だが、靖志たちを見ていたのはなかった。校庭の土色と、生徒の黒白の服が織りなすコントラストを絵に活かせないか考えていただけだった。まだ群像を描いたことは無い。大変だろうか、そして何のためにそれを描くのだろうか、詩緒の思考はあらゆる方向に枝分かれしていった。

靖志は単純だった。思考の枝など伸びはしない。ただ真直ぐに見たものを捉え、そして脊髄反射的に動くだけだった。彼の性格がそうであつたし、そうでなければ運動することなど出来なかった。

詩緒の後ろに友人が立つ。

「またあいつらね。本当に良くやるよ」

由衣は意図して久留米弁を使わないように心がけていた。それが期せずしてちぐはぐな物言いを招いていることに、彼女は気付いていなかった。

「あいつら？」

詩緒は鸚鵡返しに問うた。

「金田一味。馬鹿集団よ」

由衣は彼らのことをそう評価した。彼女は無思考な人間を嫌っていた。ただ現在のみを享受している彼らが羨ましかったからだ。

幼稚園以来の友人がそう悪し様に言う姿を見て、詩緒は初めてその一団に視線を向けた。彼らは輝いているように、詩緒には見えた。

「良かつちやない？ 楽しそうやし」

「本当に詩緒はのんびりね」

「私は絵が描ければそれが一番やけんね」

「あいつらのせいで、このクラスの順位が下がっているってのに」

「最後に頼るのは自分しかなかよ、由衣」

「そげなこと分かつとるばってん……あつ」

由衣が口を押さえる。つい出てしまった久留米弁が憎くて仕方が無い。

「良かやんね。故郷の言葉やけん」

「駄目よ、詩緒も知ってるでしょ。私は高校出たら、東京の大学に行きたいの。方言なんて喋ってたら馬鹿にされるに決まってるじゃん」

由衣自身、今の「じゃん」は良く出来たと思った。だが、詩緒はそれに気付かずに感心したように「ふーん」と相槌を打っただけだった。

「気の無い返事ね」

「由衣はやりたいことが決まっとるっちゃね」

「詩緒だって、ずっと昔から決まってたでしょ。むしろこっちが羨ましいくらいよ」

由衣が指しているのが絵画のことだということは分かっていた。
でも、それは違つと詩緒は考えていた。

ただ漠然と絵を描きたいと思うことと、自分の将来を見据えて動くのとは百歩も二百歩も差が開いている。その点、ささやかであろうと何かを実行に移している由衣は偉いと単純に思っただ。

「ま、由衣はその前に成績ばもつとあげんといかんね」

詩緒がからかると、由衣は人差し指を弾丸にして詩緒の額を小突いた。

「いたつ、痛かよ」

「痛くしたもん」

受け答えに、意味なく二人が笑う。その直後に、由衣が詩緒の肩を抱いた。

「悩みがあるなら言つてよね。親友でしょ」

詩緒はその感覚が心地よく、目を瞑ってしまふ。そのまま、「うん」と答えた。

そうしたやり取りが行われている外では、靖志が最後の打席に立っていた。時間がない。彼の一打がこの勝負の運命を握っていた。

ピッチャーが投げる。彼は先程よりもやや慎重に駆け出した。

タイミングを合わせ、足を大きく振りかぶる。インパクトの瞬間、靖志はベース目掛けて走り出した。

ボールは大きく放物線を描きながら、隣のバレーグループに飛び込む。センターがそこに遠慮がちに入っていた頃、靖志はすでに三塁を回っていた。

歓声が起こる。男子も女子も靖志の活躍に喝采を浴びせていた。そのシャワーが心地よく、彼は両手を高く掲げて応える。

同時にチャイムが鳴った。全員が慌てて校舎に駆け出していく。どんな場面を思い出しても、彼の記憶に益田詩緒は出て来なかった。そもそもステージが全く異なっていたのだ。

それでも彼は後悔していた。どうしてもっとかける言葉を選ばな

かったのだろう。今日ほど猛進な性格を恨んだ日はなかった。

放課後、遊びすぎたのだ。

どうしてもキックベースのリベンジゲームを受けなくてはならず、結局長い時間かかってしまった。何しろ連勝に次ぐ連勝で、泣きの一回が三回も続いてしまったのだから。

いい加減体力の限界を感じたのか、相手チームは後日、編成を変えての挑戦を申し込んで来た。それを受けることでようやく解放されたのだ。

さすがの靖志も疲れがたまっていた。空は微かに紫色に変化していて、郷愁が湧いて来る。彼にとつての郷愁は空の色と近所のカレーの匂いで構成されていた。

家に帰るには筑後川に沿ってどこまでも行かなくてはならない。靖志は自転車のペダルを強く踏み、速度を上げていった。

青と緑の景色が一本の帯となって流れていく。それがまた心地よかった。風景に包まれているような気持ちで息を吸い込んだ。

すると、見覚えのある制服が緑の中に飛び込んで来た。思わずブレーキをかける。まだ買ってもらったばかりの自転車は軋みを上げること無くスムーズに停車した。

土手に微妙なバランスを保って、アルミの簡易イーゼルを立てていた。カメラで使う三脚のようだと靖志は思った。

その上に、長い辺が五十センチ程度のカンバスが乗っている。その前には、これもまた簡易の椅子を使って画材入れをいじっている女子がいた。

始め、彼はそれが誰か分からなかった。他所のクラスの間人だと思っていた。だから近付いてみたのだ。誰かを良く確認するために、しかし、靖志は確認することが出来なかった。人物よりも先に、絵に目が行ってしまったのだ。

飛び込んだのは鮮やかで控えめな赤だった。夕焼けの太陽のような赤だった。

その印象から抜け出ると、周囲に緑と青が見えて来た。二つの帯

が平行に、斜めに流れていき、最後に橋の欄干で断ち切られていた。それがなんであるかを確認したのは最後だった。ようやく、輪郭が見えて来た。緑が広場で、青が川で空で、そして赤は女の子だった。小さな、三歳くらいの女の子だ。

さらにその隣に、背景と同化してしまったのではないかと思うくらいにさり気なく、両親が描かれていた。

靖志は、それを見て胸が収縮するのを感じた。杖かなにかで、心臓を突かれているような気持ちになる。例えようの無い寂しさが、靖志の背中から頭までを一気に駆け上がっていった。それは脳天に痺れを残し、彼はしばらく瞬きすることも出来なかった。

こんな絵を描くのは誰だろう。

ようやくその思いが靖志の心に浮かんで来た。気付かれないように覗き込むと、思い当たるものがあつた。

同じクラスの益田、だった。

その枠組みは、一気に靖志に親近感を抱かせることとなった。その気安さからか、つい声をかけてしまった。

「クリスマスんごたんな」

よお、とか、なにやってんの？とか。そういった軽い言葉で始めるつもりだった。それが、先程の親近感と、絵という靖志にとって全く素養のない媒体に対する畏怖から強い言葉が口をついてしまったのだ。

後悔はしたが、今更取り戻せるものでもない、と靖志は切り替えた。B型は切り替えが早いのだ。そう自分に思い込ませる。

次の日、靖志はできるだけさり気なく益田を監視した。声をかけることなど出来なかったし、彼女の方も靖志を見ることは無かった。彼女の中では、昨日のことは制作過程の雑音にすらならなかったということなのだろう。

学校では、益田詩緒は絵のことなど話題にしていなかった。隠しているような素振りも見せない。いつも一緒にいる中田由衣に福岡市美術館に行った話をしている所を見ると、友人間では普段話

題に上らないだけなのだろう。

もしかしたら、益田の絵を知っているのは俺だけなのだろうか。そう考えると、少し顔が熱くなった。

放課後、靖志はキックベースの第二リベンジゲームに挑んでいた。残念ながら、今日は大差で負けてしまう。

「靖志、今日は気合いが足りとらんぜ」

仲間からそんな指摘を受けた。彼は適当な返事をしてごまかし、急いで帰り支度をする。呼ぶ声も届かず、彼は土手の道を吹き抜けるように漕いで行く。益田は昨日と同じ場所で絵を描いていた。

今度は声をかけないように、気付かれないように細心の注意を払って覗き込む。どうやら昨日からだいぶん進んでいるようだ。より輪郭がはっきりし、細部が描かれ始めている。

その分、寂しさは増していた。

絵が完成に近付けば近づくほど、女の子の孤独が際立つようだった。空の青も、広場の緑も、その小さな女の子を孤立させるためだけに存在していた。彼女は補われて押し出されて、さらに内包されていた。そのことが心象をより憂鬱なものにしていたのだ。

次の日も次の日も、靖志は土手で立ち止まっていた。声をかけることも出来ず、絵と詩緒の表情を交互に眺めていた。

否定されるのが怖かったのだろうか。それよりも、自分の口から出て来る言葉が怖かった。詩緒の前で、何を言ってしまうか分からない。こと女性に関して、靖志は自然な言葉を選ぶことが出来ずにいた。

七

「また、登場人物が増えたわけか」

敬一郎は二人の微妙な距離を見つめていた。

景色は相変わらずで、彼にとって目の前で回転する地球だけが娯楽になっていた。少々の倦怠感が、敬一郎を包み込んでいた。それは優しく、心地良いものだった。

詩緒と靖志の距離はいつまでも変わらなかった。それを、敬一郎は自分になぞらえた。

「海里だったら、言うかもね。君の心理が、彼らに影響を与えたのかも知れないね、なんて」

そういった皮肉も、一人では虚しい。

画面では、詩緒の作品が完成に近付いていた。おそらく数日後には完成するだろう。独白しながらも、敬一郎は詩緒の作品が出来上がるのを楽しみにしていた。共感を覚えたのだ。彼女の寂しい部分と、敬一郎の寂しい部分は似通っていた。彼が檻の中で自分を表現できない以上、それを彼女に委託するのは励みであり、慰めでもあった。

恭二と洋子は、旅行の準備を始めていた。いよいよ明日、彼らは旅立つのだ。田中家では三人が食卓を囲んでいた。詩緒が二人に気をつけて行くように念を押す。

「センセイは無理するっちゃけん、絶対にいかんけんね」

「分かつとるっち言うたろうが。そげんことよりか、お前の絵はどげんとか」

恭二が指したのは、今描いている絵ではなく、これから描く予定の絵のことだった。

「心配せんだつちや大丈夫やけん。帰って来たらびつくりさせちゃうけんね」

その脇から洋子が口を挟む。

「詩緒ちゃんはお土産は何が良かと？」

特に思いつくものなどなかった。詩緒は二人が楽しんで来て、無事に帰って来てくれればそれで良いと思っていた。だが、それではせつかくの心遣いを無駄にしてしまう。知っている限りの湯布院の情報を、詩緒は思い出して行く。一番印象に残っていた二つを口にする。

「キティちゃんグッズか、鬼太郎グッズば買って来てもらって良かですか？」

思いがけない返答に、洋子が驚く。

「え？ 個人美術館の画集とかじゃなくて良かと？」

それを聞いて、今度は詩緒が驚く番だった。

「え？ 何ですか、それ」

「知らんとね。湯布院は芸術が盛んとよ。わたくし美術館とか、個人が経営している美術館がたくさんあるっちゃけど。詩緒ちゃんが知らんとは思わなかったとよ」

詩緒が恭二の方を向くと、彼は無言で頷いた。

話しは盛り上がり、別れを惜しむように時間が過ぎて行く。敬一郎は眠い目を擦りながら彼らのやり取りを見ていた。いつしか睡魔に負けて彼が眠ったとき、砂の中から一本の手が現れて、毛布をかけて行くのだった。

翌朝……そこにそういった概念があれば、だが……敬一郎が目を開覚した瞬間には、その温かい毛織物は風と散って見えなくなっていた。

八

靖志の席は、益田の遙か後方にあつた。遊びで疲れた体を、授業中に十分癒すためだ。

今日、彼は朝から詩緒ばかりを眺めていた。決心を固めるためだ。作品が完成に近づくに連れて、靖志の胸の痛みは大きなものになつていった。見ていられない、でも見ていたい。相反する詩緒の絵に対する思いは膨らんでいくばかりだ。このままでは、自分の心はズタズタに引き裂かれてしまう。彼にとって、たかが絵である。それなのにこれほど惹かれてしまうのは、ただ絵に対する興味ではないと考えたのだ。

一度そう思い直すと、答えは簡単に出た。靖志は益田に興味を持っていたのだ。

だが、それが恋だとは思っていなかった。むしろ未知への憧れに近いのだと感じていた。新しいものに触れる時の喜び、そして恐れ、それに近いものがある。

靖志は頼りない自分の心に苛立っていた。何としてもはつきりさせる必要がある。そういった意味で、靖志は潔かった。

靖志の決心、それはもう一度詩緒に声をかける、というものだった。

そのため、二度目の失敗を犯さないように朝からシミュレーションに余念がない。どのタイミングで話しかけるか、どういった台詞を言うのか。また、それに対して詩緒がどんな反応をするのか。様々な角度から研究する。

しかし、詩緒に関する情報が乏しいため、なかなか納得のいく結果は得られなかった。ただ見つめているだけでは何も出て来ない。

それでも、いくつか分かることはあった。

詩緒は目立つ存在ではないが、小さなグループの中でのリーダー的存在だった。その全ての行動が詩緒の言葉を契機にしているように靖志は読み取った。そして、そのグループの中で、詩緒は良く喋った。笑みも見せた。あの絵と合致するような印象は受けなかった。あの、土手で会った人間は本当に益田だったのだろうか、靖志はそう疑いもした。だがどれだけ見つめても、その象は揺らぎはなかったのだ。

昼休み、靖志は調子が悪いと仲間たちに嘘をついた。心配する彼らから離れ、一人保健室に向かう。だが、彼はその部屋を通り過ぎて幾ばくかの時間を過ごした。そして再び教室に向かい、ドアが見える場所で待機していた。

五分、十分　思い通りには行かないと諦めかけた頃、チャンスが巡って来た。

「おい、ちよつと待ってくれんか」

教室から出て来た由衣に声をかける。彼女は普段話したことも無い金田に、ちよつと怯えているようだ。

「別に何もせんけん、えすかこつはなか。悪かばってん、ちよつと教えてくれんか」

「何よ、何が聞きたいの？」

金田の妙に真剣な態度に、由衣が首を傾げる。

「益田つちおるやんか。あれはどげん奴か？」

声のトーンを落とし、周囲を気にしながら話す。仲間に聞かれたら事だ、との思いがそうさせた。

「詩緒？　何で詩緒の事なんか聞きたいの？」

「どげんでん良かやんか」

「良かこつはなかよ、大事な親友やけん」

思わず久留米弁で応えた中田に、靖志がたじろぐ。一時黙ってしまった彼は、考えた後にこう応えた。

「ちよつと場所ば変えんか。益田に聞かれるやろつが」

教室から離れ、中庭に移る。校庭とも反対側にあるここなら、安心して話す事が出来た。金田靖志は何度も詰まりながら、詩緒との出会いを語った。それが自分にとってどう印象づけられたのか、何を知りたいのか、辿々しくも一所懸命に話していく。額に汗をかき、回り道をしながら丁寧に話していく金田の態度に、由衣も次第に絆されていった。

「だけん、俺はそれが寂しかち思ってた。ばってん、なんでそげん寂しか絵ば描くかが分からん。益田のことはちゃんと知っとかんと、俺はまた益田のことは傷つけるっちゃないやか、ち思ってた」

由衣は金田の目を見た。普段はふざけてばかりの彼が、今はまったく瞳で由衣を見ている。

「……あんまり気は進まないんだけど。何だか詩緒を裏切るみたいで」

「頼む」

一度大きく息を吐き、由衣は話し始めた。詩緒が画家の矢島海里に弟子入りしている事、寂しい絵の傾向は小学校以来の家庭環境にある事、それでも詩緒は明るく振る舞っている事。由衣の話し方は小さなエピソードを交えながらのひどく寄り道の多いものだった。詩緒が両親と会えない寂しさを漏らしたという話から、一緒にカラオケに行った話に流れていく。それはすでに本筋とは全く関係がなくなっていたが、金田は我慢強く聞いていた。元々の話とは関係なくとも、彼には益田がリアルに感じられる出来事だったのだ。

「だから、最近はあるまり遊んでくれないんだよね」

話は詩緒が矢島海里に弟子入りした事に及んでいた。金田自身は、その画家の名を聞いた事が無かった。顔や作品が思い浮かばない人物について話されると、靖志はなぜだか腹立たしい気がした。

「でもさ、詩緒は嬉しいみたいだよ。居場所があるってことなんだろうね。詩緒は両親のこと、好きなんだけど、やっぱり誰もいない家にいるのって寂しいじゃない」

由衣の話は取留めが無かった。いつまでも拡大しそうな会話に、始業のチャイムが終止符を打ってくれた。

教室に分かれて戻ってみると、詩緒は由衣にどこに行っていたのか問いかけていた。

「ごめんごめん、ちょっと先生に用事頼まれちゃって」

見え透いた嘘ではあったが、益田は何も言わなかった。

放課後、益田は急いで席を立った。由衣への挨拶もそこそこに、カバンを手にして走り出す。靖志はそれを横目で見ながら、由衣に話しかけた。

「どげんしたとか？」

「時間が惜しいのよ。いつもそう。作品が完成しそうになるといつも慌ただしいんだから」

それを聞いて靖志も教室を出ようとする。すると、声がかかった。

「おい靖志、今日こそ気合い入れていこうぜ」

仲間からの誘いだった。

「すまん、俺、風邪気味やけん」

「マジか？ そげん言ったら昼も保健室行きよったな。早よ帰れば良かったのに」

額に手を当てようとする彼を振りほどき、靖志はドアへ向かっていった。

「おいおい」

「悪かばってん、お前に移るといかんけん」

そう言って駆け出していった。

「大丈夫か？ 風邪引いとるとにあげん走ってから」

仲間は呆然と彼を見送っている。その姿を、由衣は笑いながら眺めていた。

教室を出た靖志は、急いではいても自転車置き場に留まっていた。益田は歩きだ。今から出てもすぐに追いついてしまう。少し間を置いた靖志は、思い直してその場を発った。自転車を押していけば済む話だ。

筑後川のゆったりとした眺めを左手に見ながら、靖志は自分の行動について考えてみた。何をやっているのだろう。これではまるでストーカーじゃないか、と。一度冷静になってみると恥ずかしくなってくる。果たしてここまで自分を突き動かすものは何なのだ。今までの自分は、絵画になんて興味を持たなかったはずだ。

今になって、靖志は自分の目が絵画に向いているのか益田に向いているのか分からなくなってきた。

回想してみる。

彼が一番に見たものは何だったか。

ほぼ三つの色彩のみで構成された独特の絵画か。

それともその画面を悲しげに見つめる真剣な表情の彼女だったのか。

靖志は土手で絵を描いている人物に気付いた。近付き、それが誰であるかを確認しようとした。

今も彼はそうしようとしている。

過去と現在が頭の中で入り雑じる。

一度、全てをリセットしてみようと考えた。

初めて見る、絵を描く風景。それに不思議さを覚えて、もっと近くへもつと近くへと。

段々とはつきりして来る。彼女とカンバス。

土手の緑と空の青との間に彼女はいる。

靖志の視線が、ふ、と動く。

彼の目は、彼女の目を追っている。

そう、そこで初めて、彼は画面を見た。

そして、一気にそこに引き込まれたのだ。

だが、その印象は絵によってのみ起こされたものではなかった。

彼女の愁いを帯びた眼差しが、すでに第一印象として靖志の記憶に刻み込まれていたのだ。

今この瞬間も、靖志は詩緒の表情を眺めていた。

楽しそうでもあり、残念そうでもある。

それは恐らく、中田が言ったように作品が完成に近付いているからだろう。

同時に、悲しそうに目を伏せている。

睫毛が濡れているかのように重く感じられる。

ふつとそこから空気が消えていく。

途端に靖志は息苦しくなる。

ああ、この気持ちだ、と彼は思う。

導かれてその視線を追っていく。

絵がある。

初めて見た頃とは比べ物にならないくらい、鮮やかで牧歌的な景色だ。

ただ見ただけでは、のんびりとした家族の肖像に思える。

靖志は違った。

彼はもう詩緒の絵に対する思いに共感するだけの下地を持っている。

絵が美しく、鮮やかであればあるほど、悲しく思えた。

この絵は彼女にとって、永遠に色褪せない思い出なのだ。

色褪せないという事が、途方も無く悲しい。

靖志は思った。

自分は今に生きているのだろうか、過去に生きているのだろうか。

時間の感覚が曖昧になり、この数日間が大挙して押し寄せて来る。それは行軍のようで、どこまでも響く大きな地鳴りを供にして、靖志の胸を鳴らすのだ。

「あ、」

声をかけようとして戸惑った。

どんな台詞を選んだら良いのか。

この前の汚点を雪ぐような一言が欲しかった。

そう思い、しかし結局は靖志の心はまっすぐでいた。

素直に思った通りのことを言ったのだ。

「あ、楽しそうだな」

声は頼りなく漂い、詩緒の耳に届いた。

それでも、彼女が振り返る事は無かった。

靖志は二の句が継げずにいた。この前の言葉がよほど彼女に堪えているのだろうか。筆はパステルの粉を払い、塗り付け、色彩を調整していった。靖志の目にはほとんど分からない、極微細の調整だった。理論ではなく、感覚でしかない世界、だが作家に求められる一番肝要な部分でもあった。

五分、その間、詩緒は画面に集中した。靖志も益田の細い指がパステルに触れている様を凝視していた。応えなど無くても良かった。自分が今、一つの作品の完成に立ち会っているのだと思うと、不思議と心地よい気分だった。

詩緒は雲に筆を入れ、ぼかし具合を調整した。

そして、「うん」と頷いた。

完成なのだ、と靖志も一人、頷いた。

ふわりと詩緒の髪がなびいた。

急な動きに彼は動けずにいた。

振り向き、詩緒が靖志の瞳に焦点を合わせる。

「ずっと見とつてくれたっちゃん」

彼女が初めて靖志に見せた笑顔だった。

由衣に接する時と同じような屈託の無い破顔を、彼女は見せてく

れた。

それは背後にある絵から飛び出したかのような幼い笑みだった。

「お、おう」

それだけが靖志の精一杯だった。

詩緒は再びカンバスを振り向くと、それをケースにいれ、片付けを始めた。手慣れた様子で着々と進む行動の間、靖志は何も出来ずにただ照れ笑いだけを浮かべていた。

次に靖志が気を取り直した時には、すでに詩緒の姿は無かった。それに気付いて、靖志の胸は急に熱くなった。恥ずかしかったのだ。

意味も無く周囲を見回し、自転車に乗る。

だがすぐに降りてしまう。このまま漕いで行けば、益田に追いついてしまうと思ったからだ。

乗り、降り、少し自転車を押し、また乗ろうとする。全く行動に一貫性がなかった。

その姿を見て、小学生がくすくすと笑いながら通り過ぎていく。

頭の中は二つのイメージしか収納していなかった。

一つはあの絵。

もう一つは詩緒の笑顔。

今ようやく、靖志は自分が益田の事を好きなのだと気付いた。

それが初めからだったのか、ずっと前からだったのか、たった今からなのかは分からない。

はつきりとしているのは、彼女についてできる限りの事を知りたいという衝動が抑えられない、という事だけだ。

それ以後の彼の行動は非常に間接的だった。学校で詩緒に会っても、挨拶も出来なかった。彼女の方では気軽に手を挙げるのだが、会釈をする程度で済ませてしまう。この前までは軽口が叩けていたのに、今では顔を見る事すら恥ずかしく感じる。

放課後の彼も変わった。遊びはそこそこに、彼は図書館に通う日々を暮らしていた。

そこで絵に関する情報を集めているのだ。

今更ながら、自分が絵に対して何の素養も無いのだと思い知らされる。

「クレヨンじゃなかとか」

画材について調べていて、ようやく勘違いに気付く。

「色付きチヨーク、ち思うて良かつかな」

それでもパステルの感触はつかめずにいた。詩緒の作業の記憶から、ぼんやりとしたいいくつかの事が分かったただけだ。

それはたくさん色があるということ。どうやら混ぜる事は出来ないらしいこと。そしてただ塗るだけじゃなく、擦ったり拭いたり、色々な手法があるらしいこと。

他にもたくさん画材があることも知った。彼が知っているのは油彩と水彩、クレヨンくらいのものだった。他にも日本画を描くための顔料やアクリル絵の具、マーカーなども絵の道具として使われるのだということも分かった。

「芸術っちいうのは、油絵だけじゃなかとやね」

展覧会など一回も見に行ったことが無かった彼は、休日に福岡市美術館に足を運びもした。

大濠公園内の施設に足を踏み入れる。表ではウサギの彫刻が出迎えてくれた。バリー・フラナガンの「三日月と鐘の上を跳ぶ野うさぎ」だ。靖志はタイトルを見ることも無く作品を一瞥して入口に向かった。大抵の人間と同じように、彼は建物の中に飾ってあるものこそが美術品で、それ以外はそうでないと思っていた。彼はパブリックアートという考え方を知らなかった。その、美術を親しみやすく、世界に溶け込ませようとする素晴らしい試みについて、まだ何も知らなかった。

一階から入るとすぐに図書館のようなスペースがある。右手には案内がある。そこには女性が二人座っていて、彼と目が合うと微笑んで「いらっしやいませ」と言った。

「あの、絵を見たいんですけど」

「どう言っていいかわからず、漠然と質問する。」

「こちらは初めてですか？」

素直に頷く。

「当美術館には常設展と企画展とございます。現在の所、企画展は行われていませんので、常設展のみのご案内となりますが宜しいでしょうか」

わけが分からなかったが、とりあえず頷いた。

「常設展は二カ所ございまして、一階が古美術、二階が近現代の作品を展示しております。チケットを買われますと、どちらもご覧になれます。古美術はそちらの右手奥、近現代は二階のショップの先にご覧いただけます」

早口の案内嬢が言うには、どうやらチケットさえ買えば全部の作品が見られるようだった。靖志はすぐにチケットを購入し、まずは

古美術のスペースに行ったが、そこは仏像や皿など、およそ絵とは関係のなさそうなものばかりが並んでいた。

「美術館うち、絵ば展示するだけっちゃんかどね」

独白する靖志を、隣の老人が訝しげに見ていた。

ただ、初めて間近で見る巨大な仏像は、それはそれなりに見応えがあった。

靖志はもう一つの常設展示を見るために二階への階段を上る。すぐ左手にショップが見えた。所狭しと模造画や絵画に関する本が並べられている。何となく入ってみると、書店や図書館でも見たことが無いような本が並んでいた。専門書らしく一冊一冊は高い。だが、その中に矢島海里の個展図録を見つけた。

「矢島海里 生命の体験展」

そう銘打たれた、定価三千円の冊子だった。

「益田の師匠やったっけ」

中田由衣の言葉を思い出し、なけなしの金をはたいて購入する。恰幅の良いおばちゃんがこやかに応対してくれた。

ショップを出て奥へ向かうと、カウンターがあった。その手前には巨大な相撲取りの彫刻があったが、何だか怖くて素通りする。カウンターでチケットを渡し、中に入っていく。角の所では藍色をした大きな半球があった。アニッシュ・カプーアの「虚ろなる母」だった。ファイバーグラスで作られているというその作品は、中が割り貫かれている。それが何を表現するのか靖志には分からなかったが、その色味は吸い込まれるような深さだった。

角を曲がると、目の前に鉛で出来た飛行機が見える。アンゼルム・キーファアの「メランコリア」だ。埃がたまり、掃除もしていないような汚い彫刻だ、と靖志は思う。もちろんそれが主眼なのだが。ただ、靖志はそのまま通り過ぎようとしてできなかった。どこことなく、立ち去ることを許さない気迫が感じられた。もっと詳細に見て、何かを感じたいと思った。もし彼がデューラーについて少しでも知っていたら、キーファアの飛行機の片翼に乗せてある立体との共通

について思い至っただろう。そこから連想される憂鬱が、彼に無限のイメージの広がりをもたらしたはずだ。残念ながらまだ靖志にはそれほど知識はなかった。

近現代の展示は正面に大作を持って来ていた。縦三メートル大の縦長の画面だ。そこにはどこともつかない不思議な場所が描かれていた。荒野とも言えるし、海岸とも言える。山であるか崖であるか、とにかくそれは浮いていた。中央には瞑想する女性が描かれているが、彼女は胸に穴が開いていた。真四角に、深々と。そこに、赤ん坊が座っているのだ。しかしまた彼も胸に穴を持っている。その真ん中にはフランスパンが浮いていた。彼らは祭壇のようなものの上に祀られていた。そのため、靖志はそれらをキリストとマリアだと解釈した。彼はサルバドル・ダリの生涯について、何ら予備知識を持たなかった。そのため、マリアの部分を見て、「ずいぶんと肉感的だな」と感じただけだった。祭壇には、花や魚、麦や貝殻などが置かれていた。もしくは生贄なのだろうか、とも考える。彼らの胸に穴が開いていたからだ。

靖志は圧倒され、しばらくその画面に気を取られていた。腹の底から寒気のようなものが浮き上がって来る。歯が二度、カタカタ鳴った。

一分後に、ようやくプレートを見ることができた。そこには「サルバドル・ダリ／ポルトリガトの聖母」と描いてあった。見れば見るほど繊細で、絵の具で描いてあるとは思えなかった。筆の跡など微塵も見えない。

「これが、本物の絵、か」

今まで一度も見ることが無かった。それを勿体ないと感じる。次の絵に進んだ靖志は、そこでもまた惚けたように眺めてばかりいた。写真で見るよりも繊細で、迫力がある。色も鮮やかで蠢いているようだった。

本物しか持たない何かを、本物は持っているようだった。だが、それが何なのか、靖志にはつかめない。ただ、すごい、とそう思っ

ただけである。

やがてコの字型に通路は進んでいき、また元の入口まで戻って来
ていた。そこでも彼は、江上計太の「Psychedelic B
arroquism No. 7」に共感を覚えた。

「これも、絵か」

ミクストメディアであるこの作品は、基本的に合板を繋げ、アク
リルで幾何学的に彩色することで成り立っていた。カンバスに描か
れるそれとは違い、現に立体的で、軽やかな印象を受ける。迫っ
て来るのではなく、優しい華がそこに咲いているかのような思いを
靖志の胸に残したのだった。

それにしても、一口に絵画と言っても色々あるものだ。靖志は
思う。ダリのように完全にフラットな絵もあれば、途中にあったル
チオ・フォンタナの「空間概念」のようにカンバスに切り込みを入
れてあるものもある。また、江上計太のように立体とも言える平面
を描く画家もいれば、白髪一雄のようにアクションペインティング
もある。

そこで思うのは、なぜ益田が数ある表現方法の中からあの寂しげ
な絵を選んだか、ということだった。中田が言っていた、益田の家
庭事情もあるのだろうが、果たしてそれだけなのだろうか。

靖志は帰りに近くの文房具屋に行つて、いくつかの道具を買った。
益田がやっていたことと同じことをやれば、何か分かるかもしれない
と考えたからだ。必要なのは、カンバスと画材だった。

彼は乏しい知識を総動員して、どんなものを買ったら良いか探つ
た。店員に聞くとうとはしなかった。何だか気恥ずかしかったのだ。

まずはパステルだ。益田と同じメーカーを選んだ。遠目ではパッ
ケージしか分からなかったが、レンブラントと書いてある。

二十四色は多いようにも感じたが、以前に調べた通り、パステル
での混色が困難であるのなら、少ないくらいだ。それなのにこの色
数を選んだのは、ひとえに金銭的問題からだった。バイトもしてい
ない靖志には、この出費は痛い。同様の理由でイーゼルも買えな

った。代わりに画板を買う。それで十分だ。

益田は、塗りつけたパステルを筆でこすっていた。店内を見てみると、パステル用のブラシがある。靖志はそれを一本手に取った。後は紙である。カンバスは高かった。益田が使っていたのと同じくらいのサイズは、残った予算では手が届かない。そこで、画用紙を何枚か買うことにした。これなら一枚数十円で済む。

靖志はそれらを持ってすぐに土手へと向かった。幸いと言おうか、残念ながらと言おうか、益田は居なかった。あえて彼女が居た場所から離れた所に陣取ったせいもある。そこで座り込み、膝に画板を乗せてモチーフを探した。

まずは風景から描くべきだと考えていた。単純に、人物画は難しいと思った。靖志は益田を真似てまずはおおざっぱな形を作ろうとした。ところがこれが難しい。なかなか見ているものと描いているものの量感が一致しない。大きさがデフォルメされない。そうすると正確な写生はできなくなる。いきなりパステルを使うとするからだめなのだろうか。そう思って鉛筆で下書きをしようとしたが、それも上手くいかない。何度も何度も描き直して、ようやくコツがつかめそうな気がした頃にはもう陽が落ちていた。

靖志は、次の日も次の日も同じ場所で絵を描いた。ただ、それは描いたと言うよりも画用紙に色を乗せていたと言うべきだろう。形にならない絵を、靖志は何とか形にしようともがいていた。

彼の場合、動機が絵とは関係のないところにあつたため、気持ち画面に向いていかない。靖志は間違えていたのだ。初心者がパステルに手を出すのは、非常に難しかった。何しろ靖志は授業以外で絵というものに関わったことが全くなかったのだ。

ほかし方や色の重ね方はもちろん、彼はどこから塗るべきか、またはどのように形態を取ったらいいのかすら分からなかった。見ているものと描いたもののあまりの違いに愕然とした。それは現実はもちろん、脳内の映像とも異なっていた。

自分の手がそのようなものを描き出したことに、靖志は首をひね

る。なぜ、思つた通りのものが描けないのだろう。

彼は誰もが通るが、最も難しい場所に、留まっていた。

ふと思いついて、土手を一周してみる。彼の目は益田を探していた。しかし、どこに行つても顔は見当たらない。

靖志は草むらに座り込み、呆然と景色を眺めていた。道具は脇に置き、ただただその光景が目に入るに任せる。そうしていると、時間の動きがよく分かるのだ。刻々と変わる空気の色、風の流れ、人々の笑い声、それらが靖志の頭の中に移り込んで来る。

一時間もの間そうしていた靖志が、つと手を横にやる。触れたのはパステルの箱だった。

九

田中家のノブに、鍵を差し込む。詩緒は誰もいない家に上がって、一つ、呼吸をした。

恭二と洋子が湯布院に旅立って、二日が過ぎていた。その間、彼女が田中家に来なかったのには、二つの理由があった。

一つは描きかけの絵が残っていたから。今の季節を描くには、後回しには出来ないと思ったのだ。思ったよりも時間がかかったため、寄ることが出来なかった。

もう一つにはやはり気後れしていたのだろう。二人がいない間に家に入ること、この家にこの期間に入ることが大作を仕上げることを意味することの二つが、躊躇させていた。

自由にアトリエを使えるのは一週間だけだった。すでに二日過ぎているため、残りは五日になる。詩緒はその期間に全てが終わると思っていなかった。まだ構想は臆げで、どんな画面にするか、画材は何を使うかすら決まっていなかった。

「とにかく、アトリエに入らんとどげんもならんね」

独白して詩緒はノブを回す。彼らが行って以来、一度も入らなかった場所だが、意外なことに整理されていた。

「奥さんがしたつちやろうね。センセイが直すわけなけん」

約三年の付き合いで、詩緒は恭二の性格を良く知っていた。洋子の性格も。恭二は常に突き進み、洋子はそれを追い、支えていた。決して前に出ない洋子を、詩緒は理想の母親像に思っていた。

「奥さんのごつはなれんやろうね、私は。あん人はいつ寝よるとやろうか」

そう思うほど洋子は甲斐甲斐しく恭二の側にいる。かといって制

作中には一切関わって来ないのだ。

「ほんなこつ、奥さんも絵ば描けば良かとに」

独り言の間にも道具を準備する。とりあえずホルベインの大型イーゼルを部屋の中央に持つて来る。そこに、恭二が用意してくれた百号のカンバスを立てかける。上下からしつかりと挟み、自分の身長に合わせて調節し、傾ける。

「センセイもこげん良かイーゼルば持つとつとに使わんとやけんねえ。勿体なかよ」

そのイーゼルは、彼が詩緒と洋子に「薄明のとき」を公開した際に使用したものだった。

詩緒はカンバスを横にして使うつもりだった。これもまた、「薄明のとき」と同じだった。つまり、彼女は恭二の影響を全面に受けた作品を作ろうと思っていたのだ。

「さて、次は、と」

そう言いながら、彼女はもう一台のイーゼルを持つて来る。そこに、壁際から作品を持つて来て、立てかけた。

「薄明のとき」だった。

並列である二つのカンバスを、彼女はじつと眺めた。片方の印象が強すぎて、白い画面には何の映像も映って来ない。画面の大きさを先に決めてから描くのは初めての経験だった。普通の制作法と異なった手順に、詩緒は心をどのように持つて行っているのか戸惑っていた。

まず、彼女は眦を数度運動し、最後に緩やかな位置で安定させる。顔面の筋肉が弛緩し、次いで大きな呼吸が起きる。自然に胸が張る。腕を大きく伸ばす。足先がピンと突き上がる。全身を枠から飛び出させる。彼女という作品は描かれたものではない。生きた人間としての活動を行いたいと思っていた。彼女はここで、家族の思い出を描くつもりは無かった。捨てたつもりも無い。しかし、この画面に臨むとき、具体的で具象的なものではなく、自らの心に宿る思いを全力でぶつけたいと思ったのだ。

そんな心持ちになったのは、金田に出会ったからだだった。恭二以外の人間にじっくりと作品を見てもらったのは、実は初めてのことだった。彼女はずっと独学で学んで来た。親友の由衣にすら、まともにも作品を見せたことは無かった。というよりは、由衣が絵画に明るくないため、すぐに飽きてしまうのだ。

それがあの金田は、作品の当初からその完成までを仔細に眺めてくれた。難癖ではあれど、感想もつけてくれた。そのことが嬉しかったのだ。

人に作品を見てもらうということが、心地良いものだと思えて感じた。その感触が、詩緒の心を内なるものから外側へと向けさせた。最初に考えていた大作の構想はこうだった。三人の家族が手をつないで大きな夕日に向かって歩いていく場面だった。影は長く、ひたすらに長く描くつもりだった。そんな作品をぼんやりと思っていたのだ。それが、この経験によってゼロになった。何も無い、ただ真っ白な状態からのスタートに、詩緒は恐怖を抱いていなかった。時間も無く、アイデアすら無いのに、何となく上手くいく気がしたのだ。

そのきっかけを作った靖志は、自宅で画集を眺めていた。

「矢島海里 生命の体験展」だった。

インスタレーションを中心として、生命シリーズを展示するものだった。詩緒が見に行ったあの展覧会だ。

「変な絵、ばっかりっちゃね」

靖志の第一印象はこうだった。

どれを見ても、様々な色をした球が配置してある。景色はとてもリアルなのに、そこだけが現実離れをしていて、違和感がある。靖志はその絵に居心地の悪さを覚えた。

同時に、インスタレーションの写真についてもちよつと変わった公園、程度にしか感じられず、詩緒が受け取ったような感動は得られなかった。

靖志は仔細に眺めることなく、ページを捲っていった。同じよう

な作品が続く。作品には一つ一つ解説がついていたが、それを読む気にはとてもなれなかった。恭二の作品は、靖志にとっては退屈だった。

それは、彼が恵まれていたからかもしれない。一生懸命に誰かを愛したことが無いからかもしれない。

「そうだ」

靖志は思いついて居間にあるパソコンを立ち上げる。ほどなくして表示した画面に、矢島海里、と打ち込んだ。画像検索で、他の作品を見ようと思ったのだ。

「あれ？」

しかし、ネットで見ることのできる作品は、どれも生命シリーズの模写ばかりだった。一万五千件の検索結果の中に、その他の作品が見つかった。画像は小さく、その詳細を判別することは難しい。だが、靖志はそれが涙を流す月の絵だと理解することが出来た。

「何ちゅうタイトルやろう」

クリックしてみると「月の隙間」とある。何かの賞を取った作品だという解説があったが、靖志はそれをよく見ずに作品名で検索をかけた。

数件が引がかかったが、どれも関係のない画像だった。

溜め息をついて靖志はソファに寝転がる。

「見る方法はあるっちゃけどな」

それを試すのは躊躇われた。簡単なことのように思えるが、その一歩を踏み出す自信が無い。

目を閉じて考え込む。自分が一歩を踏み出した時の結果をシミュレートする。何度やっても良い答えは出なかった。

十

一時間が過ぎても頭の中に何も浮かんでないことに、詩緒は苛立って来ていた。いつもならば思い出が自分の中に甦って来て、そこからの連想で作品を描き始めることが出来た。または、その時の気分から導きだすことが出来た。だが、この時点で詩緒はそれらの方法論を全て捨てていたため、焦りだけが全身を震わせていた。

「とにかく、モチーフは目の前にあるとやけんね」

そう言って再び「薄明のとき」を見つめる。

改めて、不思議な作品だ。地塗りから月と太陽が浮き出るように描かれている。タッチがまざまざと残る描き方は、どこことなくゴッホに似ていた。そう言くと、恭二は怒るだろうが。

深い青の地に薄く重ねた月は、それが透けてくすみを残していた。だが、この作品ではそれが効果として現れている。それもただ重ねただけではない。タッチを残した上で何度も塗り重ねたため、月の表面はクレーターのように凸凹としていた。それは太陽についても同じことだ。やや離れた場所にある円は、暖色系の絵の具が何層にも塗り重ねられている。ところがどれも一見雑に塗っており、刺々しい表面が浮かんで見えるのだ。詩緒は太陽が沸いているようだと感じる。プロミネンスが噴き出し、薄明の空を侵すようにも思えた。双方は同じ程度の大きさに描かれているが、これもあり得ないことだ。記号としてのモチーフは、たくさんの何かを託されていた。その全ての表現を、詩緒は感じ取ることができるだろうかと不安に思う。そこには眩しさや神々しさ、不可思議さや懐かしさとともに、憂鬱や怒り、憎悪すら込められていた。そう考えるのは、自分が恭二と共にいたからなのだろう。それでも、詩緒はそう受け取らざる

を得ない。改めて詳細に見て行き、詩緒は「薄明のとき」を初めて怖いと思った。

ここには恭二の感情の全てが込められていた。それは同時に、敬一郎に関する全てがここに封じ込められていることと同義だ。

つまり、恭二はここに敬一郎を葬ったのだ。

詩緒がそのことに思い当たり、背筋を寒くしていると、どこから声が聞こえた。

「動きが無いと、退屈だね」

「え？」

詩緒は意外なところから声がしたことに驚いていた。それは他ならない自分の頭の中からののだ。いや、それすら違う。ごく近くにある、何かから発せられているのだ。

「誰？ どこにおると？」

詩緒はいつものように大きな声で叫んだ。それはアトリ工中に響き、幽かに反射してもう一人の誰かのように声を返してきた。

「誰？ どこにおると？」

残響は詩緒の声で、詩緒と同じように語る。一瞬、先程の覚えの無い声は自分が発したのかと思ったが、それともまた違った。それは確実に彼女の意志ではなく、誰かの意識によって遣わされたものだった。

「あれ、詩緒？」

それは幼い少年の声音をしていた。

優しくて壊れそうな響きを持っていた。

詩緒は自分に流れるその音を寒気として受け取っていた。

「何で私のことば知つとると？ あんたは誰ね？」

声はあっけらかんとして答える。

「敬一郎だよ、田中敬一郎。詩緒のことは、お父さんの弟子になりに来たときから見てたんだ。例えば、君がついこの前、彼氏と出会ったことも知っている」

一瞬、詩緒は何のことか分からなかった。時期のキーワードを突

き詰めて、初めてそれが金田のことなのだと分かった。と、その瞬間に顔が湯を沸かしたように熱くなってしまった。

「あれはそげんとやなかよ」

「そうかな？ 僕にはお似合いのように見えたけど」

そう言われて黙り込んでしまう。詩緒は思った。ゼロ歳児のくせに。だが一方でもう一つの思いにも囚われるのだ。なぜ、彼がこのように話し、考え、振る舞うことができているのか。その問いを素直にぶつけると、敬一郎はこう返答する。

「簡単なことだよ。僕は田中敬一郎であってその単一じゃない。すべてが一つになる世界で、僕なりの形を崩さずに、僕として存在しているだけさ」

この、答えであって答えでない話し方は、矢島海里のそれだった。しかし本人は気づくことなく、詩緒の反応を待っている。対して詩緒は、それが哲学的な命題であることは分かったものの、その意味するところは全く理解できずにいた。まず第一に敬一郎、享年ゼロ歳がそういった命題を発すること自体に戸惑っていたし、疑ってもいたのだ。果たしてこれは敬一郎そのものなのだろうか。例えば、そう、宗教的な物語で言う「悪魔」なのではないだろうか。

「ばってん、あんたが田中敬一郎うちうことを、どげんやって証明してくるっ？」

詩緒のこの問いかけは、敬一郎を困らせた。彼はあくまで刷り込まれた言葉を話したただけであつて、その答えや応用を意識してはいなかったからだ。

「えっと、どうしたら良いんだろう?」

剽軽な返答に詩緒が吹き出す。

「何ね、分からんで話しよったとね」

「まあ、死んだのゼロ歳だしね」

都合の良いときだけ幼さを主張するこの人物に、詩緒は好感を持った。元が楽天家でもある彼女は、それだけで彼を信用しても良いように思つたのだ。それに彼が敬一郎であろうとそうでなかりうと何だというのだろう。それによつて死が誘われるわけではないし、どう説明があろうと彼の言葉の真実を証明するものはないのだ。そしてまた、彼女自身の正当性を確約できるものでもないのだから。

「良かよ、信用しちやるけん。何か不思議かばってん、あんたは敬一郎で、ゼロ歳やけど大人んごつ喋れるったい」

「そう思つてくれて良いよ。良かった、どうしようかと思つたよ。それにしても、何で話すことができるんだろうね」

「さつき、敬一郎はずつと見とつたつち言つたね。どげんやつとると?」

目の前にいない彼がどこにいて、どうやっているのかは、ずっと気になつていた問題だつた。もしそれが自分特有の事象でなければ、恭二と洋子に話したいのだ。

「僕は、月にいるよ。死んだものとまだ生まれる前のものが住む場所、黄泉、あの世つて君たちは言うね」

その「君たち」の響きには、生者と死者を分かつものがあつた。「月? 黄泉、あの世……じゃあ、やっぱり君は死んどるったい」

詩緒は最初の望みを捨てた。彼の死から三年近くが経っている。

実は生きている、という選択肢への期待は軽いものだったし、現実味が薄かった。

「もちろんだよ。で、そこは真っ白な世界で全てのものが一つであって分かれていて、果てしないようで実は小さくて、でも大きくて……とにかくすごいんだ。それでね、僕がそう望めば地球が出てきて、その世界のどんな部分でもいつでも見ることができるとだよ」

興奮して話す敬一郎の、話半分は理解できなかった。とにかく順序だつてないし、整理もされていない。何となく、常識の通用しない、とんでもないところだと解釈するしかなかった。一方で理解できたのは、彼の手元にはこの地球を見るモニターのようなものがあるって、それでいつでもどこでも見ることができると、ということだけだった。

「それやつたら、話すこともできるとね」

次の希望に詩緒は繋いだ。

「いや、できないはずだよ」

だが、それはあっさりと裏切られることになる。よく考えれば、それができるのであればこの世とあの世の垣根など無くなるはずだし、敬一郎もそうできるのなら早々にやっただろう。浅薄な自分を反省し、詩緒は次の話しに進む。

「ばってん、私とあんたは、こげんやって話せとろうもん。それやつたら、敬一郎のお父さんとお母さんに教えてやったら良かよ。そげんしたら、二人と喋れるやんね」

これが最後の希望だった。その世界での時間がどれだけ限られているか分からないにしても、ほんの少しでも団欒ができる可能性があるのなら、伝えてあげたいと詩緒は思っていたのだ。

しかし、敬一郎はそれすらも拒んだ。

「駄目だよ。お父さんに知らせることは出来ない。お父さんに伝える可能性があるという意味でお母さんに知らせることも出来ない」
「なんで？ せっかく話すこつができるのに」

詩緒が問いつめると、始め、彼は口を濁し、黙ったままだった。

それでも彼女が再度詰め寄ると、ようやくその理由を話す。

「僕は今、檻の中に閉じ込められているんだ」

「檻の中？　なんで？　誰に？」

疑問符ばかりの質問に、また敬一郎の口が重くなる。

「そこは、そげん所なんね」

詩緒は分からない相手の状況を少しでも知ろうと質問を重ねた。

この問題に彼は即答する。

「そうじゃないよ。普段ならここはとても良い所だ。退屈ではあるけどね。その分、たくさん考える時間がある。自分のことに集中できるって、実は幸せなことなんだよ」

また、彼は海里のような物言いで詩緒に伝えた。彼女はその意味を良い方向に捉えようとした。たぶん、彼は孤独で、しかしそれを悲観的には思っていない。そして、どうやら彼が師事する人間がいるような印象を受けた。でなければ、享年ゼロ歳児なのに知識が豊富すぎる。例えそれが黄泉という泉に溶け込んだ結果だとしても。「それじゃあ、何が問題で、君はそこに閉じ込められとつと？」

さらに一歩進んだ彼女に、敬一郎は下がること無く答えを返す。

「たぶん、僕が現世に復活しようとしたから」

その言葉に、詩緒は息を飲んだ。彼が何気なく言ったことは、大変な意味を含んでいた。

「戻れると？」

「分からない。でも、彼は戻れると断言したよ」

敬一郎が気も楽に答える。その一つ一つが、詩緒にとって新しい情報だった。

「どうやって？　それに、彼、って？」

一度に聞いたのが悪かったのか、敬一郎は黙ってしまった。

月と地球の、この遠い二つの世界で、長い沈黙が訪れる。

詩緒は考えていた。敬一郎が還って来るとは、どういうことなのだろうか。死んでから三年、肉体などとうに無くなっている彼の、どこにそんなチャンスが残っているのだろうか。

そして、そのチャンスを与えた「彼」とは、一体誰なのだろう。
疑問は尽きないが、想像もできない。答えは、今のところ敬一郎
しか知らないのだ。

詩緒は待った。

いつしか、心は「薄明のとき」に向いていた。あの世とこの世を
結んだ、この絵に。

遠く、近く、絵は揺らいでいる。

また、詩緒は周りを見回した。何かが聞こえた気がした。

「……りだよ」

「え？」

詩緒は立ち上がり、何度も首を回した。声は、もう一度はつきり
と言葉を紡いだ。

「閉じ込めたのは海里だよ。詩緒も良く知っているだろう？ あ
の、矢島海里のことだよ。まあ、お父さんとは違う海里なんだけど」

怒ったように、敬一郎は言った。

名前を聞いて、全てが一度に頭の中に入り込んで来たような感覚を覚えた。矢島海里という名称が恭二のことを指すのならば、彼が接触を拒んだのも分かる。彼は慕い一つも恐れているのだ。現世に復帰したくても、恭二がそれを許さない。その理由はよく分かる。

恭二は怖いのだ。敬一郎に対するあまりに複雑すぎる感情が、この二年間でようやく落ち着いて来た憎しみや悲しみ、それに沸き上がって来た希望が、再びあの時期のように乱れてしまうのが。

そこで、詩緒は「檻」という表現が気になった。

「敬一郎は、いつから檻に閉じ込められとるとね」
これについて、彼はすぐに返事をして来た。

「詩緒が今見ている、お父さんの作品が完成した時にだよ」

薄明のとき、詩緒は呟いた。絵は、何も語りかけてはくれなかった。ただ、飄然と、その場に居るだけだった。

全部が、詩緒の中で了解され、また不振となって現れた。

どこにいるか分からない敬一郎に向けて、詩緒は声を落とす。

「君は、この絵の中に閉じ込められとるんやね」

ポツリとした言葉が、敬一郎の脳裏に染み渡っていった。

「絵、に？」

「たぶん、そげんやと思うよ。先生は敬一郎のためにこの絵を描いたったい。それは君が死んだっちゅうことに区切りを付けるためでもあったとよ。だけん、この絵が完成したっちゅうことは、先生が君をひとまず現在から過去に移し替えたってことやない？ それや無かったら、先生は前に進めんかったとたい。結果的に、それが君にとっては閉じ込められることになったとやろうね」

詩緒の言葉を噛み締める敬一郎は、これまでの疑問が氷解する思いだった。つまり、敬一郎は現世から最も遠い所にいるのだ。そしてそこは永遠に固定された場所でもある。だからこそそれは檻とい

う表現がなされているのだ。詩緒は絵の中に、と言ったが、その実際は過去という隔絶された時間に他ならない。そうすると、敬一郎は永遠にこの檻から出ることはできないということになる。

「僕はどうしたら良いんだろう？」

この切実な問いかけに、詩緒は答える術を持たなかった。敬一郎の行動に関わらず、恭二は彼を拒否している。彼を檻から出す方法はただ一つだけだった。

だが、それを詩緒は伝えることができない。あまりにも残酷な答えだった。

「敬一郎、これから、話せるとね？」

「そんなことは分らないよ。僕にだって、何で詩緒と話することができるのか分らないんだから」

「それやったらしょんなかね。ばってん、もう一回は話したかやけど」

「僕も、そうしたいよ。ここは何しろ、退屈だからね」

何度か話す中で、詩緒は敬一郎に伝える方法が見つかるのではないかと思っていた。ショックを受けずに、彼が受け入れられる方法があるのではないかと思うのだ。

彼が檻から出る方法はたった一つ。

恭二が敬一郎を忘れてしまうこと、だった。

第三部

—

遠く、由布岳は恭二の眼前に聳える。

遠近がおかしくなるくらいに間近に感じるその山を見るのも三日目だ。

「今日はどこに行くと？」

洋子が助手席から話しかける。宿を出て、駅方面に向かう。洋子が問題にしているのはその後の行く先だった。

「ちよつと離れんか」

一瞬、洋子は彼の言っている意味が分からなかった。しばらく考えてからようやく、この二日間見て回った湯の坪街道から離れてみよう、という意味であることに気付く。

車はアフリカンサファリの方向に山を登って行く。十分ほどで左手にハーブワールドの看板が見えて来た。

「恭二さん、そげな趣味、あつたやろうか？」

独白しながら洋子が車を降りると、恭二は既に扉に手をかけていた。慌てて追いかけた時には恭二の姿は見えなくなっていた。

時期的に客の多そうな印象だったが、平日だからか人の数はまばらにしか見えない。右手には地産の土産物、左手にはハーブガーデン入園の受付とハーブ関係のショップが広がっていた。

恭二はそれらを見るでもなしに見ている。ふわふわと視線が漂っている。洋子は苛立っている自分を感じていた。

湯布院に来てからの二日間、恭二はロールケーキを買いに行った

り、足湯に浸かって回ったり、煎餅を食べ比べたりと普段やらないことばかりをやっていた。その際の恭二が口癖のように言っていたのが「洋子、お前はどげんするとや？」だった。

今も彼は入園料を払い、先にハーブ園の中に入っていく。洋子はその後について行きながら、納得できないものを胸に残している。欧米風の庭園を模した園は、どことなく寂しげな雰囲気を持っていた。二人とも、ハーブに関する知識はほとんどない。ただ眺め、匂いをたまに嗅ぐ。どこかで嗅いだことのある香りが鼻を突く。だがそれだけだった。恭二にとって、それは想像を刺激するものではなかった。

言葉少なげに二人は温室の中に入っていく。目に入ったのは長大なバナナの木だった。身長三倍はありそうなバナナは、甘い香りがするようだった。

「すごかね」

洋子が呟く。恭二が口を開け放したまま頷いた。向こうにはパイヤも生えている。蒸し暑いくらいの室内で、南国の臭気とエネルギーに包まれていた。

「沖縄に行くとも良かね」

恭二がそんな風に言った。隣で洋子は首を傾げていた。車に戻った恭二と洋子は町に下り、金鱗湖へと向かった。不思議なことに、今回の旅行でここへ来るのは初めてだった。

「へえ」

洋子は少し、溜飲の下がる思いがした。

湖の横にあるコインパークに車を停める。すでに昼近いからか、畔は人垣で満たされていた。その隙間から見えるのは、吹き抜ける風に漣を立てる光の網だった。ハーブを奏でるように揺れ動く湖面は、無数の菱形が浮き出ている。その煌めきの中には、太陽のものだけでなく、フラッシュも多数混じっていた。

恭二と洋子は、人垣を縫って黒い建物の方へ向かう。三角屋根のシックな造りをした、美術館だった。洋子は、一人納得する。今までの恭二の行動は全て、頭を切り替えるためにやっていたのか。おかしいと思ったのだ。あの美術マニアがこの楽園に来て一度も観覧しないなんて。

そう思っていると、彼は目指す「マルク・シャガールゆいん金鱗湖美術館」に併設されているカフェの扉をくぐる。まだ洋子は希望を持っていた。どうせ中で繋がっているのだ。近い方を選んだだけだろう。

だが、彼はテラスに向かい、アイスコーヒーを二つ、と勝手に人の分まで注文をして椅子に座ってしまった。

五分後、斜めに傾いた菱形のグラスが目の前に置かれる。その間、二人は一言も口を利かなかった。

ストローでコーヒーを啜っていた恭二は、それが空になるのを見て洋子に言った。

「洋子、どげんやったか」

また、恭二が聞いた。その言葉に洋子が目を剥く。

「なんば言いよると」

すると、急に目を伏せて、彼は何事かを口籠った。

「なんち言つたとね」

いつになく洋子に迫力がある。彼女の視線は恭二を捉えて離さない。目を伏せたままの彼はそれが鬱陶しいようで、口を嚙む。

洋子は続けて話す。

「変っち思うとつたとよね。湯布院に来てからいつちよん美術館に行かんやない。なんば遠慮しよると？」

「そげんこつなか」

「そげんこつなかわけなかつてもん。こつちに来てから、恭二さ

ん、私に気ば遣いよるごたる。私が美術に詳しくなかけんね。ここには恭二さんの元氣ば付けるために来たよ？ そげんことでどげんするとね」

また、恭二は黙ってしまふ。唇を噛み締めて、何かを我慢している。

「何ね、どげんしたと？ 恭二さんらしくなかな？」

ほんの少しの間が開いた。彼は目を逸らしたままで話した。

「俺は気付いたとたい。見てん、この景色ば。綺麗かもん」

言われて湖に目をやると、霧がうつすらと浮き上がり、山からの風に吹かれてヴェールを引いていた。この土地の縮図のようだった。恭二は湖面の先に、何かを見ているようだ。

「この景色が美術っちゃんなか。動かすこともできん、本物の芸術じゃなか？」

更に恭二は言った。

「それに、お前と過ぐすこん瞬間が芸術っち思わんか？」

洋子の手を握る。グラスの中の氷が溶け落ちた。そして、洋子は首を横に振る。

「いっちょん思わんよ。恭二さん、頭が腐ったっちゃんなか？ そうじゃなかなら、なんば隠しとるとね。そげん恥ずかしかとね」

洋子は追及の手を緩めてはくれなかった。その言葉を聞いて、恭二は苦笑する。

「お前には敵わんとやなあ」

「何年一緒に居るっち思うとるとね」

洋子がようやく笑った。今度は彼女の方から握り返す。その力強さに押されて、彼は真実の口を開いた。

「ほんなこつは、恐かとよ」

「なんがね。恭二さんは克服したっちゃんもん。薄明のときは描いてから」

洋子はまだ覚えている。二年前のあの時を。家族がようやく痛手から立ち直るきっかけをつかんだあの日を。それからの恭二は詩緒

に触発されたこともあつてか、今まで以上の勢いで制作を続けていた。難しいことはよく分らないが、夫は立ち直ったのだと信じていた。

「あれは特別たい。むしろあれが出来良かったもんやけん、それから先が行けんことになった。先に行こうっち思うてから色々試したばつてん、いつちよんいかん。この二年間は、描けはするばつてん出来損ないばかりたい。益田の方がよっぽど成長しとる」

一気に吐き出して、恭二はテーブルを叩く。その音に、カフェ中の客が振り返った。洋子もまた、驚いていた。今までの恭二からは、そのような素振りは見えなかったからだ。

「恐い、つてなんがね？」

もう一度、洋子は聞いた。絞り出すように、恭二は応える。

「絵を見るとがよ」

周囲の注目も、二人には関係なかった。ざわついていた室内が静まり、声は良く通った。その上で恭二は言った。

「絵が恐か。彫刻が恐か。想像の持つエネルギーが恐か。俺が出来んこつば誰かがやつとることが恐か」

一息つき、最後の一言を口にする。

「洋子、俺は詩緒だっちゃ恐かとよ」

口元が震える。

恭二の頬が揺れる。

瞬きを一つすると、右目から涙がこぼれた。

洋子の唇もまた、震えていた。しかし、彼女は泣くことは無かった。溢れそうになる嗚咽を、噛み締めて殺す。

彼女は強くなっていた。自分の芯を見失うまいと頑張っていた。そうであるうと思っていた。思い込んでいた。踏み止まるのは、自分だ。自分が踏み止まらなないと恭二は前に進めない。

たった一言で良かった。彼は強い人間だ。彼は必ず自分で立ち上がる。ただ、そのきっかけを作れば良い。その役目を担えることが、恭二の妻である証だった。

「恐かことはなかよ」

ゆっくりと洋子は唇を動かす。意識して。口の筋肉が感じられる。「もう、恐かことやらなかなはずよ。敬一郎は失う以上の恐かことやらなかなやろう？」

意志に関係なく唇が震えた。それを必死で抑えようとして声が裏返る。それを聞いて恭二が顔を上げた。

「敬一郎……？」

「そうよ、敬一郎たい」

洋子が頷く。恭二は一度目を逸らし、それから瞳をまっすぐに向けた。そこには、先程までなかった「力」が宿っている。

また、恭二は黙ってチケットを買う。

二人分を払って二階へ上がる。階段の途中にも販売用の版画が飾ってある。

上りきると外光が射して来る。太陽に照らされて絵が輝く。美しい、と単純に思う。

「奇麗かね」

「ああ、美しい」

正面に、マルク・シャガールの「バラ色の花束」が見える。バラ色とは言え、実際にはピンクに近い色の花束がある。周囲に鳥や女

性の姿が見える。シャガール独特の量された色彩がふんわりと二人を包んで行く。眩しかった。大切に小さな欠片だった。そつと覗かないと逃げ出してしまいそうな、儚い命だった。

「絵にも、命があるんやな」

洋子も頷いた。

「そうなんやね」

夢の中にいるような表情で、恭二と洋子は版画を見て回る。大連作「サーカス」の一つ一つが、息吹として恭二の中に注ぎ込まれて行く。赤、青、緑、幻想的な色彩模様が画面を踊り、サイズを飛び出して眼前に迫る。恭二たちは一つの眼になった。ただそれは正しく美しい眼だ。

彼らは感情の趣くままに美術館を見て回った。まずは近くにある末田美術館に入る。ちよつと入り組んだ場所にあり、場所を間違える。清楚な佇まいのその館は、訪れる者の気を引き締める。

愛想の良い管理人が入館料七百元を受け取る。入口の正面には喫茶があり、右側で靴を脱いでギャラリースペースに入るようになっていた。入ってすぐに末田しおり氏の「メタモルフォーズ」が目に入る。ステンレス製の弁が多数重ねられており、それらは様々な色で塗られていた。羽化する蝶のようで面白いと恭二は思った。

その隣には末田龍介氏の「SOFT RING」があった。床に寝転んだ二つの柔らかい輪が、生き物のように絡み合っている。洋子はそれをソフトキャンディーのようだと思った。

他にもいくつかの作品を見て回る。恭二と洋子の見方は異なっていて、それぞれに楽しむことができている。美術館を出てから二人は感想を話し合う。ところが、どちらも正反対のことを言うものだから自然に笑みがこぼれてしまった。

「それにしても、一作一年がかりは大変だな」

恭二が漏らす。先程の管理人、末田しおり氏に話を聞いたのだ。大理石の切り出しは日本では行っておらず、わざわざ中国やアフリカまで行くというのだ。モニュメント的な作品は現地で制作し、切

り出しから数えると一年はかかる。恭二は中でも龍介氏の「MEMORY 1」に興味を持った。御影石をロケットのような、鐘楼のような形に切り出し、先の細い部分から横に線が入っている。彼はそれを年輪のようだと思った。さらに、彫刻の所々に穴が穿たれていた。綺麗な穴ではなく、まるで銃で撃たれたような痛々しいものだった。美術館にあるものは小さかったが、現地にある本物はかなりの大きさらしい。恭二はいずれその作品を見に行きたいと考えた。それが生命そのものを表しているように感じたのだ。

その後、二人はステンドグラス美術館に向かう。意図があるわけではなく、単純に近いからだった。彼らは湯布院にある美術館を全て制覇するつもりだった。

一つ一つの部屋を丁寧に見て回る。

「そう言えば、クレーモガラス絵を作ったな」

恭二が独白する。その記憶が、美術に対する親近感を加速させる。ステンドグラスは切り貼りの絵のように、ぎこちなくとも味のある色合いを見せていた。

「これはこれでありやと思うな」

恭二の独白に洋子が口を挟む。

「恭二さん、油絵とかしこ描かんのやもんね。こげんのも描けんかね」

洋子が指したのは併設されている教会の巨大なステンドグラスだった。聖母マリアを祝福するように天使の一群が取り囲んでいる。淡い黄色を主体とした背景は、外から射し込む光を増幅させ、神々しいと言わせないばかりの力を溢れさせている。

「そげん簡単に言うな。いっちょ出きるこつなるまでだっちゃん相当かかるぞ」

そうは言ったものの、恭二の中で何かが動いたのも確かだった。しかし、その正体までは分からず、彼はむずがる胸を押さえつつも次の美術館に向かう。

「今日はここで終わりやな」

そう言つて向かつたのは「由布院美術館」だつた。湯布院で没した佐藤溪のために開設された美術館で、全部で七つの部屋に分かれている意欲的な館だ。

湯布院の名を冠しているだけあつて、湯布院ゆかりの展示も多い。第一の部屋が様々な万華鏡を展示し、第四の部屋でも風景を万華鏡とする仕掛けも用意されていた。また、第六の部屋と称して、小山に展望台が用意され、湯布院が眺望できるようになっていた。

ここで恭二たちを引きつけたのは、タイムスリップアートメールだつた。

翌年の指定した日に絵を描いた手紙を届けてくれるサービスだ。

「どげんこつば描くと？」

洋子が聞く。恭二がぼつりと呟く。

「過去に届けてくれるとやったら、敬一郎に描くことにな」

その言葉に彼女も頷いた。お互いに宛てて描くのが恥ずかしかったので、二人は詩緒に宛てて描くことにした。絵手紙という指定であつたにも関わらず、洋子は文字を中心としたレイアウトになっている。

「なんか、しかつと絵ば描かんか」

「何ね、良かやんね。上手くなかとやけん」

「そげんことがあるか。こげんとは気持ちやけん、きちつと描かんか」

しかし洋子は首を振る。

「良かとよ。私には私のやり方があるとやけん。恭二さんだつちや恭二さんのやり方があるやろう？」

そう言われて、恭二は返事をできないでいる。

恭二が描いたのは、奇妙な絵だつた。骨ばかりの人間が、羽を広げて飛ぼうとしているところだつた。今までに彼が用いたことのないモチーフだ。彼はそれを隠すようにポストに入れる。洋子はそれを訝しがつたが、恭二はそつばを向いて話そうとしなかつた。

その日の食事は炉端焼きだった。「源」と名付けられたその店は、静かな佇まいでたくさんメニューを堪能できた。三日も経って、今回初めての贅沢な食事だ。地鶏や豊後牛の炭火焼きを楽しむ。恭二は地鶏のコロッケが気に入ったといって、大きなコロッケを二つも口にしていた。中に地鶏の塊が入っていたのが驚きで良かったのだと言う。

「そう言ったら、お前とこげんして贅沢に食事するのも久しぶりやな」

洋子が笑う。

「ずっと詩緒ちゃんが一緒やったけんね」

それを聞いて、恭二が苦笑した。

「あいつには感謝せんとな。両親には悪かばってん、あいつがうちの子供んごつ思えてくるったい」

「あら？ 私はずっとそげん思っとったとよ。恭二さんこそ、詩緒ちゃんに対する感謝が足りんっちゃなかと？」

挑戦的に微笑む洋子を見て、恭二が額を軽く小突いた。

「馬鹿言え。お前が考えとるごたるこつはなか。だけん、詩緒に土産は買うて行きよるやろうが」

初日、恭二が寄ったのは和風のサンリオグッズを扱っている「さんりお屋」だった。詩緒がお土産に、とりクエストしたものだ。表には巨大なキティを御神像とした神社が添えられていた。

「罰当たりやなかか？」

恭二は眉をひそめる。洋子はそれを笑った。

「無信教な日本人らしいっちゃあしかね。まあ、そげん目くじらば立てんで良かやんね」

恭二は納得できない様子だったが、彼女はその背中を押して中に入る。

店内は和心を考えて作られており、壁紙には竹の模様が使われていた。所狭しと商品が並べられているが、そのほとんどが猫グッズとなっている。

「ぎょうらしかね。目がチカチカするばい」

何度も目を瞬かせて、グッズに見入る。そのようなものがあるのは知っていたが、店に入ったことは無かった。恭二はいくつかを手に取り、デザインを見てみた。かぼすキティや椎茸キティなどのご当地キティが目に入る。

「ふむ、面白かことは面白かね」

いくつかを更に手に取った。そんな恭二を見て、洋子が笑っている。似合わない、と思っているのだが口には出せない。言つと恭二がヘソを曲げるからだ。

結局、洋子が詩緒の好きそうなもの、ということでストラップを買っていた。

「図録も買ってあげたけんね。ごめんごめん、私が言い過ぎやった」
洋子はおっさりと降参する。

炉端焼きの「源」を出て、宿に戻る。運転は恭二だ。二人ともアルコールを飲まないため、こういう時は気楽だ。

「あれだけ食べたのに六千円くらいで済んだばい」

洋子が喜んでいる。恭二も、妻が満足そうで笑みを絶やさない。

その様子を見ていた敬一郎は、なぜだか嫉妬に駆られるのを感じた。変なのだ。二人とも自分の親であるのに、どうしても胸が苦しい。恭二なり洋子なりを殴ってやりたい気分になる。

「えい」

その身代わりとして恭二のダイヤと洋子の水晶を小突く。それらは檻のあちこちに反射して、飛び回る。

「あっ」

それが、ふとした瞬間に檻の隙間から抜け出てしまった。

「ああっ」

敬一郎はそう叫ぶことだけしか出来なかった。手を伸ばしても、それはもう乳白色の背景に溶け込んでしまい、見えなくなっていた。「お父さんたちが行ってしまった」

それを、敬一郎はどこか他人事のように表現した。

二人を乗せた車は、ほんの五分程度で宿を取っている「ゆふいんフローラハウス」の駐車場に辿り着く。そこは温室栽培と、押し花や機織りの体験を売りにした観光施設だ。だが、一方で四室を有したペンションにもなっており、夕食が付かない代わりに格安で泊まることができる。湯布院の相場の三分の一で泊まることができるため、田中夫婦はここを定宿にしていた。

「ただ今帰りました」

ペンション棟の玄関横、居間に当たる部分の窓を恭二が軽く叩く。その向こうでは白髪混じりのペンションオーナーがにこやかに微笑んだ。そのまま玄関に入り、靴を脱ぐ。すぐ隣の扉からオーナーが出て来た。

「ゆつくりできましたか？」

これには洋子が応える。

「ええ、たくさん美術館を見て来たので、ちょっと疲れましたが」

「今なら空いてますよ。どうぞ」

オーナーが言っているのは風呂のことだ。ここでは夕方以降、温泉施設を家族風呂として利用することができる。周りに気兼ねせず、ゆつくりと入ることができるのも、恭二が気に入っている所だった。

「ありがとうございます。すぐに入らせてもらいますよ」

そう言って二人は二階に上がり、風呂の準備をした。部屋はベッド二つが設置されている。木造でロッジ風の作りは、観光気分を増進させた。小さなテレビと可愛いトイレ、部屋の内装については洋子が気に入っていた。

共同の冷蔵庫に帰りに買って来たお菓子や飲み物を入れると、その足で温泉施設に向かう。玄関で下駄を履き、ペンションのすぐ側にある引き戸を開ける。入ってすぐにヒーターのスイッチを入れた。

暖まるまでにはだいぶ時間がある。恭二はすぐに服を脱ぎ、掛かり湯をした。その時、洋子は化粧を落とすのに懸命だった。

一時間後、二人は買って来たばかりのケーキをお茶と一緒に口にしていた。

「俺はクッキーの方が良かとばってん」

漏らす恭二を遮り、洋子が話をする。

「どげんね、少しはイマジネーションっちうやつが沸いて来たかね」
その言葉を聞いて、恭二がコタツに体を埋める。ぼそぼそと何か呟いている。

「なんね、まだ何かあるとね」

昼間のことを思い出して、洋子が眦を上げた。

「そげんこつはなか。ばってん、もうちよつとやと思つつちゃけどなあ」

モンブランを一口。そして、お茶を一口。

「コーヒーの方が良かなあ」

「文句ばかり言わんとよ」

一喝されて、また顔を埋める。

恭二は「薄明のとき」を描いて以来に考えていたことを統合しようとしていた。画家は、多かれ少なかれ、自分の中にあるものを表現せねばならないと彼は考えていた。今、彼の心を占めているのは誕生と死の問題だった。もちろん、敬一郎のことがあったからだ。そのことを、もっと普遍的に昇華できないだろうかと考えていたのだ。そうやって試行錯誤をして行き、具象画や抽象画を描いて来た。それは詩緒が考えていたように取留めも無く、至極遠回りなやり方ではあった。しかし、その中で彼は一つの方角性を見いだすことが出来ていた。それは、結局のところ、出発が敬一郎である以上はどこまでもそのことから逃れる術はないのだ、ということだ。恭二は敬一郎を前面に出すこと無く、しかし敬一郎を描くにはどうしたら良いだろうかと考えていた。ただ、この湯布院で様々な美術館を回っている内に、考えたことはある。それはすでに彼自身が実践し、

手応えを得たものだ。実行することを躊躇っているのは、その方法が、彼の今までの画家生活を覆すものだったからだ。怖かった。恐ろしかった。それは、昼間に洋子に告白した怖さと同じだった。恭二の恐れていたものは、他人に対するものではなく、自分に対するものだ。それ故に、自分と似通った詩緒の作品にさえ忌諱を覚えたのだ。

黙ったままの恭二を見て、洋子が何かを思い出したように言った。

「あ、恭二さん、車にバッグ忘れたけん、取りに行ってくれんね」

気の抜けた言い方に、恭二が思わず苦笑した。

「なんね、持って来とつたろうもん」

確かにベッドの上にバッグはある。

「化粧品ば入れとる小さかバッグが、ダッシュボードにあるけん。それば持って来てくれんね」

「しょんなかね」

そう言つて、恭二は鍵を手にする。階下に降りて、そつとドアを開けた。もうオーナーたちは寝ているようで、周囲の建物の明かりは消えていた。フローラハウスの周りは田園が広がり、近くには家の灯りらしいものも無い。恭二は突然、闇の中に放り出された。

「暗かね」

携帯電話を取り出し、灯りをつける。頼りない仄かなLEDライトが、目の前一メートルを明るくした。

駐車場は五十メートルほど歩いた場所にある。そこまでの距離を、恭二は歩く。

自分の心音が聞こえるようだ。

実際にはたくさんの音が聞こえる。虫の鳴く声、発電機の音、微かな葉擦れ、夜のシンとした空気の流れる音……それらの中で恭二は自分を引きつける大きな音が鳴っているのを聞いた。

空を見上げる。

それは、宇宙の音だった。

恭二を空から眺める、天が降りて来る響きだった。

久留米では見ることの出来ない、たくさんの星々が横たわっている。

目眩に襲われる。宙は圧倒的に広がった。

見渡せば、天上に押し潰されたようにして恭二は存在していた。

あらゆる星の輝きが、彼の瞳に飛び込んで来る。その場で立ち止まり、恭二は天を見続けた。

自分が小さく思われた。

この宇宙に対して、自分はあまりに小さかった。使い古された言葉が、ここでは実感を伴って沸き上がって来る。そのことが恭二の心を新たにさせた。

「どげんでんよかねえ」

気の抜けた声を出した。先程の洋子と同じように。

自分のこだわりは、ただの我侭だった。今ならそう思えた。思えば詩緒は常に挑戦を続けている。画材に拘泥しなかった。それを若さと切り捨ててしまうのは、恭二にはまだ早い。まだまだ自分は挑戦ができるのだと、そう思いたい。

光は恭二の体を突き抜け、遙か内奥の魂に溶け込んでいった。それと同時に、恭二もまた、優しく両手を広げる暗闇に身を委ねるのだ。

そうすることで彼はこの世でない住人になることができた。あらゆる星々、全ての人間が通る道筋に視界を射すことができた。

恭二と同じ光景を、敬一郎も見ていた。彼はしかし、恭二と体験を共有することはできなかった。思考と実験の末に開闢された恭二の精神は、ただ眺めるだけの敬一郎では受け取り得ないのだ。

彼はただ漫然と、恭二が思い出したように車にバッグを取りに行き、それを洋子に渡す所を眺めていた。

恭二が何か興奮したように話していたが、それを最後まで見ることは無かった。見ているのが辛かったのだ。恭二が新たな一歩を踏み出したことを感じた敬一郎は、そのことが寂しかった。彼が忘れられるための、更なる第一歩だと思ったからだ。

しばらくぼんやりと乳白色の空を眺めていた敬一郎は、時間軸をずらした上で視点を詩緒の方に移すのだった。

二

詩緒は二つのイーゼルを前に、絵筆を持った格好のまま、固まっていた。まるで、以前の恭二のようだった。敬一郎はしばらくその様子を眺めていたが、一向に動く様子がないので話しかけてみることにした。あれ以来、久しぶりのことだった。

「詩緒、聞こえてる？」

ハッとして詩緒が辺りを見回す。すぐに視線を薄明のときに戻して、口を開いた。

「敬一郎？ そうなんやろ？」

「そうだよ」

やはり、声はその絵から聞こえていた。

「まだ、話せるんやね。檻からは出られたと」

「まだだよ。どうやって出られるか、僕には分からないんだ」

詩緒はその返答を聞いて、恭二がまだ敬一郎のことを忘れていないのだと考えた。

「退屈やなかね」

「そうでもないよ。昨日まではお父さんたちを見てたんだ」

「へえ、どうやった」

「楽しそうだったよ。お父さんは何か新しいことを始めるみたいだ」

それを聞いて、詩緒が少し暗い影を見せる。

「そうね、センセイは頑張るとるね」

小さく呟く。

それに気付いたのか、敬一郎が気遣って声をかけた。

「どうしたの、詩緒。顔色が悪いけど」

「うん……敬一郎に言つてもしよんなかとばってん」

「なんでも言つてよ。僕にも何か力になれることがあるかもしれない」

彼は詩緒に対して献身的だった。彼女が父親たちの本当の子供のように扱われていることを、疑問にすら思わなかった。むしろ、父親たちを救ってくれたのだと、今では感謝すら感じていたのだ。

「絵が描けんとよ」

「え？」

敬一郎が驚いた。どこかで聞いた台詞だったからだ。

「詩緒もなの？」

「そげんたい。ゲイジュツカっちうのは、どこかで悩むもんたい。メランコリアなんよ」

詩緒の言葉は、敬一郎には呪文のように聞こえた。だが、意味を問うのは止めておいた。海里の時に理解した。たぶん、こういうのは聞いてもまともな答えが返って来るものではない。より難解な回答が五万と吹き戻って来るだけなのだ。

「はあ、そうなんだ」

「そげんよ。私は、薄明のときんごたる作品ば描きたかったとよ。ばってん、敬一郎が閉じ込められとるち聞いてからいつちよんやる気がのうなつてもうた。どげんしてくるつとね」

「どげんして、って言われても……」

「まあね、敬一郎が悪かつちやなかもんね。全部センセイが悪かつとよ」

その言葉に一瞬苛立ちが募ったが、敬一郎は思いとどまった。彼女がカタカナでセンセイというときには親しみや冗談が込められている。

「元々はどんな作品が描きたかったの？」

「まだきつちりは固まつとらんかつたとばってんね。例えば、人がばさらか集まつとつて、なんかに祈つとるところとか良かなあ、ち思つとつたとばってん」

「なんか、宗教みたいだね」

「なんちいうか、そげんもんが描きたいっちうだけで、それば描こうと思うとったわけじゃなかとばってんね」

「なんだか良く分からない説明だね」

芸術家の頭の中とはそういうものかもしれない、と敬一郎は思った。理解しようにも筋道が立っておらず、話があちこちに飛んだりする。本人の中ではビジョンができているにも拘らずそうなるのは、彼らがイメージでものを語るからなのだろう。恭二にもそのようなところがあった。昨日までに敬一郎が見て来た湯布院での恭二は、まさしくそれだ。

詩緒は、突然立ち上がると、部屋を出て行ってしまった。予告も無く、予想もできない行動だった。

絵画としての敬一郎はどうすることもできずにその場でドアが閉まるのを見ているだけだった。思い当たるのは、敬一郎の言葉が詩緒を怒らせたのではないかということだ。だが、それならそれで、詩緒はきっと一言言っていくと思うのだ。彼女はそういう性格だと、今まで見ていた敬一郎は確信していた。

「じゃあなんで出て行ったんだろう？」

自問しても何も生まれない。

「どうしてみんな僕を避けるんだろう？」

恭二も洋子も詩緒も、皆が自分を忌まわしいものとしている。

「僕はもう、いらないんだろうか。だからこんな所に閉じ込められているんだろうか」

疑問は尽きない。しかし、答えは出ない。誰か相手が欲しかった。この問題に答えを出してくれる。

そして、敬一郎はもう一度その可能性に到達する。

「僕は、世界から拒絶されているんだろうか」

当然の帰結だった。思い起こせば、彼は拒絶されているからこそここにいるのだ。黄泉だけではなく、現世からも影響を受ける彼の、尽きない悩みだった。現世では、人は他人に認識されて初めて人となる。そういった意味では、敬一郎は誰からも「生」を認知されない存在だった。同時に、死んだものとまだ生まれる前のものの住む世界では全てが同一化され、あらゆる事象が絡み合って生きている。それを拒否した彼が、受け入れられないのは分かり切ったことだ。またそれらのことは現世と黄泉とで表裏一体な訳ではなく、それぞれのある側面を示しているだけなのだ。だとすれば、敬一郎はすでに現世に生きているとも言えた。だが、彼はそれすらも否定したのだ。

「いや、君は忘れられたのさ」

誰かの声が聞こえた。それは、海里のもののように思えた。敬一郎が声の方に振り返ると、そこには誰もいなかった。

ただ、一羽のウサギがいるだけだった。

「海里……？」

敬一郎は問うたが、ウサギは首を振った。

「ここでは誰何に意味はないよ、敬一郎。ただ私はここにいる。それが重要なことなんだ。まあしかし、言ってしまうえばあの現世と交わったものの意識は、ここには見当たらないがね」

彼は海里のことをそんな風に表現した。ピンと立てた耳は、辺りを嗅ぎ回るように始終動き、どことなく落ち着きのない恭二を思い起こさせた。真っ白な体で、そして赤い瞳でまっすぐに敬一郎に向き合っている。

「ねえ、ウサギさん」

「なんだい、迷い子よ」

いちいち持つて回った言い方をするのが気になる。それでも怯ま
ずに質問を続ける。

「忘れられたってどういうこと？」

ウサギは、鼻を動かしていた。それが匂いを嗅ぐためのものでは
なく、迷っているのだと気づいたのは、応えが返ってこないからだ
った。敬一郎は考えた。ずっと考えた。うんと考えた。そしてある
時、「そうだ！」と叫んだのは彼ではなくウサギの方だった。

「確かめてみれば良い。その、自分の眼で」

「でも……」

敬一郎は躊躇う。海里との旅が頭をよぎっていた。最後のあの瞬
間の絶望も。

「心配する必要はない」

それを読んだかのようにウサギは言った。

「君は誰からも拒否されることはない。なぜなら、君は失われた存
在だからだ。それに、もう時間もないのだ。お茶会、という訳では
ないがね」

ウサギの比喻は、絵本を読むことすらなく死んだ敬一郎には分か
らないものだった。素直に彼は問う。

「時間がないって？ それにお茶会って？」

「お、お茶会は忘れてもらいたい。だけど時間がないのは本当だ」

敬一郎は首を傾げた。

「さあ、早くいかなくては」

そう言つてウサギが檻に触れると、それは高熱でも浴びせられた
ように溶けていく。あれほど色々なことを試しても有機的に逸らし
てきたこの檻が、乳白色の液体へとなり果てていく。

驚きつつも、敬一郎は急いでそこを離れた。またいつ閉じこめら
れるか分からない。それに、久しぶりに思い切り体を動かすのは気
分の良いことだった。

敬一郎は伸びをした。

その間、全てを忘れてしまったような気がした。見れば空には太

陽の光が燦々と降り注ぎ、眼下には濡れた色をした草花が香っている。

道は、まっすぐに伸びていた。

鈍く、蛍のように輝いている。

「冷光……」

なぜ、自分はこんな言葉を知っているのだろうか。敬一郎は自らの引き出しを探る。そうだ、詩緒がそう言っていた。自分の家の家電の光だ。

この道は、あの家へと続いているのだろうか。頭の中に様々な情景が浮かび、消えていく。知っている何か、知らない何かがたくさん星となって自分を貫く。

上空を再び見れば、今度は月が浮かんでいた。明るいままで、月光が流れている。だが、眼下の花々は少しずつ蒸発していくのだ。

敬一郎は花の空気をつかもうとして、腕を伸ばす。ところが逆に花に包まれてしまう。

もがく敬一郎を、ウサギは見ていた。

時間がないというのに、何を遊んでいるのだ。

もう一度空を見れば、そこには巨大な岩が浮いている。

「今度はマグリットか。これも画家の息子である故か」

小さな口をモグモグと動かしている。可愛らしい口から似合わない言葉が出ていることに、疑問や嘲笑を挟むものはいない。

「ぶはっ」

ようやく、敬一郎が花の蕾から咲いた。大きく手を広げて、開放感を表現する。バレエダンスのようだった。

全ての事象は今、消え去った。

まっさらな空、まっさらな道、まっさらな敬一郎。

「さあ、気が済んだかね」

ウサギが敬一郎に近付いていく。

「気が？ 助けてもくれなかったくせに」

「ウサギに無理を言うものじゃない」

「こんな時だけ個体を強調するんだね」

「全ては流れるままに、時には滞ることもある」

「ずるいよ」

「さあ、冗談はこれくらいにしよう。君にとっては再び、だな」
「うん」

敬一郎は感じていた。彼は目指さなくてはならない。真実を知るために。

「月が完全な円を描き、地球に最も近くなる夜、月の入口へ」
二人は声を揃えた。

三

夕景は太陽を連れて闇に移ろうとしていた。

詩緒は、自宅近くの土手を、ブラブラと流していた。歩みと一緒に沈み行く太陽も動く。赤と緑が対比して、目に痛かった。詩緒の目には涙が溜まっていた。

鼻がツンとして、くしゃみが出そうになる。噉ると、今度はその雫が目に入ってきて来る。結局、詩緒はティッシュを二枚出して、その両方を拭った。

筑後川に流れる赤い球体は地面を飲み込んでしまいそうだった。

実際には、逆に飲み込まれていたのだが。

詩緒はそれに自分も飲み込まれていくような気がしていたのだ。彼女は怖かった。絵を描くのが怖かった。自分を背景にした絵を、自ら表すのが、人に見てもらおうとすることが恐ろしかった。

恭二の作品に敬一郎が閉じ込められていることを知り、自分の触れている媒体が持つ力を扱いかねていた。詩緒の行為が、自分だけでなくその周囲にまで、いやもしかしたら世界にまで影響を及ぼすかもしれないと思った時、筆を持つことすら止めなくなった。

土手に来たのは、絵を思い出すためだった。自分を見失わないように、絵とは何かを考えるためだった。

遙か先まで続く川の舳先は、マレーヴィチのシュプレマティズムを思い起こさせた。広場には何台かの車が止まっており、夕日の赤に溶けていた。まだまだ山吹の光の残る場所では、子供たちがサッカーやフリスビーを楽しみ、ジョギングやウォーキングを楽しむ人たちの姿が見える。川岸では釣り竿を垂れて獲物を待っている人もいた。

「そう言えば、クラスの男子たちが話してたっけ」

筑後川ではかいバスが釣れる。元々はいなかったはずのブラックスバスが釣れることに、詩緒自身は哀しいものを感じる。大体、食べもしない魚を釣って何が楽しいのだろう、と思う。

不快なものを感じて目を転じると、そこに絵を描く人物が見えた。小さく背中を丸めて、一心に画面を見つめていた。普通の画用紙に、どうやら色鉛筆を使っているようだった。速記するようにして、急いで太陽の沈み行く様を描き移していく。そうしないと全てが失われると思っているような、無くしてしまったものを取り出しているような、そんな切迫感が伝わって来る。彼の短い髪が風で流れた。背中から見えているため、表情は見えない。詩緒が近付いていっても、一向に気にする気配はなかった。間近で見ると、まだまだ初心者領域を出ていない。何本も修正の線が引かれ、筆運びも安定していない。だがそのぎこちなさの中で、懸命さと丁寧さは見受けられた。詩緒は急いでいても、線を疎かにしない姿勢を評価した。

構図も河川が下方に沈み、張りが見えない。色使いも単調で効果が見えなかった。画面の上三分の一が空いてしまっている。それが狙ったことなら良いのだが、どう見ても絵を損なっているようにしか思えない。おそらく、ちゃんとした構成も考えずに目に見える範囲から描きだしたのだろう。そのためか、対象の配置もバラバラになっていて、統制が取れていない。恭二が見たなら、すぐに怒りだすだろう、と詩緒は一人笑みを浮かべた。しかし、詩緒はその絵に好感を持っている。なぜだろう。ルソーの絵を初めて見た人は、こんな風な感動を受けるのだろうか。素朴、と一言で言ってしまったのは失礼だが、詩緒の忘れてしまったものが表現されている。

また乱暴に言ってしまうなら、それは楽しさだった。描かずにはいられない胸から沸き上がって来る情動。それが楽しさでなくて何だろう。目の前の男の子は、脇目も振らず、画面だけを見つめている。おそらく、何も考えずに。

羨ましかった。

詩緒はそうすることのできる彼が羨ましかった。

三十分も経っただろうか。夕日が沈み、お馴染みとなったあの瞬間が訪れる。

薄明に、町は溶けていた。

何もかもが同じ色に染まり、同一となり、共同体となる。詩緒は絵を描く彼の姿を見ていた。まだ、記憶の残る画像を画面に定着させるため、休むこと無く鉛筆を動かしている。

背後から明かりが灯った。土手の向こう側の、家々の灯火だった。さらにそれから十分ほどの間、彼は画面を埋めていた。

そして、ほ、と息をつく。

そこで、詩緒は声をかけた。

「素敵な絵ですね」

男の子は、びっくりして振り返った。

その表情を……容貌を見て、詩緒も同じ顔をした。

「金田……君？」

「益田やんか」

二人とも、それきり何も言い出せない。その内に、辺りは暗くなっていく。お互いの顔も見えないままで、時間だけが過ぎていく。動けなかった。何かのきっかけを探していたとき、山鳩がほお、と鳴いた。金田が身じろぎしたのが分かった。

「どうして、絵を描いとると？」

声を発したのは詩緒からだった。金田は頭を掻きながら言った。

「ずっと見とつたら、描かんといかんような気がしたったい」

「そげんやなくて」

詩緒が繋げようとするのを止めて、金田は絵を手を取った。

「暗かけんもう見えんばってん、見てくれとつたとやろう？ 面白かな、絵ば描くつち」

胸に両手を重ね合わせ、心臓の音を確認するようにして詩緒が答える。

「そう、そうやね。絵を描くとは楽しかよ」

今の自分は心からそう言えない、それでも、そう答えざるを得なかった。

「金田君の絵は、楽しそうやね」

明るい色で、丁寧に塗られた絵だった。色鉛筆独特の淡色感が、ほのぼのとした情感を助長している。

「お前と最後に話してから、俺、絵の道具は買いに行ったとよ。最初はどげんして良かか分からんやった。でも、そげなことはどげんでん良くなってきたとよ。ただ色ば塗って、それらしくなるだけだつちや楽しかもん。あれから、毎日、一枚ずつ仕上げとるつちゃん後で……」

後で、お前にも見せちやるけん。そう言おうとして、靖志は留まった。ふと、今自分が益田と自然に話していることに気付いたからだった。

急に心臓が高鳴る。気が付けば喋っていた。

「俺、もつと絵ば描きたか。絵が上手くなりたか。だけん、教えてくれんやろうか」

益田は沈黙したままだ。考えている、というよりも圧倒されているようだ。

靖志は胸を押さえたまま黙り込んでしまった。自分が次に言おうとしている言葉が、全身を駆け巡る。何かが爆発したような気がした。

「俺、ずっとお前の隣で絵が描きたかけん」

ひゅ、と益田が息を飲んだのが分かった。

靖志は耳鳴りを感じていた。

二人だけが世界から取り残されていた。いや、二人は世界を置き去りにして遠い場所に向かっていた。

それは、生者のものでなければ死者のものでもない。また、まだ生まれる前のものの世界でもなかった。

それは、明日の世界だった。

ぎゅ、と益田が目を瞑った。喉を鳴らし、一度、大きく息を吸っ

た。

「うん、良かよ」

精一杯に口を開き、はつきりとした声で応える。靖志は、頬にできたエクボが可愛いと感じた。

靖志は、詩緒に向かって話しかけた。

「ほ、ほんなこつか？」

今にも腰が砕け、座り込んでしまいそうだ。

「ふふ、ほんなこつよ。隣で絵を描くだけやる？」

詩緒はからかってみたくなり、そんな言葉を転がした。靖志は頭よりも先に体が反応し、食って掛かってしまった。

「そげな馬鹿なこつがあるか！」

詩緒がびっくりして後ずさった。それを見て靖志は言い淀む。

「あ、す、すまん。いらんこつば言った」

すぐに、詩緒は否定する。

「良かとよ。ちゃんという意味は分かっとなるけん、心配せんだつちや良かよ。それに、私も嬉しかとよ。こげん優しか絵ば描く人と付き合つとやったら、きつと楽しかち思ふもん」

初めて、詩緒は「付き合う」という言葉を発した。そのことによつて靖志はようやく安心した。思わず大きな息をついた彼を見て、詩緒が微笑んだ。そして、その口元を緩ませた詩緒を見て、靖志も笑顔を見せたのだ。

四

道はまっすぐで、寸分も曲がったりはしなかった。淡く光る道路は、敬一郎のためだけに空けられていた。

「前は、ブランコが来たり、雲に乗ったりしたんだけど」

疑問を呈すると、ウサギは耳だけをこちらに向けて返答する。

「あれは君の作り出したものだろう？」

返す言葉は無かった。ウサギは敬一郎の前を走っている。その後ろを彼は必死になってついて行っている。余計なことを考える暇はなかった。とにかく息を切らしながらも走らなくてはならないのだ。

「元々、あの現世と交わったものもこうすれば良かったのだ。なまじ秩序を保とうとするからこうなる。ぶれはいつでも生じるものであり、そのために輪廻の輪は太く丈夫に作られているというのに」

今度の話は、敬一郎に向けられたものではなかった。暗号のような言葉たちは彼の目の前であちこちに飛び回り、敬一郎を嘲笑した。一つは今から彼らが向かう先に飛び去って行った。一つは天高く昇って行った。一つは敬一郎の口に飛び込んで来た。

驚いた彼は咽せ込み、中のものを吐こうとした。膝について体を折り、指を喉に突っ込む。そうしてまでも、入り込んだ「輪廻」という言葉は出てきそうも無かった。その間、ウサギはただ黙って見ている。解説するでもなく、そのことに危機感を覚えるわけでもなかった。敬一郎は無駄なことだと分かり、膝を払って立ち上がった。「一体、どういうことなの」

彼の問いに、傍らで見ていたウサギが答える。

「迷い、なんだろう。もちろん、君のだ」

指摘されて、敬一郎は俯いた。僕はまだ迷っているのだろうか。あれほど切望した現世への復帰が目の前に迫っているのに。

長い時間が経って、敬一郎自身の生への憧れも落ち着きを見せていた。一つのことには固執するには、彼はまだ幼すぎたのだ。その想いを下支えして来た両親への愛情も、今は疑問符付きのものになっている。それでも復活を望むのは、彼が確かめたいからだだった。両親の愛情を、自分の生きた証を。直接聞いてみたかったのだ。

「僕が生まれて、本当に良かったのか」を。

敬一郎は、走り出した。ウサギを置いて、全力で。彼は気付かなかったが、風景は光の帯のようにして遙か後方に去って行き、彼自身は光として前進していた。長い檻の中での生活が、彼とこの黄泉との同調を促進していた。あれほど嫌がっていた自身のエネルギー化を、彼は今、無意識に行っている。

「間に合うだろうか」

その後ろについて行きながら、ウサギは心配していた。ただ無自覚に意識の海に溶けられては困るのだ。

やがて、月は真円を描き、彼らの前に現世への扉が見える。

「あれ？」

光の速度から急激に足を止め、敬一郎はその入口を見た。

以前は階段があり、その先に地球が浮かんでいたのだが、今は様々な装飾がついた重そうなブロンズの扉となっている。観音開きで、そのあちこちに苦しい人間たちの様相が浮き彫りにされている。それらは一面にびっしりと描かれており、およそ気持ちの良いものでは無かった。敬一郎はそれが何か分からないまま、ただ不快感だけが全身を浸していた。

「ウサギさん、あれはなに？」

ウサギは息を切らすことも無く後ろに佇んでいた。敬一郎の質問に鼻を動かして、一言で答えた。

「現世への門だ」

だが、それは敬一郎の望んだものではなかった。彼はなぜ以前と

風景が変わっているのかを知りたかったのだ。

門はたくさん人間が罪を犯している場面を彫り込んでいた。長方形のその枠にまで仔細に埋め込まれ、彼らは門自体から逃げ出したがっているようにも見える。その中央上方には何事かを考え込んでいる人間がいて、それら罪深き人々を睥睨している風にも見えることができた。人体の一つ一つは無情なまでにリアルに作り込まれており、それ故に恐ろしさは数倍されていた。敬一郎は一つの事実に気がついた。これほど作り込まれている門なのに、余白が多いのだ。首をひねった敬一郎を見て、ウサギが口を出す。

「未完成なのだよ、あれは。残念ながら、作った人間はその途中で死んでしまった」

「人間が作ったの、あれを？」

「そうだ、素晴らしいと思わないか」

「僕は怖いよ。ねえ、現世で作れなかったのなら、こっちで作れなかったの？」

敬一郎は素朴な疑問をぶつけた。それに対し、ウサギは一度顔を逸らした上で返事をする。

「彼は……君のように記憶を持たなかったのだよ。取り戻す機会も得られなかった。彼は溶けてしまったのだよ。意識の海へ」

「意識の海？」

「海里が言わなかったかな。ここは死んだものとまだ生まれる前のものの住む場所だと。君が死んだものとすれば、生まれる前のものはどこにいるだろうね」

「それが、意識の海？」

「そうだ。そこでは死んだものが溶け込み、ドロドロのスープとなっている。誰も彼も分からず、また物質を形成することもない。混濁とした意識の中から新しい何かを創造するために日々ぶつかり合い、混ざり合っている。やがて時がくれば彼らは作り上げた自身の魂を古い殻に宿して現世の入口までやって来る。そうしてその門からあの世界に向かって出て行くのだ」

敬一郎は想像した。以前、海里に触れた時のように、私とあなたが同一となる感覚を。そして、そこから新しい何かが生まれて来る感動を。そうした中で一つの疑問が出て来る。

「それじゃあ僕が前に見たのは何だったの？」

ウサギは再び沈黙した。口をしきりに動かしていることから、まだ迷っているのだと分かった。

「ウサギさん、教えてよ」

敬一郎が叫ぶ。彼は耳を伏せ、目を閉じた。敬一郎が諦めかけたとき、誰かが答えを発した。

「あれは幻だ」

聞き覚えのある声だった。そちらを振り向くと、一人の老人が門の前に立っていた。

「あなたは……」

敬一郎が檻にいた時に、横を通り過ぎた人物だった。更に、彼の後ろから誰かが分離されて来る。

「まさか君が諦めずに辿り着くとは思わなかったものだからね」

懐かしい声だった。あれからもう、感覚的に二年が過ぎていた。

今でもピエロのような派手な色彩をまとうて、こちらに向けて微笑みかけている。

「海里」

敬一郎が叫ぶと、海里は手を挙げて制止した。

「久しぶりだね、敬一郎。もっとも、私はずっと見ていたんだよ。君がいつ弱音を吐くかを。しかし、君は一向に諦める気配がない。ついには現世と交信すらしてしまった。私は心配していたんだよ。困るのだ、君が現世に行ってしまうと」

海里の言葉に敬一郎が反発した。

「それならなぜ僕を助けたのさ」

それに対する彼の返答は冷たいものだった。

「助けた？ 私は何もしてない。ただ、説明し、見守っていただけだよ。道は君が決めたんだ。困るんだよ、君が現世に行ってしまうとね」

もう一度、海里は同じ台詞を口にした。その後、老人の方を向いて敬一郎を紹介する。

「彼が、君の弟となる予定の人物だ」

海里の言葉に、老人が頭を下げる。それは単に挨拶をしただけではなく、謝っているようにも見えた。

「これから彼は田中恭二、洋子夫妻の元へ降りて行く。そして第二子として生を受け、育っていくのだ」

敬一郎はまじまじとその老人を見た。彼はもう俯くことをせずにまっすぐに敬一郎を見据えている。

「この、おじいさんが、僕の弟だって」

ゆつくりと、単語を区切りながら話す敬一郎の表情は、色の無く冷めきつたものだった。

それを横目で見ながら、ウサギは駆け出す。

呆然としていた敬一郎は、それを目の端で追っていた。ウサギは最後に一言、告げた。

「すまない」

ウサギは老人に飛び込んだ。彼らはぶつかることなく、一つに融合する。そのことに敬一郎が戸惑うことは無かった。この世界では二つが一つになることなど、よくあることだったからだ。

老人はウサギを取り込んだ後、徐々に若返りを見せていた。老人から壮年に、青年に、学童に、幼児に　やがてそれは小さな種にまで矮小化してしまう。種は単子の若葉を伸ばし、温かな光に包まれている。

「さあ敬一郎、もう君に戻る場所はない。大人しく意識の海へと溶けてしまふんだ。そうすれば、彼のようにどこかに輪廻することができる。それが、君の幸せだ」

断定する海里を他所に、敬一郎は種から目を離せずにいた。彼の論理に反発する余裕すらなかった。その光景は美しかった。種はどこから現れて来た鳥の頭を持つ人間たちに抱えられていた。そのいずれも異なつた鳥がモチーフになつてはいるが、無表情でことなく生命感のない所が似ている。

「さあロプロよ、新しい命を運んで行くのだ」

海里はその鳥たちをロプロと呼んだ。敬一郎がもし絵画に明るかつたならば、それがかのシュルレアリスト、マックス・エルンストが度々作品に登場させた鳥のことだとすぐに分かつただろう。だが、彼は幼いが故にそれらのことを学ぶ機会を逃していた。地球から覗いた恭二はシュルレアリズムの待つ美術館には行かなかった。それはこの三年だけの特殊な事情によるものだったが、敬一郎にとつては最大の損失だった。

ロプロは六人いた。四人が種を抱え上げている。種はいつの間にかそれほどの大きさになつていた。残りの二人は門扉に手をかけていた。身長二メートルにもなるうかという大きな人間が、その巨大な掌をブロンズの把手にかける。体が斜めになるほど力を入れて引き、門は地鳴りを伴つて開きつつあった。

寒気を感じた敬一郎は両腕を抱く。確かにその冷氣は門の中から凍みだして来ていた。神々しい光景であるのに、禍々しさが抜けない。恐ろしさと優しさが均等に敬一郎の体を支配していた。

扉が開き、中からは霧が吹き出した。しかしロプロは粛々と歩みを進め、門の中に入つて行く。

「待つて」

敬一郎が止める。

「無駄だよ。誰にも行軍を止めることはできない」

海里はそう言つて敬一郎を抱きすくめる。

その間にも種は現世へと消えて行く。

段々と、ロプロは種に吸い込まれて行つた。一人、また一人と。その度に種は大きくなつていく。

ついに最後の一人が吸い込まれたとき、種は若葉を伸ばし、現世への蔓を伸ばし続けた。

「待って」

敬一郎の声が聞こえようもなく、種は……彼の弟は現世へと降りて行った。

五

湯布院旅行から三ヶ月後、洋子は不調を訴えて病院に向かった。

「どげんしたとですか、奥さんは」

アトリエで二人並びながら、詩緒が恭二に聞く。

恭二は詩緒を見て、再び制作に戻った。作品を見つめたままで詩緒に忠告する。

「知らん。お前はそげんことよりか早よ作品ば描かんか」

未だに詩緒は大作を描けていなかった。百号のカンバスは、イーゼルに架けられたままだ。まだ詩緒には作品の構想すらないのだ。

それでも彼女を悲観的にさせていないのは、偏に靖志の存在があるからだ。あれ以降、二人は度々外で会っては楽しい時を過ごしていた。その息抜きが彼女を前向きなままでいさせてくれた。

「でんもんはしょんなかですよ。センセイは良かですね。新しい作風ば思いついて」

恭二は弟子を一瞥すると吐き捨てるように言った。

「バカ言え、実験と実践の結果たい」

そうは言うものの、恭二の表情は明るかった。今、彼が手にしているのは何の変哲もない石だった。湯布院の河原で拾って来たそれを、恭二は危ういバランスで接着していた。

その周りには、新しい作品が並んでいた。子供の重さと同じになるように砂を入れたキューピー人形、その表面には切れ目が入れてあり、砂が零れ落ちるようになっている。

また、初めて、敬一郎の肖像画を描くことにも挑戦していた。今、彼が描いているのがそれだ。黒い背景に敬一郎の全身が描かれている。彼は両手を伸ばし、磔刑を受けているように見える。通常の作

品と異なっているのは、それはとても細長いキャンバスに描かれていた。そのため、全身の比率も歪になっている。

その他にも、無数の作品が制作されていた。今までの恭二のペー
スからは考えられない。

詩緒はその全てを見てきたが、そのどれもが恭二の作風と異なっていた。

二人は制作を続ける。もつとも、詩緒は画面を見つめたままだったのだが。

「先生は、薄明のときを描く前はどげんことば考えとったのですか」
詩緒は思いついたことをそのまま話す。

恭二は何も答えなかった。思い出たくないのか、思い出せないのか、何も語らない。

そうして二人無言でいると、ドアが開く音がする。

「ただいま」

「奥さんやね。元気そうで良かった」

詩緒が迎えに出る。その後ろから、恭二がついてくる。洋子は笑顔を見せてもう一度「ただいま」と言った。

「どげんやったのですか？」

詩緒が聞くと、洋子は笑みを抑えきれないで笑ってばかりいる。

「なんば笑つとるとか。早よ言わんか」

靴を脱ぎ、玄関からまっすぐにリビングに向かった洋子は、ソファに座り、二人を迎えた。

「恭二さん、詩緒ちゃん聞いて。おめでただって」

満面の笑みで告白する。詩緒はすぐに顔を綻ばせ、洋子に抱きついた。

「ほんなこつですか？ 良かったとですね」

そうしておいて、すぐにお腹を圧迫してはいけないのだと気付き、そこから離れる。

「遠慮せんで良かよ。一緒に喜んでくれて嬉しかよ」

そう言って詩緒の頭をなでた。

一方で、恭二はまた喜ぶタイミングを逃していた。弟子である詩緒が見ている前だから、ということもあるが、二人があまりに喜んでいるので逆に冷静になってしまったのだ。

「恭二さんは相変わらず喜んでくれんとね」

それを洋子が指摘する。彼は首を振って否定した。

「そげんこつはなかよ。喜んだる。喜んだるばってん……」

「ばってん、なんね？」

「敬一郎が頭に浮かぶったい」

申し訳ない、と思っっているのだ。改めて敬一郎と向き合おうとした恭二だからこそ、そう思うのだろう。しかし洋子はそれを慰めた。恭二さん、それとこれとは別よ。確かに敬一郎のことは残念やつたけど、だからうちうて新しい子供ば喜ばんわけにはいかんやろう？ 私らは生きていかんといかんのよ。ずっとそげな顔で新しい子と会って行く気ね」

「そげなこつはなかばってん」

「恭二さん、こげんは考えられんとね。忘れよう忘れようやなくてっさい。敬一郎はずっと私らの隣におるっち」

恭二は目を伏せた。それを見て詩緒が話しかける。

「すいません、私が口挟んで良かことやないっち分かつととすけど」

「なんか、言うてみい」

顔を上げた恭二が詩緒を見る。

「先生は敬一郎のことばどげん思つととですか。忘れたかとか、それとも納得したかですか」

詩緒の言葉を、恭二は取り入れ、飲み込み、熟考した。言うべきことを選んでいような素振りだった。

洋子はその様子をじっと眺めていた。夫が何を考えているかは良く分かつていた。ただ、それを話することができるかどうかは、彼の強さ次第だと思った。

詩緒は待った。彼女は敬一郎が檻から出られるのかどうか、その

可能性を知りたかったのだ。そして、より円満な解決はないのか、
恭二の言葉から探ろうとしていた。

恭二は二度、大きな溜息をつき、それから詩緒に向き直った。

「忘れることやらできん。やっぱり俺は、納得したかつちやろうと思う。ばってん、納得できんとも分かるったい。だけんが、新しい子供のことは手放して喜べんたい。不安があるったい。それを言うたらしよんなかこつも分かる。ばってん、それが素直に理解できんのが親うちうもんやなかるうか」

そこには、複雑な心情が簡潔な言葉で述べられていた。それ故に、内容はより複雑なものとなっていた。詩緒は一つ一つを取り出して、ゆっくりと吟味していった。そして、敬一郎が復活するためのもう一つの方法があることを理解した。

「先生は、ほんなこつはもう納得しとるっちゃなかと？」

詩緒の提言に、恭二は戸惑った。詩緒の目を見つめる。彼女は懇願するような表情をしていた。詩緒は恭二が敬一郎を受け入れることこそ、檻から出す最も良い方法だと考えたのだ。その証拠が、一連の作品群だった。彼が湯布院から帰ってきて作り始めた作品は、明らかに敬一郎の誕生と死をテーマとしていた。それは拡大し、人間の生と死というテーマをも内包している。果たして、生まれてすぐ死ぬという生き方に意味があるのか。そこに恭二は斬り込んでいくのだと詩緒は思っていたのだ。だとしたら、恭二はもうすでに答えを見つけているのではないか。そうでなければ作品を描けるだろうか。敬一郎の肖像画を描けるだろうか。

しかし、恭二の返答は哀しいものだった。

「残念ばってん、俺はまだ答えは見つけとらんとよ。答えやらなかとやなかかちも思うとる」

肩を落とす詩緒に恭二は言った。

「ばってんな、益田。俺は一つだけ考えとることがあるとよ」

「それはどげんこつですか」

顔を上げて恭二を見る。気が付くと、洋子が詩緒の手を握っていた。彼女もまた、戦っているのだと分かった。

「薄明のときは完成しとらんかったとやないか、ち俺は思うとる」

「彼らはまだ悩んでいる。それは永遠のものかもしれない。だが、停滞ではないのだ。敬一郎、君はそれに水を差そうというのかい」

敬一郎を抱きすくめたまま、海里は地球の映像を見せる。

「僕は確かめたいんだ」

必死に抗おうとする敬一郎に、海里はさらに言った。

「はつきり言おう。君がやろうとしていることは誰も望んでいないことだ」

一瞬、敬一郎の動きが止まった。

「すでに死に、その呪縛から逃れようと必死に頑張っている人たちを惑わせるつもりかい。君は満足かもしれない。だが、両親の気持ちを考えたことはあるかな」

敬一郎の抵抗がなくなった。海里は畳みかけるように最後通告する。

「君の肉体はもうないんだ。生き返る方法など……無い」

敬一郎は目を見開いて海里を見る。逆に海里は目を逸らした。

「方法が、無い？」

「そう、魂としての君は肉体を持たない。現世では肉体という防護服がなければ個人としての存在を確保し得ない。意識の全てが世界と同一化していることは違うのだよ」

なぜ、という言葉が先に出てきた。今までの海里の言動が思い起こされる。そう言えば、彼は具体的な復活の方法については全く触れていなかった。月が真円を描くとき、月の入口へ、と言った。だがそれは経過であり、結果ではない。それから先のことなど、何も彼は答えていない。

そういったことに思い及んだとき、敬一郎は叫んだ。

「騙したんだな」

そうじゃない、海里はそう言おうとした。だが、それよりも先に敬一郎は彼の腕をすり抜けていた。いくら海里が追いかけても無駄だった。敬一郎は水となり大気となり、あらゆる方法を使って現世への門に向かつていく。彼は今まさに自戒を破り、黄泉の住人として現世を目指そうとしていた。それは復活ではなく、迷走だった。死んだものとまだ生まれる前のものの世界から全てを取り込みながら、または取り込まれながら、意識の残骸としての彼は門を潜り抜ける。

「敬一郎！ 行くんじゃない」

海里の懇願も、届かない。霧に包まれたまま、敬一郎はただ一つの球体へと変化していく。その周囲をさらに闇が包み込んでいった。門は自然に口を閉ざそうとしていた。海里はそれ以上踏み出すことができずに、手を伸ばしたままその場に立ちつくした。

「敬一郎……」

呟く彼は、一人だった。この黄泉で、ただ一人の人間だった。

「行ってしまったか……」

海里は黒く光る門に触れる。「考える人」は閉ざされた門を見つめ、何事かを考えていた。

六

洋子の妊娠が分かってから三ヶ月後、恭二の個展が開催された。ギャラリーの入口には、「矢島海里・生命体験？」と銘打たれている。展示されている作品は全二十作品の全てが新作だ。

詩緒がドアを開くと、活気が伝わってきた。所々でざわめきが起こっている。すでに恭二の知人や取材の記者が数名見えた。恭二はその真ん中で一人一人に挨拶を交わしていた。隣にはお腹の大きくなった洋子がいて、それがまた皆の顔を微笑ませる。詩緒は作品の一つを前にする。詩緒も制作に携わっているものだ。

そこには、設計図だけが示されている。画廊では、表現できない作品だった。作品名は「仕事から帰ってきた父親が眠っている子供の顔を見るパート？」だ。

中身は実に単純だ。必要なものは指定された文章が書いてある紙と、一軒の家だけだ。

鑑賞者は、あらかじめ家のあちこちに文章の書かれた紙を貼っておく。

例えば「ただいま、とやや小さめの声で言う」とか「音を立てないようにドアを開く」などが書いてある。

鑑賞者はそれに従って行動する。そして、想像力を働かせるのだ。働き疲れ、家にやっと戻ってきた父親。電車では駅に停車する度に家路を急ぐ人々の表情を、その足取りを羨ましそうに眺めている。鈍く灯る街灯を頼りに、暗い道を歩く。彼は想像している。子供は今日、どんな遊びをしただろうか。滑り台は怖がらずに上れただろうか。その頂上で雲に乗れるか夢想しただろうか。それとも駆けっこをしただろうか。友達と泥だらけになりながら転げ回っただろう。

か。お母さんの言うことはちゃんと聞いているだろうか。嫌いな食べ物を残してないだろうか。玩具を片付けただろうか。まだ遊びたいと泣かなかっただろうか。寝る前に父親のことを思い出しただろうか。そうやってノブに手をかけるのだ。そつと開け、「ただいま」とやや小さめの声で挨拶をする。「お帰り」の声も小さい。そして続けて「もう寝てるの」と囁かれる。「分かってる」と父親は微笑む。忍び足で廊下を歩いた彼は鞆も置かず子供部屋のドアをそつと開ける。光の射すベッドの上に、まさに天使のように彼は眠っている。父親は彼に羽が生え、飛んでいってしまったのだろうか。と恐れを抱く。そつと部屋に入る。鞆を床に置く。ベッドの側に、跪く。柔らかそうな頬にキスをする。子供は僅かに身じろぎする。驚いて、父親は足早に部屋を立ち去る。しかし、その唇には子供の滑らかな頬の感触が残る。

詩緒は恭二と一緒にその作品を制作した。文章のアイデアは洋子も併せて三人で出した。人物の動きが自然になるか、感情の波と行動が一致しているか、不自然に感動を押しつけていないか、微妙なバランスの上で台詞や行動が決定された。

結果的にはどこの家庭でもありそうな状況だが、それ故に共感も呼びやすかった。この作品は、アイデアさえあれば誰でも作れるところがミソだった。恭二の狙いは、インスタレーションを展示場から飛び出させることだった。誰でもアートを体験し、それによって日常の何気ない風景を見直して欲しい。日々の色んな一場面に感動があるのだということを知って欲しかった。

詩緒は「薄明のとき」以来、初めて恭二に作品のコンセプトを詳細に語ってもらった。そして、その制作にも携わらせてもらった。それは恭二の発破だった。十分に詩緒にも分かっているのだが、まだ彼女は作品を思いつくことができていない。

恭二たちは忙しそうで、詩緒に気付かないでいた。それを良いことに、詩緒は一鑑賞者として作品を眺めていた。悲しいことだが、詩緒のように若い人間はこの場には数人しかいなかった。

その中に靖志の姿を見つけて、詩緒は近付いていく。彼はミルク飲み人形を自作の閉鎖型保育器に入れた作品を扱っていた。中の人形は約二千百五十グラムに調整されており、保育器付属の手袋で触ることができるようになっていた。

「靖志君、どげんね」

詩緒が声をかけた時、彼はちょうど手袋で赤ん坊の頭を撫でていたところだった。

「わっ、詩緒か。がば驚いた」

思わず大声を上げてしまった靖志は、急いで腕を抜き、恥ずかしそうに口を押さえる。周りを見回し、誰も注意を払っていないことを確かめると、ようやく詩緒と目を合わせた。

「悪かね、驚かせて。靖志君、初めてやなかとね、先生の作品ば見るとは」

苦笑しながら、詩緒は靖志に感想を聞いた。彼はやや興奮した様子で話し始めた。

「そげんよ。俺、前にネットとか福岡市美術館の図録とか見たとばってん、全然分からなかったと。なんがこげんとか面白いか、詩緒はおかしかなに弟子入りばしたとやな、ち思うとったたい。ばってん、これば見たらそげんこつは言われんことなつた。俺は小さか子供ば扱ったことはなけれど、これやったらなんか実感が湧くつた。ああ、子供っちこげんやろうかね、とか、小さかと可愛かね、とか。ばってんやつぱりっさい、大切かつちゃんね。絶対にのうなしとくなかと思うとよ。なんち言うか、もうこの保育器とかっさい、頑張れ、頑張つて生きんといかんよ、ち思うやんか。生まれるucci大変かね、生きるucci大変かね。ばってん、生まれるucci、生きるucci、良かこつやね、そげな実感があるとよ。やつぱ詩緒の先生やね。俺もこげな先生が欲しかばい」

一気に捲し立てる靖志を、詩緒は嬉しく思った。ここに、思いを共有できる人がいる。それだけで前に進めるような気がするのだ。
「靖志の先生やったらここにおけるやんね」

気恥ずかしさからそれを隠し、詩緒は戯けた。

「そげんやったね、すまん」

ペコリと頭を下げる靖志は、微笑んでいる。そんな二人を、洋子が見つけた。

「あら、詩緒ちゃんやないね。こっちに来んね」

そう言つて手招きした後、隣にいる靖志に気付く。

「そちらはどなた？ お友達……じゃないみたいやね」

勘の良い洋子はすぐに理解した。詩緒は照れ笑いを浮かべながら田中夫婦に寄つていった。

「先生、おめでとうございます。大盛況ですね」

詩緒が言つと、恭二は素直に礼を言う。

「ありがとうな。益田が手伝ってくれたおかげで間に合った。すまん、自分の作品は後に回さして」

「良かとですよ。どうせまだ何も思いついとらんですから」

「そげん言うな。お前はまだまだ悩んで良かくらいたい」

二人の掛け合いを靖志は眺めているしかなかった。入り込めないでいる彼を見て、洋子が助け船を出す。

「恭二さん、師弟の話も良かばってん、詩緒ちゃんが紹介したか人がおるらしかよ」

言われて初めて恭二は靖志の方を向いた。本当に今まで目にも入っていなかった。

「すまん、悪かね。初めまして、矢島海里です。今日は個展に来ていただいてありがとうございます」

丁寧に挨拶する恭二に、靖志は戸惑った。自分も挨拶せねば、と思いい、どんな風に言えば良いのか分からなくなってしまった。

どもりながら愛想笑いばかりを浮かべている靖志を見て、詩緒が間に入る。

「先生、紹介します。私の弟子の金田靖志君です」

何より、紹介された靖志が驚いていた。恭二は驚きよりも先に手が出てしまう。

「馬鹿か、お前は。何ば弟子やら取りよるとか」

軽く頭を叩かれただけが、詩緒が「痛かあ」と押さえる。それを見て靖志が食ってかかろうとし、さらにそれを止めようと洋子が割って入った。

「きさん……！」

「ちょ、ちよつと待って」

「こら洋子、お前何ば……」

「靖志君止めて！」

入り乱れる声に周りの視線が集まる。わけも分からず、とにかく止めねばと人々が四人を引き離れた。

その後、洋子はお腹の子供に悪いからと、別室に連れて行かれ、靖志たちはその場で和解した。靖志も恭二もお互いが謝り、詩緒も誤解の元を作ったことを謝罪した。それがきっかけで恭二は矢島海里の弟子を知人たちに改めて紹介し、話の和は丸く収まった。

再び恭二は人の対応に追われ始め、居心地の悪さを感じ始めた二人はお互いの家に戻る。

男橋、女橋を乗り越え、詩緒は河原を歩いていった。どたばたで終わってしまったが、詩緒は彼女なりに落ち込んでいた。

恭二の作品群は改めて見ても乗り越えることのできない壁のように思われた。そういった萎縮も、詩緒が大作を描けない理由の一つだった。

小川は心地よい音を立てながら流れていく。詩緒はその流れに身を浸したい気分になった。オフィーリアのように。もっとも、自分はまだ死ぬ気はない。まだまだやりたいことがあるのだ。

と、そこまで考えたときに敬一郎のことが頭に浮かぶ。あれから話すことができなくなってしまった彼は、一体どうなったのだろうか。

「薄明のときは完成しとらんかったとやないか、ち俺は思うとる」

恭二はそう言った後に作品をどこかに仕舞ってしまった。場所を聞くと恭二はこう言った。

「お前は薄明のときから何かばつかもうとしよるごたるが、止めとけ。どげんしたっちゃ真似にしかならん。それにっさい、あれはまだ変えないかんところがある。俺はお前にもそれば見せるつもりはなか。出来上がるまではな」

恭二は知らない。そこに敬一郎がいることを。それなのに、作品を改変するとはどういうことなのだろう。一体、恭二は敬一郎のことをどう思っているのだろうか。個展の作品はテーマが普遍的に変化しすぎていて、恭二個人の感情は読めなかった。敬一郎の肖像画が堂々と飾られていたが、それすらもアイコンのように象徴的に扱われているため、背景にある恭二の心情が見えてこないのだ。それが彼の望むところだとは分かっているが、詩緒は反発を覚えた。なぜもっと敬一郎を思ってやらないのだろう。彼は待っているのに。それとももう新しい子供の方にはかり目が向いてしまい、敬一郎のことなどどうでも良くなったのだろうか。

そういった方向に想像が向いたとき、自分のことを考えてしまう。以前に恭二が言ったことがある。私と敬一郎は同じなのだ。ど

ちらも葬られた人間だと。今思えば、恭二は酷いことを言っていると思う。例え、それが正鵠を射ているとしても。私はまだ葬られていない、そう信じたい。私は両親とつながっている、そう信じたい。詩緒は殊更に思いこんだ。刷り込むようにして。そうしないと自分がどうにかなってしまいそうだった。

倒れ込みそんな意識のふらつきを感じながら、詩緒は自宅への道をたどる。目指す家がとてつもなく遠く、余所余所しい感じがした。誰もいないと分かっている家に帰るのが、馬鹿らしくなってくる。

それでも詩緒が自宅のノブに鍵を挿すと、開いていた。

「あれ？ こんなに早い時間なのに」

詩緒は警戒した。まだ日が高いのに両親が帰ってきているはずがない。靖志に送ってきてもらえば良かった。今から電話しようか。しかしそれまで待つのも怖い気がした。恭二が一番近いところに住んでいるが、今は個展で家には誰もいない。

「どげんしょ、警察に連絡せんといかんかな」

それにしても本当に不審者かどうかの確認が必要だった。詩緒は音を立てないようにノブを回す。静かに開けてみると、玄関には一足の靴が放り出してあった。

見覚えのあるハイヒールを見て、胸を撫で下ろす。

「なーんね、お母さーん」

大声で母親を呼ぶ。奥の方からバタバタと何かを探す音が聞こえる。詩緒はハイヒールを揃えて置き、自分の靴を隣に並べてから音のする方へ向かう。

「お母さん、何で帰ってきてとるとね」

景子は詩緒に背を向けていた。

「大事な資料を印刷してただけだね。どこに行ったか分からなくなつたの。詩緒、知らない？」

「私を知るわけなかやんね。元のファイルはどこにあると」

詩緒の素朴な疑問に、景子が振り返る。

「そう言えばそうね。もう一回印刷すれば良かったわ」

あはは、と無防備に笑う。

「それ以前にファイルごと会社に持って行ったら良かやんね。メールで送っとっちゃろうか」

詩緒の申し出に、景子は「あつそ、じゃ、お願い」と素っ気なく応える。

用事を済ませた景子は、急いで部屋を出ようとする。それを、詩緒は腕を引っ張って止めた。

「どうしたの？ 急いでるんだけど」

景子は眉根を寄せて不審を顕わにしている。詩緒は先程、帰ってくるまでに頭をよぎった不安について、母親に問い質してみようと思ったのだ。

「お母さん、あの、進学のことなんだけど」

早口で詩緒は言った。景子は詩緒の目を見つめ返し、首をかしげた。

「大学のことがどうかしたの」

何でもないことのように問い返す。詩緒は気後れして尻すぼみな声になってしまう。

「あの、どこの大学にしようかな、と思って……」

伏し目がちになる詩緒に向けて頭上から声がかかる。

「詩緒が決めたらしいじゃない。好きにすれば？」

言い放つと、景子は手を振り解いて玄関に向かう。あまりのことに呆然としてしまった詩緒は、何も言えずにそれを見送った。

七

土手に座っていると、十月にしては肌寒い風が吹き抜けていく。

詩緒は上着の前を合わせ、靖志の肩に頭を乗せる。その行動に靖志は微かに反応した。

「ねえ、靖志君、酷いと思わん」

詩緒は寒くて制作できないのを良いことに、靖志に悩みの全てをぶつけていた。

「うーん、まあ詩緒の気持ちも分かるばってん」

靖志は相談事などされた例しがなく、曖昧な返事に終始していた。それが不満なのか、詩緒が靖志の腕を抓った。

「痛かよ」

「痛くしたもん。靖志君、聞いとると」

「聞いとるよ。そういうことは、中田に相談した方が良かつちやなかか？」

できることなら逃げたいと思う。根が気楽な靖志は、悩みとは無縁の存在だった。

「由衣は絵のことやらいつちよん分からんもん。それに、由衣やつたらたぶん、自分で考えなさい、って言うやろうと思う」

靖志は中田の顔を思い浮かべて頷いた。

「まあ、確かに。ようするに、詩緒には今、三つの悩みがあるっちゃろ」

自身の頭を整理する意味も込めて、彼は順番に項目を挙げていく。「一つ目は絵が描けななこと。二つ目は進学をどげんするかっこうこと。三つ目は両親と擦れ違っとること」

詩緒が頭を動かす。肩越しにそれが伝わってきて、肯定だと解釈

する。

「絵が描けんつち言うても、俺と一緒に描けとるやん」

二人は会う時はいつも一緒に制作する。同じ風景を見て、同じ絵を描くのだ。それは詩緒が靖志に教えるためにやっていることでもあるが、彼女にとっては共有した思い出を画面に残したいという気持ちもある。そうした時の詩緒は靖志が見ても楽しそうで、学校で見るとは違い、冗談を言ったりもするのだ。靖志は知らないが、その詩緒は田中家での振る舞いと同じだった。

「風景画を楽しんで描くのと、百号に自分の全てばぶつけるのとじゃ違つとるよ」

靖志にはまだ百号という大きさがピンと来ていなかった。それを言つと、詩緒は「私の身長と同じ」と答える。

「ちょ、立ってん」

靖志に言われるまま、詩緒は立ち上がる。それに合わせて彼も立つ。十センチ以上の差があった。

「へえ、こげん大きかとか」

靖志が掌を水平に動かして大きさを確かめる。すると、詩緒はいきなり座ってしまった。

「何で座るとか」

「何か馬鹿にされよるごたる」

「しとらんよ」

「分かつとる」

言い捨てて、詩緒は顔を背ける。靖志は立ったまま、詩緒の頭を撫でた。

「ちょ、なんばすつとね」

「まあ良かけん良かけん」

押さえつけるようにして、撫で続ける。最初は抵抗していた詩緒も、しばらくすると目を閉じてされるに任していた。そうしていると、なんだか落ち着いてくる気がするのだ。

「そのまま聞いてん」

靖志がいつもよりもトーンを落とした優しい声で言う。

「詩緒はっさい、たぶん焦つとるとよ。色んなことば」

その言葉に詩緒が反論しようとする。それを止めて、靖志が道筋を逸らす。

「俺とか、大学に行きたか、ち言うたら親に言われたとよ。お前んごたる頭が悪かとかが大学行つたつちや遊ぶばかりやろうが。それやったら早よ働かんか、ち。俺、言つたとたい。馬鹿言いなさんな、今時大学も出とらんでから就職の宛てやらなかよ。それに俺だつちややりたかことがあるとやけんね、つち」

詩緒が相槌を打つ。

「靖志君のやりたかこつちなんね」

彼は困ったように笑った。

「俺っさい、美大に行こうち思うとるとばってん、つち言つた」

詩緒が吹き出す。どう考えても絵を描き始めて数ヶ月の彼が美大に通るはずがない。

「馬鹿やなかと？ で、なんち言われたと」

「詩緒が言つたごつ言われた。馬鹿やなかか、お前は世迷い言ば言うつらんでちゃんと自分が通りそうな大学ば探さんか、げな」

二人で笑っていた。ひとしきり笑った後、靖志が座り、真面目な顔をして詩緒を見つめる。

「詩緒、お前のお母さん、良か人やんか」

「どこがよ」

詩緒が反発するが、靖志は首を振る。

「うんにや、俺の話ば聞いたろうが。普通やつたらあげんせろ、こげんせろつち口出すし、金やら、色々な問題があるけん、なかなか自分の考えばかりは通らんとよ。詩緒のお母さんは好きにしたら良か、詩緒が決めて良かつち言つたつちやる。それは、詩緒が考えて決めたことやつたら認めちやるよ、つちうことやなかとね」

言われて、詩緒は改めて母親の言葉を反芻してみる。だが、残念なことに彼女はその時の景子の表情を見ていなかった。声の調子も

単調で、抑揚がなかった。そこから、彼女の真意を読み取ることはできなかったのだ。

「私には……分かんよ」

自信なく応える詩緒に、靖志はさらに言った。

「絵もそうやし、大学もそうやと俺は思うよ。詩緒の思う通りにしたら良かやん。感じる通りにしたら良かやん。誰にも遠慮することはなかよ」

それでも、詩緒は俯いている。

「まああれだ、何かあったら俺がついとるし」

照れながら言うと、詩緒が下を向いたままで反論する。

「靖志君じゃ猫の手にもならんよ」

「ぐ、まあ俺じゃ師匠の役には立たんわな」

素直に認める。しかし、それではいけないと靖志は詩緒の肩をつかんだ。

「いつまで落ち込んでるとか。いい加減にせんか」

「なんね、逆ギレね」

「そうじゃなか。詩緒は絵ば描かんといかんたい。そうじゃなかと詩緒っち言わんよ。誰が見たってそうやろうもん。例えば会つとらんでも、お母さんだっちゃ分かつとるばい」

詩緒は靖志を睨み付ける。彼に怒っても仕方がないことは分かっている。それでも、心は晴れない。詩緒は分かっていたのだ、自分の気持ちを。ただ、慰めて欲しかっただけなのだ。

「そげなこと言ったっちゃ、分かんやないね」

駄々をこねる詩緒に、靖志は言葉を尽くした。話は平行線をたどる。詩緒は何を言っても聞き入れてはくれなかった。最後には二人とも黙り込んでしまう。

詩緒は川を見た。筑後川はいつも変わらず悠々と流れている。彼女はもう一度思った。この川に流れてみたいと。ただ、たゆたい、空を眺めてみたい。そうしてどこかに消えて行くのも良いかもしれない。

シュプレマティズムに裏付けされた川の舳先を見つめている。その詩緒を、靖志は見つめていた。彼女は疲れているのだ。信じることに。一つの歯車が狂うと、全てが狂ってしまうことがあるものだ。靖志は少しでも力になりたかった。だが、今、彼の言葉は詩緒には届かない。時間をおくことも、必要なかもしれない。靖志はそう考えて立ち上がる。

「俺、帰るけん。詩緒も少し休みいよ。それが良かと思う」

振り返った詩緒を待たずに、靖志は帰ってしまった。

「靖志君……」

怒らせてしまった、と詩緒は感じた。こうして私は何もかも失ってしまふのだろうか。

それから一時間ほど、詩緒は川の流れを眺めていた。浮かんでは消え、思いついては否定する。詩緒はがんじがらめになっていた。薄明のときの呪縛にかかっていた。恭二がそうであったように、詩緒も頭の奥底にあるものが取り出せないでいた。

答えは出ているのだ。おそらく、全ての回答は分かっているのだ。なのに悩んでいるのは、思い切りがつかないからだ。詩緒にはきっかけが必要だった。

空を見上げると、雲行きが怪しい。その黒い空は、恭二の所に弟子入りしたあの日を思い出させる。あの時の詩緒には勇気があった。懸命さがあった。今の彼女には曇天のように錘がぶら下がっている。「帰ろ」

呟いて立ち上がる。重い足取りで一步一步道を踏みしめる。葬送の行進のように、詩緒は陰をまもっていた。その陰も、やがて降り出した雨に流されていく。

雨に追われるようにして詩緒は家に入った。

「ただいま」

声をかけても、誰もいないのは分かっていた。それ以前に家内は暗かった。曇りから室内の暗さに鞍替えし、それは彼女を押し潰した。自然に溜息が出てくる。

詩緒は電灯を点けようとスイッチに手を伸ばしかけて、光に気が付いた。

「留守電？」

明かりを点けて、詩緒は電話機の前に歩み寄る。家を象ったボタンの赤く光っていた。

首をかしげながら詩緒はそれを押す。

父親からだった。

「詩緒、誕生日おめでとう。今年も祝えんで悪かね。いつもご飯ば作ってくれてありがとう。毎日、楽しみにしてるよ。悪か親でほんなこつすまん……………詩緒、今度休みに時間が合ったら、一緒に絵ば描きに行かんか。チチは下手やけど、それでも良かったら……………詩緒……………あい」

そこでメッセージは切れていた。父親の、精一杯だった。

「馬鹿やね、どうせ時間やらなかクセに」

そう言いながらも、詩緒は笑っていた。

自分でも忘れていた誕生日を、父親が覚えていたことが嬉しかった。胸の奥から溢れてくる震えを、詩緒は押さえることができなかった。

次のメッセージは母親からだった。

「詩緒、誕生日おめでとう。この前はごめんね、ちゃんと話し聞けんで。今度の日曜日に休みば取ったけん、ちゃんと話そう。ハハはね、詩緒がやりたいことをやって欲しかち思うよ。ずっと我慢させてきたけんね。いつもありがとう。それじゃまた日曜日にね」

電話の前から離れることができなかった。詩緒は何度もメッセージを再生し、覚えるほどに聞き込んだ。

夕食を食べることも忘れ、詩緒は自室に戻って涙を流した。繋がっていた。葬られていなかった。クローゼットから引っ張り出した

絵を眺める。詩緒の誕生を描いた作品だった。二人とも微笑んでいる。泣いているのは詩緒だけだ。元気に泣いている。それを温かく抱きしめてくれている。何も心配する必要など無かった。何もなくても、益田家は繋がっていた。

しばらくそうしていた詩緒は、携帯電話を取り出し、靖志に連絡する。夜十時にも関わらず、彼はワンコールで取ってくれた。
「どげんした、大丈夫か」

一番に詩緒の心配をしてくれる。その声を聞いて、自分を恥じた。私はこんなに恵まれている。何を悲観することがあるだろう。

「何もなかよ。謝りたかったと」

「何ばね」

ほんの少し黙り込んだ。あれだけ我俣を言っておいて、謝るのがなんだか恥ずかしかった。

それを隠すために、詩緒はベランダに向かう。風の中なら、言える気がしていた。

雨はちょうど止んだところだった。秋から冬に移り変わる、心地よく肌寒い風が吹き抜けていた。

「靖志君、ごめんね。言う通りやった」

詩緒は留守番電話のことを話す。靖志は満足そうに頷いた。

「そうか、良かったな」

「うん」

靖志の声が優しく響く。なぜ、彼の声はこんなにも心に染み入ってくるのだろう。目を閉じて、彼の話しに触れる。

「詩緒、感じる通りにやってみてん。それが、芸術家っちうもんやろ」

彼の声は戯けているようだった。詩緒は少し笑った。

「靖志君」

「ん？」

「私、美大受ける」

「そうか。別の大学になっても、見捨てんでくれよ」

今度は澁刺と笑った。気持ち良かった。靖志といて安心できるのは、彼がいつも詩緒を楽しませてくれようとしているからだ。詩緒はそのことによく気付いた。

「そげんことせんよ」

詩緒も負けずに返す。緊張しないのだ。まるで恋愛している感じがしない。だが、それだからこそ安心する。

「ありがとうね」

心から礼を言っ、詩緒は深呼吸するために顔を上げた。

そこに、月が顔を見せていた。目の端に映る満月は、いつもより大きく感じる。丸い縁をぼんやりと滲ませて、夜に溶け込もうとしていた。

明るい空は町を浮き彫りにさせていた。エンボスをかけたように凹凸をはっきりとさせて。夜なのに昼のようだ。詩緒はまともに満月を見たことがなかったことに気が付いた。

「靖志君、空、見て」

スピーカーの向こうで、窓を開ける音がした。しばらく、二人とも黙って月を見ていた。はっきりと月の模様が見える。恭二が言っていた。月の模様が兎に見える、と。

目を細めて眺めていると、確かにそのように見える。腰を曲げて、大きな耳を立てて。巨大な兎が小さな臼についている。

月から敬一郎を連想した。彼はまだ檻の中だろうか。ずっとそこから動けないのだろうか。

「敬一郎も、一緒に餅ばつけると良かとにね」

詩緒の呟きを、靖志がオウム返しに聞いた。

「敬一郎？」

詩緒は恭二の息子について話した。靖志は、ただ頷き、聞いてくれた。それについて、何の評価もしなかった。昼間までの詩緒だったら、それを非難だと受け取っただろう。

しかし、今は違った。

詩緒と靖志は繋がっていた。彼らは離れた場所にいても、同じ景

色を見ている。同じ満月を見ている。

何も心配することはない。私は死者ではない。現世で彼と繋がっている。

詩緒は思った。お父さんとお母さんも、この月を見ているだろうか、と。

「詩緒、反対側ば見てん」

靖志が大きな声を上げる。興奮しているようで、何度も急かす。

「ちょ、ちょっと待って。今見るけん……」

ベランダから見える満月の反対側、右側の端に、空の一部がおかしな色をしている。

「なんかあるね」

靖志は応えなかった。詩緒は目を凝らしてその部分を見る。円弧を描く、数種類の色が分かる。一番はつきりしているのは黄色だった。その上に赤、そして黄色を挟んで、青が見える。微かに、緑色も見えるような気がした。

そうした色の構成に気付いた時、詩緒の口から言葉が零れていた。

「虹……？」

「そげんたい。虹やなかね」

靖志が肯定した。

昼間ほどはつきりと見えなくても、きちんとした橋を架けている。やや白っぽい月虹は、星の煌めきの間を駆け抜けていた。

「夜にも、虹が見えるよね」

詩緒が疑問を口にする。

「俺にも分かん。ばってん、こげん明るかつちゃけん、虹くらい出たつちやおかしくなかつちやなか。昼も夜も、一続きなんやけん」

靖志は何気なく、戯けたように言った。その言葉を、詩緒が繰り返す。

「昼も夜も……一続き」

「そげんたい。明るくなつたつちや暗くなつたつちや、地球が地球つちうことに変わりはなかるうもん」

「そうだね。そう……」

詩緒には靖志の声が届いていなかった。もう、彼女は自らの思考の中に入り込んでいたのだ。

月虹はすでに消えつつあった。雨上がりの明るい夜に、ほんの少しだけ現れる幻のようだった。

詩緒の頭の中で、目まぐるしく景色が変化していく。意識と意思出と現実が混ざり合い融け合って一つの光景を構成する。

「詩緒……？」

靖志が声をかける。だが、詩緒は応えなかった。彼女の脳は今、構成されたものの実現に向けた要素の組成に取りかかっていた。

携帯を放り出してクローゼットを漁る。覚えている限りではそれは存在していた。

「おい、詩緒お」

靖志は声を掛け続けたが、その内に向こう側で何か忙しそうな音がしているのに気付くと通話を切った。彼の胸に完成間近の絵を描いている時の、あの真剣な詩緒の表情が思い浮かぶ。張り詰め、一時も揺るがず、声をかけても聞こえない。そんな時の彼女は美しかった。

「何かつかんだごたるね」

満足そうに靖志は背伸びをした。急に眠気が襲ってくる。まるで何かが乗り移ったかのようにだった。

「睡魔さんいらっしやい、かな」

靖志はなおも戯けて、ベッドに入る。間もなく、彼は眠りについてた。

詩緒はその晩、三枚の素描を仕上げた。自分の考えたものがどういった風に出来上がるのか、確かめたかったのだ。

一枚は鉛筆で大まかに、二枚目は色の配置だけを、そして三枚目は画材を試していた。

暗くなりすぎないように配慮するのが大変だと詩緒は独白する。そのための画材だった。

誰のためでもなく、そして自分のためでもなく、詩緒はこの大画面のための作品を描こうと思った。

八

田中家のアトリエで、詩緒は一番中央に陣取っていた。恭二は端の方で詩緒の制作を眺めている。もう二週間になる。その間、彼は自分の制作を止め、彼女の動きを見守った。

「最初は無理やなかかち思ってたが」

恭二はその絵に見とれていた。鮮やかな色合いと、優しさに溢れていた。

自分の身長と同じ大きさの画面に、詩緒はオイルパステルで立ち向かった。

最初はクレヨンで、と思っていた。それが上手くいかなかった。クレヨンでは重ね塗りができない。相乗した色の溶け合いは、この作品に重要な要素だった。

何度も試作をこなした。クレヨンだけではなく、色鉛筆、油絵の具、水彩、アクリル、ソフトパステルなどなど。しかしどれも詩緒の想像した色が出ない。条件は発色が良く、透明性があり、定着が良いこと。それらを満たすのは、オイルパステルだけだった。

それに、オイルパステルは使い方にも幅があった。普通に塗るだけでなく、テレピン油に溶かして塗ったり、熱で溶かして盛り上げたりもできる。

詩緒は今、ペインティングナイフでエッジを整えていた。塗り込まれた空の蒼はどこまでも広く感じさせた。浮き彫りにされた町はどこか懐かしさを感じさせた。

周りの音など耳に入らない。詩緒がいつも感じるあの瞬間が訪れる。水の中に潜ったような、静かな時間。息が詰まるような心地がする。鰓で呼吸をするのだ。

彼女は時間と空間に溶けていた。緩やかに画面と詩緒が近付いていく。目の前に見える風景は、詩緒のものだった。手を伸ばせばそこに手が届く。泳ぐことができる。

詩緒がカンバスと一つになった。外界の音が、揺らいで聞こえる。視界が四角に区切られる。世界は詩緒と一つになる。

パステルは、空気のようにふわりと画面に乗った。

詩緒の手は次々に色を操っていく。何の躊躇もなく、ただ動くままに動いていた。恭二はその様を舞っているようだと思った。

残るは全体の微調整だけだった。詩緒は後ろに下がって画面を眺め、そのどこかに違和感がないかを確かめていた。うん、と彼女は頷く。

最後の一筆を乗せた時、詩緒はカンバスが輝いたように感じた。

胸の中が、澄み渡って行く。それは、彼女の心が画面に全て乗り移った証拠だった。次第に詩緒は現世へと戻ってきていた。今気が付いたかのように恭二の方を振り返る。

「終わったごたるな」

恭二が後ろから拍手をしてくれた。全身の力が抜ける。心地良い疲れが、微笑みを運んで来た。この喜びを、早く洋子にも伝えたいと、まず考えた。

その時、玄関でチャイムが鳴る。

「誰やるうか」

詩緒はフィクサチーフでパステルの顔料を画面に定着させていた。洋子の「はい」という声が、ドアの向こうから聞こえる。

「先生、今日は誰か来る予定やったのですか」

詩緒が聞くと、彼は否定した。

「セールスかなんかやるうか」

と詩？が言った時、洋子の声が聞こえた。

「あら……君は」

「お母さん」

「きゃあ」

洋子の悲鳴に、恭二が飛び出す。詩？も定着液の缶を置いて部屋を出た。

「なんかお前は」

恭二の声を聞いて玄関の方を見る。

「靖志君、どうしたの」

そこにいたのは、田中家の場所を知らないはずの靖志だった。彼は恭二と洋子に向かって、何度も呼びかけている。

「お父さん、お母さん」

「お前にお父さんやら言われる筋合いはなか。それに、俺は詩緒の父親でも何でもなかぞ」

何かを勘違いした恭二がそう応える。だが、靖志は熱っぽい目で二人を見て、なおも語りかけるのだった。

「何を言ってるのさ。僕だよ、敬一郎だよ」

大きく手を振って、まるで駄々っ子のように地団駄を踏む。普段の靖志とはまるで違っていた。

「君、ふざけるのは止めてもらえる。そうでなくてもいきなりの訪問で驚いているの」

洋子も不快感を顔わにしている。押し問答のようなやりとりは続いた。恭二たちは意味が分からず彼を帰そうとするが、靖志は同じことを繰り返して分かってもらおうとしている。

遂に、恭二は洋子に警察に電話するように指示した。

だが、詩緒には段々と理解できてきた。彼は必死に自分が敬一郎であることを伝えているのだ。

「ちょ、ちょっと待ってもらえんですか」

詩緒は三人の間に割って入った。許可を得る前に、靖志に向かって話し始める。

「靖志君……じゃなくて……敬一郎なんやろ？」

落ち着かせようと、肩をつかんで目を合わせる。取り乱していた靖志は、詩緒であることをみとめると笑みを浮かべた。

「あ、詩緒、良かった。詩緒なら分かってくれるよね」

「やっぱり敬一郎っちゃんね。ちゅうことは、復活できた？」

彼が頷く。二人だけの会話に、田中夫婦は入り込めないでいる。

だが、徐々に目の前にいる靖志が、敬一郎なのだということが分かってくる。ただし、納得はできなかった。

詩緒は靖志だということを忘れて敬一郎を抱きしめた。

「良かったねえ」

敬一郎と共に喜ぶ。彼は今までの経緯を話し始めた。

「檻からはウサギさんが出してくれたんだよ。でも、そのウサギは僕の弟の片割れだったんだ。で、海里が邪魔しに来ただけで、僕はそれを振り切って現世への門を潜ったんだよ」

一息で話す敬一郎だったが、その意味は恭二と洋子には分からない。だが、詩緒は何度か話したことがあったため、ある程度の意味をつかめた。

「そうやったとね。大変かね」

そこでようやく、洋子が口を挟んだ。

「ちょ、ちよっと待って、詩緒ちゃん」

「なんですか」

「もしかして、本当に彼が敬一郎なの？」

「本人がそう言いよるやなかですか」

きょんとした顔で詩緒が返す。

「どうということなんか、説明してもらって良かな。何で詩緒ちゃんだけが分かった」

洋子は居間に案内する。そこで話を聞かせてもらおうというのだ。恭二は一言も口にせず、ただ成り行きを見守っている。

「順番に話すけん、ちゃんと聞いとってくださいね。本当は敬一郎が自分で話した方が良かとやろうけど、何せ享年ゼロ歳やけん、話し方が下手かとよ」

詩緒は話し始めた。それは敬一郎の話から類推したことも混じった、一方的な物語だった。

「敬一郎は死んでから、月に行つとったとよ。黄泉、っちも言うつつた。そこで、先生と奥さんのことばずつと見よつたらしか」

月、と恭二が呟いたが、質問には至らなかった。洋子は黙って聞いている。敬一郎は何事か付け加えたそうだったが、詩緒に止められて話すことができなかった。

「敬一郎はそこで海里っちう人物と出会うつ。もちろん、先生とは違うばい。ばってん、先生も関係しとる」

「なんち」

恭二が立ち上がろうとする。それを洋子が抑え、詩緒に促す。詩緒は気圧されながらも口を開く。

「これは敬一郎に聞かんといかんとはってんが、海里っちいうんは先生の感情とか、意志のことやなかと？」

敬一郎は俯いた。考えているようだった。しばらく時間が経ったが、誰も動かない。敬一郎は俯いたままで答えた。

「たぶん、そうなんだろうと思う。でも、そうじゃないとも思っんだ」

「それは、どげんことね」

敬一郎は言葉を選びながら話す。

「海里は言っていた。月では……あの死んだものとまだ生まれる前のもののある場所では、全ての意識が全てに影響を与える。だから、僕の意志によって道ができたり、障害が生まれたりした。でも、その一方で現世の影響も受けているみたいなんだ。何しろ、黄泉と現世は表裏一体、一つのものなんだから。海里はお父さんの影響が大きかった、とも言っていた。だから、詩緒の言っていることはある意味じゃ当たりなんだと思う。でも、それだけじゃないみたいなんだ」

敬一郎は言い淀んだ。自分でもどう整理して良いか分からないようだった。彼が気にしているのは「現世と交わったもの」と「意識の海」というウサギの台詞だった。

もし、黄泉にいる人間が全て意識の海に溶けるのならば、海里はなぜ存在できているのだろう。弟であった、今から生まれる人間がその形を表すのなら分かるが、海里は違う。それに彼は管理人のよくなものだとも言っていた。

「僕は……海里は僕と同じなんじゃないかと思うんだ」

詩緒が「なぜ」と疑問を挟もうとした時、どこからか声が聞こえ

る。

「正解だよ、敬一郎」

その声は、全体から聞こえて来た。どこからでもなく、自分の中から聞こえてくるようにも思えた。

「誰か？」

恭二が、今度こそ立ち上がり、周りを見渡す。誰もいなかった。いるはずがない。

「海里っ」

敬一郎が叫んだ。靖志の姿でそうしていると、ゼロ歳児とは思えない。

「海里……この人が」

詩緒は耳を澄ませて音の出所を探った。あの時のように、絵の中から声がしているのではないかと思ったのだ。

「どこにおるとか。出てこんか」

痺れを切らして恭二が怒る。洋子も不安そうに縮こまっていた。「探しても無駄だよ。私はどこにもいない。門から話しているのだからね」

声はどの絵からも聞こえていなかった。やはり、自分の中から聞こえてくるという言い方が正しいようだった。

「門っちなんか」

恭二が聞く。海里が答える。

「矢島海里先生だったら当然ご存じだと思うよ。ヒントをあげよう。ロダンだ」

それは奇妙な光景だった。全ては一人芝居なのではないかと思ってしまう。

「地獄の門、か」

恭二はその名を答えた。詩緒にも聞き覚えがあつた。オーギュスト・ロダンがダントの「神曲」の場面を想定して作成した、地獄への入口だ。残念ながら未完に終わっているが。考える人、が据え付けられていることでも有名だ。

「そう、地獄への入口だ。ただし、敬一郎が潜ったその門の先、つまり現世が地獄というわけではない。肝心なのはその碑文だよ」

思わせぶりの海里の言葉に、恭二は反応する。

「この門を潜る者、一切の望みを捨てよ」

敬一郎は感心した。自分ではさっぱり分からなかった海里の会話を、恭二はしっかりと受け止めている。

「お父さんすごい」

呟く敬一郎とは逆に、詩緒は胸を痛めていた。門の碑文が、あまりにも哀しすぎたからだ。海里によれば、この世は地獄とまではいかないまでも、望みは捨てなければならぬ場所だというのだ。

「そんなこと……」

詩緒の言葉に洋子が顔をしかめる。手招きをし、詩緒を抱きしめた。

「詩緒ちゃん、分かるとよ」

頭を撫でる洋子を、詩緒は上目遣いに見た。洋子は泣いていた。それを恭二は見ていた。彼には分かっていた。碑文は誰にとっても哀しいことが書かれてあるが、その視点を敬一郎に向けた時、それは別の意味で悲しみを持つのだ。

「海里っち呼んで良かか」

どこを向いて良いか分からず、仕方なく天井を向いて話す。

「どうぞ。さすがに私のウツツの寄生木。良く分かっている」

先回りして褒めている。そのふざけた調子を振り切るようにして、恭二は声を振り絞る。

「敬一郎は蘇ろうとしたっちゃんうが。お前は止めようとしたっちゃんかか」

海里は沈黙した。恭二の言葉の先を促している。

「海里、お前は知つとるっちゃん。蘇ろうとした人間がどげんなるか」

まだ、海里は沈黙している。敬一郎が顔を上げて父を見た。

「お前んごつなる。それがどげな状態か俺は知らん。ばってん、それが望みのなかこつやろうつちうことは分かる」

詩緒が声を上げた。

「望みのないって、どげなこつですか」

詩緒の言葉は、海里に向けたものだった。しかし、海里は何も答えない。

誰も、その先が分からず、黙ったままでいた。この状況が良いものか、悪いものかすら判断できないでいる。

一つだけ確実なことは、敬一郎がこの場にいる。それだけだった。そんな中で、敬一郎が話し始める。

「僕は、気が付くと月にいた」

小さな声だったが、皆が振り向いた。海里さえも、そちらを注視しているように思えた。

「最初は何も分からなかったけど、隣に浮かんでいる地球を眺めているのは楽しかった。

そこには、お父さんやお母さんが映っていた。僕は思い出していたんだ。自分の名前、お父さんたちのこと、そして自分が死んでしまったこと。

そんな時だった、海里と出会ったのは。

彼は色んなことを教えてくれた。僕がいる場所、月のこと。そこは死んだものとまだ生まれる前のものが住む場所で、誰もがそこと現世とを行き来しているということ。ただし、そのためには輪廻という輪を潜り、新しい生命として生まれなければならないこと。

僕は、僕のままで生きたかった。生まれて三日目で死んでしまったなんて、やりきれなかった。見ている内に、どうしてもお父さんたちの所に帰りたくなっていたんだ。

海里は手伝うと言ってくれた。月が真円を描く時、月の入口に行けば、復活できるって言った。僕はその言葉を信じて、長い長い旅を続けたんだ。

ついに月の入口にたどり着いた時、僕は見たんだ。お父さんが絵を完成させて、そこにサインをするのを。そこには、矢島海里、つて書いてあった。その時、僕は閉じこめられたんだ。海里によって、檻の中に。

檻の中で、僕はお父さんやお母さん、そして詩緒のことを見てい

た。お父さんが新しく一步を踏み出すところも。詩緒が悩んでいるところも。

寂しかった。誰もいなかった。いや、一人だけ通った。おじいさんだ。出して、って言ったけど、出してくれなかった。順番だって言っ

そんな時、僕はウサギさんに出会った。

檻から出してくれたんだ。それからあつという間さ。月の入口まですぐに到着した。前のことが嘘だったみたいに。

でも、そこにも海里はいた。そして、出してくれなかったおじいさんも。海里は言ったんだ。そのおじいさんが僕の弟だって。君は意識の海に溶けるんだって。そうすれば輪廻できるって。おじいさんはウサギと合体して現世に行ってしまった。

僕は、その後を追って門を潜ったんだ。

これが僕の知っている全て。

ねえ、分かってよ。何で皆、難しい話をしているの。僕のことを喜んでくれないの」

長い話だった。彼が死に、そしてこの場所に戻ってくるまで、三年もかかっていた。

皆が彼を見ていた。確かに、誰も笑顔は見せていなかった。そして、誰も笑顔を見せようとはしなかった。

今、語られたことが全てを繋げていた。

敬一郎がこれからどうなるのか。敬一郎以外の皆が分かっていた。彼は涙を流しながら自分を理解してくれない両親を責めていた。

詩緒はその姿が靖志であることなど、気にならなくなっていた。

彼女の目には、靖志は敬一郎として映っていた。

洋子は唇を噛み締めて、敬一郎の言葉を受け止めていた。口に出すことが恐ろしかった。

恭二だけが、彼の視線をまっすぐ受け止めていた。何も語ろうとしない海里を無視し、敬一郎に話しかける。

「敬一郎……」

恭二は息子の名を呼んだ。彼は涙で顔をぐしゃぐしゃにしながら恭二を見つめる。

「なあに？」

「俺は、敬一郎に幸せになつてもらいたか」
そう言つて立ち上がった。

「来んか。お前に見せたかもんがある」

一緒に、洋子も立ち上がる。二人は連れ添つてドアを潜つた。詩緒がその背中に声をかける。

「私も、良かですか」

恭二が振り返つた。

「当たり前やろうが。早よ来んか」

不安を抱えたままで、詩緒は廊下に出る。

九

二人は寝室に向かっていた。この田中家で、詩緒が唯一入ったことのない場所だった。

アトリエの奥にあるドアを勢いよく開く。八畳の寝室は、ベッドと鏡台、それにタンスがあるだけの簡素なものだった。

その壁に、大きな絵が飾ってある。

ベッドに寝て、ちょうど正面に見える位置に、百号もの大きさを持ったその絵はあった。

「薄明のとき」

敬一郎が呟いた。黄泉で見るよりも迫力があつた。立体感を伴って迫ってくる画面により、深い青に取り込まれそうになる。

敬一郎は改めて作品を眺めた。その後ろから、詩緒が戸惑いながら呟く。

「変わってる」

一目で分かる変化だった。毎日眺めていた詩緒でなくとも分かる。ただ、見取れていた敬一郎はすぐには気が付かなかった。

「そげんたい。敬一郎、すまん」

向き直った恭二が謝罪した。

「お父さん、どうしたの？」

敬一郎は慌てている。詩緒はそれ以上何も言わず、見ていようと決めた。これは、親子の儀式だ。彼女は絵を見た時に、それが意味するものが分かっていたのだ。

「敬一郎、檻に入れられとったっちゃろうが。それは俺のせいやろう」

話し続けようとする恭二を、敬一郎が止めた。

「お父さん、良いんだよ。全部分かつて。海里が言っていたよ。現世では人は自分を疑うことができないって。そうしたら自分で無くなってしまうって。お父さんは、僕がいることで、自分で無くなってしまうところだったんだよね。僕は見てたよ。お父さんがどんな風にこの絵を描いたのか。どんなに苦勞して立ち直っていったのか。だから、もう謝らないで」

敬一郎は辿々しい口ぶりで、自分なりの理解を話した。そして、それは演繹的ながらも的を射ていたのだ。不意を突かれて、恭二は何も言えなかった。息子がそこまで理解しているとは思わなかったのだ。

「そうか、敬一郎にはなんもかんも分かつとるとやな」

「当たり前だよ。死んだものとまだ生まれる前のものの世界では、全てが溶け合っているんだ。皆のことが、自然に分かるようになってるんだよ」

敬一郎の言葉に乗せて、恭二が返す。

「そうやったか。俺も、敬一郎にそげん思われて嬉しか。ばってん、俺は思うとよ。敬一郎は今、全部が溶けて、自然に皆のことが分かる、ち言つたな」

敬一郎が頷いた。

「やったら、何で敬一郎はここにおるとや。一人だけ人間の格好ばしてから、動くことができたとや」

今度は微動だにできなかった。彼の許容の範囲を超えていた。

「敬一郎、お前のやろうとしとることは、自然なことやなかとやなかか。もしそうやったら、止めてもらいたかとよ」

恭二の右目から、一筋の涙が流れる。敬一郎は俯き、頬を震わせていた。

洋子はそんな敬一郎の手を取り、下から顔を覗いた。彼は我慢している。涙をこぼすまいと。自分が間違っていることを認めたくなかったのだ。

「敬一郎、私たちは嬉しかとよ。敬一郎がこげんまでしてくれて、

会いに来てくれて。もう会えんやろうち思うとったけん、嬉しかった。ばってんね、お父さんもお母さんも、願うとは敬一郎の幸せつたい。もし、このことで敬一郎が良くなかことになるをやったら、戻って欲しかとよ」

洋子の言葉は重く、引き裂かれるような響きを持っていた。それに被さるようにして、ようやく海里が重い腰を上げる。

「敬一郎、君がもし本当に復活を遂げてしまえば、彼らは戸惑い、まともな生活を送れなくなるだろう。なぜなら、彼らの中で君はもう死んでいるからだ。死んだものは生き返らない。それはルールでもあり、彼らが先に進むための保険でもあるんだよ。それが確約されることで、彼らは君を思い出にできる。もし生き返るかもしれないと思っていてごらん。彼らはいつまでも復活を願ってやまないだろう。何度君が死んでもだ。そして、それは君にとっても同じことだ。復活を遂げ、そのまま暮らし、両親が先に死んだとして、君は納得できるだろうか。復活を願うのではないかね。そうしたとき、君はあの長く辛い道のりを彼らに辿らせるつもりなのかな」

その言葉を、恭二も洋子も否定しなかった。むしろ肯定するかのようにお互い、顔を見合わせていた。何も言わなくても、分かっているのだ。どうすればいいのかを。

恭二と洋子は確認しあっているようだった。本当に後悔しないのか、納得できるのか。二人の目に迷いはなかった。恭二は、想いの全てを伝えるために壁の方を振り返った。

「これば見てくれんか。薄明のとき、新しく描き足したつたい」

指差された箇所、明るい星が描き足されていた。記号的で、分かりやすい星だった。それだけに、ひととき大きな輝きを見せる。太陽と月に挟まれて、星は分厚く塗り込められていた。原色に近い黄色を何度も何度も塗り重ねて。元々タッチが色濃く残る作品だったが、そのことによって平面的な絵画ではなく、フランク・ステラの立体絵画のような印象を持たせていた。星に引っ張られるようにして、月も太陽も画面を飛び出していた。こちらに迫ってくるよう

な、強烈な印象だった。

詩緒は、なぜこの描き足しの制作風景を見せてくれなかったのか疑問に思っていた。だがそれはこの作品を見たときに氷解した。もうこの作品は公共の絵ではなかった。恭二と洋子と敬一郎、そしてこれから生まれてくるであろう二人目の子供のための……田中家のための作品だった。

「これは、敬一郎たい」

真ん中の星を指して言う。しかし、敬一郎を見てはいなかった。

「それと……洋子のお腹にある、お前の弟でもあるったい」

詩緒の方から恭二の表情は見えない。たぶん、苦渋の表情をしているだろうと彼女は思う。

「俺らにとっては、二人とも、おんなし子供たい。二人とも大事か離しとうなか。ばってん、大事かけん、お前が輪廻の輪から外れるとば見過ごすことはできんたい」

遂に、恭二は口にした。敬一郎が「え」と声を漏らす。

「海里、さっきお前は言うたな。敬一郎とお前がおんなしっち。それは、お前もこうやって蘇ったことがあるとやろう？」

すでに、海里の声は天井から聞こえるようになっていた。位置が定まったのは、皆がその現象に慣れたからだ。

「その通りだ。かつて、私も現世へ復帰した。そして再度天寿を全うしたのだ」

「じゃあなぜ僕の邪魔をしたのさ」

敬一郎が問う。

「君は相変わらず話しを聞かないな。再び黄泉に戻った私は、後悔したよ。君にはまだ詳しいことを話していなかったな。普通は黄泉に行き、自分が死んだことを理解した人間は意識の海という乳白色の液体となり、そこで輪廻の時を待つ。彼らは自在に過ぎず。魚になったり、鳥になったり、まあ中にはブランクや雲になったりするものもいるだろう。山や川になるもの、道になるものもいたな。面白かったのは月になったり地球になったりした奴がいたことだ。もう分かっただろう。敬一郎が見ていたあの世界は全て死んだ生命、もしくはこれから生まれる生命だったんだよ」

丘が動いたり、景色が急に変わったのも、そのせいだったのか。敬一郎は一人だけ納得した。他の三人は二人のやりとりを注意して聞いている。

「さて、黄泉に戻った僕は今度こそ満足し、新しい命に生まれ変わろうと考えていた。だが、それは無理な話だったんだ。ルールを無視した私は永遠に殻を持った存在となった。すでに現世とも黄泉とも組成の違った人間になっていたのだ。つまり、僕は永遠に生まれることのできない人間になった。たくさんの仲間たちと溶け合うこともできず、黄泉を彷徨うだけの存在になったんだよ」

だが、敬一郎は知っていた。彼は地面に溶けたり、エネルギーを充填したりできたではないか。十分に黄泉と交わって生きていたではないか。

「それは違うよ。溶けることと交わることは違う。私はその力を借りていただけだ。君が現世へ降りる時、僕の体を擦り抜けたようにね。溶けるとはまさしく現世の殻を無くし、全てと同一となることだ。彼らが現世の殻を取り戻すのは輪廻する時のみ。ほら、地獄の門で会ったあの老人のようにね」

思い出したように海里は話しの矛先を変える。

「そう言えば、彼は心配していたよ。現世で一緒に暮らすことはできないが、自分の兄が苦しむのをこれ以上見たくはないと。視察に行ったり、ウサギと二つに分離して君に現世に帰るのを諦めさせようとしたり。結局無駄だったようだがね」

洋子が腹をさす。その様子を恭二も見ている。敬一郎は自分に分かる範囲で、話を整理しているようだった。

詩緒は考えていた。ある一つのことを。

それを行動に移そうか迷っている間に、三人が次々に語りかける。

「敬一郎、俺は戻って欲しかと思う。まだ間に合うとやろう?」

恭二の問いに、海里が答える。

「今ならね。ただし、無理矢理では駄目だ。本人にその気がなければね」

洋子がそれを受けて、敬一郎を説得にかかる。

「敬一郎、戻ってくれんやろうか。お母さんは、敬一郎がずっと何もない世界で彷徨うなんて嫌やけんね」

首を振る。顔を上げようもしない。

「嫌だよ、せつかく会えたんだよ。なのに離れ離れになるなんて。」

もう少しだけでも、一緒にいたいよ。たった三日だけの人生なんて、哀しすぎるじゃないか」

今度は恭二と洋子が黙る番だった。彼らとて、心から望んでいたことなのだ。敬一郎ともう一度会いたい。一緒に暮らしたい。成長を見たい。笑っている顔を見たい。一緒に語らいたい。だが、それが敬一郎を苦しめるくらいならと思うと、口にできないだけなのだ。そんな中で海里が再度説得を試みる。

「敬一郎、よく考えてごらん。例えどんな命であろうと、生命はそれを全うする。生き抜いた命に、良いも悪いも、長いも短いも無いのだよ。僅か三日とはいえ、君は二人の子供として生きた。そして死んだのだ。」

君にできることは、今二人の前に現れ、二人を戸惑わせることなのかね。

君が幸せになるのに、必要な場所はここだけなのかな」

それに、と海里は言葉を続ける。

「君が今、借りているのは、詩緒の恋人の体だ。このまま、彼の人生を奪ってしまうつもりかい。彼には彼の両親なり友人がいる。このままでは君が好意を持つている詩緒も悲しませることになる。彼らから靖志を奪ってしまう権利が、君にあるのかね」

それでも、彼は首を振って否定した。もう理屈ではないのだ。彼は自分に対する愛情のみで動いている。そこに理屈もなければ道徳もない。靖志の姿であるから忘れがちだが、彼はまだ生まれて間もない人間なのだから。

詩緒は行き詰まった状況を見て、ようやく決心した。ドアの付近に立っていた彼女は、部屋の中央に歩み寄り、敬一郎の肩に手をかける。

「敬一郎、ちよつと来てもらえん？ 見せたかもんがあるだよ」

有無を言わず、手を引いて部屋を出る。

二人の後ろに、洋子と恭二も付いてきた。恭二は内心で、彼女が何をするか分かっていたが、それが何に繋がっているのかは分からなかった。

詩緒がアトリエのドアを開ける。

入ってすぐにその絵は見えた。

「別に、敬一郎のために描いたうちゅうわけじゃなかとばってんね。見て欲しかとよ」

それは、百号……長辺一メートル六十センチのキャンバスを横長に使った作品だった。

夜を描いている。それは月が出ているのを見ればすぐに分かった。満月は必要以上に大きく見え、表面の凹凸から兎の姿まで見える。オイルパステルの発色の良さにより、全体的な画面の暗さの中で一際明るく輝いていた。

その球体は町を見下ろしていた。くつきりと浮き彫りにされた町は、その所々に灯りを点け、人影が見える。中にはベランダから空

を眺めている人間もいるのだろうか、指差している姿も見えた。個々の家の姿形ははっきりとせず、ある程度類型化された家庭の形が映っている。

空は瞬く星で覆われていた。スクラッチ……削り取りの技法で描かれた星々は移ろいやすい色合いを見せている。空自身も真っ黒ではなかった。蒼い空は深い色で全体を包み込んでいる。

恭二が口を挟んだ。

「今気が付いたとばってんが、この空は薄明のときと同じ色じゃないか？」

詩緒が頷く。最大に明るい月に照らされた地球は、その色を薄明の闇に戻していた。

そして、町から月に向けて、大きな虹が架かっている。やや白味がかった、夜の虹だった。重ね塗りで下の色が透けているために、不思議な色合いが出ている。ぼんやりとした赤、青、黄色……その他にも、七色がある程度認識できた。ただそれは背景の蒼に溶け込んで、何らかの行く先を示す道筋のように見えた。

それらの光景は、詩緒があの日、靖志と共に見た光景だった。再現ではなく、詩緒というフィルターを通して最大限個性を出し、だが感情を出しすぎず。彼女のためではなく、誰かのために。不特定の誰か、そこには当然、詩緒も敬一郎も恭二も靖志も洋子も海里すらも含まれる。

それらの感情を乗せ、一隻の飛行船が虹の橋を飛ぶ。暗闇にも負けず、真っ白な船体を主張しながら。船は一直線に月を目指していた。そうして見ていくと、満月は飛行船を迎え入れるためにぼっかりと空いた入口のようだった。

敬一郎はその絵を理解しようとした。いや、そうしなくても彼なら理解できた。なぜならこれは敬一郎と詩緒を描いたものだったからだ。

「月に還るまで」

詩緒が一言だけ告げた。敬一郎が振り返る。詩緒は間を置いて、

語りかける。

「月に還るまで。この絵のタイトルたい。君やったら見て分かったろう？ この絵は敬一郎のことは描いとるとよ。同時に、私のことも描いとる。ちうことは、海里さんの言う『死んだものとまだ生まれる前のものの世界』と『生きているものの世界』を描いとるちうことたい。

敬一郎。私たちは、月に還るまでこの現世で生きとる。この二つは離れとるよ。あんまりにも遠く。話もできんし、会うことやら絶対にできん。ばってん、あの世とこの世は記憶とか、思い出んごたる形でいつだっちゃ繋がつとるとよ。

そげん考えたら、私たちは私たちだけじゃなか。いつだっちゃ月に還り、現世に戻り、生き続けることができるっちゃなかね。形にこだわるこつはなかとよ。

それぞれが、それぞれの幸せば追いかけて、毎日ば生きていけば良かつちやなかるうか」

それきり、詩緒は口を噤んだ。

敬一郎は絵を見たまま、語ろうとも、動こうとしなかった。

長い、長い時間が経った。

日はやがて落ち始め、薄明がやってくる。それほどに長く張り詰めた時間だった。

話しかけることを拒む気配が敬一郎にはあった。

薄明に、絵は包まれていった。それでも、白い飛行船は浮かび上がるようにして色形を残している。星も、月も消えずにいた。敬一郎は町と、月とを見比べ、そして飛行船に指を這わせた。

その体が崩れ落ちる。

「敬一郎！」

三人が駆け寄った。倒れ込んだ靖志の体は、ゆっくりと寝息を立てていた。誰もがほっと息をつく。その頭上から、声が聞こえた。「ありがとう」

海里の声だった。思わず天井を見上げる。詩緒の目に、初めて見

る海里の姿と、隣で笑う敬一郎が見えた。

「敬一郎……」

詩？の呟きに、二人も上を見る。

「敬一郎……」

恭二にも、洋子にもその姿は見えているようだった。

海里と敬一郎はそれ以上、一言も語らずに消えて行くこうとしていた。敬一郎は次第に小さくなり、赤ん坊の姿に変化していった。海里は一羽の鳥に変身し、赤ん坊を背中に乗せる。

鳥は、甲高く一声だけ鳴いた。

そのまま視界から消えてしまう。

暗い中、飛行船だけが輝いていた。

十

恭二は広い展示会場を、順番に見て回った。作品を楽しんでくれている様子が分かり、次の制作への意欲が湧いてくる。

恭二の生命体験展も、もう十回目になっていた。節目の今回、初めて恭二は「薄明のとき」を展示した。

そちらの方に向かいながら、恭二は今までのことを反芻する。会場には生命シリーズなど、過去の代表作が順に鑑賞できるようになっていた。

初公開、ということ、薄明のときの前には他よりも多数の人が立ち止まっていた。その中に見覚えのある顔を見つけて、声をかける。

「詩緒やなか。靖志君も」

二人は恭二の姿を見て歩いてくる。

「こんにちは先生。おめでとうございます」

頭を下げる詩緒に、恭二は手を振って遠慮する。

「いやいや、そっちこそめでたかろうが。二人展、成功すると良かな」

詩緒と靖志は、結婚後初めての展覧会を二人展と称して同時に行うことにしていた。

「ありがとうございます、海里先生。結婚してからバタバタでしたからねえ」

靖志は振り返る。靖志は美大こそ入れなかったものの、美術の勉強は続けていき、恭二の下に弟子入りした。今では詩緒とジャンルは異なるものの、高い評価を受ける作品を作り続けている。詩緒は美大を出て、すぐに恭二の手伝いを始める。また、美大仲間で作っ

た芸術グループでテーマに沿った展覧会を開き続け、それが話題になって定期的に作品が売れるようになった。詩緒の美しく優しい絵は雑誌の表紙などにも採用されている。

そんな二人が結婚したのが、二年前だった。結婚後すぐに、二人展を開くつもりだった。靖志は様々な素材を使った彫刻、詩緒はパステルということではなかなか統一したテーマを模索できなかったのだ。

ようやくテーマが決まった時には、詩緒の妊娠が分かる。負担のかかる展覧会はいったん諦め、出産に専念した。子供が生まれたのがつい半年前。出産後も慣れない子育てで苦労したが、そんな合間に詩緒は制作を続けた。そして、今回、矢島海里の個展に合わせて二人展を開くことになったのだ。

三人がお互いの作品について話を続けていると、恭二のズボンを誰かが引つ張った。

振り返ると、男の子がニンマリと笑う。

「お父さん、外で遊んできても良か？」

早く行きたいと足を動かし続けている。それを指摘して恭二は叱った。

「こら敬二、美術館じゃ静かにせんといかんち言つたろうが」

「だって、早よ行きたかつちやもん」

「そげんもこげんもあるか。それに、詩緒姉ちゃんと靖志兄ちゃんに挨拶せんか」

言われて、ようやく敬二は二人の存在に気付く。

「あ、姉ちゃん兄ちゃん、こんにちは」

ペコリと頭を下げる仕草が可愛くて、詩緒は笑ってしまう。靖志は彼を抱き上げた。

「ようし、兄ちゃんが遊んでやろうか」

敬二は大喜びで声を上げてしまう。

「本当？ やったあ」

「こらっ、敬二、静かにせんか」

詩緒が笑みを大きくする。

「センセイ、センセイの方がうるさかよ」

言われて思わず口を噤む。敬二がその姿を笑っていた。

「まったく。敬二、お母さんはどこか？」

問われて、敬二は後ろを指差す。

「ほら、来とるよ」

見ると、洋子が苦笑しながら歩いてきていた。これから始まる恭二の叱咤を思つてのことだろう。

「さあ、行こうか、敬二」

靖志が足を踏み出そうとすると、敬二が言った。

「あ、待つて。姉ちゃん、赤ちゃん見せてよ」

「え？ ああ、良かよ。寝とるけん、起こさんでね」

肩にかけたスリングの中に、すっぽりと収まっている。敬二の半分にもならない赤ん坊は、寝息を立てて眠っていた。敬二はそれを覗き込みながら、笑っていた。

詩緒が話しかける。

「ほら、敬一郎。弟だよ」

敬二が、首をかしげた。

終

3110（後書き）

これで「月に還るまで」は完結です。

今まで長い間読んでくださった読者の皆様、ありがとうございました。

そして、本当にお疲れさまでした。

しばらく前に書いた作品ですので、舞台の時代が数年前になっておりますが、ご勘弁ください。

なお、作中の方言は福岡は久留米弁、舞台は福岡県久留米市や大分県由布院などになっております。

興味がおありの方は、ぜひ久留米や由布院に遊びに来てください。良いところですよ……久留米はだいぶ寂れてしまいましたが。

作中の絵画作品の描写については、全て私の創作です。

モデルとなった作品はありません。

もし、小説をご覧になって、作中絵画を描いてみた、という方がいらっしゃいましたらどうぞ、村上悟までご連絡ください。

作品の挿絵などに使わせていただきます。

それでは、つらつらと長文を書いてしまいましたが、この辺で。

最後に、作品を描くにあたって多大な協力をしてくれた家族に愛を込めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5795s/>

月に還るまで

2011年6月23日18時10分発行